

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第11集

下佐野遺跡

I地区・寺前地区(1)

縄文時代・古墳時代編①

1989

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

東日本旅客鉄道株式会社

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 11 集

下佐野遺跡

I地区・寺前地区(1)

縄文時代・古墳時代編①

1989

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

序

太平洋側と日本海側とを結ぶ交通幹線として上越新幹線が完成いたしました。この完成により群馬県と首都圏との隔たりは1時間以内になり、首都東京の息吹が聞こえるようになりました。

この事業は濃密に埋没していた先人の行動の軌跡である文化財の調査を必要としました。発掘調査は昭和49年から57年の間に、群馬県教育委員会、及び群馬県埋蔵文化財調査事業団により実施され、整理事業は群馬県埋蔵文化財調査事業団により昭和60年から63年にわたり実施されました。

高崎市東南部の佐野地区は、国の特別史跡であります「上野三碑」の「山上碑」「金井沢碑」にあります「佐野の三家」（みやけ＝屯倉）の故地と考えられてきた土地で、国史跡の浅間山、大鶴巻といった前方後円墳を始めとする大古墳群があります。開発により既に消滅している付近の遺跡も少なくありませんが、地中にはまだ多くの遺跡が遺されていると思われま

す。

今回の調査により縄文時代から近世にいたる貴重な資料を得る事ができました。佐野の“みやけ”に直接かかわる資料は検出されませんでした。古墳時代の資料には傑出したものがあり当時の中心地であったことを示しています。これらは古代社会解明の貴重な資料となりましょう。

発掘調査、整理の事業実施に当たりましてご協力を頂きました日本鉄道建設公団、東日本旅客鉄道株式会社、群馬県教育委員会他の関係者の皆様に感謝申し上げますと共に、直接事業にたずさわりました担当者を始めとする皆さんの労をねぎらいます。

本書が古代社会究明の資料として広く県民の皆様に活用されることを願いつつ序といたします。

平成元年2月1日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、上越新幹線建設に伴う事前調査として、昭和49年度から昭和57年度にかけて実施した、群馬県高崎市下佐野町所在の下佐野遺跡Ⅰ地区、上佐野町所在の下佐野遺跡寺前地区の発掘調査報告書である。
2. 下佐野遺跡は、発掘調査の段階では、種々の事情により北から寺前遺跡、下佐野Ⅰ遺跡、下佐野Ⅱ遺跡としたが、一つの複合遺跡であることから、昭和61年度におけるⅡ地区の整理・報告書作成事業の段階で、下佐野遺跡として統一した。
3. 発掘調査は、昭和49年度から昭和57年度にわたって、日本鉄道建設公団東京第三工事局と群馬県教育委員会との委託契約に基づいて実施された。委託契約の概要については、「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第1集」に、調査の概要については、本書第1章にまとめてある。なお、昭和55年度以降については、群馬県教育委員会から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に再委託が行われた。
4. 出土遺物の整理は、昭和60年度から昭和63年度にわたり、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
5. 出土古銭の鑑定は、川原隆氏にお願いした。
6. 出土人骨の鑑定は、宮崎重雄氏（群馬県立前橋第二高等学校教諭）にお願いした。
7. 石器・石製品の石材鑑定は、飯島静雄氏（群馬県地質研究会）にお願いした。
8. Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓出土の小形仿製内行花文鏡の考古学的所見については、小林三郎氏（明治大学教授）にお願いした。
9. 第1章第1節については森田秀策氏（高崎市立南小学校長）に、第4章Ⅱ第3節については梅沢重昭氏（群馬県教育委員会文化財保護課長）に執筆をお願いした。
10. 東京国立博物館収蔵遺物(伝長者屋敷天王山古墳出土遺物)の実測及び本書への掲載にあたっては、東京国立博物館より多くの御配慮をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。
11. 田島桂男氏所蔵遺物の実測にあたっては、同氏より格別の御配慮をいただき、本書への掲載を快諾していただいた。記して感謝の意を表する次第である。
12. Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓出土のガラス玉と同区 pit 内出土の一字一切経については、極めて遺憾であるが、文化財保護課分室および当事業団保管中に紛失した。
13. 本書は、昭和61年3月当事業団発行の下佐野遺跡Ⅱ地区（上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第6集）の後編である。遺跡の立地及び地理的・歴史的環境についての説明は割愛し、第4章の調査の成果と問題点については、Ⅱ地区も含めた。
14. 本地区（Ⅰ地区・寺前地区）においては、表土（耕作土）直下がローム層となっているため、基本土層の説明は省略した。なお、例外的に間層が遺存する部分については、各遺構記述の項

で触れた。

15. 遺構説明は、各調査担当が一部を分担したが、その他については、本書編集担当が執筆した（文末に執筆者を明記）。なお、遺構・遺物図については、すべて編集担当が作成した（住居跡・掘立柱建物遺構・土坑——井川達雄、方形周溝墓・古墳・石槨・館跡・溝——飯塚卓二）。
16. 第1・3・5・7章の執筆者のうち、調査担当者以外については、執筆者名の他に所属を記した。
17. 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏に御協力・御助言をいただいた。記して感謝の意を表するものである。（敬称略・五十音順）

石川正之助、石北直樹、今泉泰之、梅沢重昭、大塚初重、金子真土、亀井正道、栗原文蔵、小林三郎、坂本和俊、田口一郎、田島桂男、田部井功、外山和夫、橋本博文、星 龍象、増田逸朗、望月幹夫、木村豪章
18. 発掘作業の実施にあたり、地元関係者並びに大勢の発掘作業員の御協力があった。ここに記して厚く感謝の意を表する次第である。
19. 出土遺物の整理と報告書作成作業は、下記の者が担当した。

飯塚卓二（専門員）、井川達雄（主任調査研究員）、外山政子（嘱託員）、藤井輝子・今井サチ子・高橋伸子・小池洋子・須田はつ江・守随（旧姓清水）秀子・嶋崎しづ子・宇佐美征子・岩淵節子・筑井弘子・小野寺仁子・五明志津江・平野照美・渡辺フサ枝・光安文子・小林幸江・吉原清乃・永井真由美・岡田美知枝・戸神晴美・富沢スミ江・淵本五子・井田裕子・狩野フミ子・桜井都巳子・千代谷和子（補助員）

出土遺物の保存処理 — 関 邦一（技師）・北爪健二（嘱託員）

出土遺物の写真撮影 — 佐藤元彦（技師）
20. 本遺跡の遺構実測図・遺構写真・出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 遺構番号は、原則として調査時のものを使用した^が、変更したもの及び欠番がある。
2. 竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、土坑実測図は $\frac{1}{60}$ で統一した(住居跡のカマドは $\frac{1}{30}$)。また古墳周堀、方形周溝墓、館跡堀、溝については、原則として平面図を $\frac{1}{200}$ 、断面図を $\frac{1}{60}$ とした^が、都合により例外もある。
3. 遺物実測図は、原則として $\frac{1}{3}$ に統一したが、大形の遺物や小形の遺物についてはこの限りではない。
4. 本文中の方位は磁北である。
5. 遺物番号は、時代・調査地区・種類を問わず、通番とした。従って、本文、遺構図、遺物図、遺物観察表、写真図版相互の同一番号は同一遺物である。
6. 遺構はすべて時代別に分けた^が、時期が不明確なものについては、中世・近世編に一括した。
7. 遺物観察表の記載項目について
 - (1) 法量 完存か完存に近い場合は数字のみ、遺存値は()、推定値は[]とした。
 - (2) 色調 新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議事務局監修・1976)による。
8. 東京国立博物館収蔵遺物の観察表の記述にあたっては、東京国立博物館図版目録古墳遺物編(関東II)(東京国立博物館編集、便利堂発行、昭和58年2月)に従った。
9. 本文中の下記の火山噴出物は、次の降下時期が想定されている。

浅間A軽石 - 天明3年(1783)
浅間B軽石 - 天仁元年(1108)
浅間C軽石 - 4世紀前半
榛名FP軽石 - 6世紀中葉～後半
榛名FA火山灰 - 5世紀末～6世紀初頭
10. 本書中の地図は、下記発行のものを使用した。

(1) 第1図	5万分の1地形図(高崎)	建設省国土地理院
(2) 第2図	2,500分の1都市計画図	高崎市
(3) 第3図	500分の1地形図	群馬県教育委員会
(4) 第863図	2,500分の1都市計画図	高崎市
(5) 付図6	500分の1地形図	群馬県教育委員会

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経過と調査の概要〔第1分冊〕

- 第1節 調査に至る経過 1
- 第2節 調査の概要 4

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物〔第1分冊・第2分冊〕

I 縄文時代

- (1) 竪穴住居跡 (第1分冊)11
- (2) 土 坑 (//)52
- (3) 表土出土遺物 (//)74
 - a、土器 (//)74
 - b、石器 (//)77

II 古墳時代

- (1) 竪穴住居跡 (//) 102
- (2) 溝 (//) 236
- (3) 土 坑 (//) 238
- (4) 方形周溝墓 (第1分冊・第2分冊) 240
- (5) 古 墳 (//) 308
- (6) 石 槨 (//) 410

第3章 調査の成果と問題点—縄文・古墳時代—〔第2分冊〕

I 縄文時代

- 第1節 遺構について 413
- 第2節 出土土器について 417

II 古墳時代

- 第1節 古墳時代の住居跡と住居跡出土の土器について 423
- 第2節 古墳時代の墳墓について 431

第3節	高崎市東南部、倉賀野・佐野地域の古墳形成と発展	449
第4節	小形内行花文鏡について—下佐野遺跡出土鏡について—	461
第4章	平安時代の遺構と遺物〔第3分冊〕	
(1)	竪穴住居跡	465
(2)	土坑	626
第5章	調査の成果と問題点—平安時代—〔第3分冊〕	
第1節	平安時代の遺構と遺物について	746
第6章	中世・近世の遺構と遺物〔第4分冊〕	
(1)	竪穴住居跡	763
(2)	館跡	766
(3)	囲溝掘立群	869
(4)	掘立柱建物跡	875
(5)	井戸跡	887
(6)	溝	929
(7)	畠跡	992
(8)	土坑	994
(9)	表土出土遺物	1055
第7章	調査の成果と問題点—中世・近世—〔第4分冊〕	
第1節	中世・近世の遺構と遺物	1077
第2節	遺跡出土の石造物について	1108
第3節	鉦鼓（伏鼓）について	1112
第4節	「出土古銭」—概略・考察・課題—	1114
第5節	群馬県下佐野遺跡出土人骨について	1117

付図1 I地区A区4号前方後方形周溝墓遺物出土状況図

付図2 I地区A区1号館跡（内郭）遺構図

付図3 I地区C区1号館跡（内郭）遺構図

付図4 寺前地区溝遺構図

付図5 (1)、(2) 遺構全体図

付図6 遺跡の地形と検出遺構

第1章 調査に至る経過と調査の概要

第1節 調査に至る経過

1. 三幹線時代

わが国に初めて新幹線が走ったのは、昭和39年10月1日、東京～新大阪間の東海道新幹線で、夢の超特急と呼ばれた。時あたかも東京オリンピックが始まる9日前のことであり、さらにこの年9月5日には名神高速道路が全通しており、9月17日には国電浜松町駅と羽田空港間にモノレール羽田線が開通するなど、わが国の国際的な地位向上や経済大国への進路が開かれた画期的な時期でもあった。

昭和30年代の高度経済成長、昭和45年の大阪千里丘陵での日本万国博覧会後になると「豊かな時代」にかけりが生じてきたが、自動車社会への成長と高速自動車道の整備、それに佐藤内閣のあとを受けて出現した田中角栄首相の唱えた「日本列島改造論」が新しい時代の到来を思わせた。

昭和44年閣議決定された新全国総合開発計画に盛られた均衡ある国土の発達の実体化は1つが高速自動車道の整備であり、1つは新幹線網の整備であった。翌45年5月18日に公布された「全国新幹線鉄道整備法」の第1陣が上越新幹線であり、東京～新潟間を1時間半で結ぶことにより1日行動圏が飛躍的に増大されるとともに、長距離旅客や貨物輸送に寄与しようとしたものであった。

一方、昭和45年には東京と新潟を結ぶ関越自動車道、埼玉県から本県を通過している国道17号線のバイパスとしての上武国道計画も計画され、本県はいわゆる三幹線時代を迎えることになったのである。

2. 上越新幹線の建設計画と地元協議

昭和46年1月に基本計画、ついで同年4月に実施計画がたてられ、6月1日には東京と新潟に日本鉄道建設公団の新幹線建設局が設置され具体的に動き出した。同年10月14日には、鉄建公団から二十万分の一地図による路線発表があり、本県では高崎と月夜野町内に二駅を設けること、県北は大半がトンネルで通過することなどが明らかになった。高崎市内でもこの年10月から12月にかけて市内14か所で路線発表と説明会が行われた。

路線発表をうけて高崎市内でも各地に対策委員会や反対同盟が結成された。高崎駅以南の和田田中、琴平参道、新後閑、上佐野（1、2区）、下佐野（1、2区）計7地区の対策委員会が、昭和47年1月9日には佐野地区上越新幹線対策委員会として結成された。高崎市長を会長とする上越新幹線高崎市対策委員会も、同年3月21日に設置された。市内で結成された組織の大部分を結集して同年5月2日には、高崎地区上越新幹線対策連合協議会が発足した。この会から鉄建公団

第1章 調査に至る経過と調査の概要

に最初の要望書が提出されたのは同年8月1日であった。その要旨は路線の地下案であった。これに対して鉄建公団は直ちに8月15日に地下案は不可能であると回答したが、2回にわたる役員会では結論が得られなかったため、翌48年4月から直接地元住民への説明会が行われた。この結果、大半の地区では了解を得られたとみられたが、佐野地区の対策委員会では地下案に固執して、48年10月には市の連合協議会から脱退した。同年12月3日、高崎市長から地下案の再検討が要望されたが、12月7日になり地下案への変更は無理であるが、環境保全対策については十分に講じるとの回答があったため、連合協議会としては地下案の実現は無理であるとの判断にもとづき以後条件斗争へと転換した。

昭和49年4月18日、市の連合協議会は、公団に対して側道(両側設置、幅8.5m)と公害対策を主とする要望を提出したが、公団側は側道は市と協議中であること、公害対策については努力している旨、回答を8月22日に示し、協力を求めた。その後折衝が続けられた結果、翌50年7月25日高崎市長立合いのもとに①側道は市街地であることを考慮して両側6mとし、市への移管については別途市と協議すること、②公害対策(騒音、振動)については環境庁の基準を守ることとして妥結した。以後各地区毎に説明会があり、測量と地質調査が実施された。

市の連合協議会から脱退した佐野地区でも下佐野2区を除いて条件斗争へと転換し、50年1月から3月までには連合協議会と同趣旨で合意し、50年9月には中心測量を完了した。下佐野2区でも、情勢の変化により51年5月に条件斗争に転換し、地元説明会の後、8月10日には測量、地質調査は8月15日にそれぞれ終了した。

3. 埋蔵文化財の対策

昭和46年10月の日本鉄道建設公団による上越新幹線の路線発表の段階ではまだ公共関連対策での動きはなく、2,500分の1地図で初めて該当地区内の調査依頼が公団から県当局にあったのは翌47年5月になってからである。県から県教育委員会事務局の文化財保護室(この年4月1日に発足)へ依頼があり、分布調査したところ93件がリストアップされ、同年7月に県を經由して公団へ報告された。同年9月になり、県教委に対して公団側から協議があり、93件の中で22件が該当すること、その大半は埋蔵文化財の包蔵地であることが判明した。この年の秋には着工していた利根郡月夜野町内の中山トンネル入口付近などで埋蔵文化財の事前調査を急ぐよう要望も出されていたが、まだ事前協議や調査体制も整わぬ段階であったために具体的な対応は次年に持ち越されることになった。

昭和48年1月から3月にかけて県教委と鉄建公団との間で、工事区域内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査計画と、調査経費についての綿密な協議が続けられ、同年4月1日付けで県教育委員会教育長と日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長との間で、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、併せて、昭和48年度分の委託契約書が締結されたのである。県教委ではこの48年4月から文化財保護課として上武国道、関越自動車道と上越新幹線地域の発掘調査担当者を整え対応することになった。

昭和48年度は既に中山トンネル工事に着工していた利根郡月夜野町大字上津の十二原遺跡と大原遺跡、そして年度の後半になり高崎市大八木町の大八木遺跡の調査を実施することにより長期計画がスタートしたのである。

4. 下佐野遺跡の調査に至るまで

昭和49年度の上越新幹線関係の高崎市内における調査は、前年度からの大八木町内の井野川をはさんだ南の融通寺遺跡と北の熊野堂遺跡で行なわれ、11月からは烏川左岸の上佐野町舟橋遺跡に着手することになった。この上佐野遺跡調査に入る経過としては、49年8月19日に上佐野町公民館において埋蔵文化財調査に関する地元説明会が行なわれ、鉄建公団と県・市教委が出席して調査計画を述べて協力を求めた。10月までの段階で地元交渉も進んだことから11月上旬に下検分を済ませ、11月21日から翌年3月までの1期、4月以降の2期調査を実施した。そして50年3月1日から7月15日までは山崎病院東側の上佐野町寺前地区にも1次調査の試掘に入ったのである。

烏川左岸の上佐野町から下佐野町にかけては元々、高崎市内でも有数の古墳群地域として知られ、漆山古墳は現存しており、少し東方へ離れては国史跡の浅間山古墳や倉賀野町の大鶴巻・小鶴巻古墳などにつらなる注目すべき地域であり、また国の特別史跡山上碑文中に出てくる佐野はこの佐野地域とみられており、謡曲「鉢の木」に登場する佐野源左衛門常世を祀る常世神社や長者伝説の舟橋の地名も遺っているなど、考古・歴史上素材の多い地域である。包蔵地の状況などからこの地域の遺跡発掘は全面的に実施を要することとしてあらかじめマークしていたのであったが、現実的には幾多の条件下での調査にならざるを得なかった。それは、(1)前述したとおり地権者会と鉄建公団側との交渉が長びき、地元問題が解決しない限り入ることが不可能であったこと、(2)新幹線本線敷き(幅12m)の両側に側道がつく交渉が当初の段階にはなく、50年7月25日以降になって両側6mの計画が出てきたため、場所によっては、2次、3次の調査に入った所があったこと、(3)工事計画の進捗は地元協議や団地買収との関係に左右され、文化財調査も条件の整った所から入ることを前提にしたため、部分的に調査を実施せざるを得なかった所もあり、非能率的な結果となったことなど、多くの課題をかかえていた。

上佐野町舟橋遺跡に着手した昭和49年11月に、下佐野地区1.2kmの測量入りが合意に達したとの情報もたらされた。しかし文化財側の調査は、急に予定を変更して新規の場所に入ることは限られた体制では不可能であることを鉄建側には伝えていた。翌50年3月には買収合意にまでは至らぬが、文化財調査入りは応じるようにとの交渉が鉄建公団側と続けられていた。しかし50年8月から10月にかけては月夜野町上毛高原駅周辺が重大な局面になっていたため月夜野地域に全力を注ぐこととし、結局烏川右岸の下佐野町内の対応は51年度以降とすることで、50年9月25日の県教委と鉄建公団との協議で決めた。

こうして下佐野遺跡Ⅰ地区第1次調査は昭和51年4月から始められ、開業直前の昭和57年の4月末までの長期にわたる発掘調査が続けられたのである。

(森田秀策 昭和61年3月まで群馬県教育委員会文化財保護課長 現在高崎市立南小学校長)

第2節 調査の概要

遺跡名 下佐野遺跡（しもさの）遺跡

所在地 群馬県高崎市下佐野町・上佐野町

調査地区 I地区 本報告

下佐野町字長者屋敷946番地他、同字清水935番地他、同字蔵王塚870番地他

II地区 「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第6集」（昭和61年3月刊行）下佐野町字川籠石1201番地他、同字鍛冶風1019番地他、同字稻荷塚608番地他、同字長者屋敷1001番地他

寺前地区 本報告

上佐野町字寺前524番地他

調査主体と調査期間

I地区

A区

- | | | | |
|----|-----------------------|------|------------------|
| 1次 | 昭和51年4月12日～昭和52年3月25日 | 調査主体 | 群馬県教育委員会 |
| 2次 | 昭和55年5月6日～昭和55年12月15日 | 調査主体 | （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 3次 | 昭和57年3月1日～昭和57年4月27日 | 調査主体 | （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 |

B区

昭和52年4月12日～昭和53年1月27日 調査主体 群馬県教育委員会

C区

昭和54年1月16日～昭和54年7月28日 調査主体 群馬県教育委員会

D区

- | | | | |
|----|----------------------|------|------------------|
| 1次 | 昭和53年1月9日～昭和53年4月28日 | 調査主体 | 群馬県教育委員会 |
| 2次 | 昭和54年8月1日～昭和55年3月21日 | 調査主体 | 群馬県教育委員会 |
| 3次 | 昭和55年5月22日～昭和55年6月6日 | 調査主体 | （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 |

寺前地区

- | | | | |
|----|----------------------|------|----------|
| 1次 | 昭和50年3月1日～昭和50年7月15日 | 調査主体 | 群馬県教育委員会 |
| 2次 | 昭和54年8月1日～昭和55年3月14日 | 調査主体 | 群馬県教育委員会 |

調査地点 I地区 大宮基点73,700m～74,460m

寺前地区 大宮基点74,460m～74,730m

調査面積 I地区 18,240㎡

寺前地区 6,480㎡

調査担当者・調査員（I地区・寺前地区）

1 昭和49年度～昭和54年度（群馬県教育委員会文化財保護課調査）

担当者 長谷部達雄（I地区A区1次、現在 シン航空写真株式会社）

秋池 武（I地区A区1次、I地区B区～D区1次～2次、寺前地区2次 現在 群馬県立吉井高等学校）

横倉 興一（寺前地区1次 現在 高崎市教育委員会）

飯塚 卓二（I地区A区1次、I地区B区～D区1次～2次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

桜場 一寿（I地区A区1次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

下城 正（I地区C区、寺前地区1次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

中束（旧佐佐藤）耕志（I地区C区、I地区D区1次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

調査員 中里 吉伸（I地区A区1次、寺前地区1次 現在 太田市史編纂室）

外山 政子（I地区A区1次、I地区C区、I地区D区2次、寺前地区2次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

宮下万喜子（I地区D区2次、寺前地区2次）

大木紳一郎（I地区D区1次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

2 昭和55年度～昭和57年度（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

担当者 飯塚 卓二（I地区A区2次、I地区D区3次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

女屋和志雄（I地区A区3次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

井川 達雄（I地区A区2次～3次、I地区D区3次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

坂井 隆（I地区A区2次、I地区D区3次 現在（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）

調査員 宮下万喜子（I地区A区3次）

新井 順二（I地区A区3次 現在 勢多郡新里村教育委員会）

調査の方法と経過

1. I地区

調査範囲は、上越新幹線大宮基点73.7kmから74.46kmまでである。本地区の長さは約760m、幅は約24m（本線部分12m、左右側道部分各6m）であり、面積は18,240㎡となる。

調査は、A区～D区にわたる調査小区を設定し、各小区ごとに中央に主軸をとり、5m×5mの基準杭を設定した。なお、当初2m×2mのグリットを設定し、調査を開始したものの、表土が薄く、耕作土を除去すると地山であるローム層となり、ローム漸移層も殆ど残存していないという状況から、グリット調査の必要性はないものと判断し、表土はバックホーで全面除去することと

第1章 調査に至る経過と調査の概要

し上記の基準杭設定に変更した。

調査は、昭和51年4月12日に群馬県教育委員会文化財保護課により開始され、住宅の存在しないA区の大宮基点73.9kmから北側へと進行した。途中で調査が中断したことも数回あったが、昭和55年度からは調査主体が(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団へと移り、昭和57年4月27日に完了した。

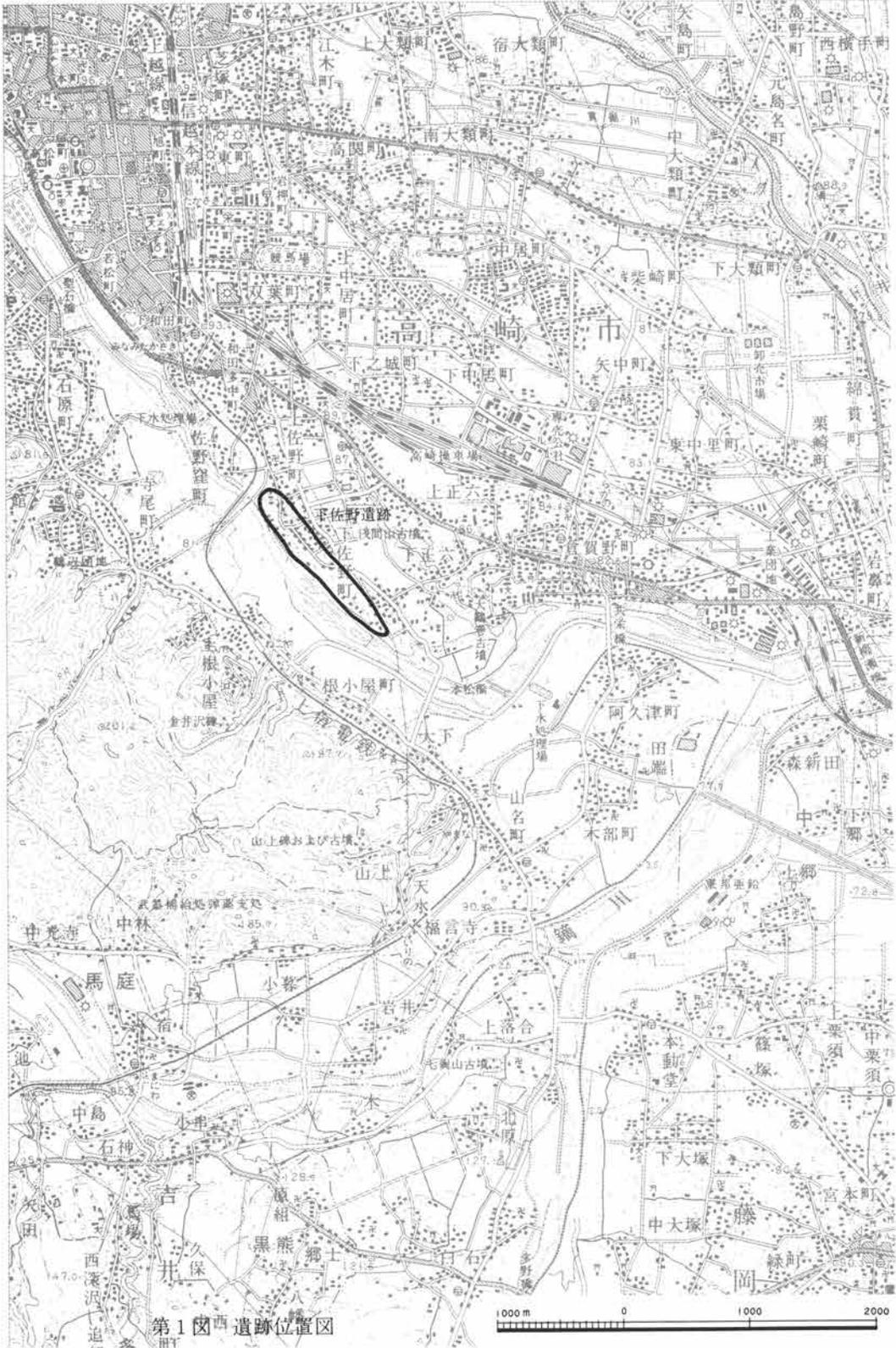
2. 寺前地区

調査範囲は、上越新幹線大宮基点74.46kmから74.73kmまでである。本地区の長さは約270m、幅は約24m(本線部分12m、左右側道部分各6m)であり、面積は6,480㎡となる。

調査は、2次にわたって群馬県教育委員会文化財保護課により実施された。1次調査は、昭和50年3月1日から同年の7月15日までの5ヶ月半であるが、この段階では、日本鉄道建設公団側の両側側道付設という方針が確定しておらず、加えて用地も未買収であったことから、住宅地部分を除く本線敷部分が調査の対象となった。なお、調査は2m×2mのグリット設定により行われた。2次調査は、昭和54年8月1日から昭和55年3月14日にわたって実施された。I地区同様、耕作土を除去するとローム層であり、バックホーにより耕作土を除去後、5m×5mの基準杭を設定して実施した。

発見された遺構 (I地区・寺前地区)

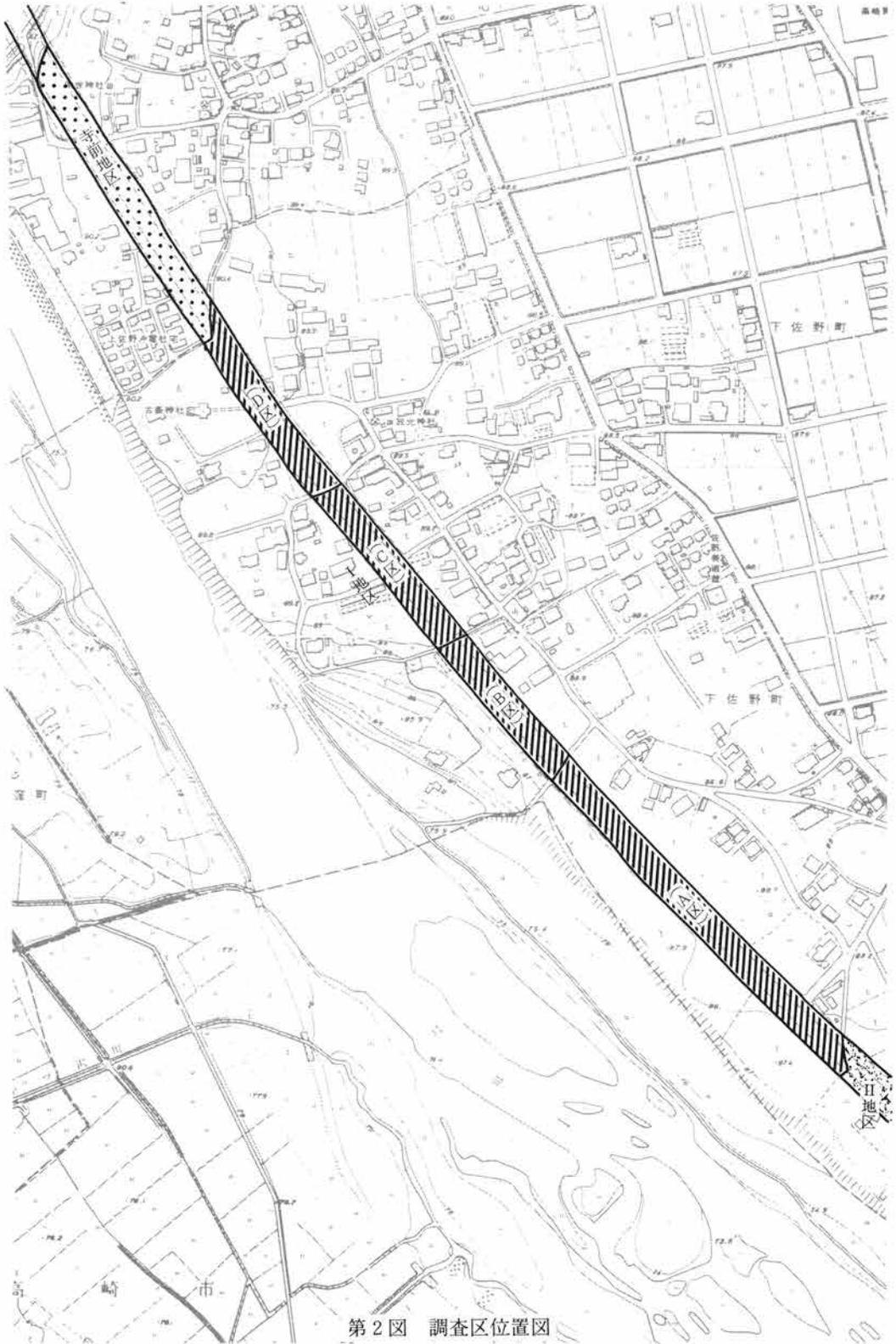
竪穴住居跡	194棟	縄文時代 11 (中期9 後期2)	古墳時代 67 (前期36 中期2 後期29)	平安時代114	中世 2
掘立柱建物跡	11棟	中世～近世? (I地区A区1号館跡内郭・C区囲溝掘立柱群は除く)			
館跡	3	中世～近世			
畠跡	2面	近世			
道路状遺構	1	平安時代?			
溝	72条	古墳時代 2	中世・近世・時期不明確 70		
井戸	48基	中世・近世・時期不明確			
囲溝掘立柱群	1	近世			
土坑	321基	縄文時代 26	古墳時代 3	平安時代 7	中世・近世 時代不明確 285
方形周溝墓	21基	古墳時代			
古墳	30基	古墳時代			
石櫛	3基	古墳時代			



第1図 西遺跡位置図

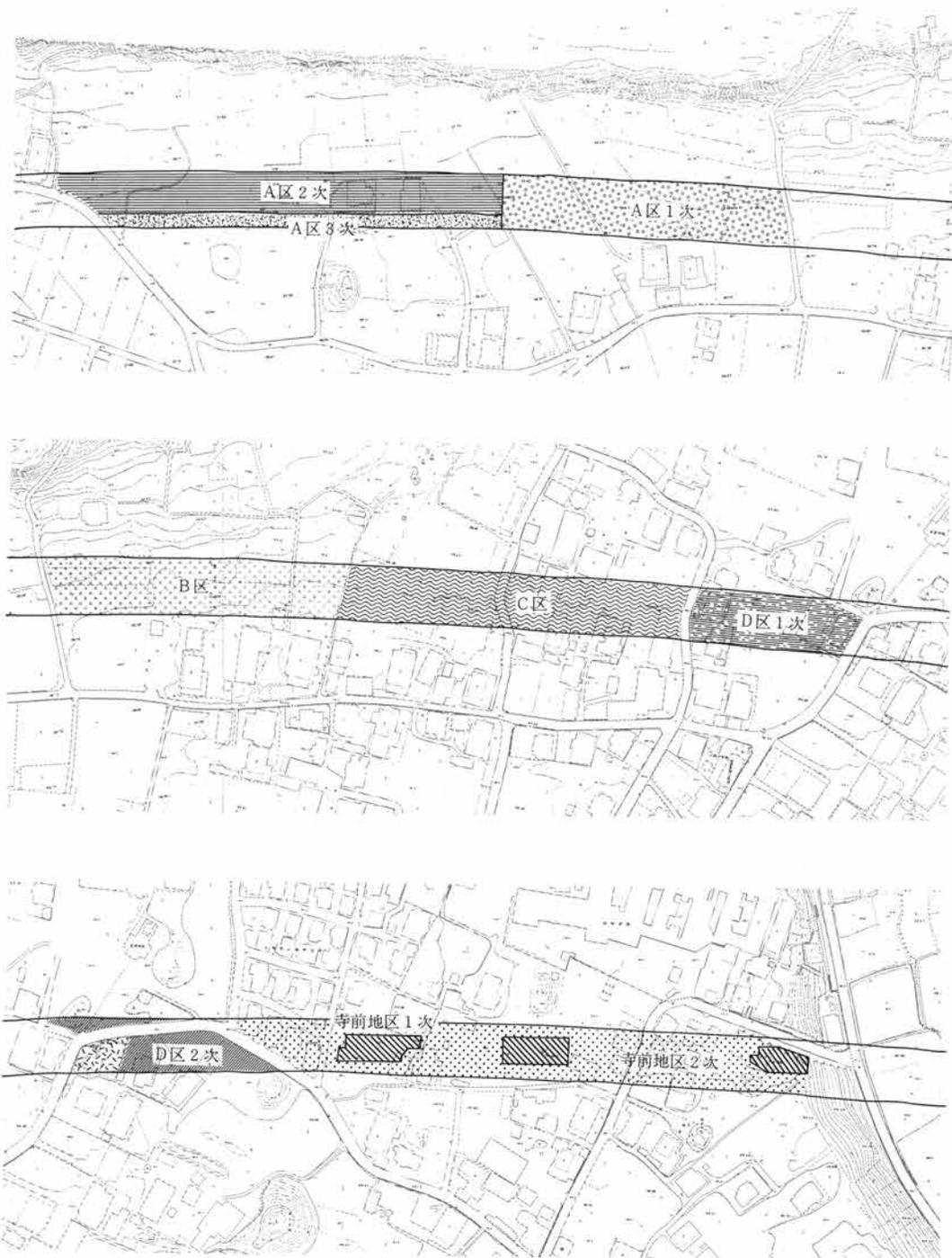


空からみた遺跡周辺の地形(昭和22~26年、米軍撮影)



第2図 調査区位置図

第1章 調査に至る経過と調査の概要

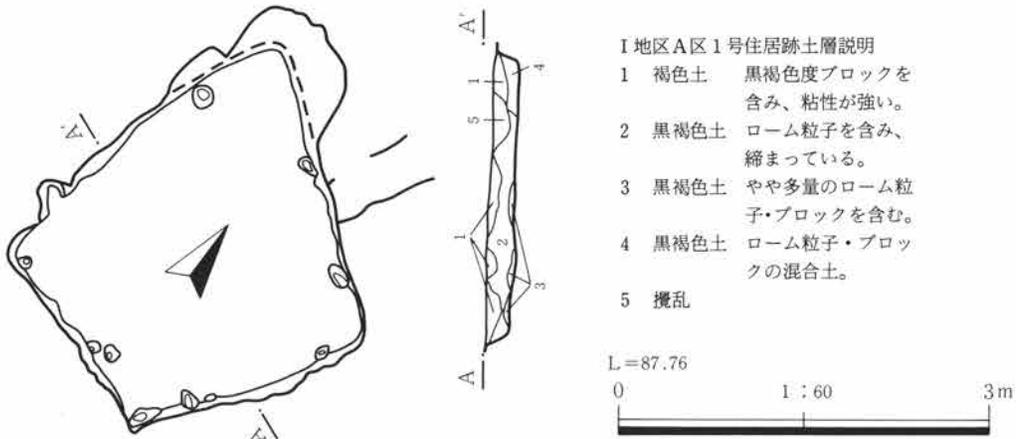


第3図 I地区・寺前地区調査の経過

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

I. 縄文時代

(1) 竪穴住居跡



第4図 I地区A区1号住居跡遺構図

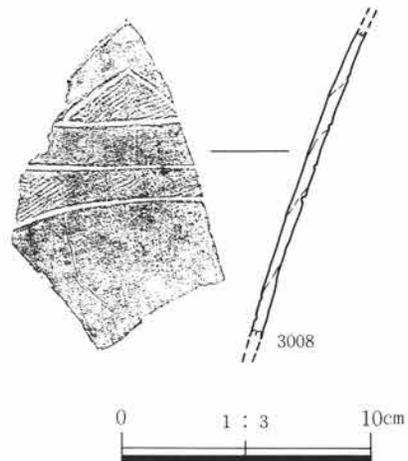
I地区A区1号住居跡（第4・5図、図版5・6）

本住居跡は、時期不明の土坑と重複しているが、本跡が古い。規模は、長辺240cm、短辺175cmを測り、四辺は方位と一致する。長軸はN-9°-Eで平面形は、不整形形状を呈している。ローム層を、13~24cm掘り込み平坦な床面としている。壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴は合計12本確認でき、その内の8本は各壁際で2本づつ95~150cmの間隔で配置され不規則である。焼土等炉と思われる箇所は確認できなかった。遺物は、床面より3~14cm浮いた状態で9点の土器片がある。他時期の土器片の混入が認められるが、埋没土層中の土器片の在り方から推定すると、後期掘ノ内II期である。

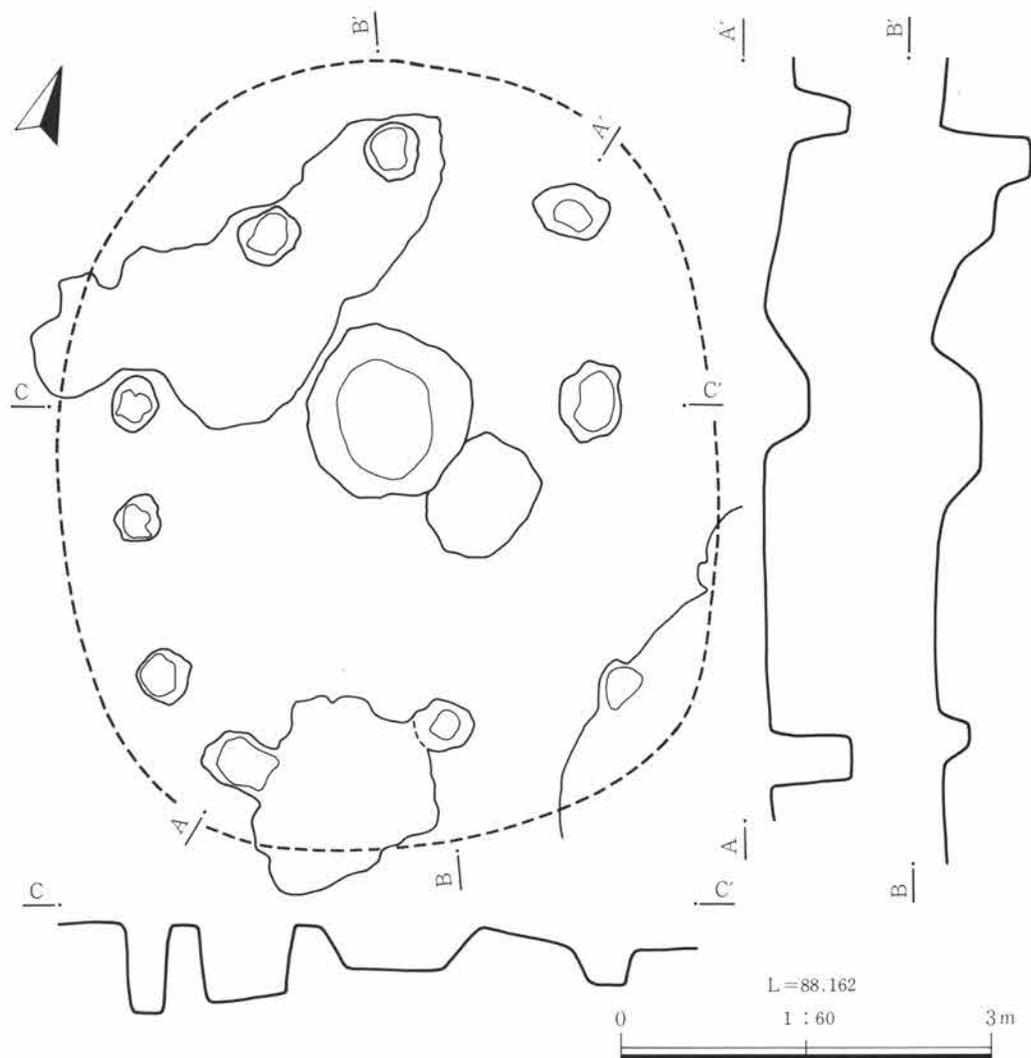
3008は、深鉢形土器の大形体部破片で、三角形及び平行する沈線で区画した後、RL縄文で充填している。器面は丁寧に調整されている。

本跡は、住居跡として報告しておくが、炉跡等が不明であり、又、所属時期を決定するに十分な出土遺物が少ない。

(中里)



第5図 I地区A区1号住居跡遺物図



第6図 I地区A区9号住居跡遺構図

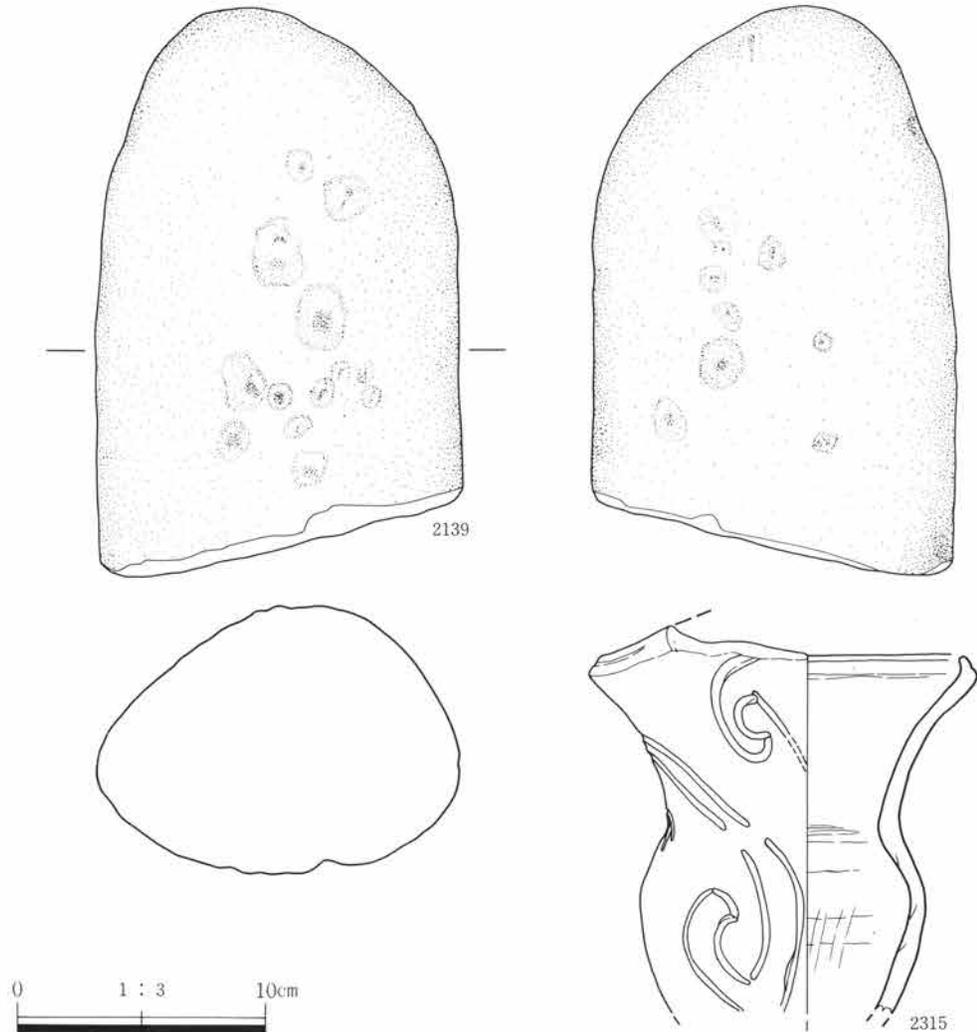
I地区A区9号住居跡（第6～8図、第1表、図版5）

本住居跡は、1号方形周溝墓方台部南辺隅で確認され、23・24・29・30号土坑と重複している。本遺構が古い。規模は、ローム面上での炉、柱穴の確認であったため、壁面の存在と共に明らかでない。平面形は、柱穴の配置から推定すると円形を呈するものと考えられる。柱穴は、炉を中心に25～40cmの小円形ピットを確認できるが、柱穴間は60～150cmと不規則である。柱穴の深さは15～50cmである。床面は炉を中心として認められロームを固く踏み固めているが周辺では明確ではない。炉は、約70cmの範囲に円礫、扁平礫及び土器片を2～3層敷き詰めた掘り込み炉で、掘り方は径96cm、深さ23cmを測り覆土内には焼土が認められ、床面まで広がっている。

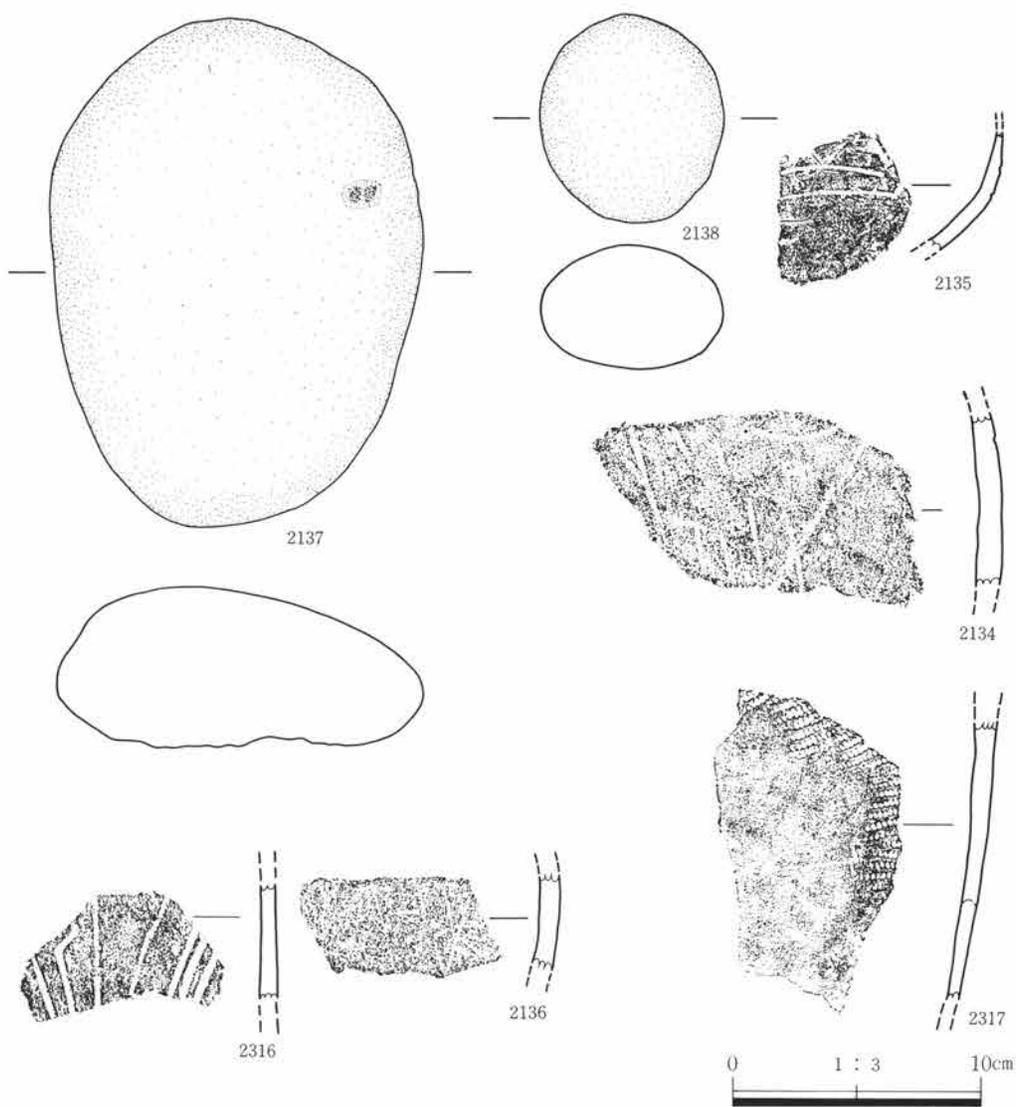
I 縄文時代（竪穴住居跡）

遺構の時期は、炉中に敷かれた一括土器より、後期称名寺II期である。

出土土器2315は、底部を欠く深鉢形土器で、現存器高15.1cm、口径15.1cmを測る。体部は強く縊、体部上半部より口縁部にかけて外反し、口唇部は内傾する。口縁部は波状口縁で、口唇部外側は部分的に沈線を一条廻らしている。文様は口縁直下より体部下半部にかけて斜位に太い棒状の沈線でJ字状文を表出している。体部は、石粒を含み黄橙色を呈している。炉中に使用されていたため、一部二次焼成を受けている。後期初頭称名寺II期である。出土石器2137・2139は、多孔石である。2137は多孔質安山岩を素材としており一部欠損している。表裏に複数の錐揉み状凹穴が付けられている。2139は、多孔質安山岩の自然石を素材とし、一面のみ一個の凹穴が付けられている。2138は、粗粒安山岩質の磨石である。 (中里)



第7図 I地区A区9号住居跡遺物図(1)



第8図 I地区A区9号住居跡遺物図(2)

第1表 I地区A区9号住居跡石器観察表

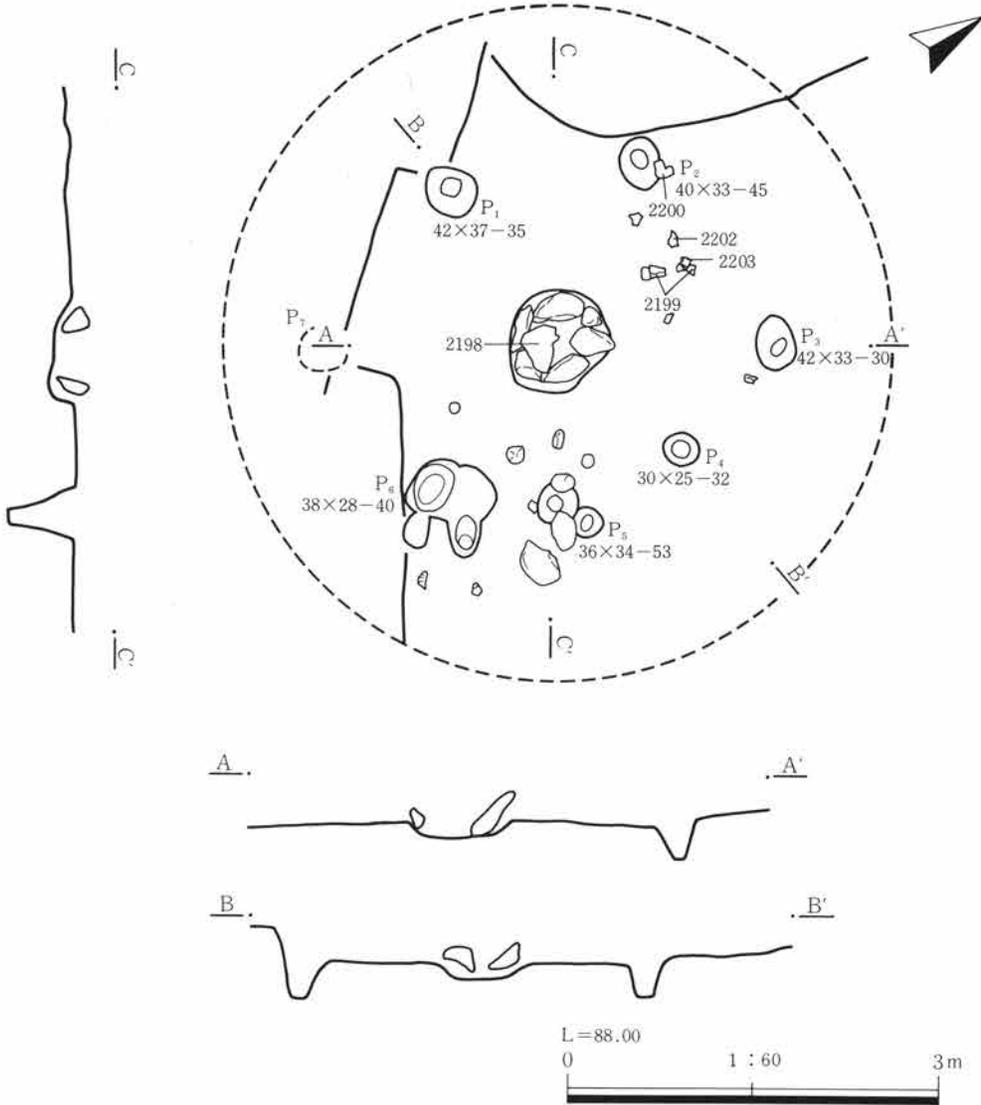
番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2137	多孔石	225	150	106	4850.0	粗粒安山岩。	表裏に凹穴を持ち、全体に磨耗。
2138	磨石	82	74	48	338.9	粗粒安山岩。	全体に荒れている。
2139	台石	201	149	63	2800.0	粗粒安山岩。	裏面に強い敲打、剥落している。

I 地区 A 区 53 号住居跡（第 9～11 図、第 2 表、図版 6）

本住居跡は、南北 4.70m、東西 4.50m の円形を呈する。12 号方形周溝墓、平安時代の 51 号住居跡と重複し、床面の殆どは削平された状態にあった。

炉跡は、住居のほぼ中央に位置する、6 個の河原石を用いた石囲炉である。石は、長さ 35cm 前後のものを弧状にめぐらしているが、北東の 1 石が立石様に斜め方向に差し込んだ状態にある。炉の掘り方は、84×80cm の円形を呈し、焼土と炭化物が若干残る。

柱穴は、炉の周囲に 11 本が確認されたが、対応関係から P1～P7 を支柱穴とした。6 本は、



第 9 図 I 地区 A 区 53 号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

いずれも径30~40cmの円形を呈し、深さは確認面から23~45cmを測る。

遺物は、炉内に倒れ込んだ2198、炉の北側から2199・2200・2202・2203の深鉢、P5の周辺から大小6個の河原石が散在して、覆土中から土製円盤1点、短冊型石斧2点が出土している。

出土遺物

2198は、口縁部体部上端の一部を欠くだけの深鉢で口径24cm、器高29.5cmを測る。口縁部と体部を「∩」形の沈線で、単位に区画し、LR縄文を充填、無文帯には蕨状文を施す。

2199は、体部中央以下を欠く深鉢で、「∩」形の沈線区画内をLR縄文で充填、無文帯に蕨状文を施し、口縁部は無文のままとする。

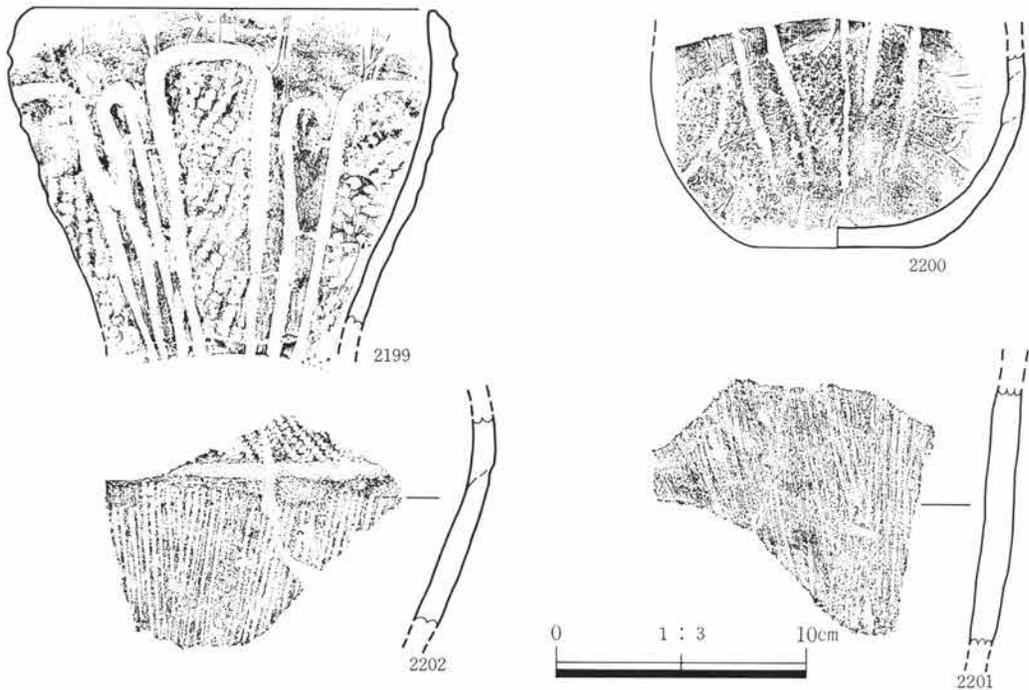
2200は、体部中央以上を欠く深鉢で、体部には隆帯と沈線を垂下させて区画し、LR縄文を充填している。

2201~2203は、いずれも深鉢の体部破片で条線を施文、2202は口縁部を区画する沈線の上端にLR縄文が施線されている。2204は、深鉢体部の破片を利用した円盤で、周縁は打ち欠き後、研磨調整と紐かけ様の小さな刻みがある。

2205・2206は、短冊型石斧である。2205は、小型の完存品で薄い剝片を素材とし、両縁辺に細い剝離を施している。2206は、頭部破片で粗く打ち欠き、厚い。

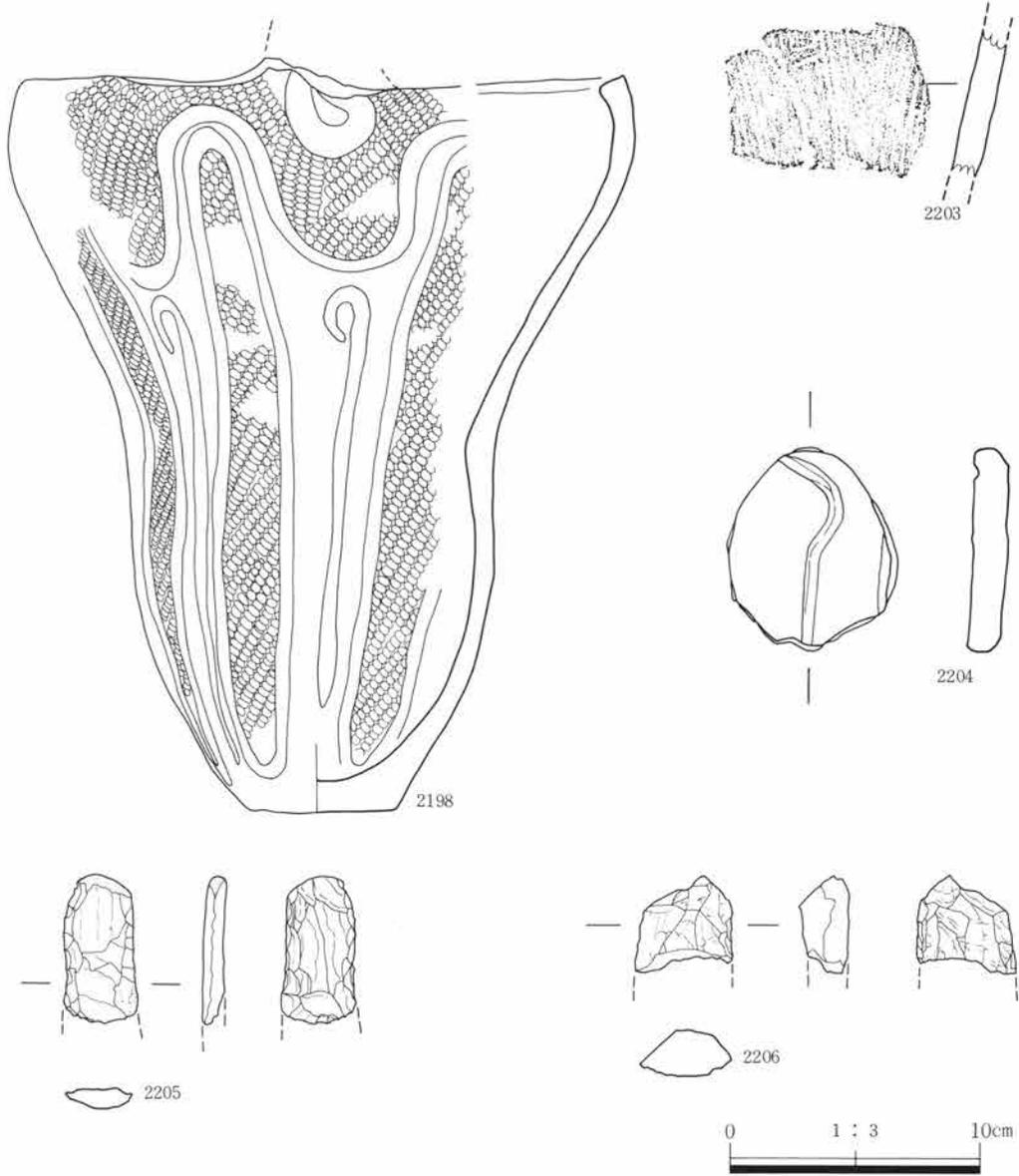
遺構の時期は、炉内出土の2198、床面出土の2199の特徴から加曽利EIV式(古)とする。

(女屋)



第10図 I地区A区53号住居跡遺物図(1)

I 縄文時代（竪穴住居跡）



第11図 I 地区A区53号住居跡遺物図（2）

第 2 表 I 地区A区53号住居跡石器観察表

番号	器 種	長 さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚 さ 最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
2205	打製石斧	59	30	9	20.0	雲母石英片岩。	短冊型、極小型、完存。
2206	打製石斧	39	39	19	28.2	硬質泥岩。	頭部のみ、短冊型。

I 地区A区57号住居跡（第12～14図、第3表、図版7・8）

57号は、直径4.80mの円形を呈し、東南側に58号が重複する。両者の床面の段差は、58号が5cm高く、57号が先行する。覆土は、上層をローム粒を含む茶褐色～明褐色土が、床面上を粘性に富みローム粒の多い茶褐色～明褐色土が見られた。

炉跡は、住居中央に位置し、河原石7個を残す石囲炉であるが、北から西側にかけて半分程の縁石が抜き取られていた。炉内部には、僅かに焼土が残っていた。炉の掘り方は不明である。

柱穴は、58号の範囲を含めて21本が確認されたが、対応関係からP1～P6までを支柱穴とした。掘り方は、30～50cm前後と不揃いで確認面からの深さは19～66cmと一定しない。P1の両脇にあるP7・P8は対称的な位置にある小ピットだが、補助的な性格を持つか。

遺物は、覆土中であつたものは58号と明確に分離し得ないが、推定範囲内の壁際に多く見られ、深鉢、石皿、磨石がある。

2216は、深鉢の下体部である。縦位の撚糸文を施文後、3単位の隆帯と沈線を垂下させ区画している。底部外面には、半ばまで消された網代圧痕があり、内面にはタール状付着物がある。

2217は、深鉢の頸部破片で、LR縄文施文後、2～3条単位の波状沈線を施す。

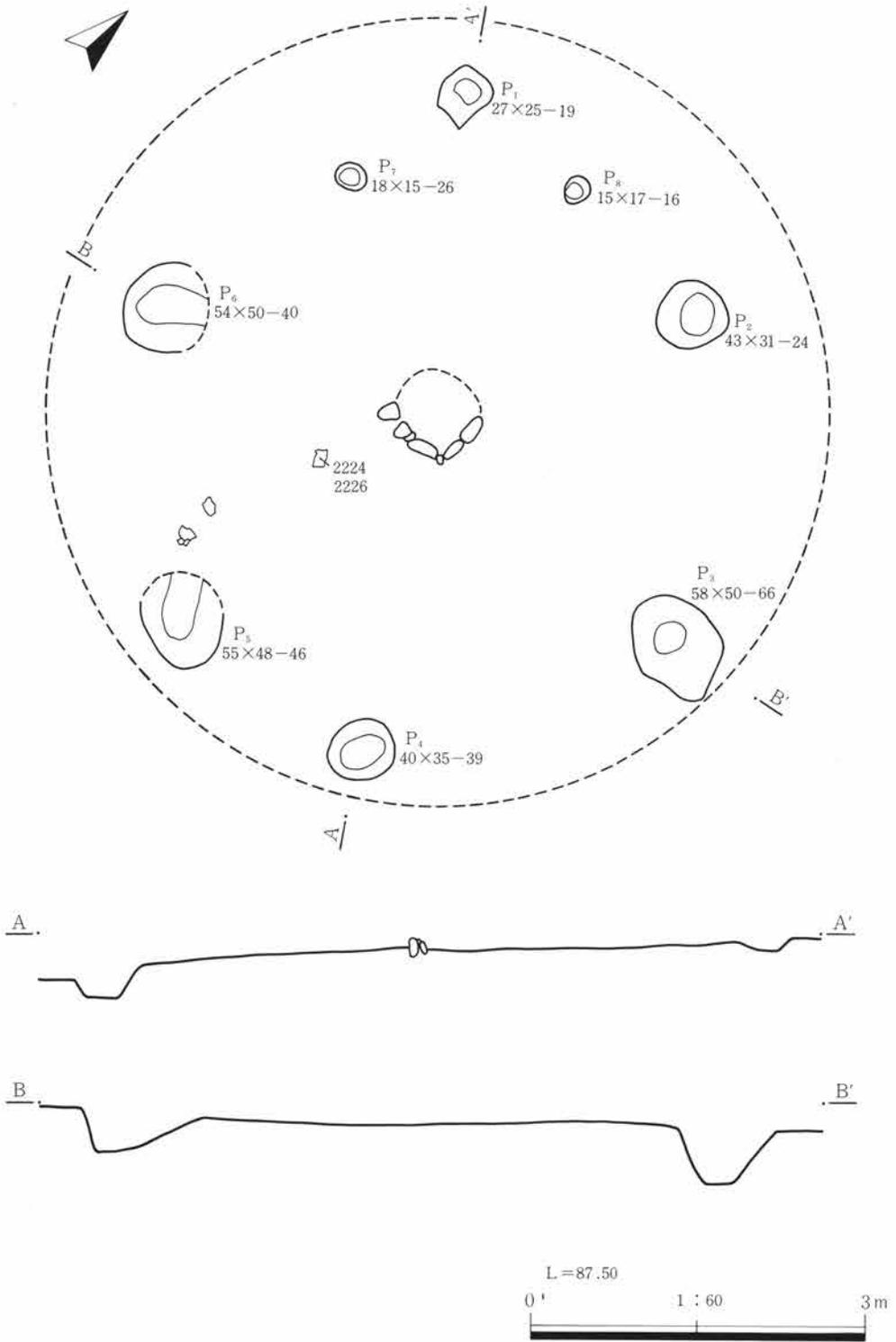
2218・2219は同一個体で、深鉢の体部である。貼付隆帯と沈線により渦巻文を配し、隆帯上にはLR縄文を施す。

2220は、深鉢の波状口縁部の破片で沈線による渦巻文を施す。2221は、深鉢の体部小破片で貼付隆帯上に竹管工具による連続爪形文と矢羽根状の刻みを施す。

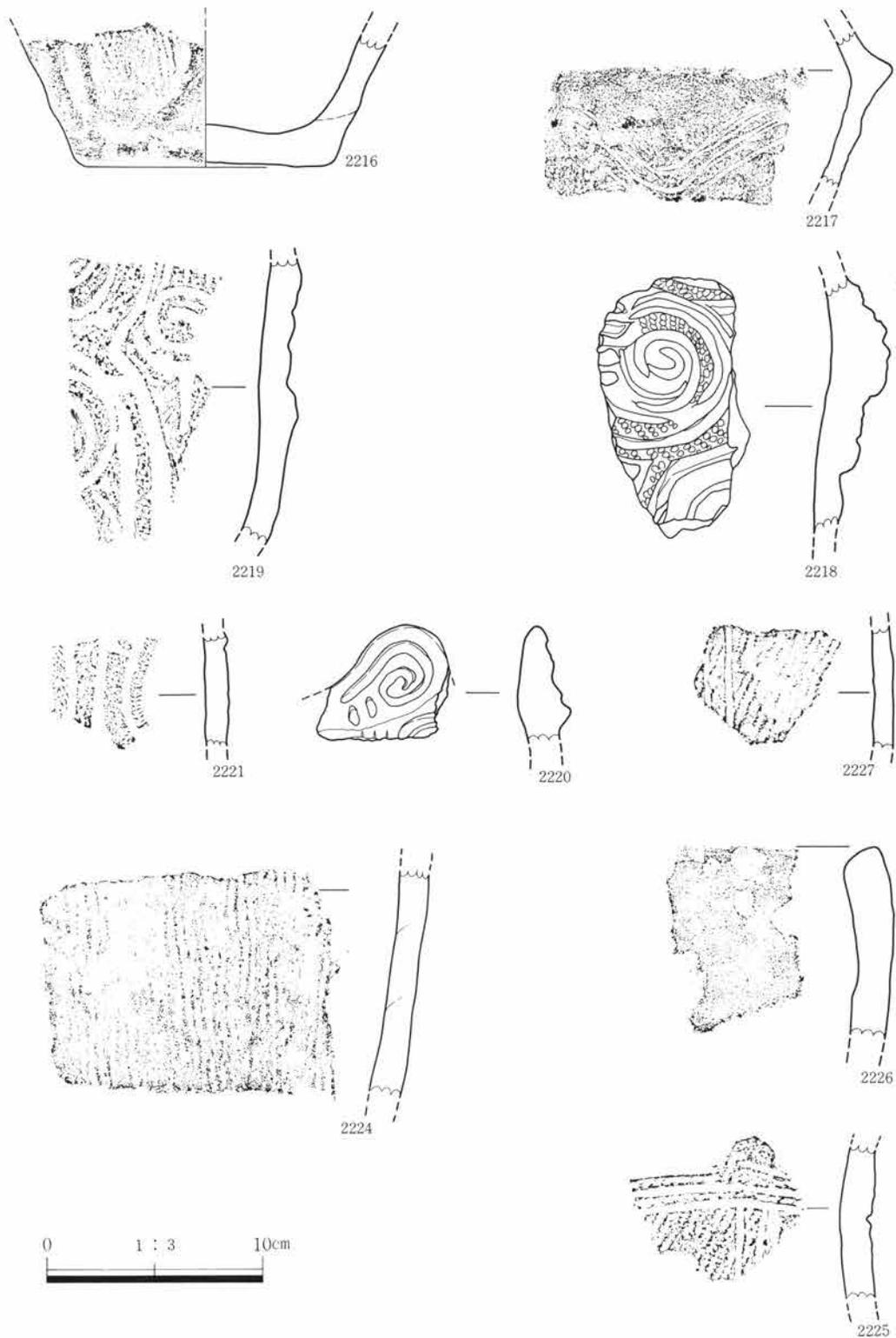
2224は、深鉢の体部で全面に縦位の撚糸文を施す。2225は、深鉢の体部縊部分で、LR縄文施文後に横位・縦位の沈線で区画し、横位の沈線間には連続した刺突文がある。2227は、深鉢の体部破片で、LR縄文の上に2本の沈線を垂下させている。2226は、浅鉢の口縁部破片である。

2867・2868は石皿である。2867は、すり面の中央は長軸に沿って磨耗しているが周縁は敲打痕が連続している。2868は、表裏とも凹むが片面にのみ磨耗痕が見られる。

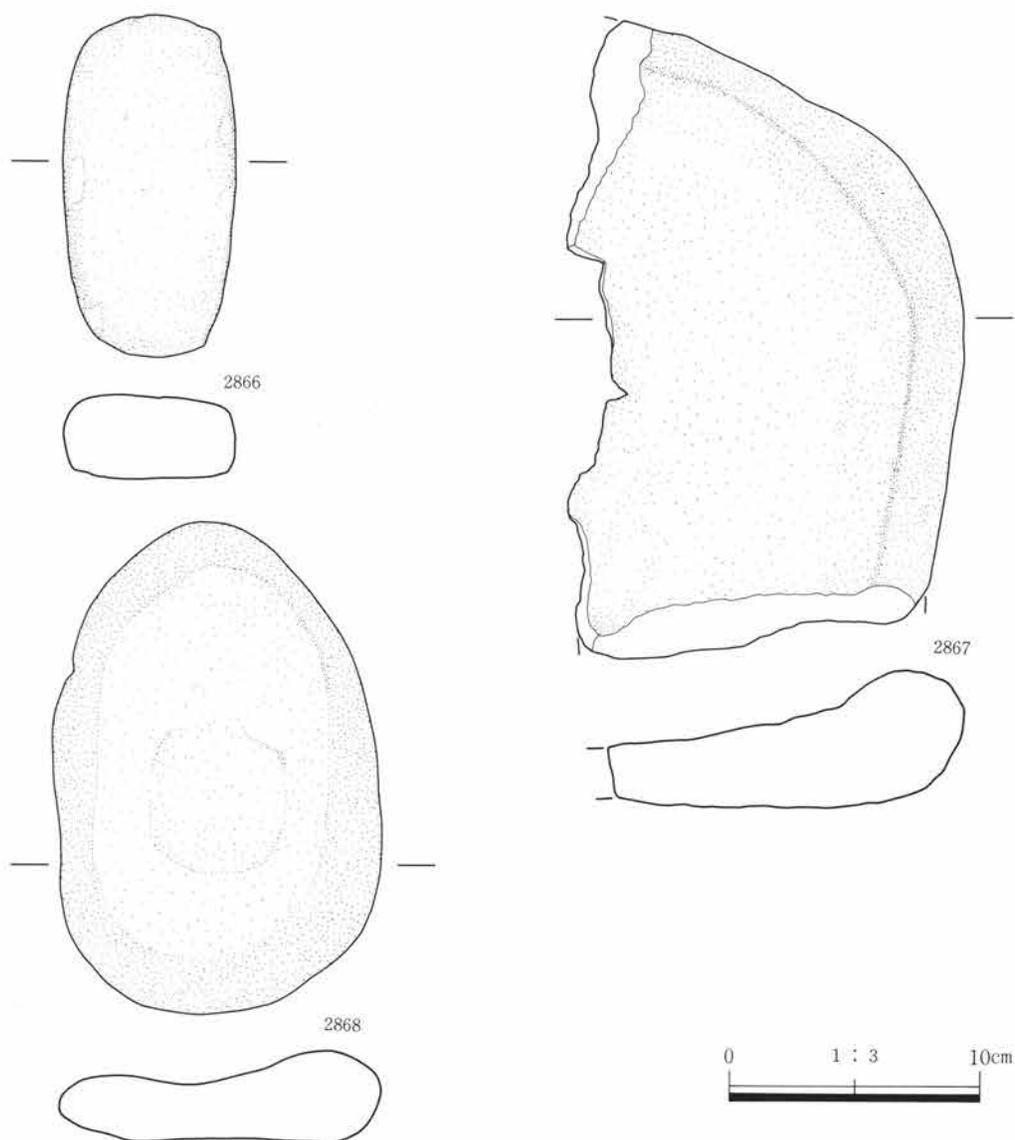
土器は、2221が勝坂式、2218・2219が加曾利EⅠ式、2216・2225が加曾利EⅡ式である。遺構の時期は、土器に若干の幅があり加曾利E式の中葉と考えられる。 (女屋)



第12図 I地区A区57号住居跡遺構図



第13図 I地区A区57号住居跡遺物図(1)



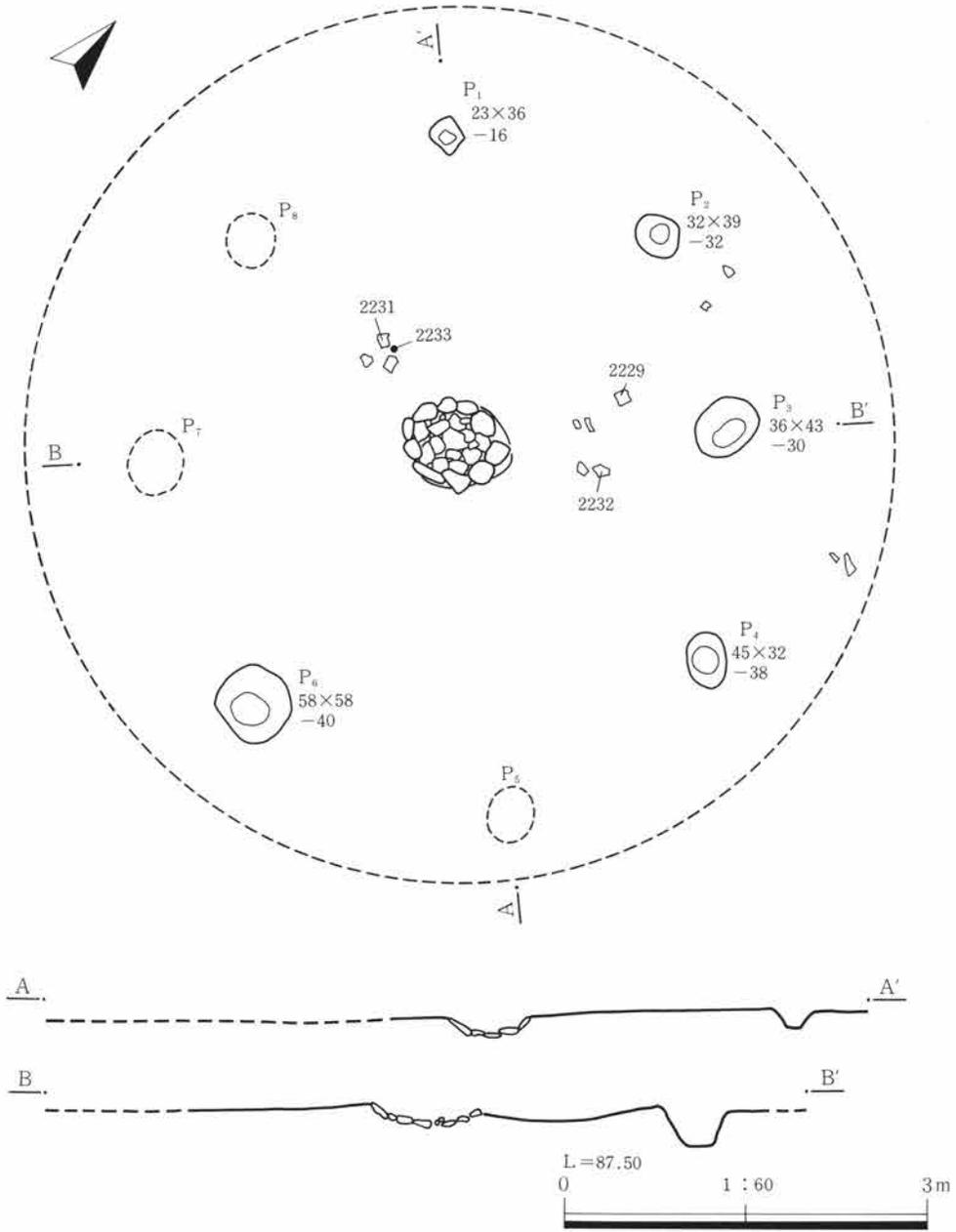
第14図 I地区A区57号住居跡遺物図(2)

第3表 I地区A区57号住居跡石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2866	磨石	135	69	33	540.0	デイサイト。	表裏両面に強い磨耗。
2867	石皿	253	153	49	2000.0	砂岩。	すり面の周縁は敲打、中央は磨滅。
2868	石皿	196	129	35	1290.0	粗粒安山岩。	表面凹み、僅かに磨耗。

I地区A区58号住居跡（第15～18図、第4表、図版7・8）

58号は、直径4.50mの円形と推定されるが、57号同様に床面近くまで削平を受けた状態で確認された。覆土は、上層が粘性に富みローム粒を含む茶褐色土、床面上をロームブロックを含む明褐色



第15図 I地区A区58号住居跡遺構図（1）

色土である。

炉跡は、住居中央に河原石を孤状にめぐらし、床面全体にも敷石のある石囲炉である。縁石は、扁平な河原石10石からなり、掘り方に斜めに差し込んだ状態にある。炉の内部には、焼土・炭化物の量は少なく、敷石も火熱を受けた様子が少ない。内部からは、縁石にかかって石製垂飾1点（2235）が出土している。

柱穴は、5本が確認されており、P 6～P 8の3本は対応関係から推定した。P 1～P 4は、径18～40cmの円形を呈し、確認面からの深さ28～41cmを測る。

遺物は、57号と分布状態をほぼ同じくするが、炉の周囲に散在する傾向が窺える。組成は、深鉢・浅鉢・短冊型石斧1点・磨石1点があるが、土器の個体数は多くない。

2229は、口縁部～体部中央を残す浅い鉢である。口径33cmに復元され、内外面とも丁寧に研磨された上に、口縁～体部上端にかけて赤色塗彩されている。

2230は、深鉢の口縁部破片で、縦位の条線地文の上に、口縁部に3本の沈線がめぐり、体部にも3本単位の沈線で孤線文が2段に描かれている。

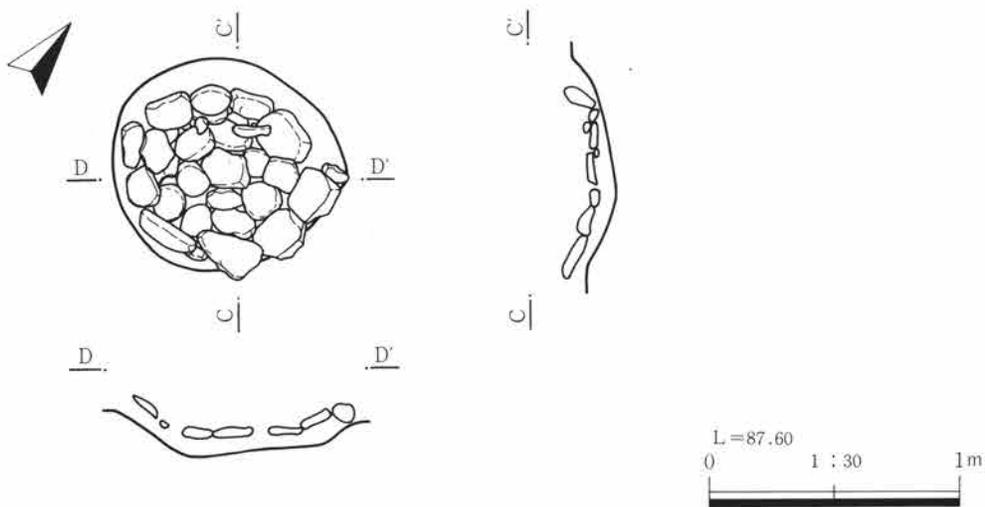
2231～2234は、深鉢の口縁部破片で、貼付隆帯の楕円区画内に2231が絡条体し、2232が縦位の平行沈線、2233がR L縄文を充填している。

2235は、砂岩製垂飾で、6.80×5.60cm、厚さ0.90cm、上端に刻みと共に小溝が全周し、両面から穿孔され紐孔としている。

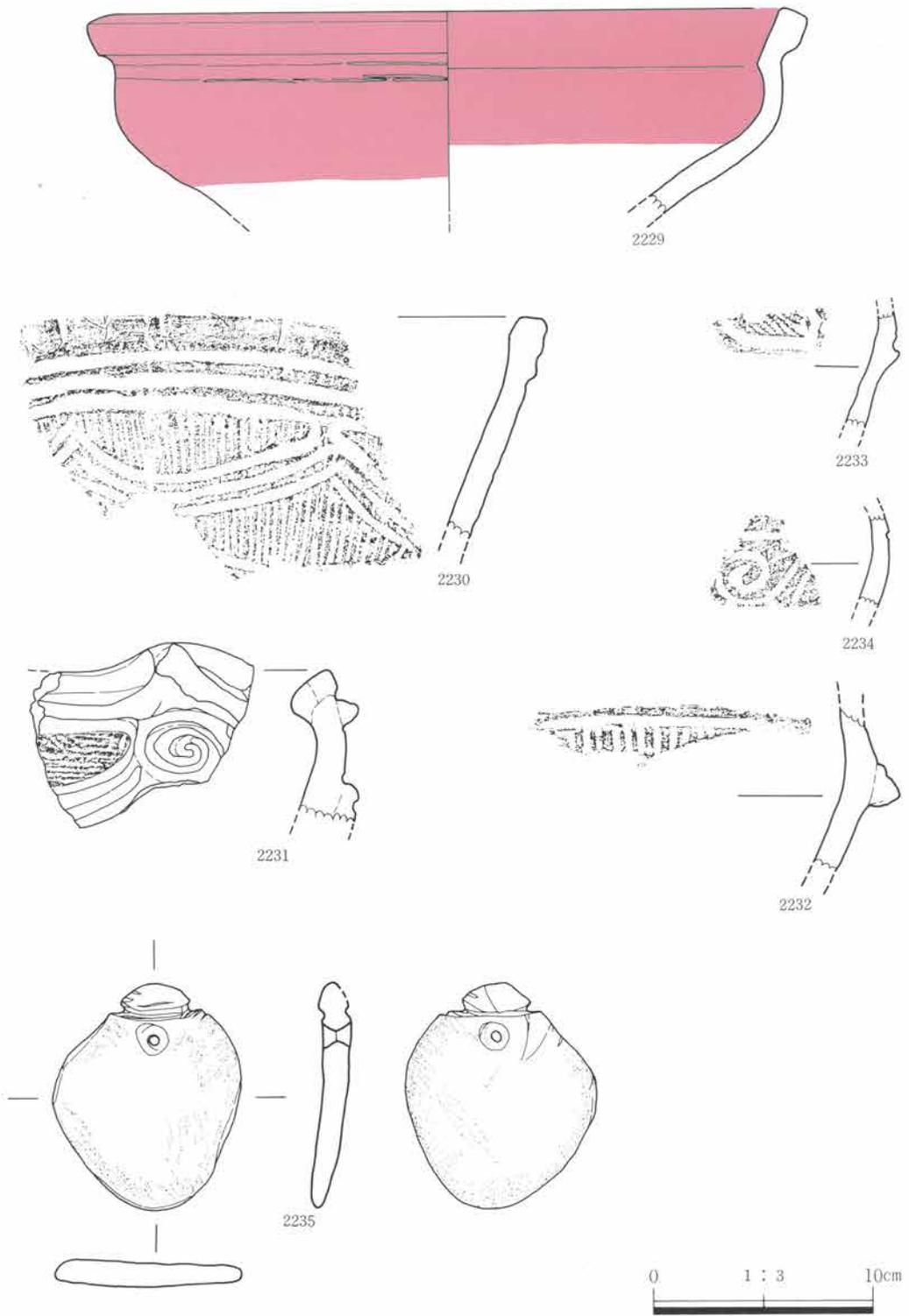
2236は、短冊型石斧の刃部で、端面に長軸に沿った磨耗痕が見られる。2869は、卵形の磨石で全体に磨耗しているが、平坦な一方に部分的な磨滅面が見られる。

土器は、2230～2232が加曽利E II式で遺構の時期を示すが、57号住居跡を切っている。

（女屋）

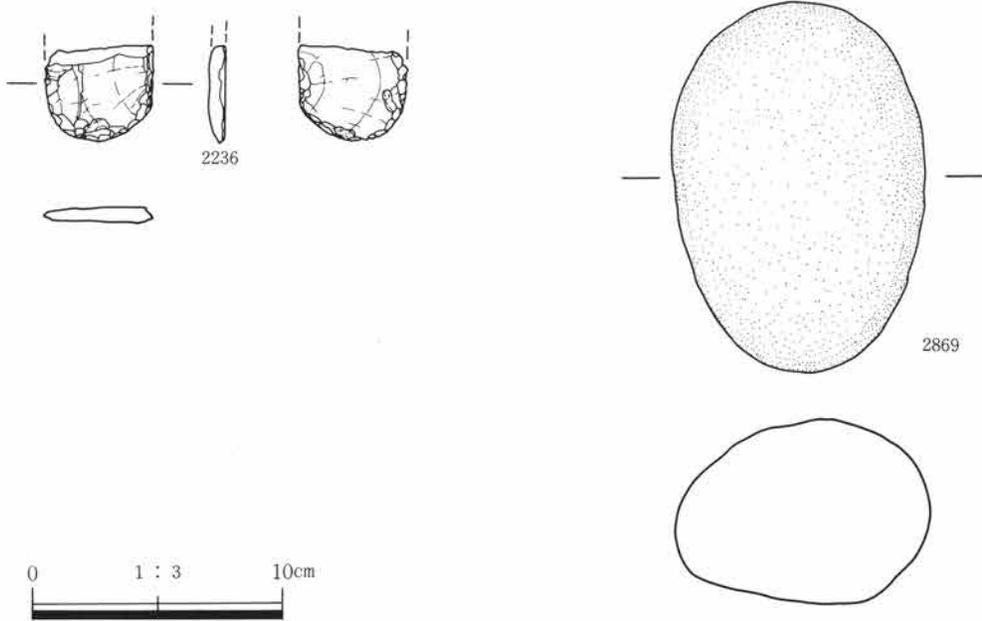


第16図 I地区A区58号住居跡遺構図（2）



第17図 I地区A区58号住居跡遺物図(1)

I 縄文時代（竪穴住居跡）



第18図 I 地区A区58号住居跡遺物図（2）

第 4 表 I 地区A区58号住居跡石器観察表

番号	器 種	長 さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚 さ 最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
2235	石製ペンダント	68	56	9	33.5	砂岩。	孔径 3mm、上端に溝が全周、両面穿孔。
2236	打製石斧	38	43	7	14.2	硬質泥岩。	刃部のみ、端部磨耗、短冊型。
2869	磨 石	147	101	74	1490.0	溶結凝灰岩(大峰・三峰)。	全体に磨耗、裏に磨減面あり。

I 地区A区59号住居跡（第19～21図、第5表、図版9）

本住居跡は、南北4.40m、東西4.80mの円形を呈するが、東半分は10号方形周溝墓に床面下まで削平されている。覆土は、西壁沿いにローム粒を含む黒褐色土が見られた。

炉跡は、住居中央を外れた北西寄りにあり、河原石の割石3個が残る石囲炉であるが、抜き取られた方が多い。炉の内部には、若干の焼土と炭火物が残る、縁石は赤化していた。炉の掘り方は、80×72cmの円形を呈し、深い掘り込みを持っている。

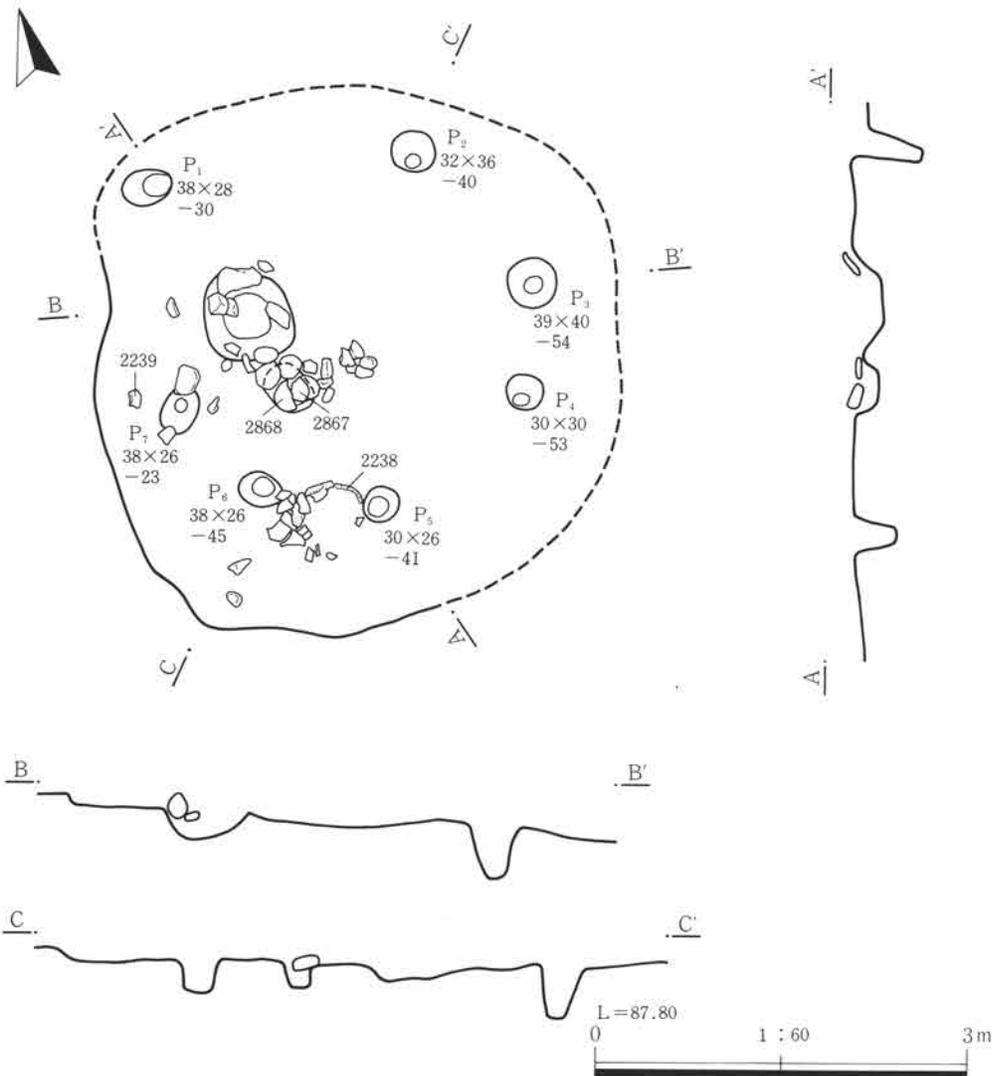
炉の南にT字形に接して、河原石4石を用いた部分的な敷石状態が見られた。石の中には、使用可能な石皿2点（2867・2868）があり、下部には80×72cm、深さ20cmの円形ピットがあき、貯蔵穴様のピットに対する蓋石の性格も考えられる。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

柱穴は、7本が確認されたがP1～P6までが、支柱穴と考えられる。いずれも直径30～40cmの円形の掘り方を持ち、深さは30～54cmでP4～P7までが40cmを越して深い。P7は、掘り方に変化ないが支柱穴の対応関係から外れ、寧ろP5との間にある伏甕を意識したものであろうか。

遺物は、西半分に分布するが床面上での石が目についた。組成は、P5脇の伏甕である深鉢を始めとして、小型の深鉢、分銅型石斧2点、磨石1点がある。

2238は、キャリパー状の大形深鉢で口径48.2cm、残高24.5cmを測る。口縁部から体部上半にかけて残存し、口縁は4単位の突起を持つ波状を呈し、貼付隆帯で楕円状に区画した中を平行沈線で充填、頸部は、無文のままとし、縷以下の体部にはLR縄文を全面に施文する。



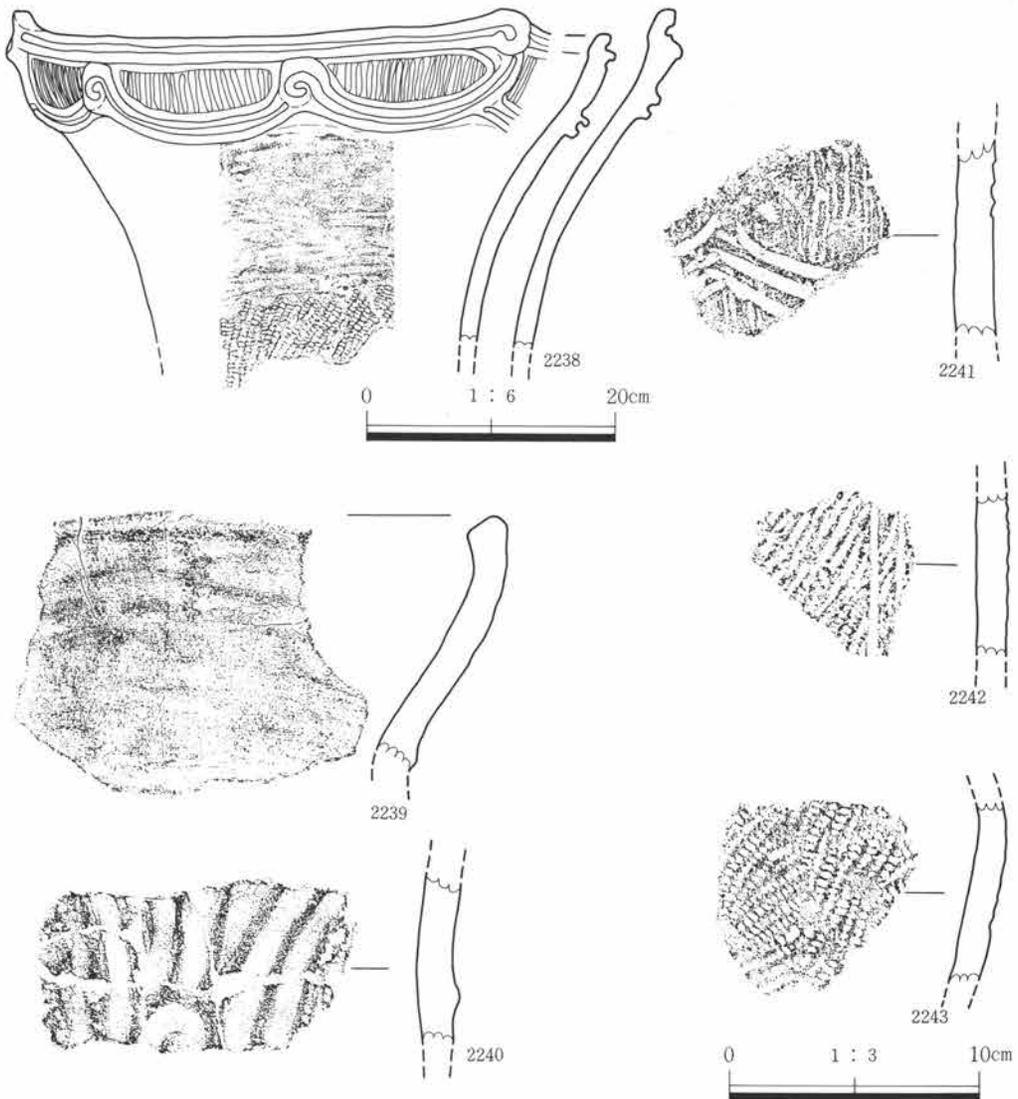
第19図 I地区A区59号住居跡遺構図

I 縄文時代（竪穴住居跡）

2240～2243は、深鉢の体部破片である。2240は、太めの沈線で区画した中を縄文で充填。2241は、縦位の撚糸文の上に3本単位の連弧文を施す。2242・2243は、LR縄文を地文とし、2242には2本の沈線が垂下する。2239は、浅鉢の口縁部破片である。

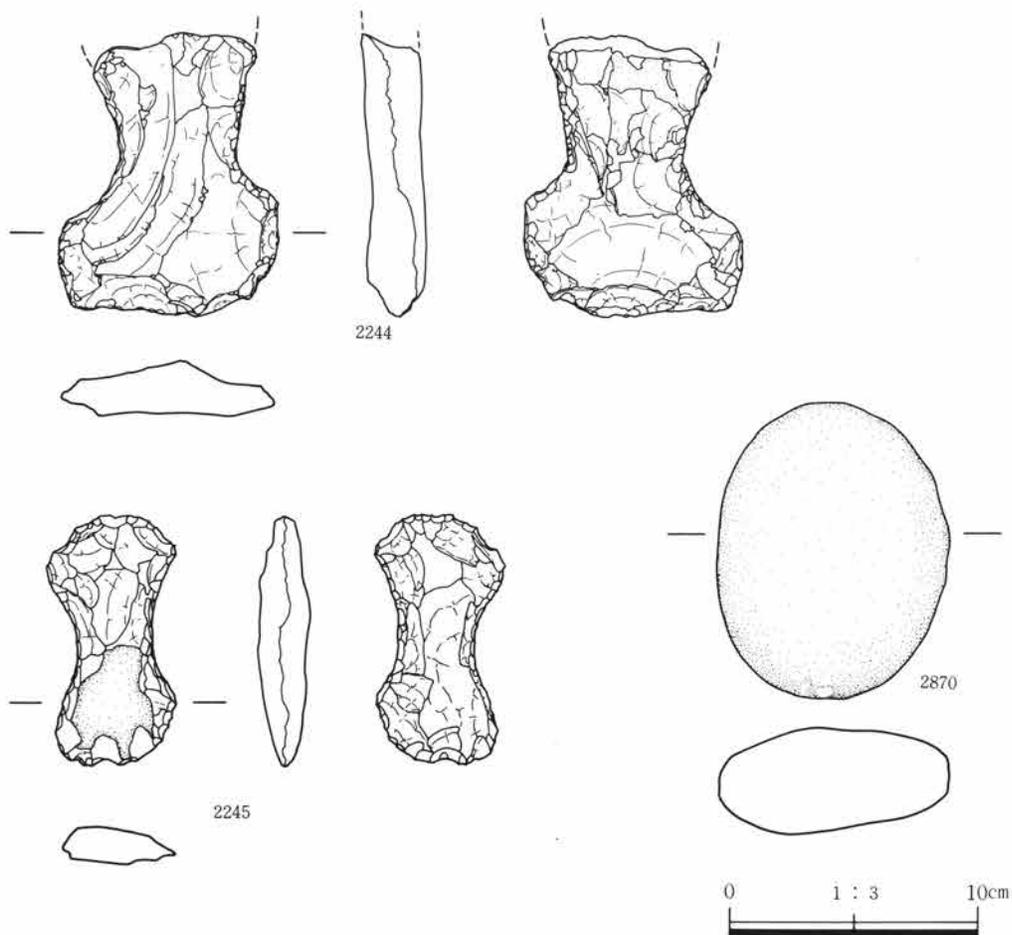
2244は、頭部を欠損している。両側の挟りは深く、軽く敲打、刃部は平らで厚い。挟れ部には幅3cm弱の着装に伴う磨耗痕が見られる。2245は、分銅型の完存品で、上下両端は丸みを持つ。2870は、卵形の磨石、全体に磨耗し、裏面には平坦な磨滅した面が見られる。

遺物は、伏甕である2238が加曽利E II式、浅鉢を除いた他が同E III式である。遺構の時期としては、遺物に幅があるものの伏甕の時期を当てて加曽利E II式とする。 (女屋)



第20図 I地区A区59号住居跡遺物図(1)

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第21図 I地区A区59号住居跡遺物図(2)

第5表 I地区A区59号住居跡石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2244	打製石斧	112	88	23	224.4	硬質泥岩。	分銅型、頭部欠損、装着痕あり。
2245	打製石斧	98	49	19	107.9	黒色頁岩。	分銅型、完存。
2870	磨石	118	93	41	640.0	粗粒安山岩。	全体に磨耗、裏に磨減面あり。

I 地区 A 区 75号住居跡（第22・23図）

本住居跡は、径7.0mの円形を呈すと推定されるが、後代の多くの遺構が重複し、床面近くまで削平された状態で確認された。

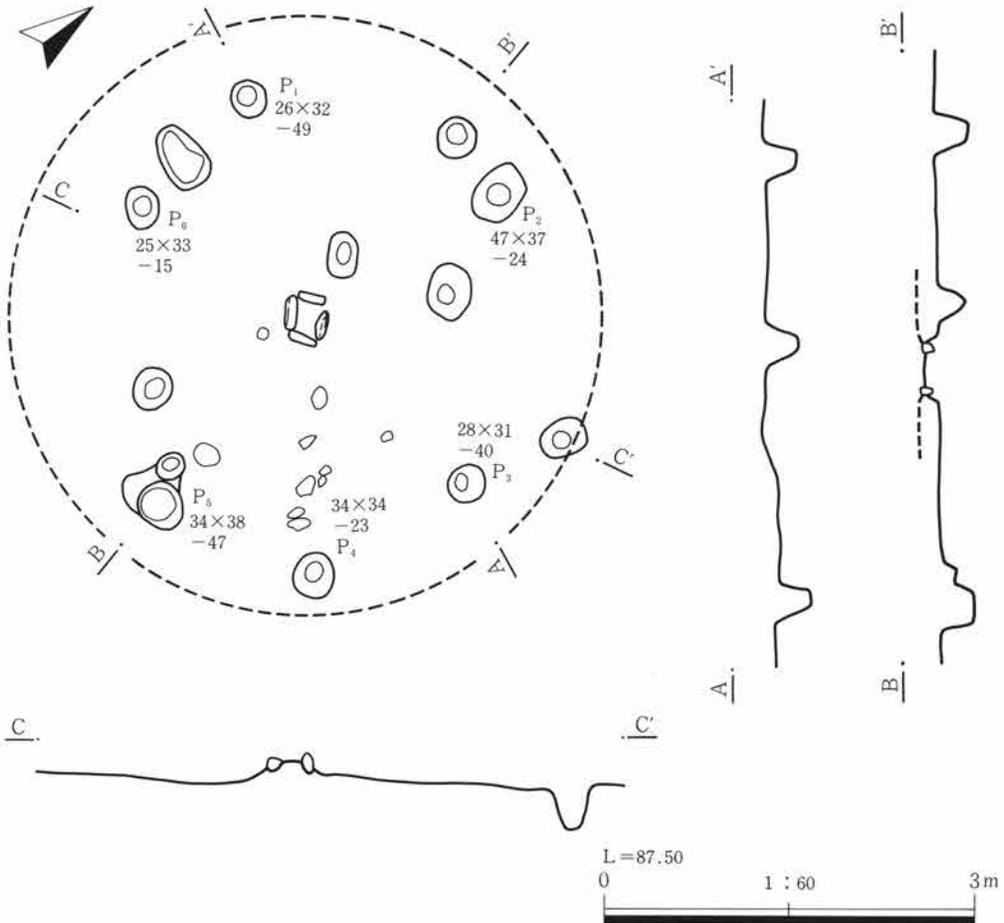
中心位置にある石囲炉は、浅い掘り方の中に4個の河原石を横置きにしたもので、中には若干の焼土と炭火物が残っていた。

柱穴は、14本が確認されたが、炉を中心とした6本主柱穴である。いずれも直径28～48cmの円形の掘り方を持ち、深さ15～47cm、柱間120～230cmを測る。

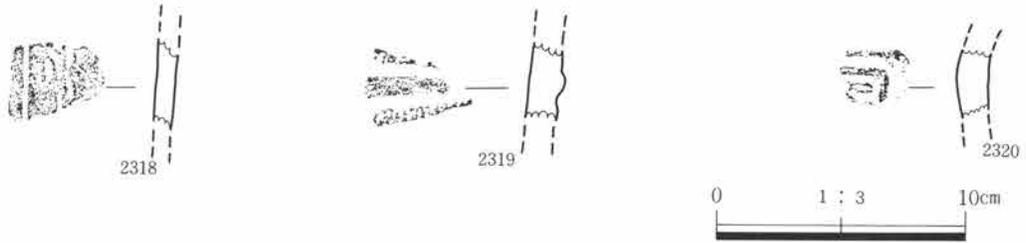
遺物は、土器と石器の破片が若干ある。炉の東南には大小の河原石10個が散在するが、P5脇にあるのは丸石の様である。図示した3点は、いずれも深鉢土器の体部破片で、2318が沈線区画内に列点文を施した称名寺II式、2319・2320が加曾利E III式である。

遺構の時期は、加曾利E III式である。

（女屋）



第22図 I 地区 A 区 75号住居跡遺構図



第23図 I地区A区75号住居跡遺物図

I地区A区76号住居跡（第24～32図、第6表、図版9・10）

本住居跡は、直径6mの円形を呈すると推定される。75号・100号とは南北に隣接して位置するが、同様に床面近くまでを削平された状態で確認された。

覆土は、中央部全体をローム粒を含む茶褐色土が、壁際に黄褐色土が分布する。

炉跡は、住居中央にあり、河原石12個を対に配した隋円形の石囲炉である。内法で南北90cm、東西40cmを測り、掘り方は舟底状を呈する。炉内は、上面を暗褐色土、下面を黄褐色土が覆うが焼土・炭火物は少なく、縁石の焼け方も不明瞭である。

柱穴は、土坑状のものまで含めて16本が確認されたが、P1～P6までの6本主柱穴とした。しかし、隣接し合う柱穴の様子からすると同心円上での建替えも考えられるが定かでない。掘り方は、60cm前後の円形のものが多く、床面からの深さは41～56cmを測る。

住居内には集石3箇所と埋甕2基があり、遺物分布の中心となっている。

集石1は、炉の北東に接するもので、割石を含む大小の15個の河原石からなる。上面は、ほぼ平らで下面に70×50cm、深さ21cmの円形ピットがあく。集石2は、P3に落ち込んでいるが4個の河原石からなり、P4に落ち込んだ状態にある2324の大形深鉢の口縁部が共伴する。集石3は、炉の南1.50mにあって、集石1とは炉を挟んで対に近い位置にある。割石4個を含む8個の河原石からなり、板石をめぐる弧状の配列がうかがえる。この中には、多孔石1点が含まれる。住居内には、比較的多くの石が散在するが、集石周囲に多く、何らかの関係を持つのであろう。

埋甕2基は、炉の西側2.30mと3.10mの位置にあり、炉に対して直角方向に連なる。

1号埋甕は、大形深鉢の体部を輪切り状にしたもので、ロームを掘りこんだ中に正位の状態にあった。中には、拳大の河原石数個が見られた。

2号埋甕は、円筒状深鉢の底部を欠いたものを、土坑状の掘り方内に正位の状態に据えたもので、1号が床面よりも5cm程高いのに対して、口縁は床面と同一である。

遺物の出土状態は、住居全体に散在するが、P1とP2を結んだ東では3基の集石に伴うかのように破片状態の土器が多く、西では2基の埋甕と2321の深鉢1個体が単独と、半ば対称的なあり方を示している。器種は、深鉢・浅鉢に限られるが深鉢は大形品で個体数も多い。石器は、短冊

I 縄文時代（竪穴住居跡）

型打製石斧10点・礫器3点・スクレイパー1点・凹石3点・磨石・石皿各1点がある。組成としては、器に大小がないが個体数の多いのが特徴で、埋甕を除いて10個体を上回る。石器は、石鏃・剥片石器類が少ないが、短冊石斧は細分が可能である。

2321は、大形深鉢の口縁部～体部にかけての破片で、口径48.7cm、残高26cmを測る。口縁は、2本の貼付隆帯で半円形に8単位に区画した中を平行沈線で充填、区画の間は渦巻文を施す。口縁部以下は、全体にLR縄文を施文する。

2322は、1号埋甕で大形深鉢の体部である。絡条体Lを地文とし、2本の貼付隆帯による『し』状文を対に、2単位施す。

2323は、大形深鉢の口縁部体部中央の破片で、口径34cm、残高32cmを測る。口縁部は、2本の貼付隆帯で隋円形区画を作り、中を平行沈線文で充填、区画間は、やや隆起する渦巻文を配す。頸部は無文帯とし、3条の沈線をめぐらした体部は全面にLR縄文を施文する。2324は、本例と似てだが、口縁部の隋円状区画内はLR縄文で充填されている。口径29cm、残高33cmを測る。

2325は、深鉢の口縁部破片で口径29cmを測る。体部にむけて縦位の撚糸文を施す。

2326・2327は、大形深鉢の体部破片で、LR縄文を地文に施し、2327は3条の沈線をめぐらす。

2328は、2号埋甕で底部欠損の円筒状深鉢である。口径15.2cm、残高21cmを測る。口縁部は、やや開きぎみの無文帯、頸部は貼付隆帯を1本めぐらし、体部はLR縄文全面施文後、頸部から4条の貼付隆帯を垂下させて区画する。隆帯の交点は突起する。

2329は、深鉢の口縁部～底部の破片である。口径38cm、器高17cmを測る。口唇部は、平坦、内外面ともに丁寧に研磨してあるが、内面の中位以下と底部外面に磨耗が著しい。

2330は、補修孔を持った浅鉢の口縁部の小破片である。

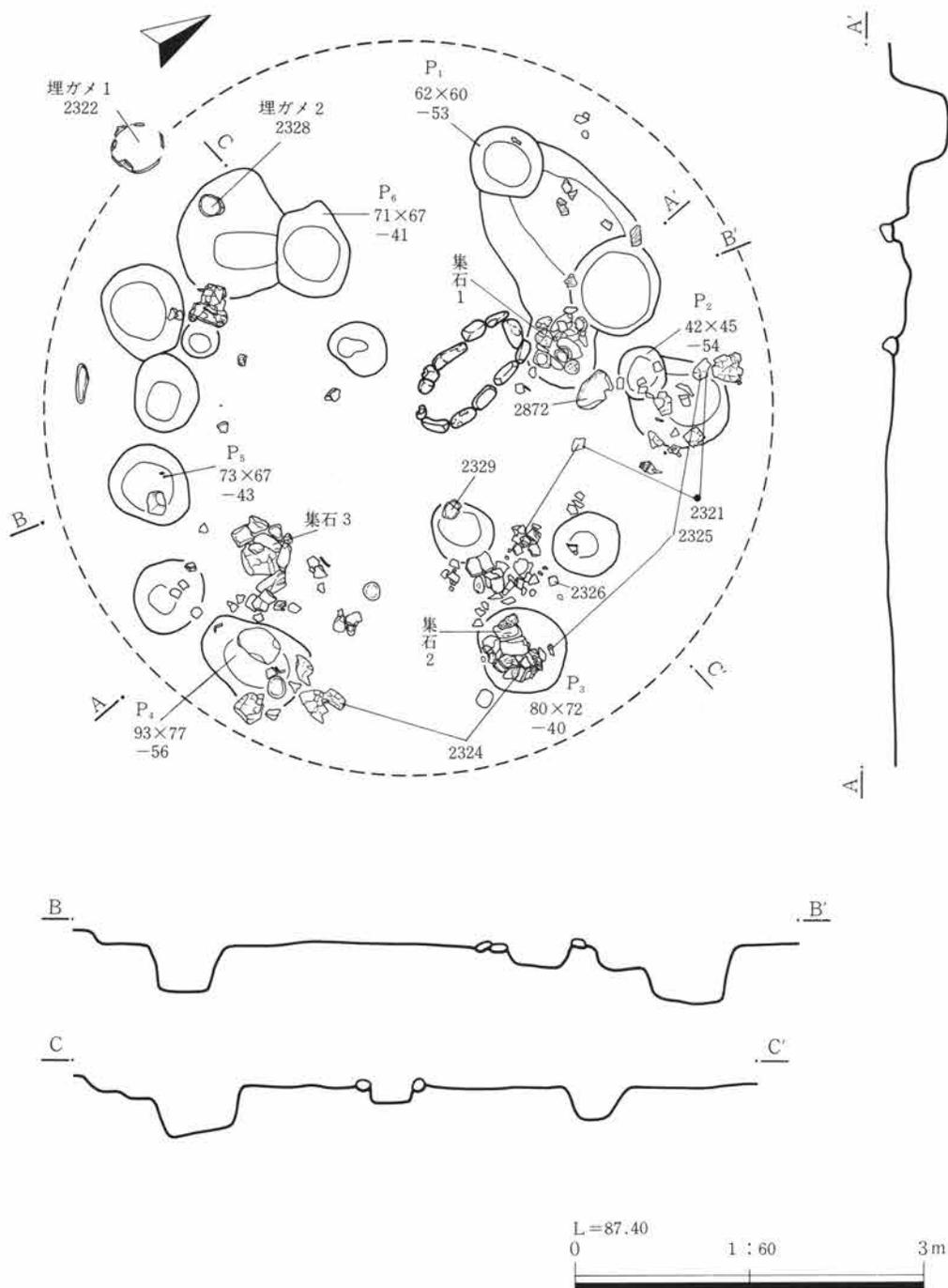
2331～2339は、いずれも短冊型石斧である。破損品を含むが、長さ10～12cm前後で一定する。2331～2333・2336の4点は完存品。両側縁が平行するが刃部に最大幅がある。刃部は、平らなものと舌状の2つがある。全体に着装部と刃部に磨耗痕が目立つ。2324は、刃部が『ハ』の字状に開き、最大幅を持つ。

2340～2342は礫器である。片岩を素材とし、石斧に近い用途と2342は石錘の可能性もある。

2344～2346は凹石である。表裏に1～2孔を持つが、2344は端部に敲打痕を持っている。

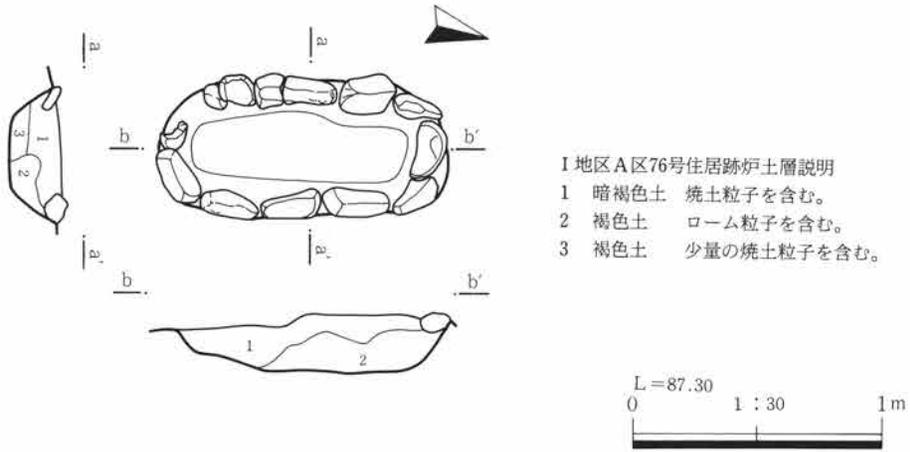
2871は磨石、2872は石皿である。

遺物は、住居の遺存状態に合わせてか個体数が多く、組成としての傾向を示し、時期的にもまとまりを持っている。2322・2328の2基の埋甕は曾利II式の特徴を持っているが、主体は2321を始めとする2323～2327の加曾利EII式の一群で、遺構の時期を示すものである。（女屋）

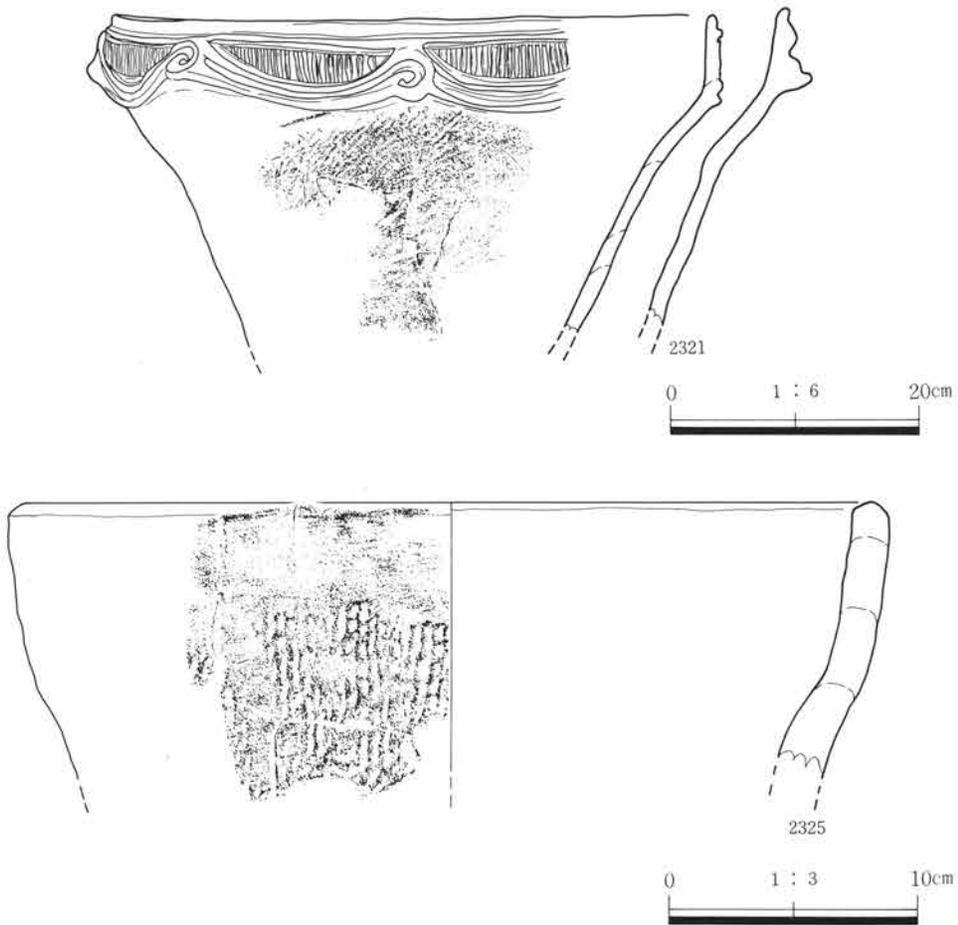


第24図 I地区A区76号住居跡遺構図(1)

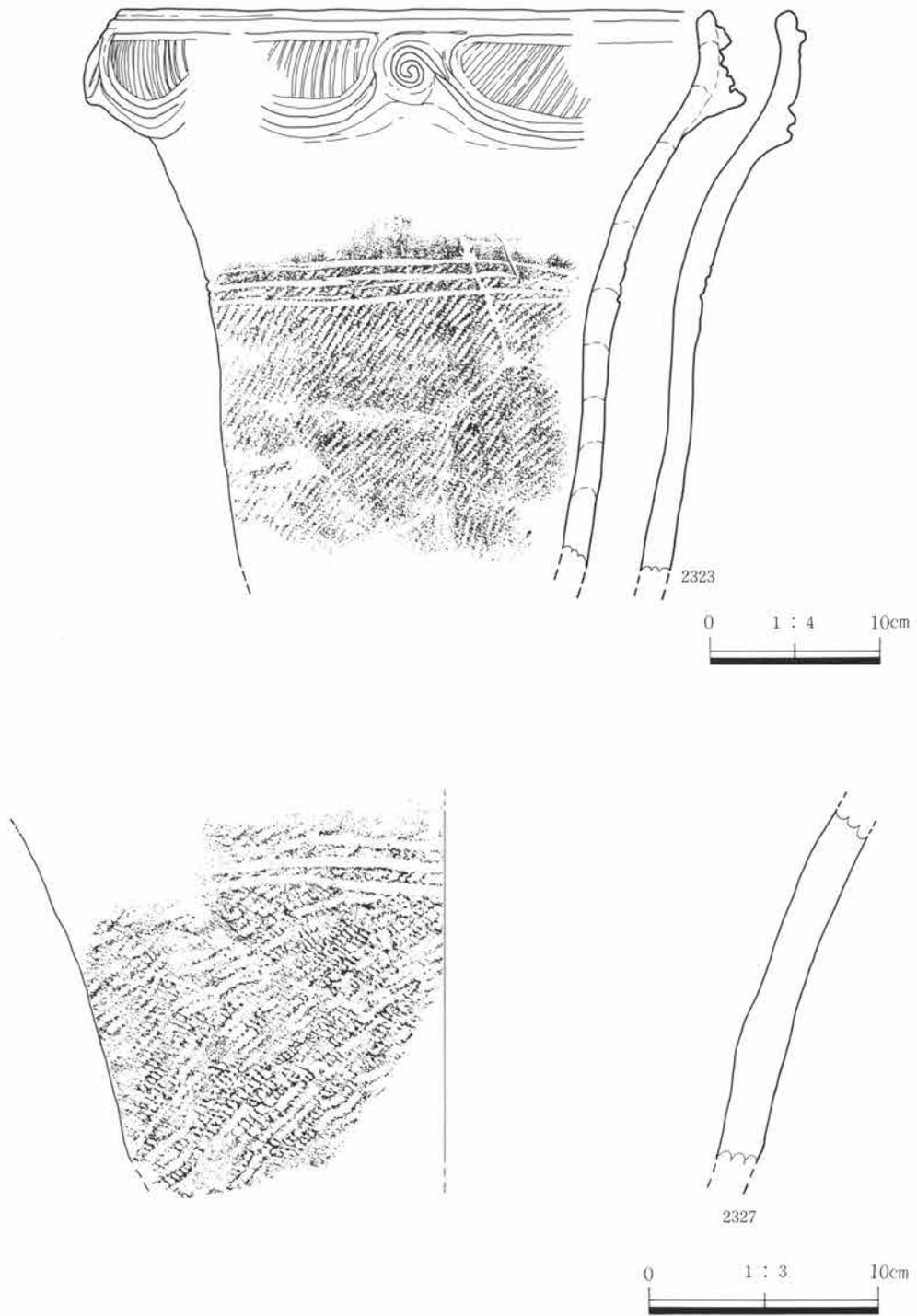
I 縄文時代（竪穴住居跡）



第25図 I 地区A区76号住居跡遺構図（2）

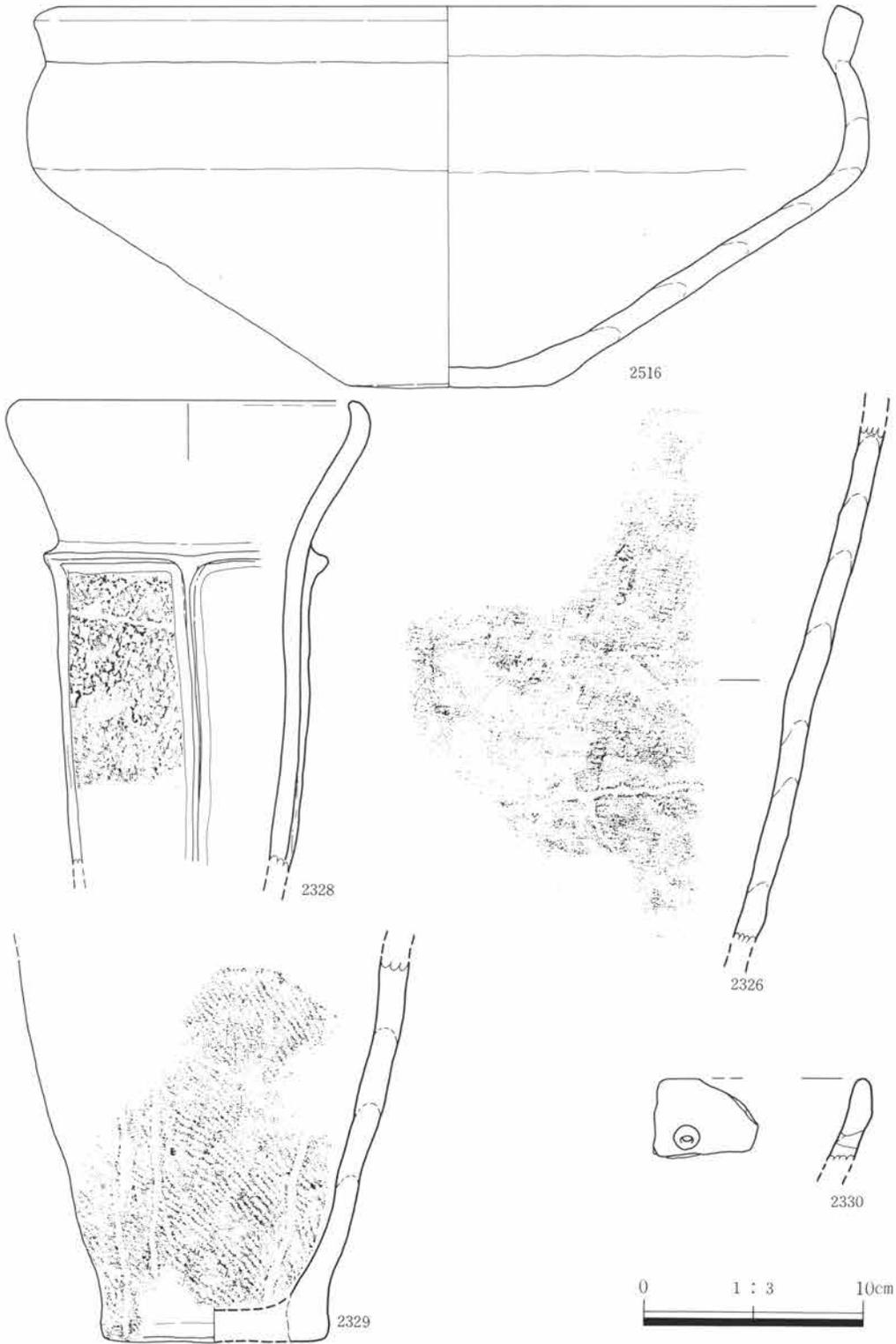


第26図 I 地区A区76号住居跡遺物図（1）

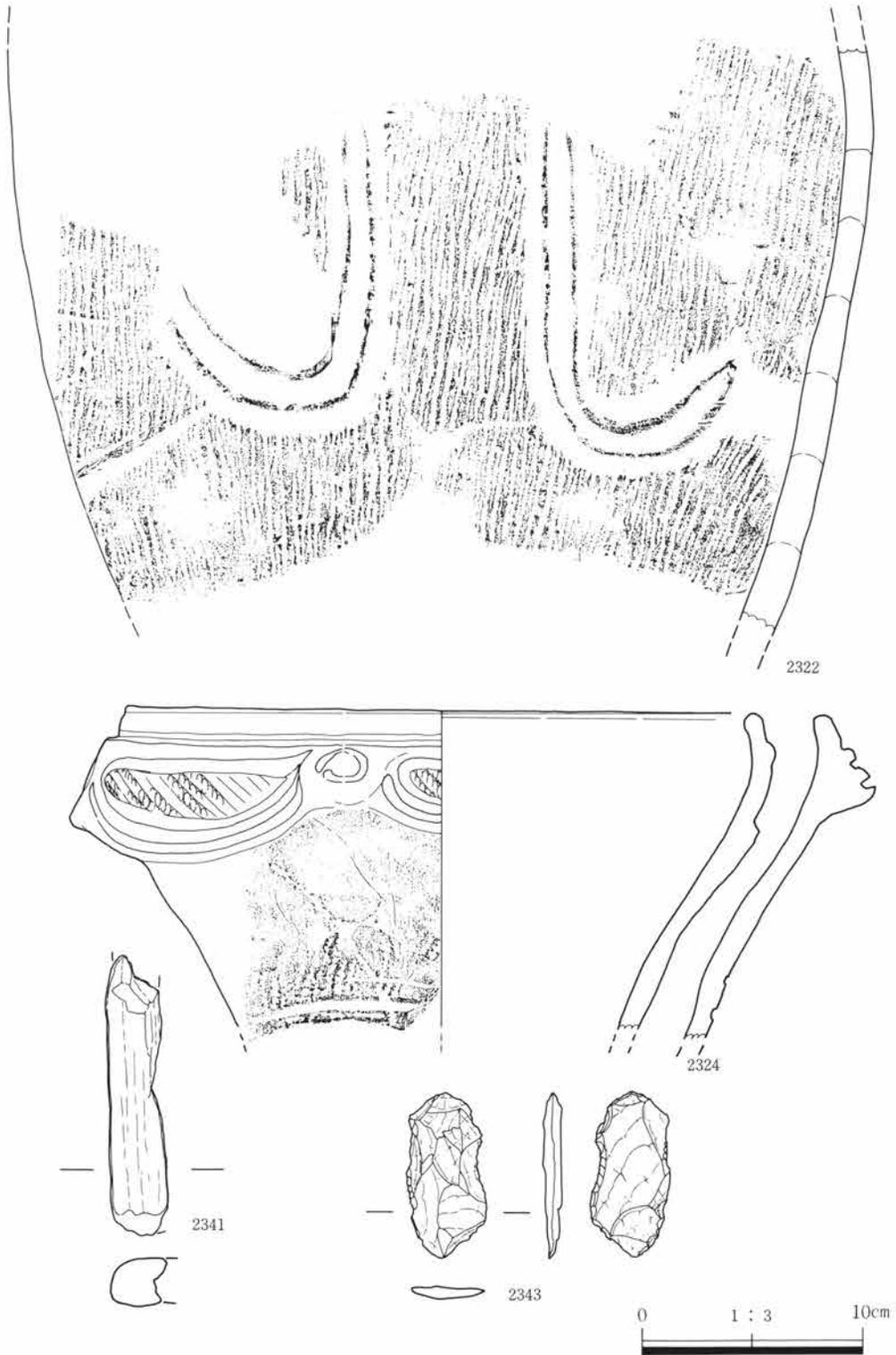


第27図 I地区A区76号住居跡遺物図(2)

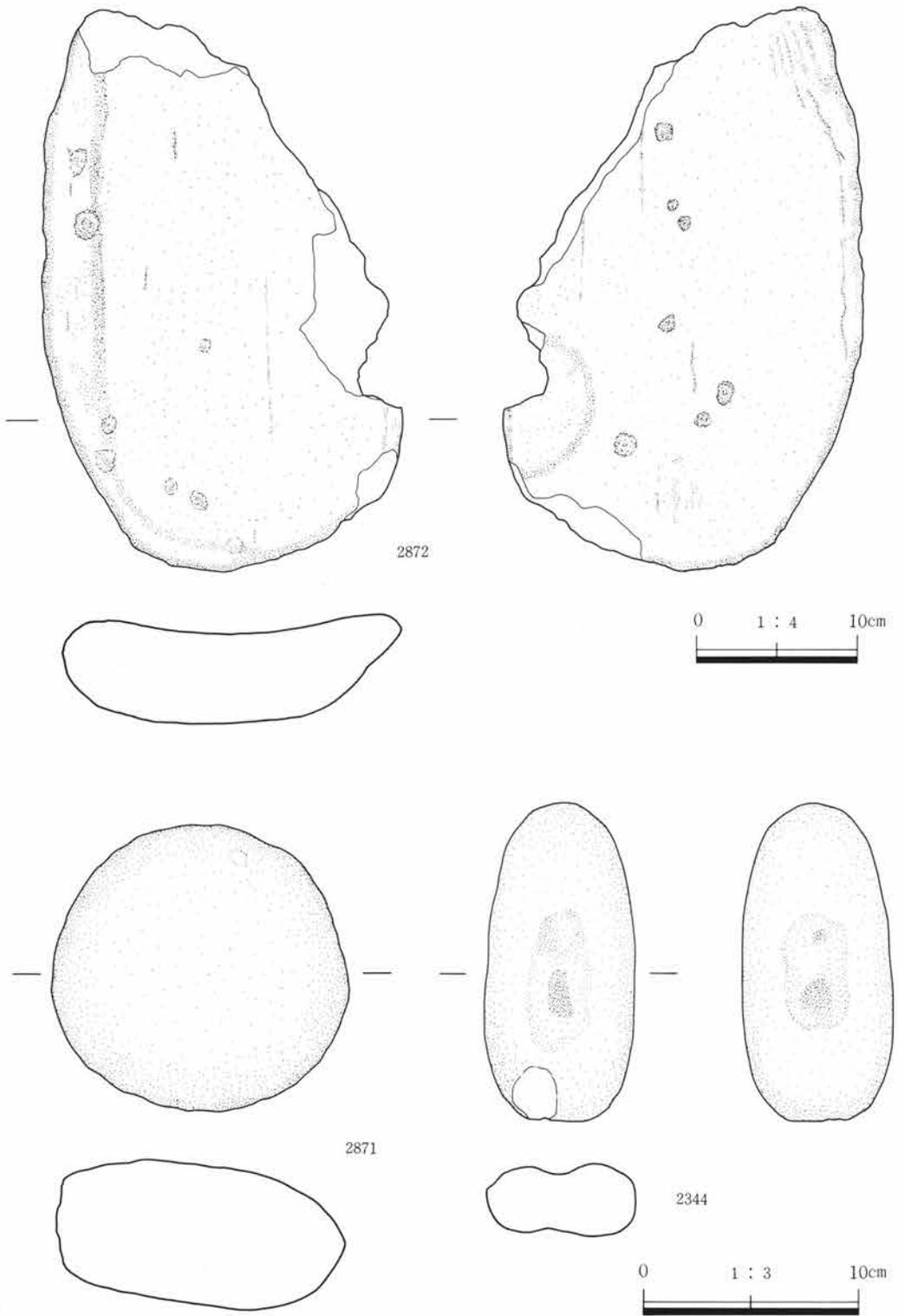
I 縄文時代（竪穴住居跡）



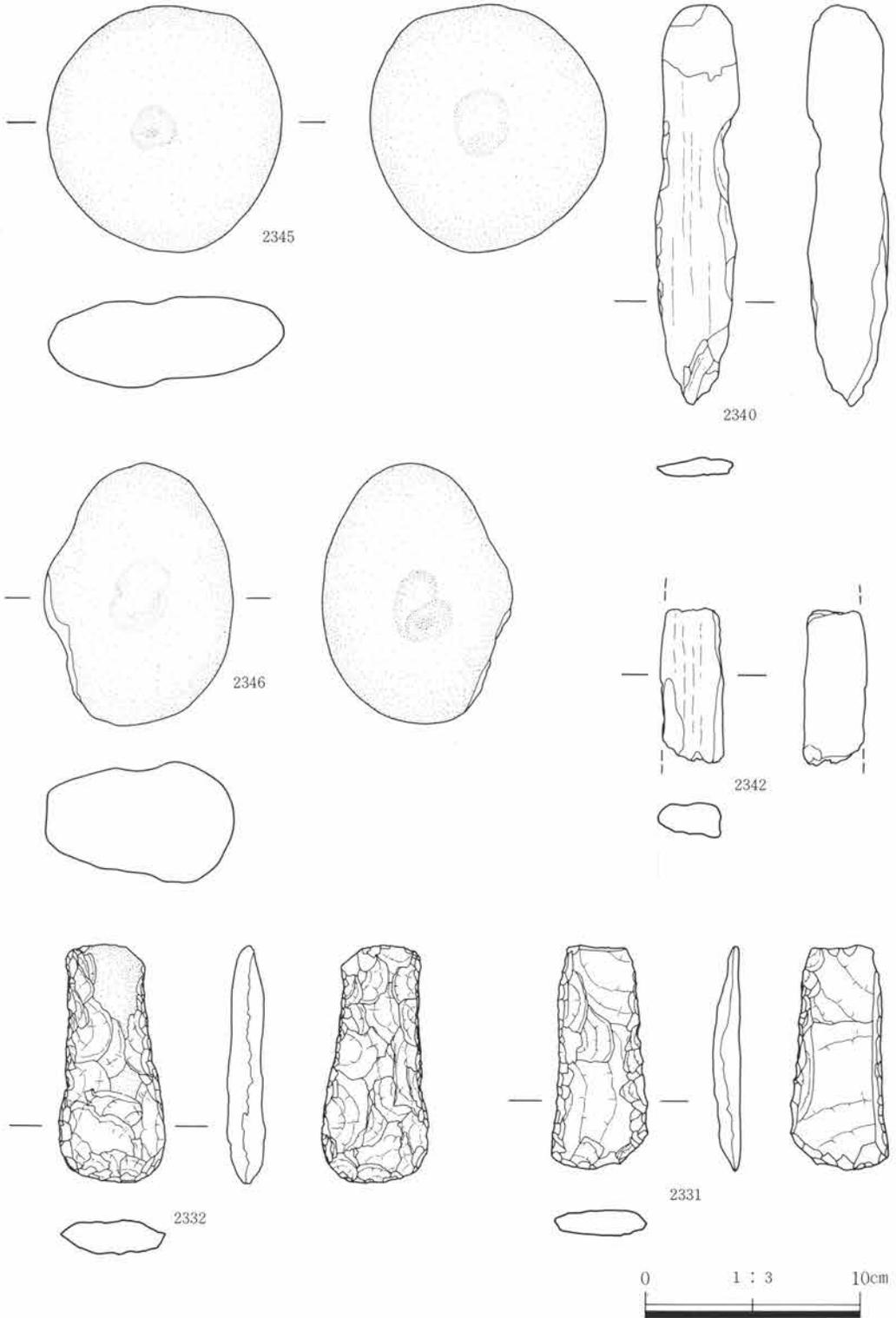
第28図 I地区A区76号住居跡遺物図(3)



第29図 I地区A区76号住居跡遺物図(4)

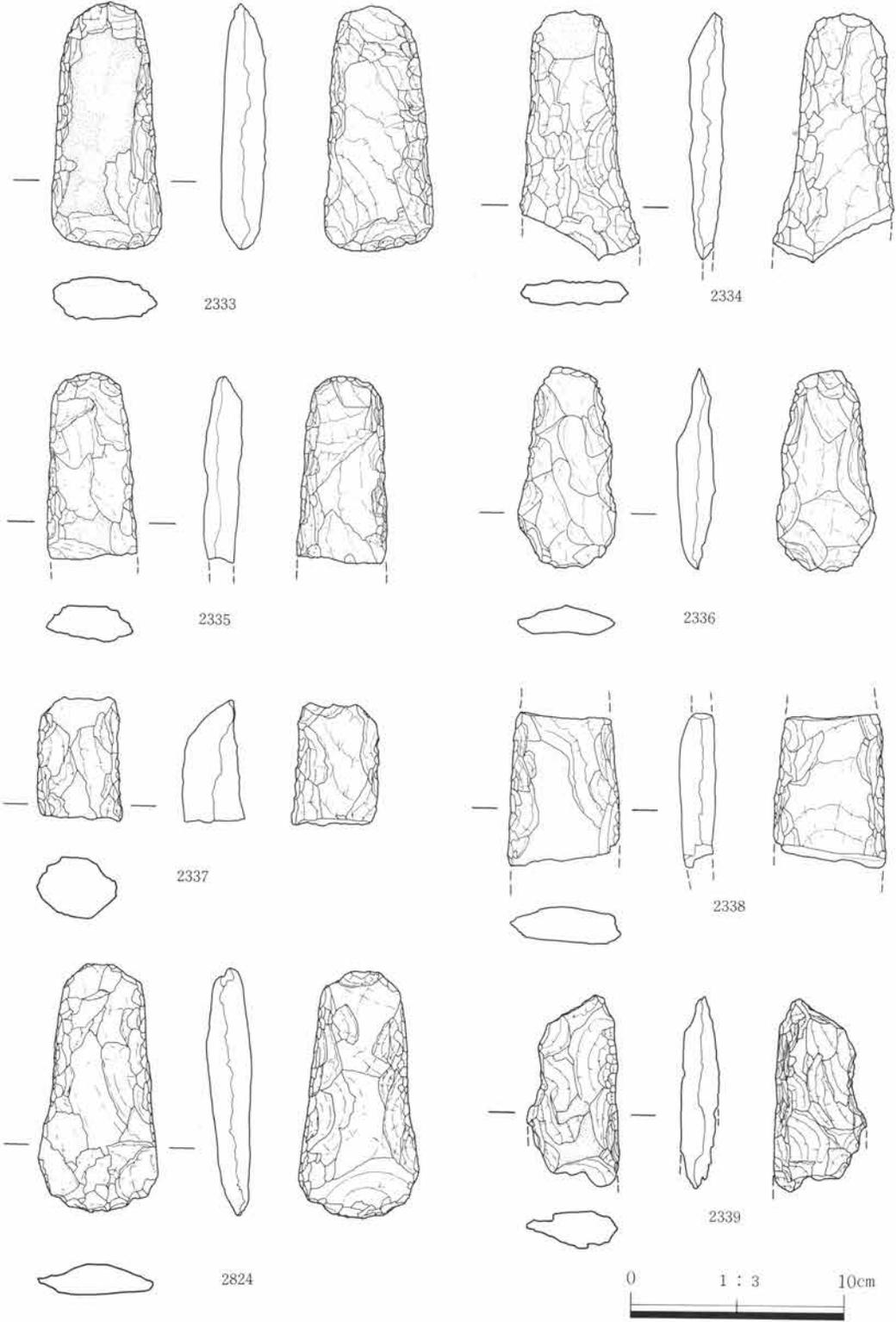


第30図 I地区A区76号住居跡遺物図（5）



第31図 I地区A区76号住居跡遺物図(6)

I 縄文時代（竪穴住居跡）



第32図 I地区A区76号住居跡遺物図（7）

第6表 I地区A区76号住居跡石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2331	打製石斧	102	44	12	79.2	輝緑岩。	短冊型、完存、刃部磨耗。
2332	打製石斧	109	49	17	107.4	硬質泥岩。	短冊型、完存、刃部全体が磨耗。
2333	打製石斧	113	51	20	164.0	硬質泥岩。	短冊型、完存、刃部にタテの磨耗痕。
2334	打製石斧	114	51	16	119.6	細粒安山岩。	短冊型、完存、刃部ハの字に開く。
2335	打製石斧	85	42	17	80.6	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損。
2336	打製石斧	92	46	17	67.6	頁岩。	短冊型、完存、刃部磨耗。
2337	打製石斧	57	38	27	87.0	硬質泥岩。	短冊型、頭部のみ、全体に厚い。
2338	打製石斧	71	51	16	93.5	灰色安山岩。	短冊型、両端部欠損、全体に扁平。
2339	打製石斧	89	43	17	64.0	細粒安山岩。	短冊型、刃部の一部を欠損。
2340	礫器	183	35	8	79.0	黒色片岩。	短冊型、全体に薄く、先端尖る。
2341	礫器	125	25	21	96.4	黒色片岩。	石斧の用途か。
2342	礫器	71	28	15	54.4	雲母石英片岩。	石錘か、下端面にV字の刻みあり。
2343	スクレイパー	74	32	8	21.9	頁岩。	縁辺に使用痕あり。
2344	凹石	146	69	34	462.9	粗粒安山岩。	表裏2孔、下端に敲打面あり。
2345	凹石	113	109	40	520.5	粗粒安山岩。	全体に磨耗、表のみ平坦。
2346	凹石	119	89	55	715.6	粗粒安山岩。	表裏孔のみで、磨耗等なし。
2824	打製石斧	114	55	21	136.9	珪質変質岩。	短冊型、完存、刃部に強い磨耗、刃をつけ直す。
2871	磨石	137	131	54	1590.0	粗粒安山岩。	表裏面の中央が僅かに平坦。
2872	石皿	348	213	58	5850.0	点紋緑色片岩。	裏面平坦、中央部は特に磨減。

I地区A区98号住居跡(第33・34図)

本住居跡は、径5mの南北に長い円形を呈する。南東側を平安時代の96号住居跡に切られ、壁の殆どを削平された状態で確認された。覆土は、炭火物が混入する暗褐色土が唯一残る。

炉跡は、住居中央に土器を埋設した埋甕炉で、I地区では唯一、隣接するII地区8区1号住居跡に類例が求められる。土器は、深鉢形の体部中央を輪切り状にしたもので、下端面は内側に向けて丁寧に研磨されていた。炉の掘り方は、径70cmの円形を呈し、周囲は赤く一様に焼けていた

が、土器内部での焼土は少ない。

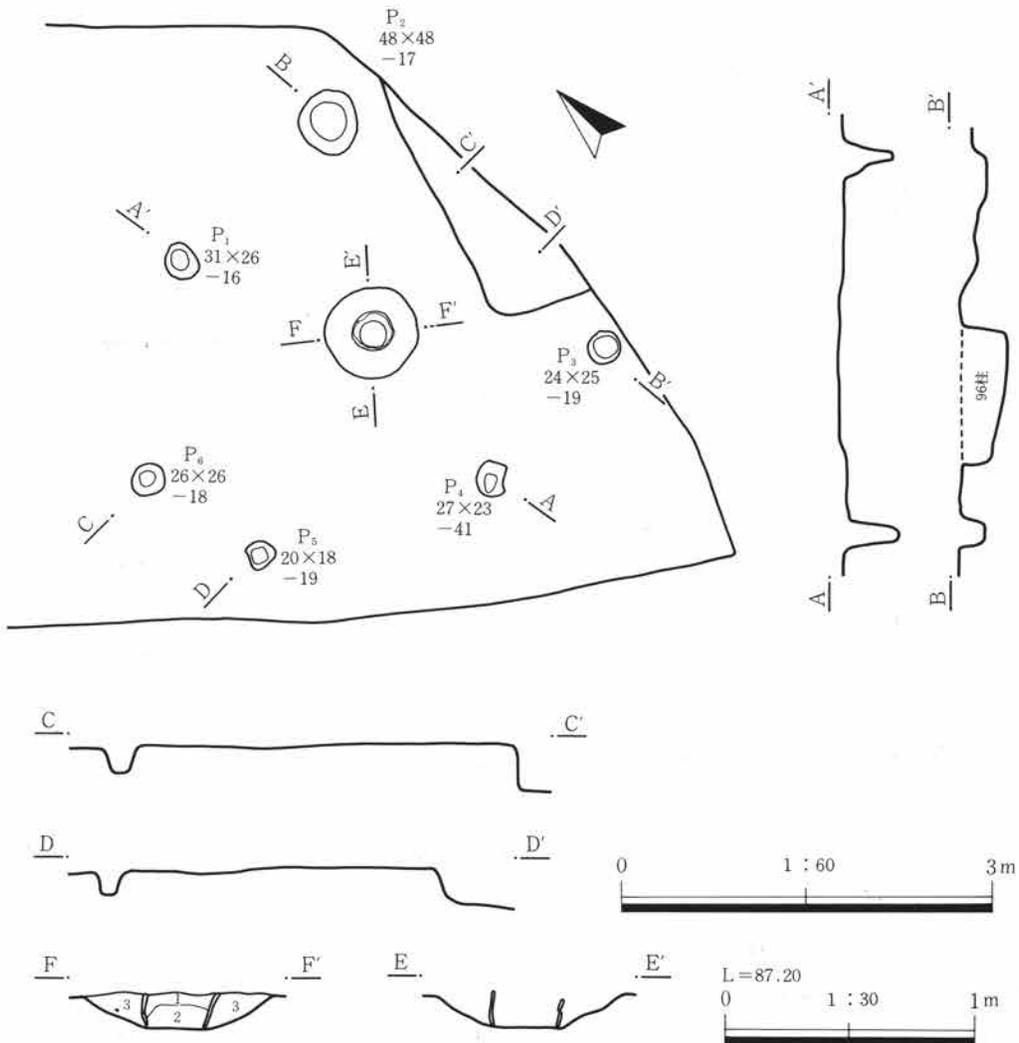
柱穴は、炉をめぐり対に6本が確認された。形状は、径25～40cmの円形で、床面からの深さは15～19cmを測る。

遺物は、炉体土器（2561）だけである。

2561は、LR縄文を施文後、2本の沈線による磨消無文帯を13単位施している。

遺構の時期は、炉体土器の特徴から加曾利E III式である。

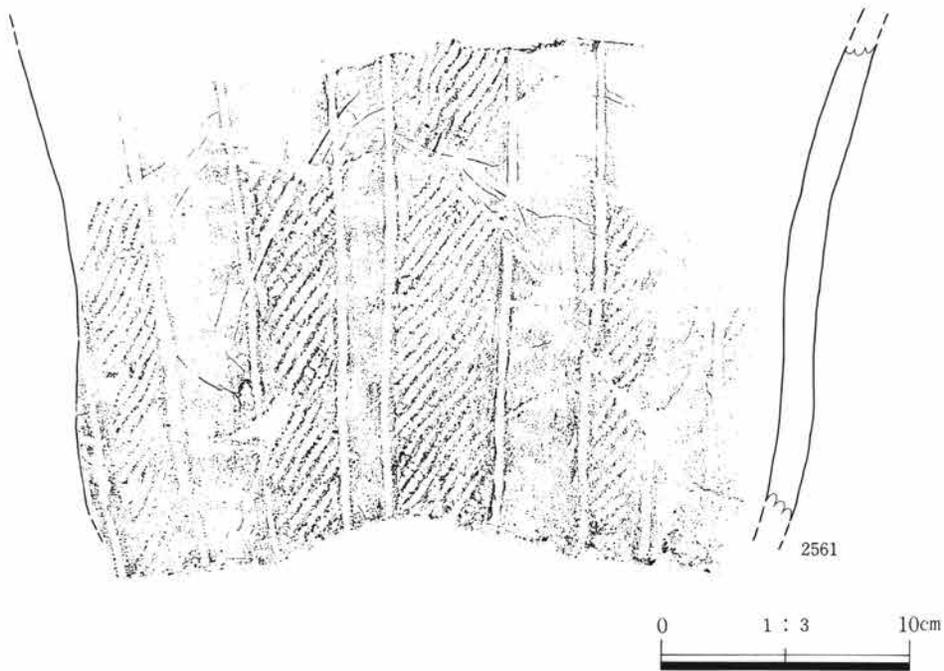
（女屋）



I 地区A区98号住居跡炉土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒子・少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 褐色土 やや多量のローム粒子・ロームブロック及び少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 3 黄褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。

第33図 I 地区A区98号住居跡遺構図



第34図 I地区A区98号住居跡遺物図

I地区A区100号住居跡（第35～39図、第7表）

本住居跡は、南北5.20m、東南6.10mの楕円形を呈する。北側に於いて、加曽利E III式期の75号が重複し、東南側に同E II式期の76号が接する。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土である。

炉跡は、住居の中央北寄りに52×37cm、深さ17cmの円形の掘り方があり、焼土等判然としない可能性がある。

柱穴は、8本が確認されたがP 1～P 6の6本を主柱穴とし、調査区域外に1本を推定する。柱穴は35cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは25～48cmを測る。

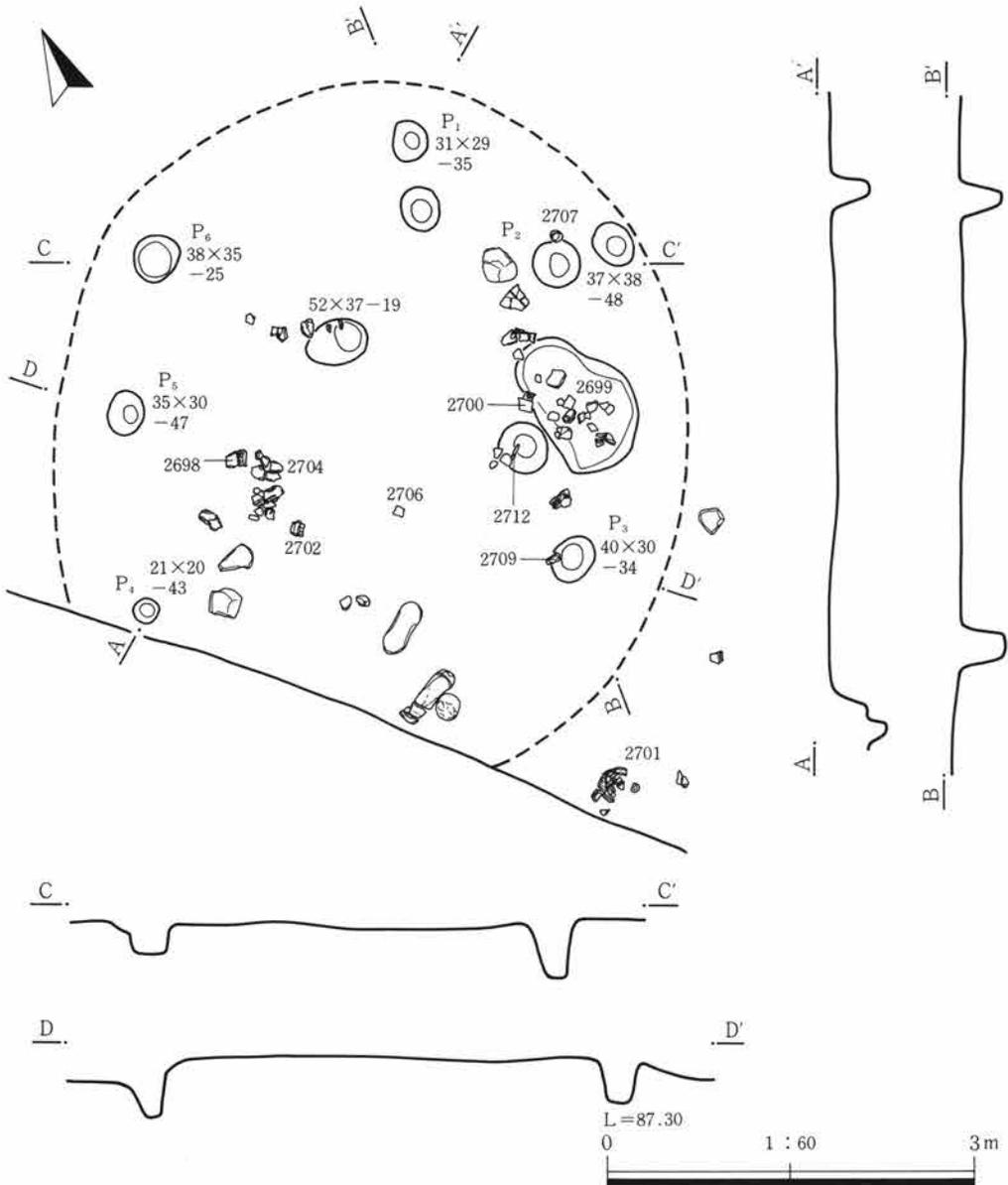
遺物は、P 2とP 3との間に2699・2700の深鉢、2712の短冊型石斧、P 5の東に2698・2702・2704の深鉢、浅鉢、2711の短冊型石斧が分布するが、床面上での壁沿いをめぐり傾向を示す。また、住居内には、石器に混じって大小の河原石8個が散在するが、被熱のために脆いものがあることから、中央北寄りの掘り方を炉とすると、抜き取った縁石の可能性はある。

2698は、口径27cm、器高33.6cmの深鉢である。口縁は、2本の貼付隆帯で楕円状に7単位に区画し、中を平行沈線で充填、区画間に渦巻文を配す。頸部は無文帯とし、刺突文を施した貼付隆帯をめぐらし体部と画する。体部は、LR縄文を全面に施文後、2本の貼付隆帯を垂下させて4単位に区画、間に貼付隆帯による蛇行文を施す。

2699は、大形深鉢の口縁部～体部にかけての破片で、口径35.5cm、残高20.5cmを測る。口縁部

は、2本の貼付隆帯により隋円状に7単位に区画し、中をLR縄文を充填、区画間には渦巻文を配す。頸部は無文帯とし、体部にむけてLR縄文を全面に施文する。

2700は、鉢形の口縁部～頸部の破片で、口径29.5cm、残高10cmを測る。口縁部は、「く」の字に外反し無文、頸部は強い屈曲を持ち貼付隆帯で隋円区画を作りLR縄文を充填、橋状把手には隆帯による渦巻文を付す。体部は無文で膨らみを持つ。



第35図 I 地区A区100号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

2702は、深鉢の体部で上径10.5cm、残高10cmを測る。全面にLR縄文を施文する。

2703は、深鉢の体部で2698と同じLR縄文の上に2本の貼付隆帯と蛇行文を施す。

2704は、小形深鉢の口縁部で口径14.5cmを測る。貼付隆帯による隋円状区画内を平行沈線で充填し、区画間は隆起する渦巻文を配す。頸部は無文帯である。

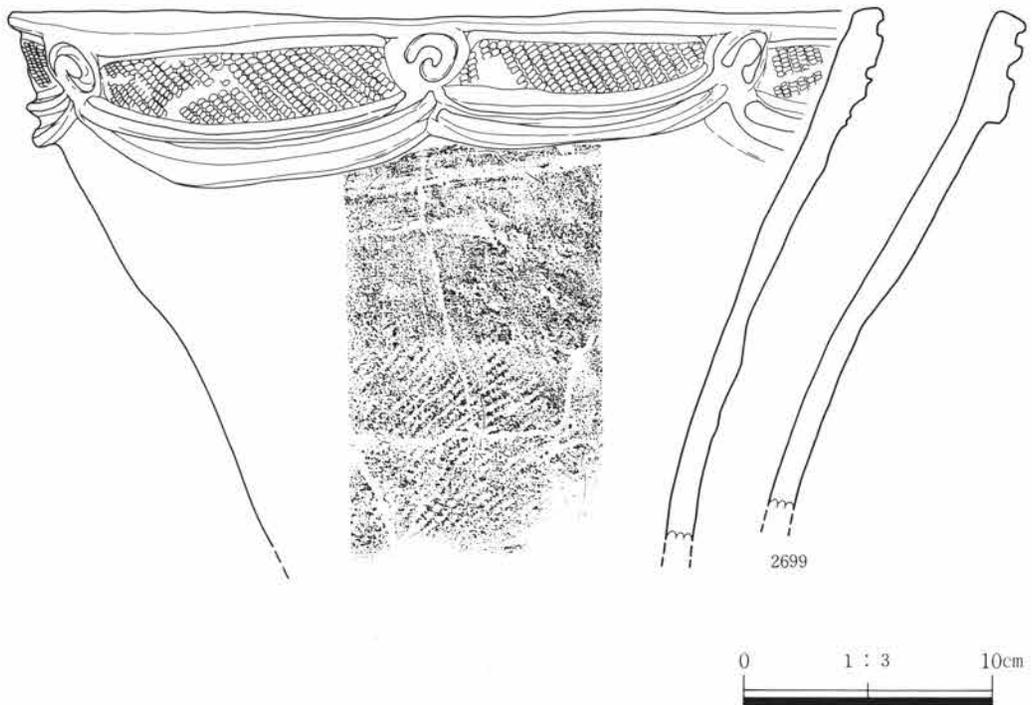
2705は、有孔鏝付土器の頸部から体部破片で最大径24cmを測る。縊部に隆帯を貼付し、上下両面から穿孔する。孔径は3～5cmである。

2706は、浅鉢の口縁部小破片。2707は、深鉢の台である。底面は隅丸方形で最長7.50cmを測る。

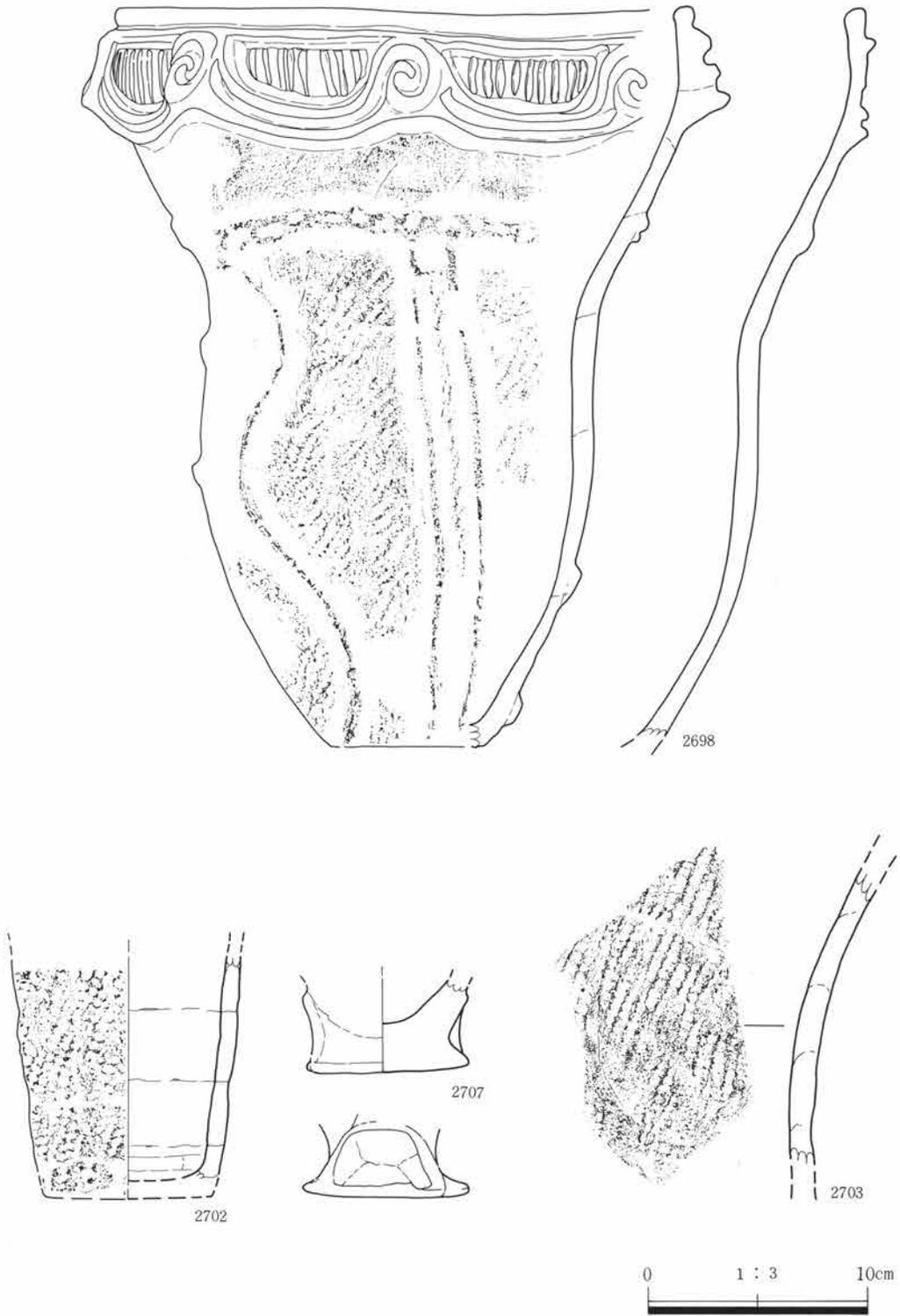
石器は、短冊型石斧4点と礫器1点、石鏃1点がある。石斧は、着柄痕や刃部の磨耗痕を持っている。2712は、両端に敲打痕を持ち、石斧の用途があろうか。

2701は、深鉢の口縁部～体部にかけての破片であるが、本住居の範囲を外れ、逆位の埋甕として別の遺構に伴う可能性がある。口径28cm、残高12cmを測る。口縁は、沈線で隋円形に区画し、中をLR縄文を充填、体部はLR縄文施文後、2本の沈線による磨消無文帯を懸垂する。

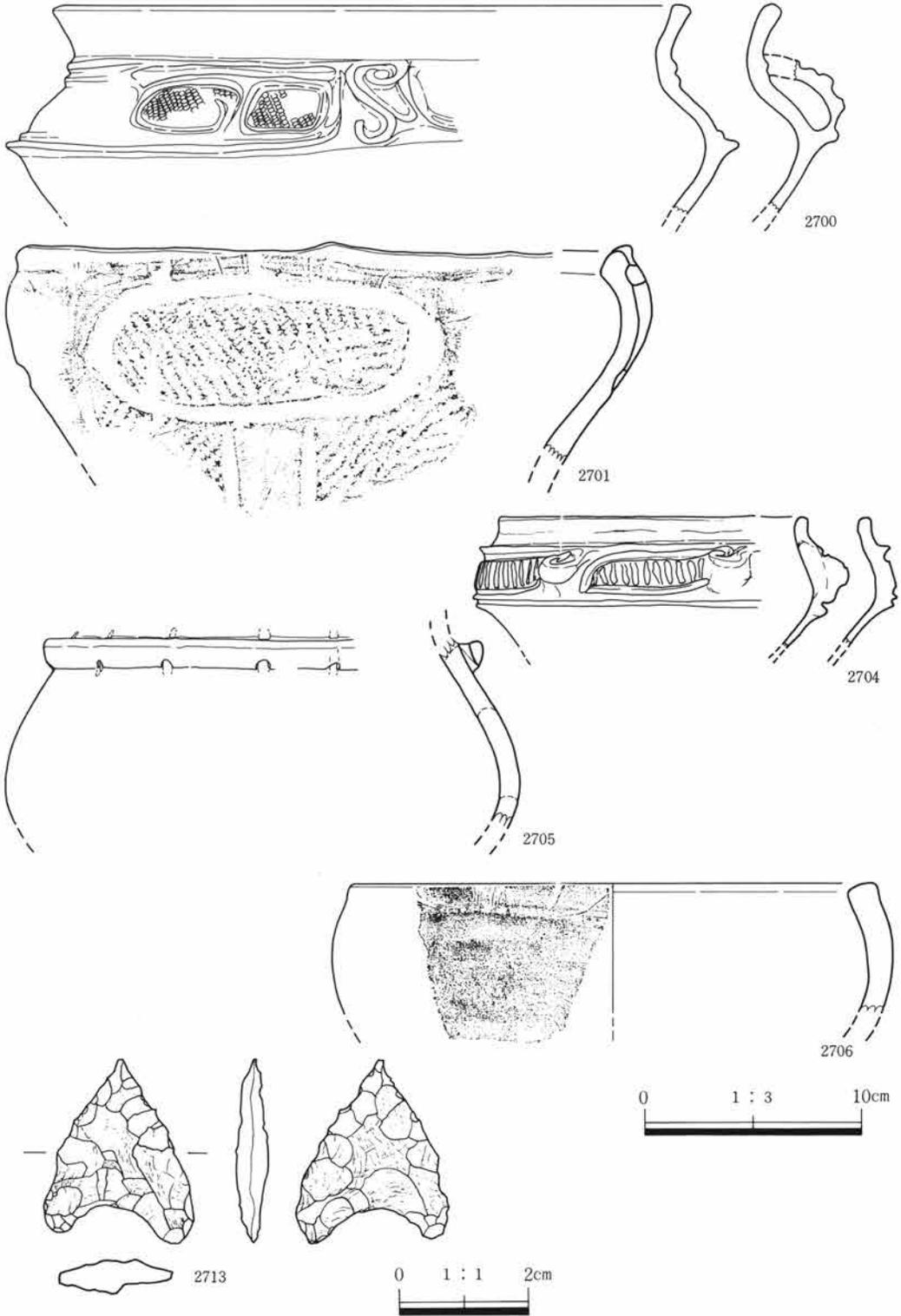
以上の土器は、加曾利E III式の2701を除き、同E II式に属し、遺構の時期を示す。(女屋)



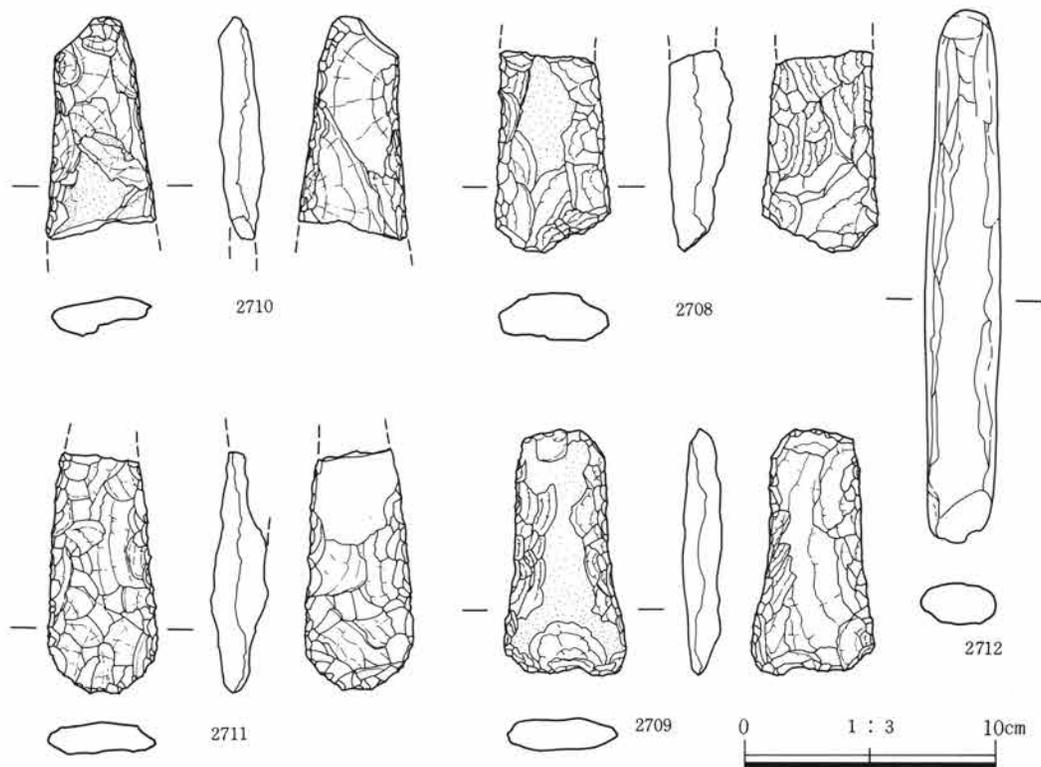
第36図 I地区A区100号住居跡遺物図(1)



第37図 I 地区A区100号住居跡遺物図（2）



第38図 I地区A区100号住居跡遺物図(3)



第39図 I地区A区100号住居跡遺物図（4）

第 7 表 I地区A区100号住居跡石器観察表

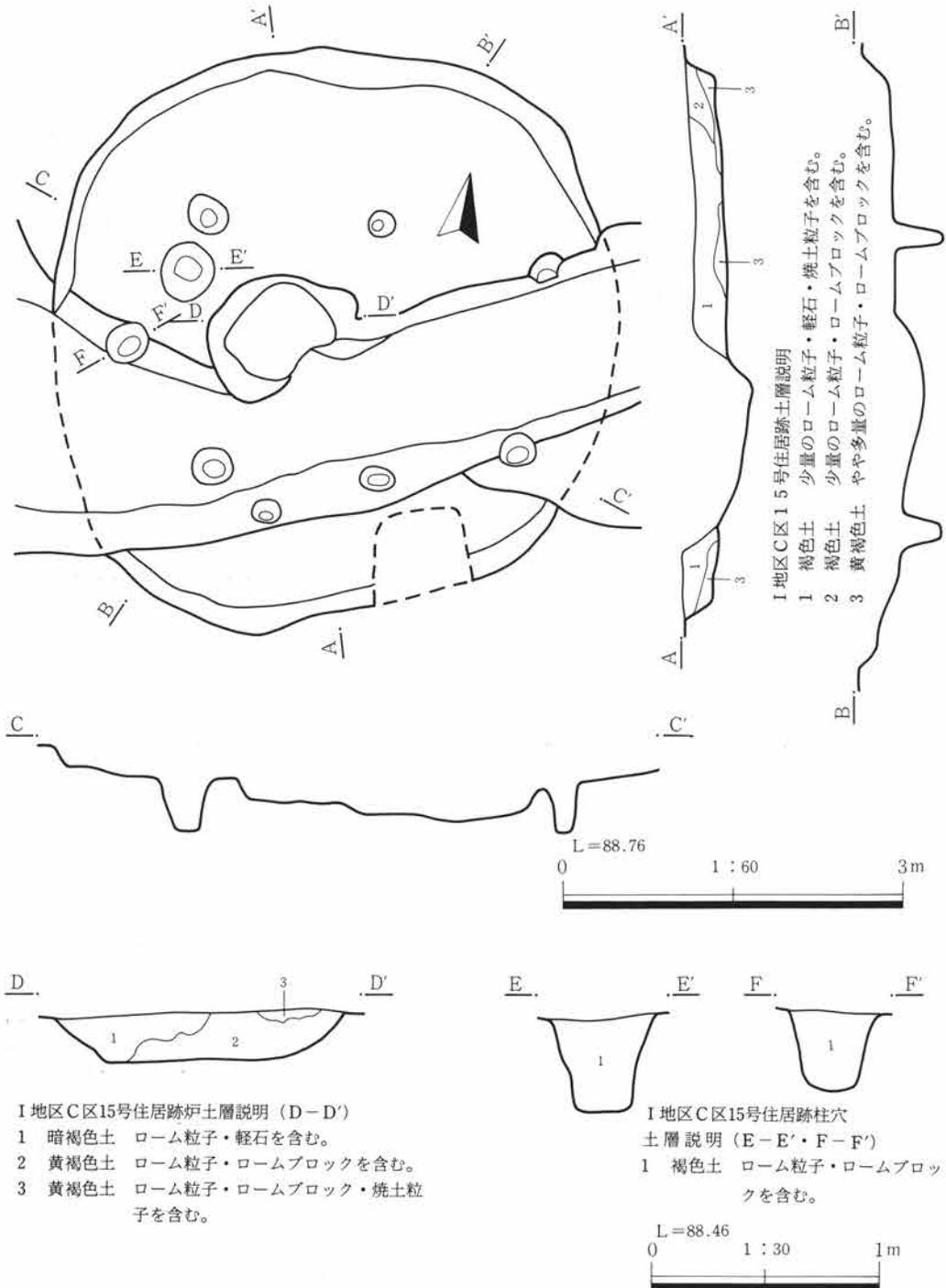
番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2708	打製石斧	80	44	25	130.1	黒色頁岩。	短冊型、頭部欠損、全体に磨耗。
2709	打製石斧	97	48	15	88.6	硬質泥岩。	短冊型、完存。
2710	打製石斧	88	43	16	65.7	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、磨耗。
2711	打製石斧	96	44	22	94.0	黒色頁岩。	短冊型、頭部の一部を欠損。
2712	礫石	212	30	16	186.5	黒色片岩。	石斧の用途、両側面に敲打痕。
2713	石鏃	27	23	5	2.3	黒耀石。	凹基鏃、完存。

I地区C区15号住居跡（第40～43図、第8表）

当住居跡は耕作土下、黄褐色土中で確認された。5号方形周溝墓と重複するが、本住居跡が古い。平面形は円形を呈し直径4.9mを測る。床面はローム面で平坦となっている。中央部分に焼土

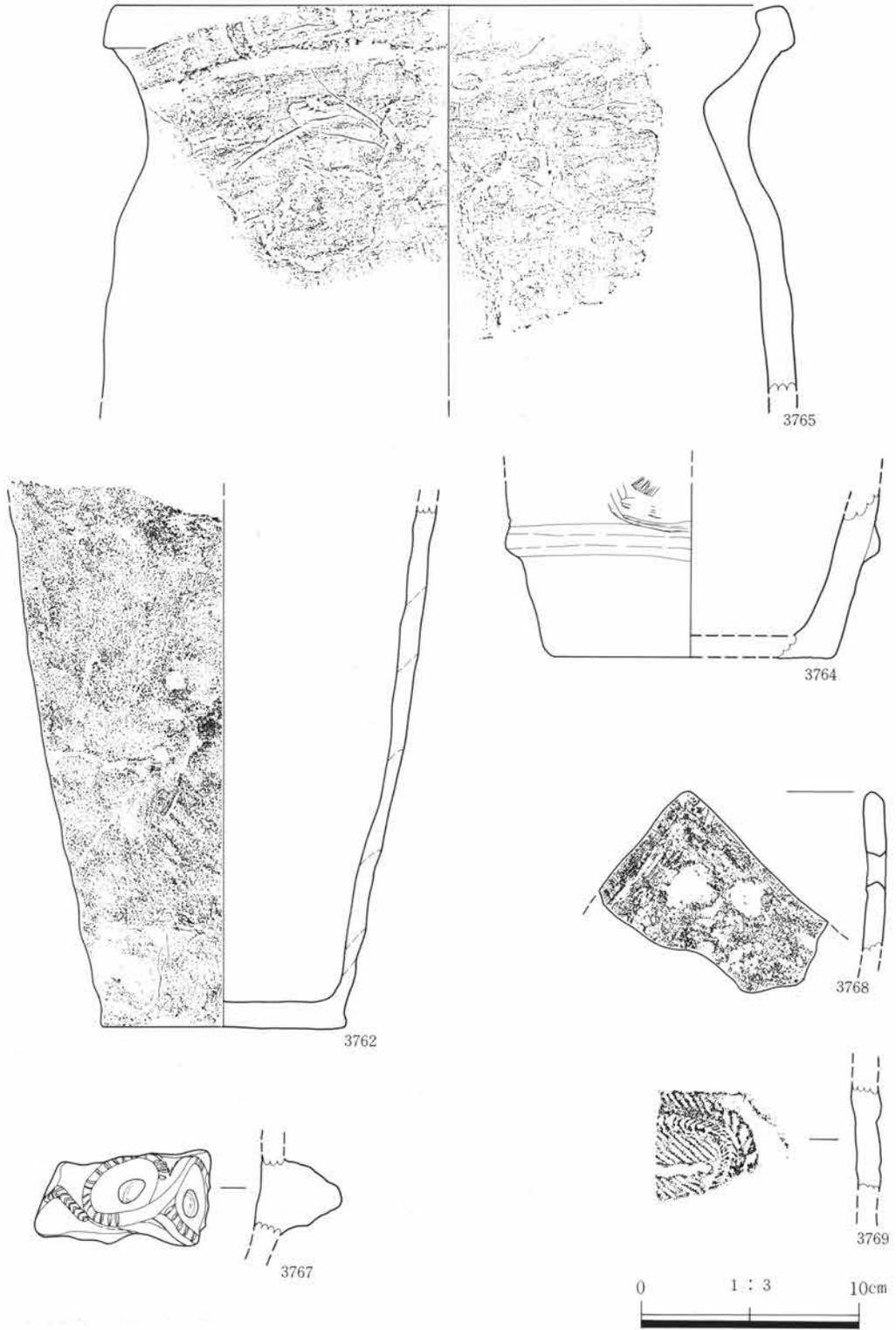
第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

を混入した落ち込みがあり、炉と考えられる。柱穴は径約20~35cm、確認面からの深さ約30~45cm程の6本が対で存在する。遺物は、深鉢、石斧、石鏃、磨石が出土している。出土遺物は、縄文時代中期前半の阿玉台である。 (秋池)

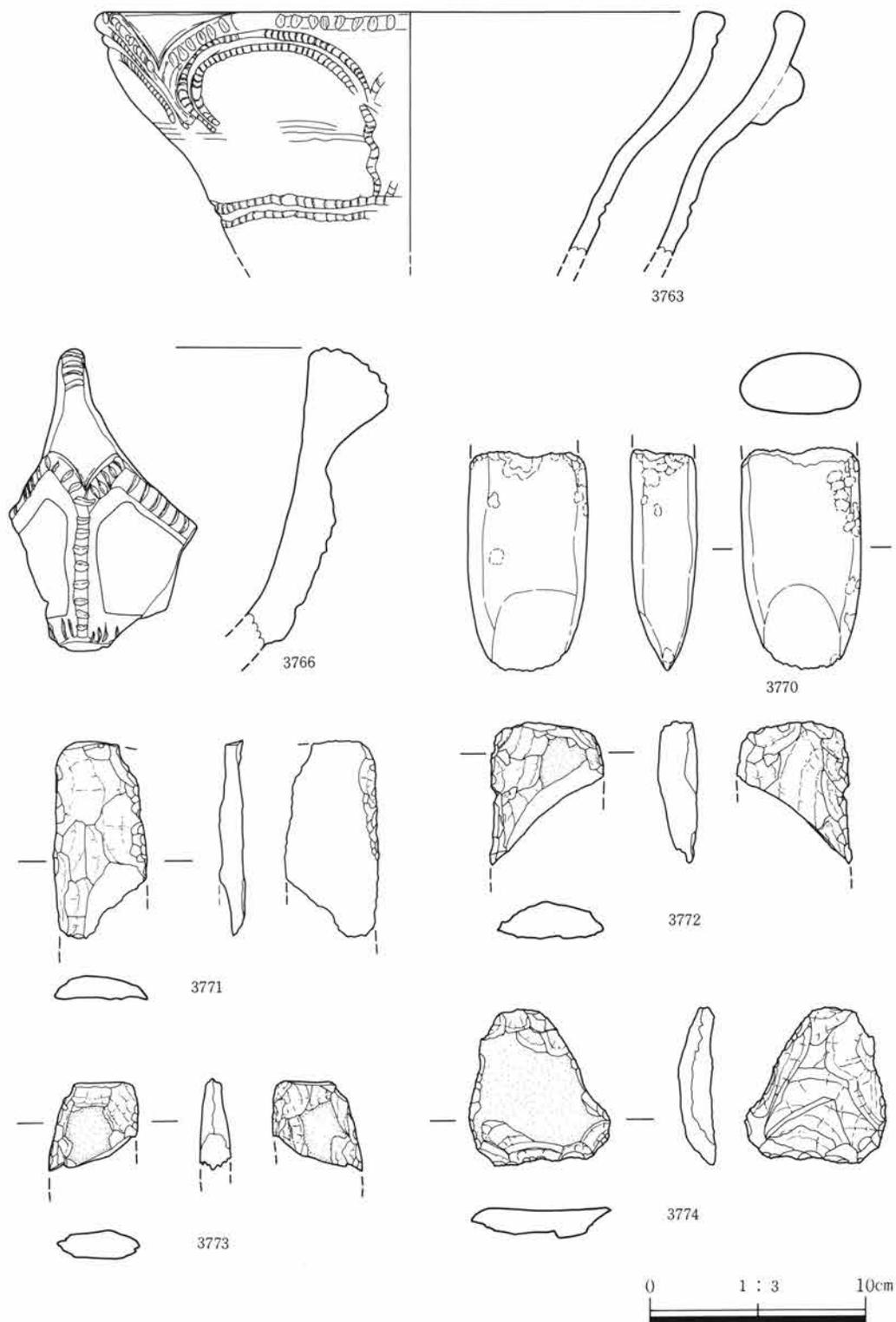


第40図 I地区C区15号住居跡遺構図

I 縄文時代（竪穴住居跡）

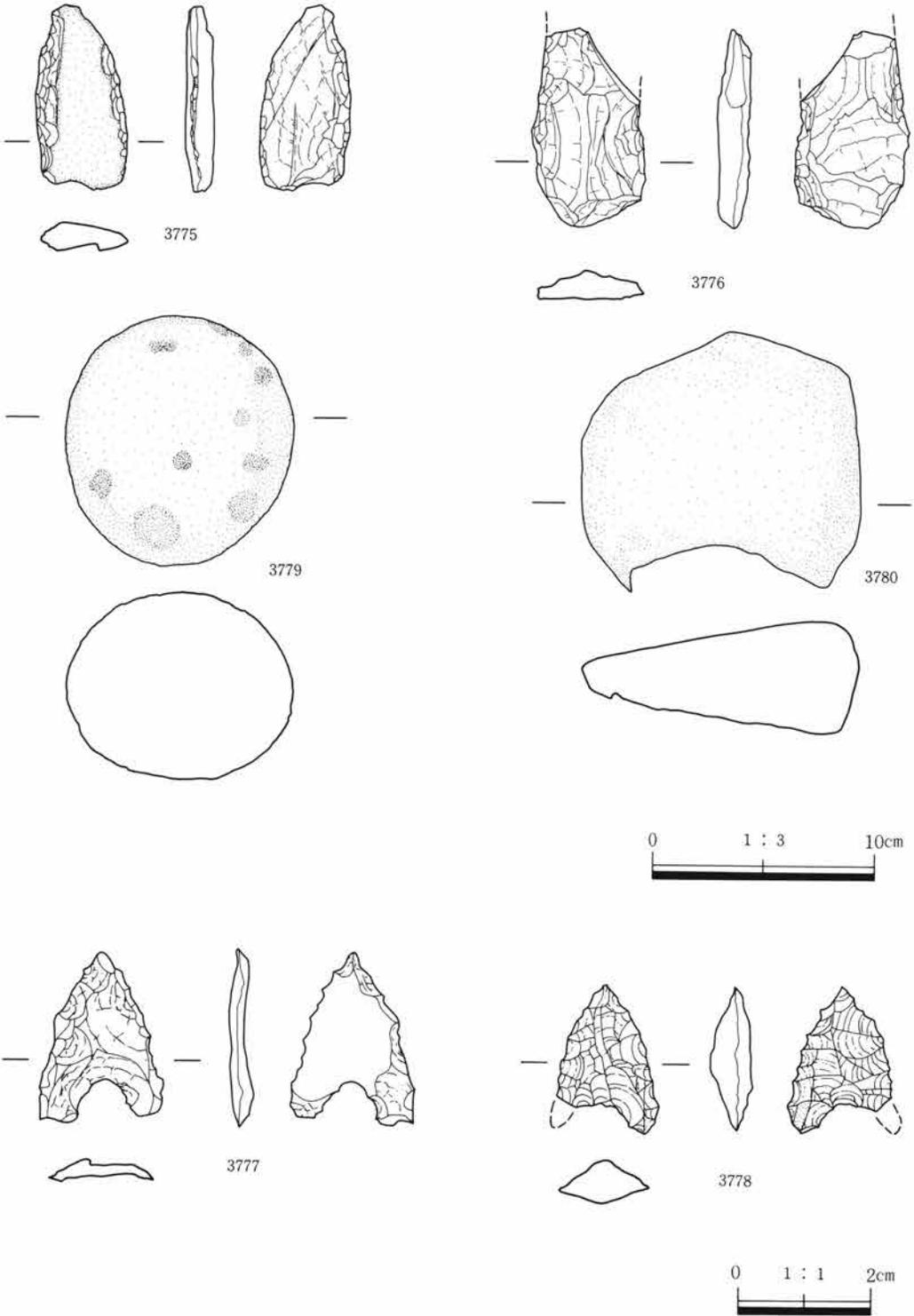


第41図 I地区C区15号住居跡遺構図(1)



第42図 I地区C区15号住居跡遺物図(2)

I 縄文時代（竪穴住居跡）



第43図 I地区C区15号住居跡遺物図(3)

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

第8表 I地区C区15号住居跡石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
3770	磨製石斧	100	55	30	305.2	変玄武岩。	乳棒状、上半部欠損、先端に斜位の使用痕。
3771	打製石斧	90	44	11	42.6	硬質泥岩。	短冊型、裏面剥落、刃部欠損。
3772	打製石斧	65	51	18	51.4	硬質泥岩。	短冊型、頭部のみ。
3773	打製石斧	41	38	14	28.5	硬質泥岩。	短冊型、頭部のみ、部分的に研磨を施す。
3774	打製石斧	72	65	15	80.8	黒色頁岩。	撥型、完存、強い反り身を持つ。
3775	打製石斧	83	40	13	51.1	黒色頁岩。	短冊型、頭部欠損、刃部蛤刃状に研磨
3776	打製石斧	89	49	14	71.0	黒色頁岩。	短冊型、頭部欠損。
3777	石 鏃	26	18	3	1.1	黒色頁岩。	凹基式。
3778	石 鏃	22	15	6	1.5	黒耀石。	凹基式、片脚欠損。
3779	磨 石	111	103	84	1180.0	粗粒安山岩。	まばらに凹痕あり。
3780	台 石	125	100	49	1054.6	粗粒安山岩。	周縁に敲打調整、裏面に敲打による剥落あり。

(2) 土 坑

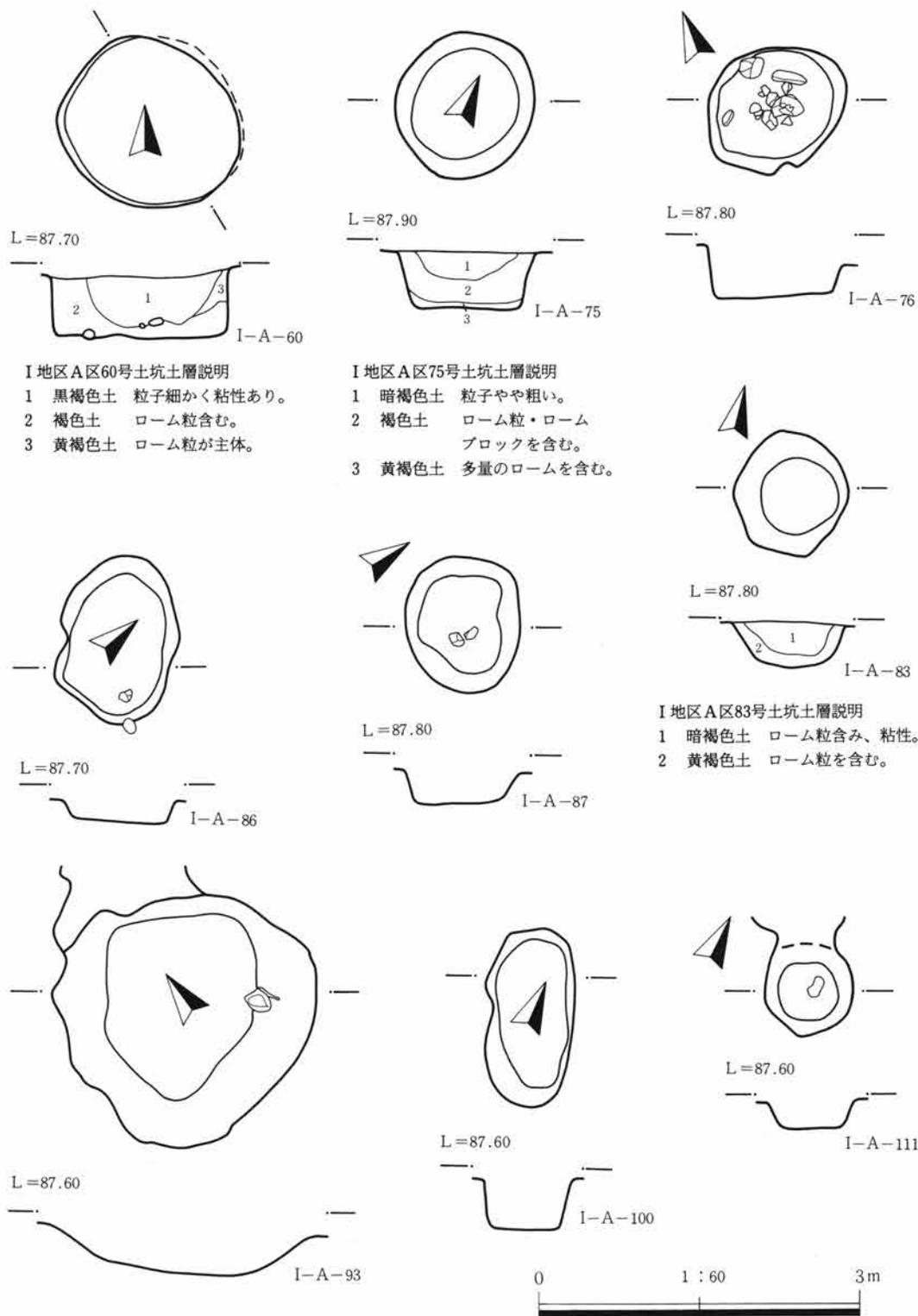
第9表 土坑一覧表

土坑番号	規模(長辺・短辺・深さ) (一辺・深さ)(直径・深さ) (長軸・短軸・深さ)	形状・方位 (方位は長辺・長軸を基準)	出土遺物	備考	挿図番号
A区-060	長軸:170cm短軸:150cm 深さ:60cm	不整楕円形 N-90°-E	深鉢2個体。(2774、2775)堀之内Ⅱ式	覆土中に河原石を含む。	44図
A区-075	長軸:140cm短軸:125cm 深さ:50cm	楕円形 N-23°-W	深鉢2個体。(2785、2786)加曾利EⅡ式	覆土中に人頭大の河原石1個。	44図
A区-076	長軸:140cm短軸:110cm 深さ:45cm	不整楕円形 N-34°-E	深鉢2個体。(2787、2788)加曾利EⅡ式	覆土中に多数の河原石を含む。 86土坑・87土坑と近接。	44図
A区-083	長軸:120cm短軸:100cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-11°-W	深鉢7個体。(2791~2797)加曾利EⅡ、EⅢ、称名寺式堀之内式		44図

I 縄文時代（土坑）

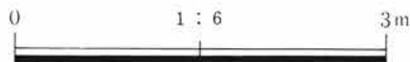
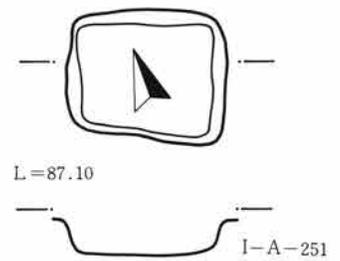
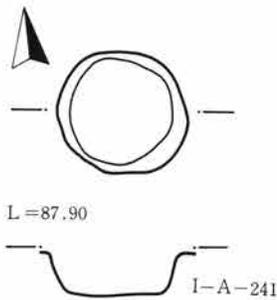
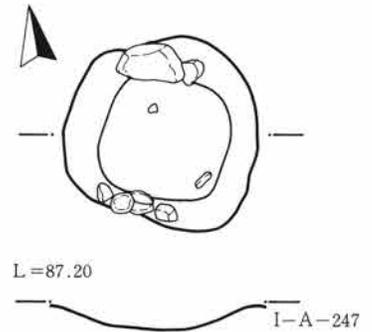
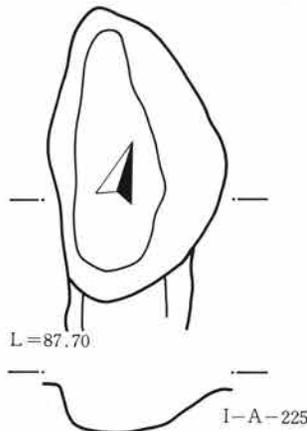
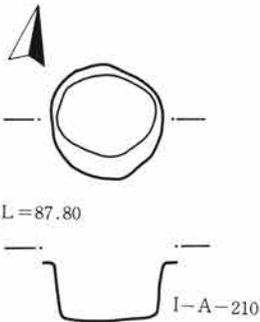
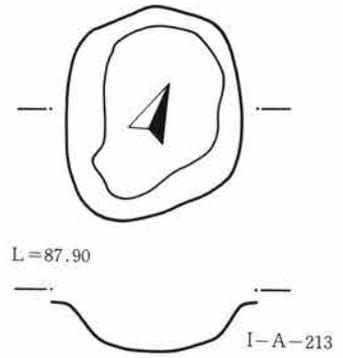
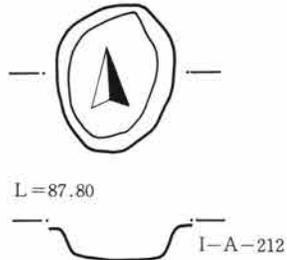
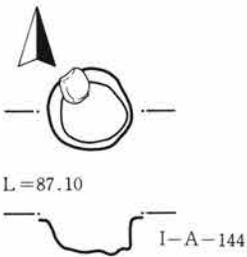
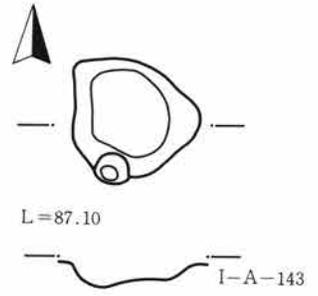
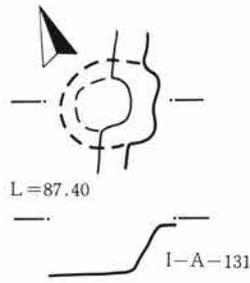
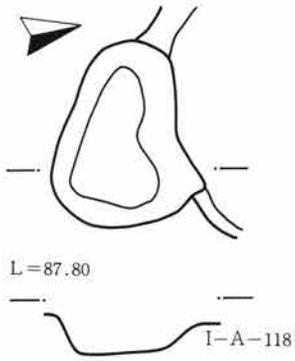
A区-086	長軸:155cm短軸:110cm 深さ:20cm	不整楕円形 N-44'-W	深鉢2個体。(2798、2799)加 曾利E II式	土坑内及び周囲に石が散乱。76 土坑・87土坑と近接。	44図
A区-087	長軸:130cm短軸:110cm 深さ:30cm	不整楕円形 N-61'-W	深鉢2個体。(2800、2801)勝 坂式、加曾利E I式	土坑内に河原石を多数含む。76 土坑・86土坑と近接。	44図
A区-093	長軸:240cm短軸:220cm 深さ:50cm	不 定 型 N-41'-E	深鉢3個体。石棒1本。 (2802~2804)曾利式、加曾 利E II式		44図
A区-100	長軸:165cm短軸:80cm 深さ:50cm	不整楕円形 N-21'-E	深鉢1個体。(2805)加曾利 E III式		44図
A区-111	直径:80cm深さ:25cm	円 形	深鉢1個体。(2808)加曾利 E II式		44図
A区-118	長軸:150cm短軸:90cm 深さ:30cm	不 定 型 N-73'-W	深鉢1個体。(2809)加曾利 E III式		45図
A区-131	長軸:—短軸:—深さ: 35cm	不 明	深鉢2個体。(2810、2811)加 曾利E II式		45図
A区-143	長軸:110cm短軸:110cm 深さ:20cm	不 定 型 N-90'-E	深鉢2個体。(2816、2817)加 曾利E II式		45図
A区-144	直径:65cm深さ:25cm	不 整 円 形	石皿1個・凹石1個。		45図
A区-210	直径:90cm深さ:45cm	円 形	深鉢1個体。(2831)称名寺 I式	覆土は暗褐色土、ローム粒子を 含む。	45図
A区-212	長軸:120cm短軸:95cm 深さ:25cm	楕 円 形 N-85'-W	深鉢1個体。(2826)称名寺 I式	覆土は軽石・炭化物を含む。	45図
A区-213	長軸:170cm短軸:130cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-24'-E	深鉢3個体・浅鉢1個体。 (2827~2830)堀之内式	覆土にローム粒子・炭化物粒子 を含む。	45図
A区-214	直径:100cm深さ:30cm	円 形	浅鉢1個体。(2832)堀之内 II式	覆土はローム粒子を含む。	45図
A区-225	長軸:230cm短軸:140cm 深さ:30cm	不 定 型 N-20'-W	深鉢3個体。(2833~2835) 磨製石斧。加曾利E II、E III 式	A区91号住居跡より古い。覆土 にローム小ブロックを含む。	45図
A区-247	長辺:150cm短辺:130cm 深さ:15cm	不整長方形 N-11'-E	深鉢2個体・打製石斧2本。 (2837、2838)加曾利E II式	覆土はローム粒子を含む。	45図
A区-251	長辺:125cm短辺:100cm 深さ:30cm	長 方 形 N-19'-E	深鉢2個体。(2839、2840)加 曾利E式後半	覆土にローム粒子を含む。	45図
A区-253	長 軸:(180cm)短 軸: (150cm)深さ:55cm	不 定 型 N-19'-E	石皿1個。	中央部が凹状。	46図
A区-259	長軸:75cm短軸:45cm深 さ:40cm	不 定 型 N-15'-W	深鉢1個体。(2842)勝坂式		46図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

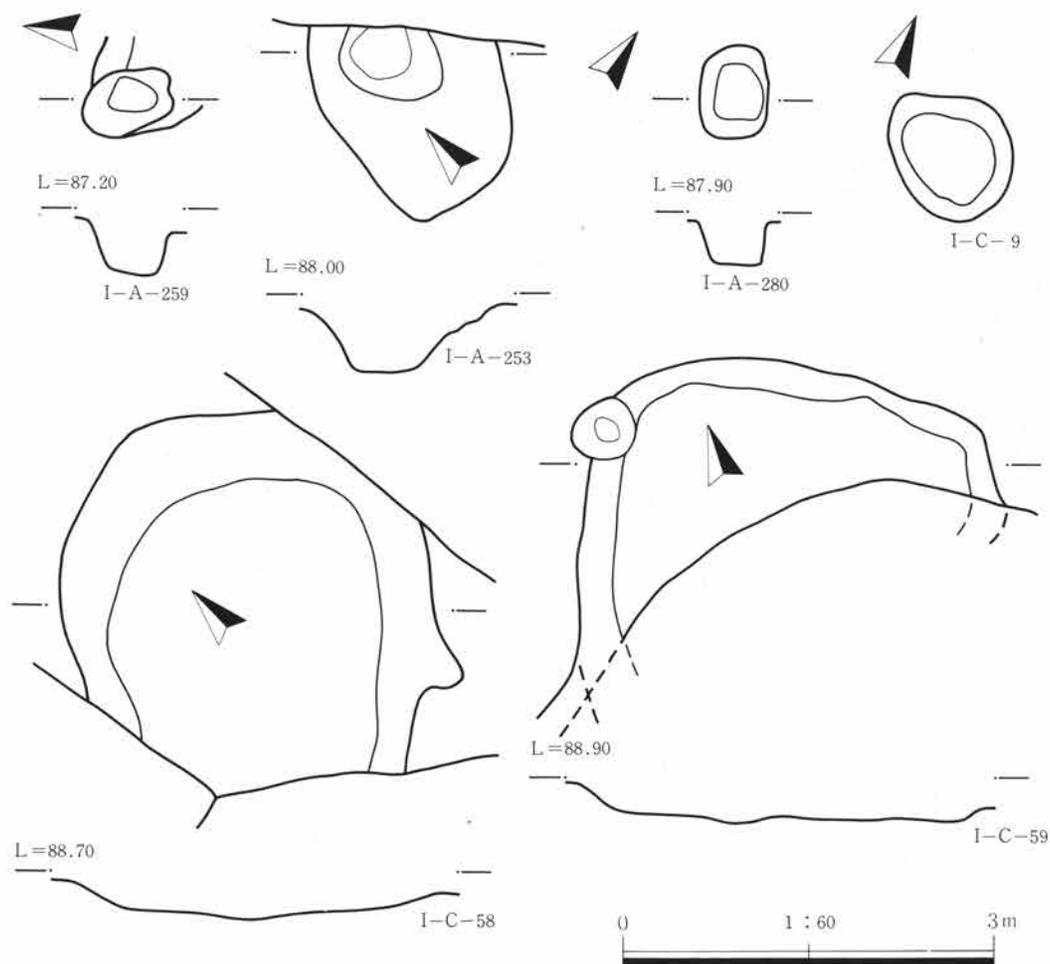


第44図 土坑遺構図(1)

I 縄文時代（土坑）



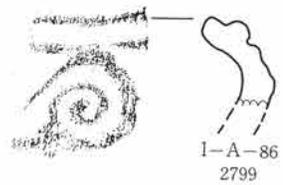
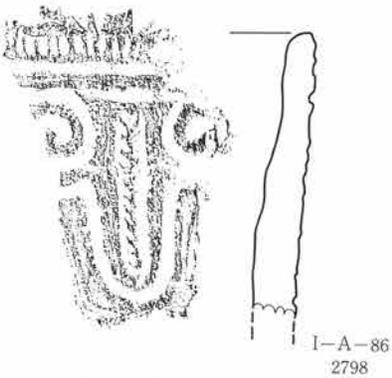
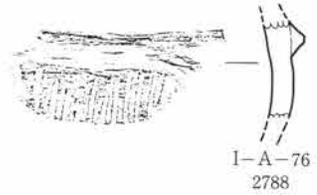
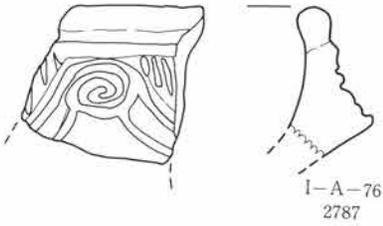
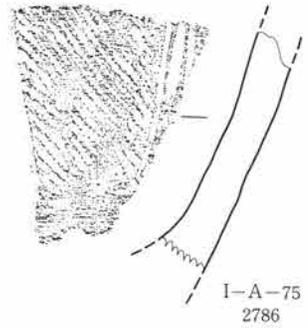
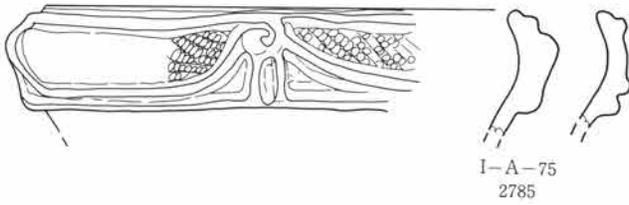
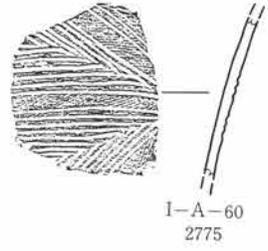
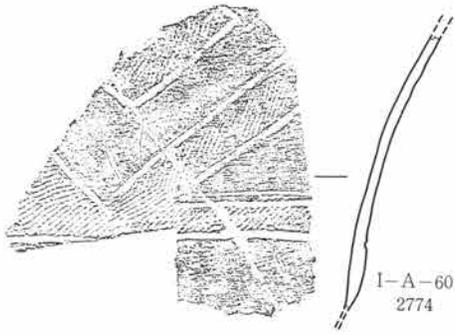
第45図 土坑遺構図（2）



第46図 土坑遺構図(3)

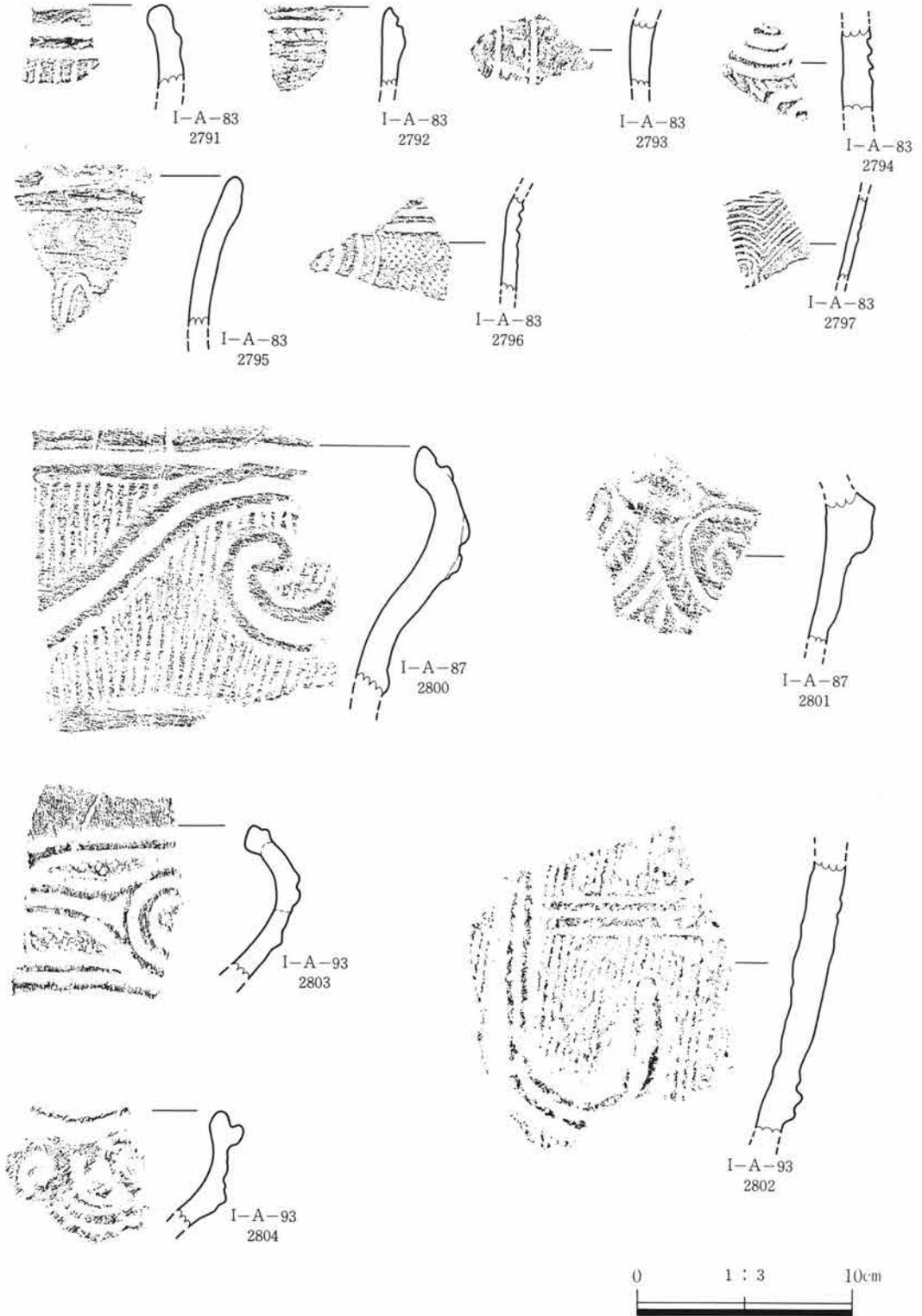
A区-280	長軸:70cm短軸:50cm深さ:35cm	不整楕円形 N-34'-W	深鉢1個体。(2844)堀之内式		46図
C区-009	長軸:110cm短軸:95cm深さ:-	不正楕円形 N-37'-W	深鉢1個体・不定型石器1個。(3857)阿玉台Ib式		46図
C区-058	長軸:(300cm)短軸:280cm深さ:30cm	不正楕円形? N-41'-E	深鉢2個体。(3863,3864)阿玉台Ib式	C区2号古墳・C区3号方形周溝墓より古い。覆土はローム小ブロックを含む。	46図
C区-059	一辺:32cm深さ:25cm	不明	打製石斧1・石鏃1・不定形石器1。	C区6号方形周溝墓より古い。覆土はローム粒子を含む。	46図

I 縄文時代（土坑）



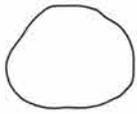
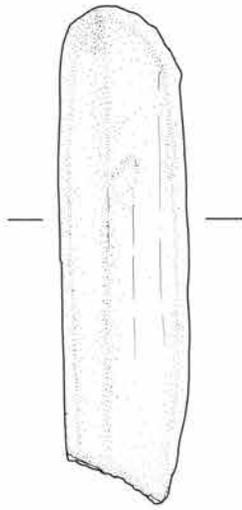
第47図 土坑遺物図（1）

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

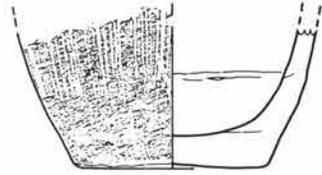


第48図 土坑遺物図(2)

I 縄文時代（土坑）



I-A-93
2847



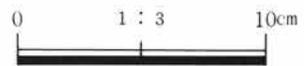
I-A-100
2805



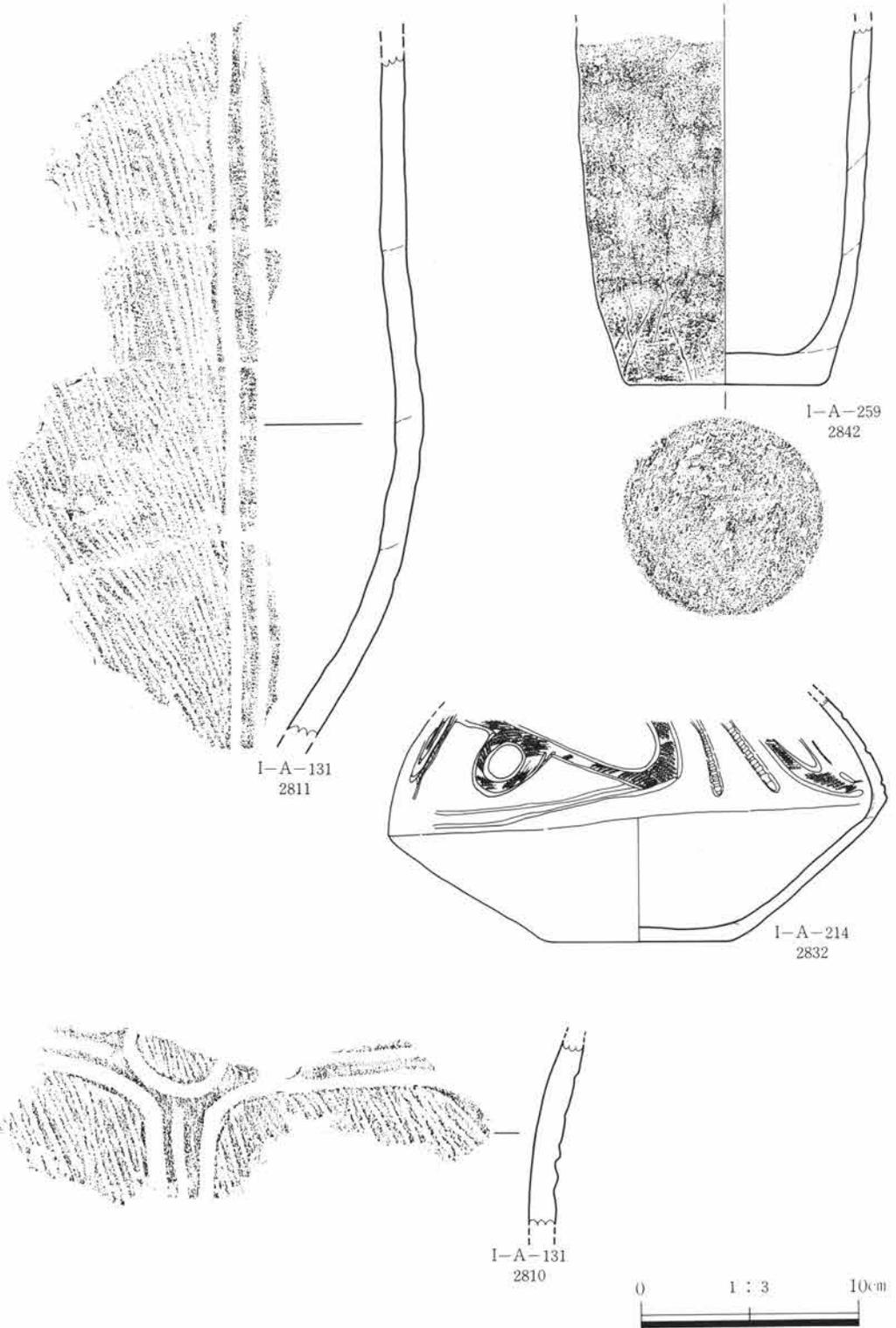
I-A-111
2808



I-A-118
2809

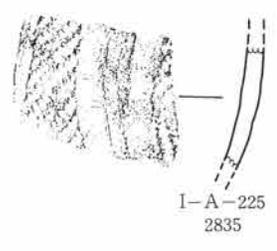
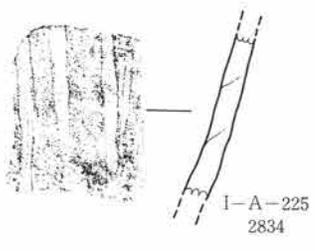
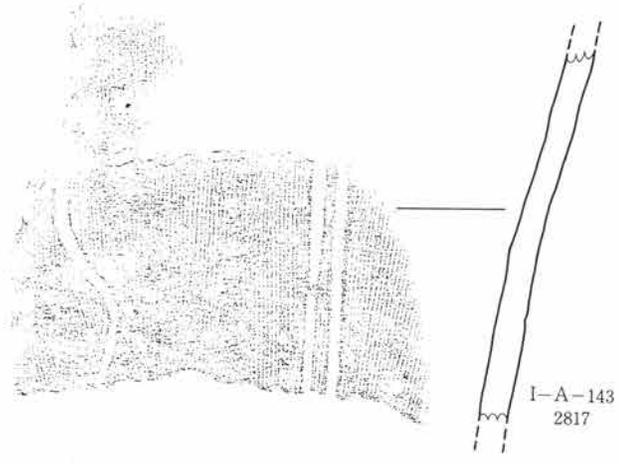
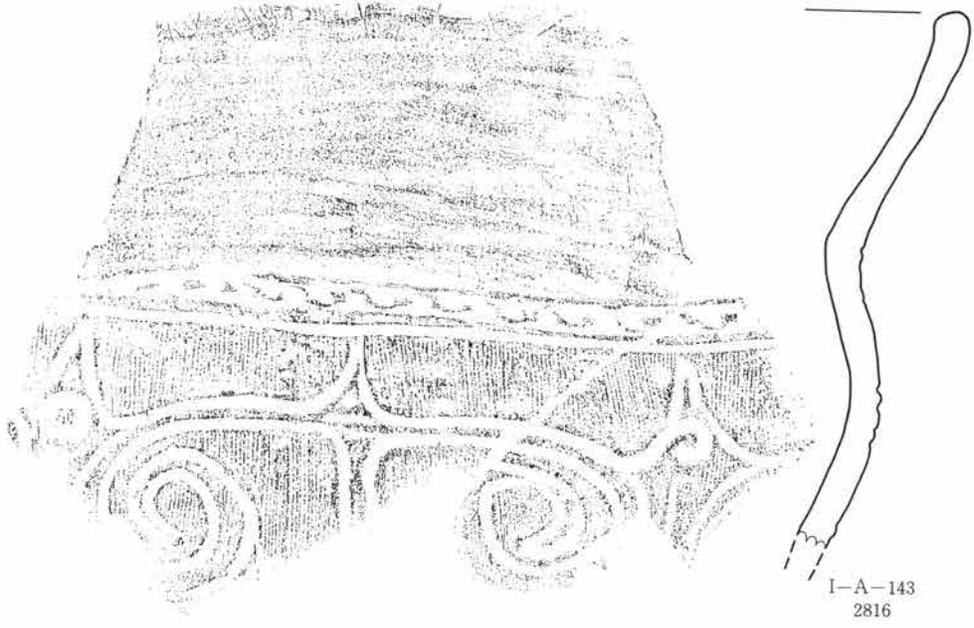


第49図 土坑遺物図（3）

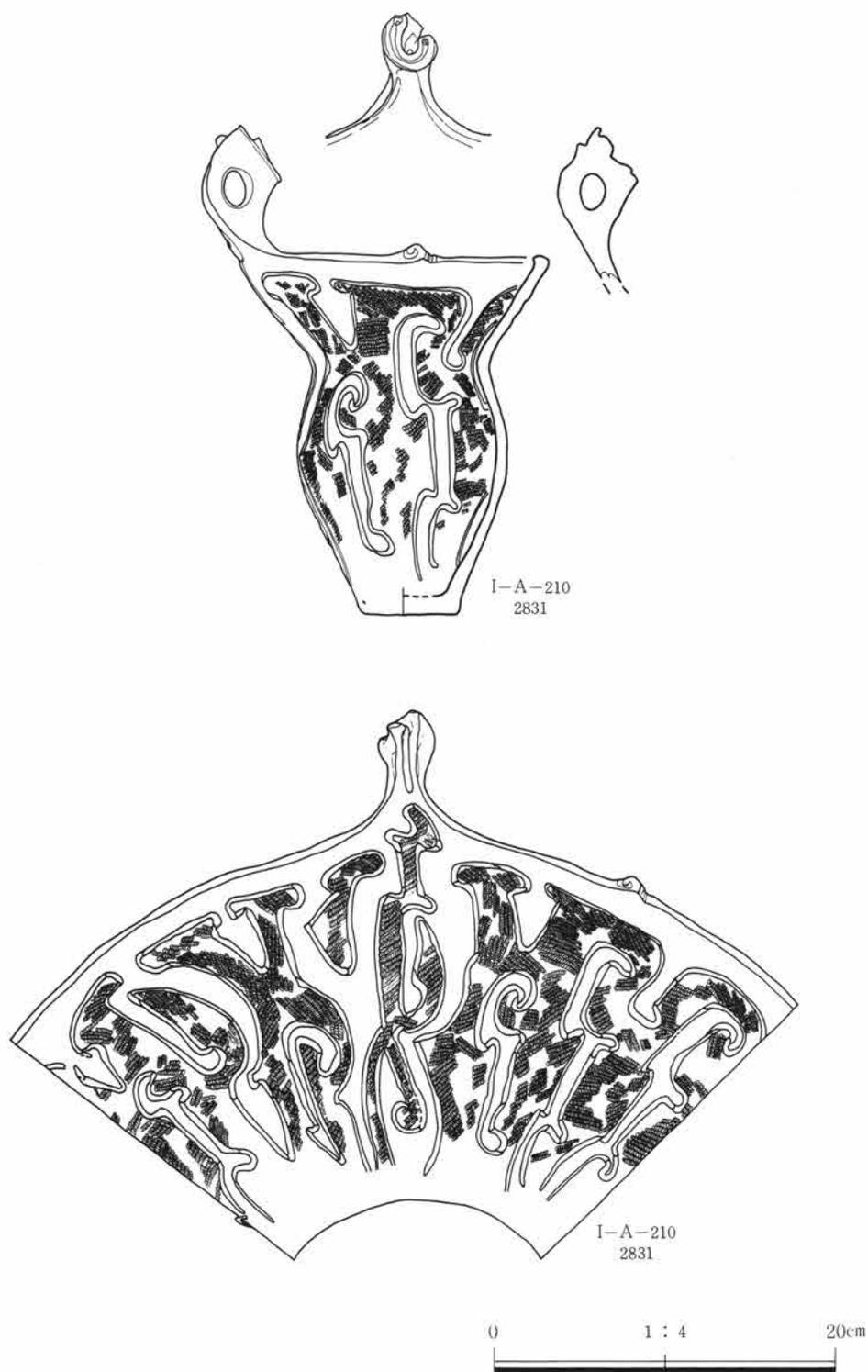


第50図 土坑遺物図(4)

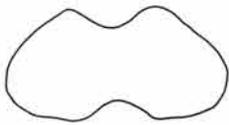
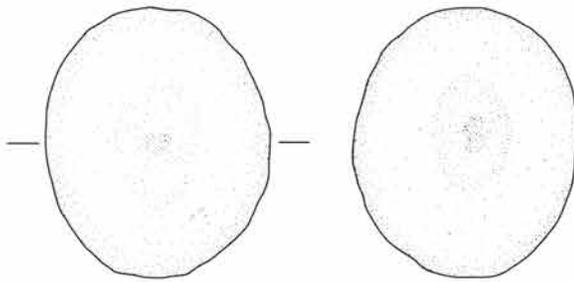
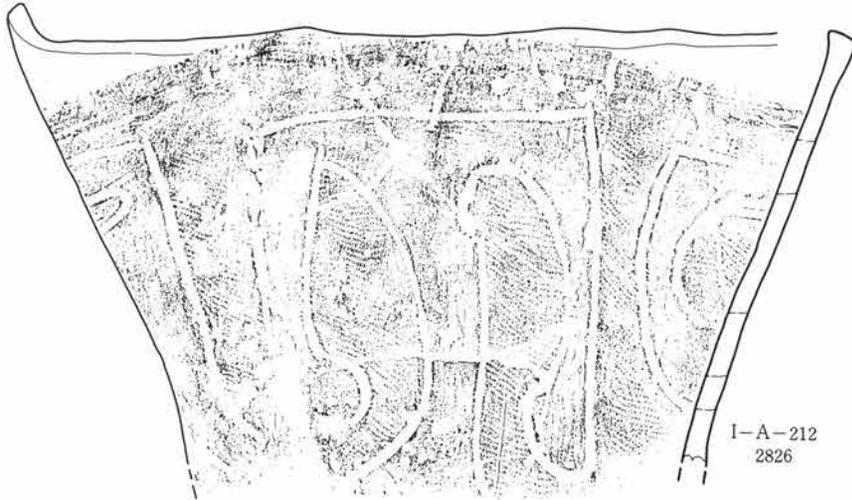
I 縄文時代 (土坑)



第51図 土坑遺物図 (5)

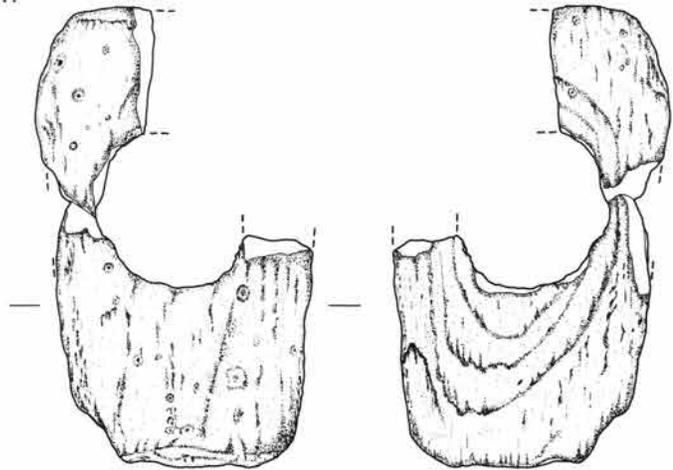


第52図 土坑遺物図(6)



I-A-144
2849

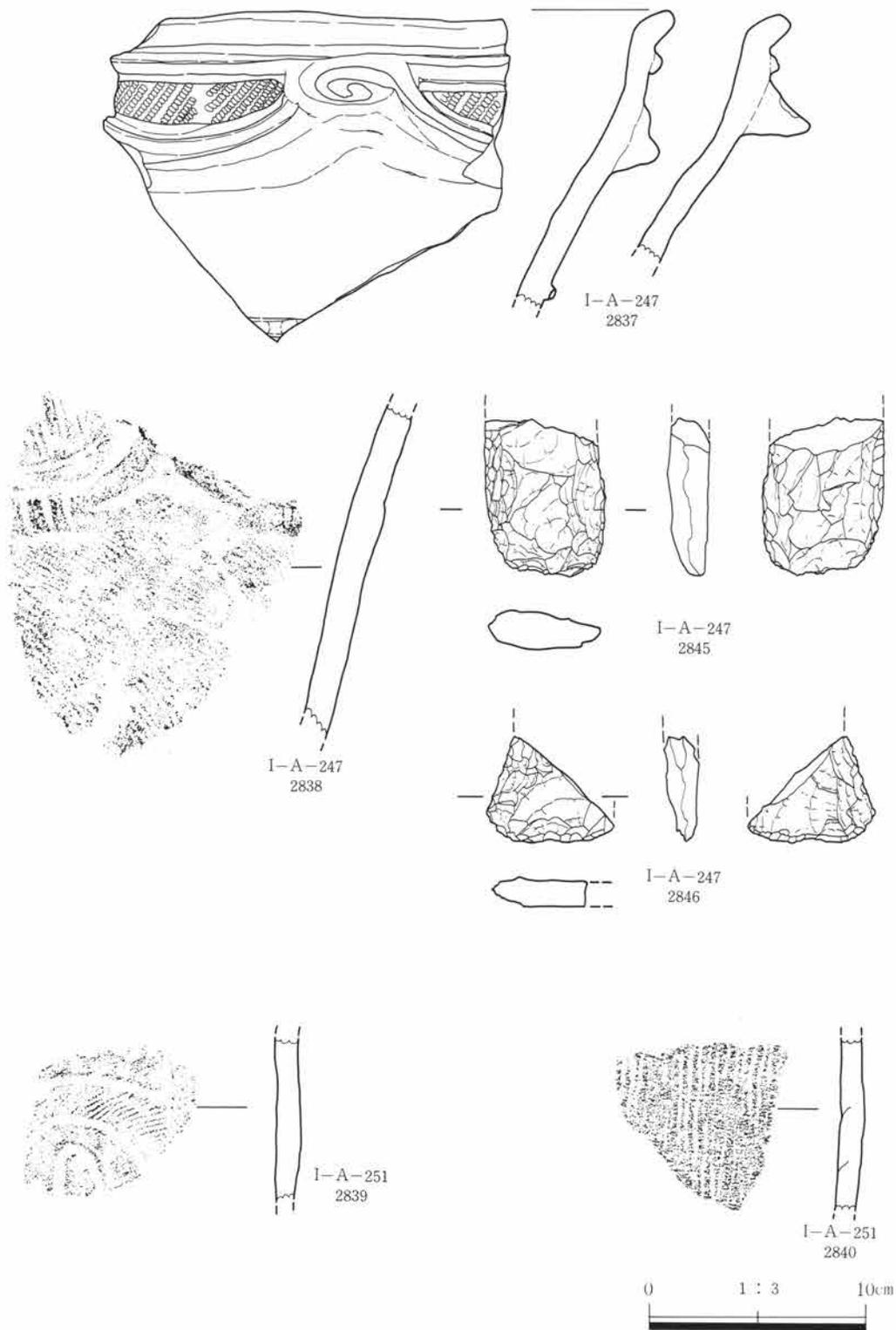
0 1 : 3 10cm



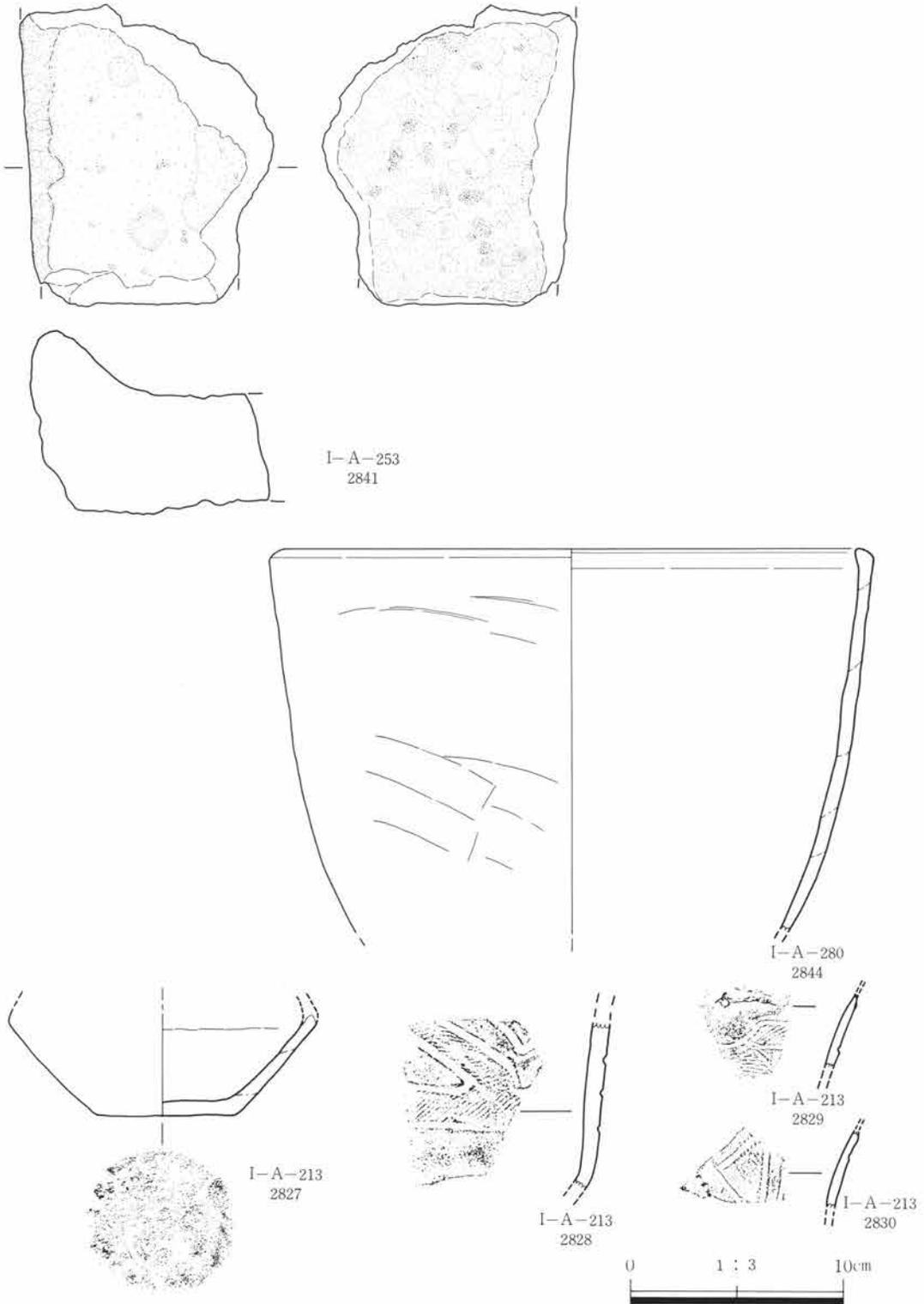
I-A-144
2848

0 1 : 8 40cm

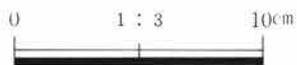
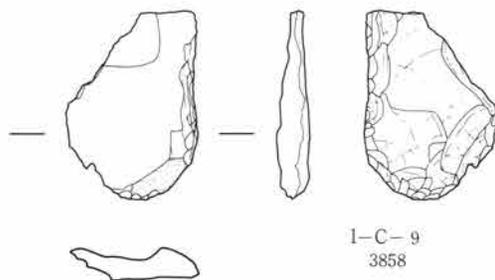
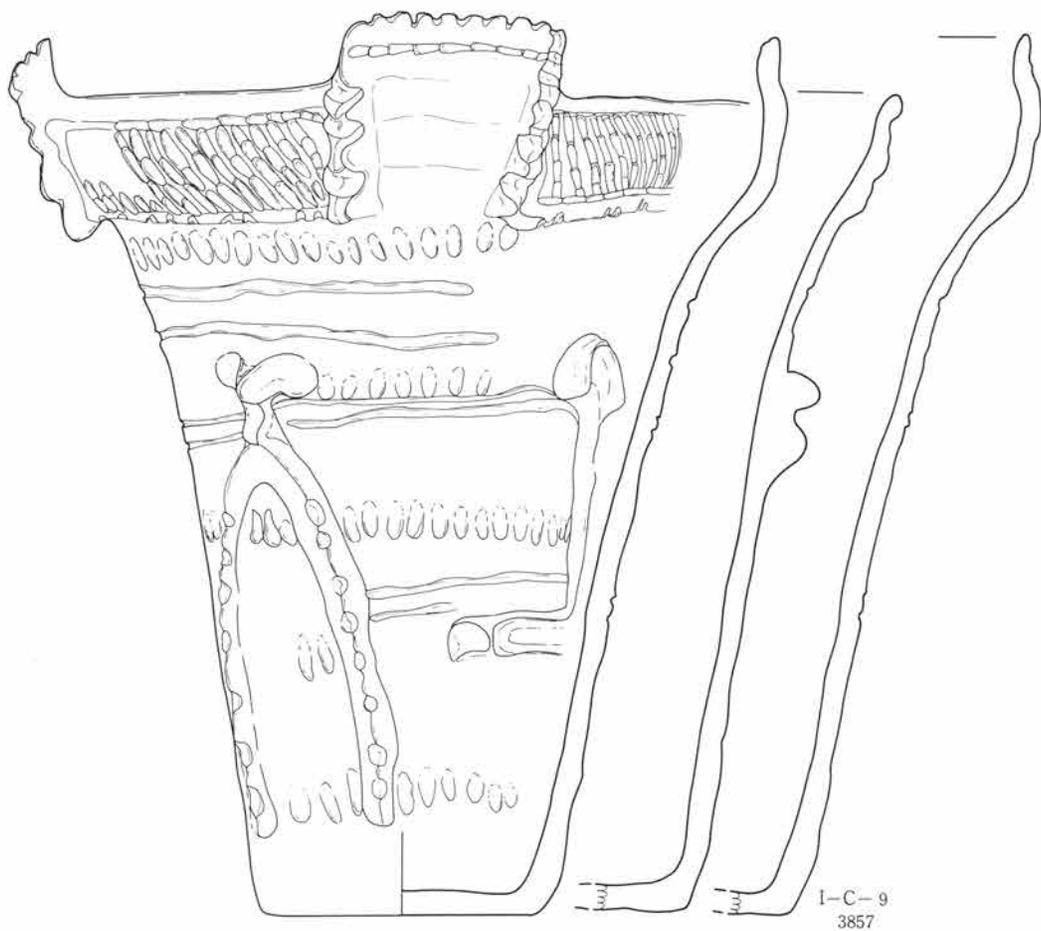
第53図 土坑遺物図（7）



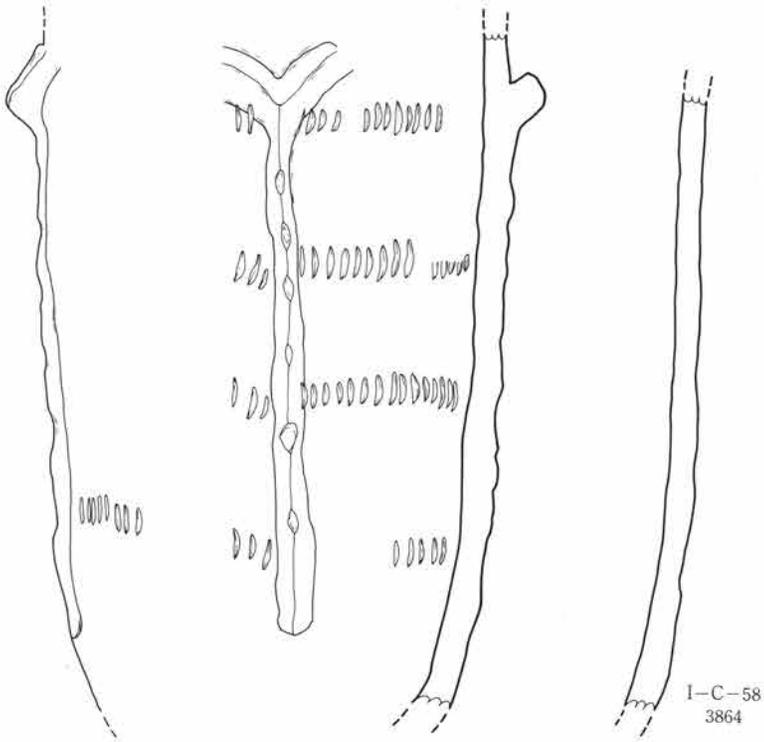
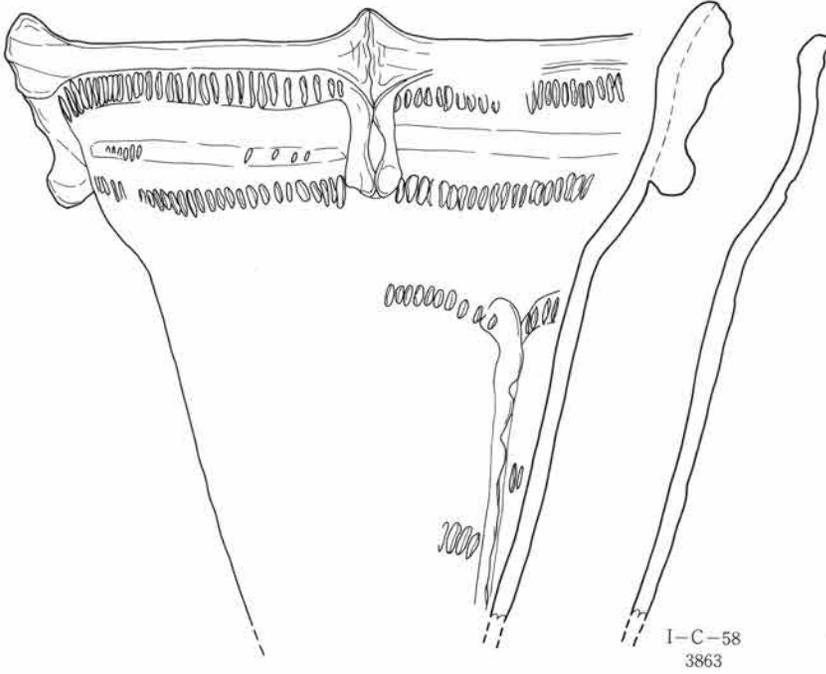
第54図 土坑遺物図(8)



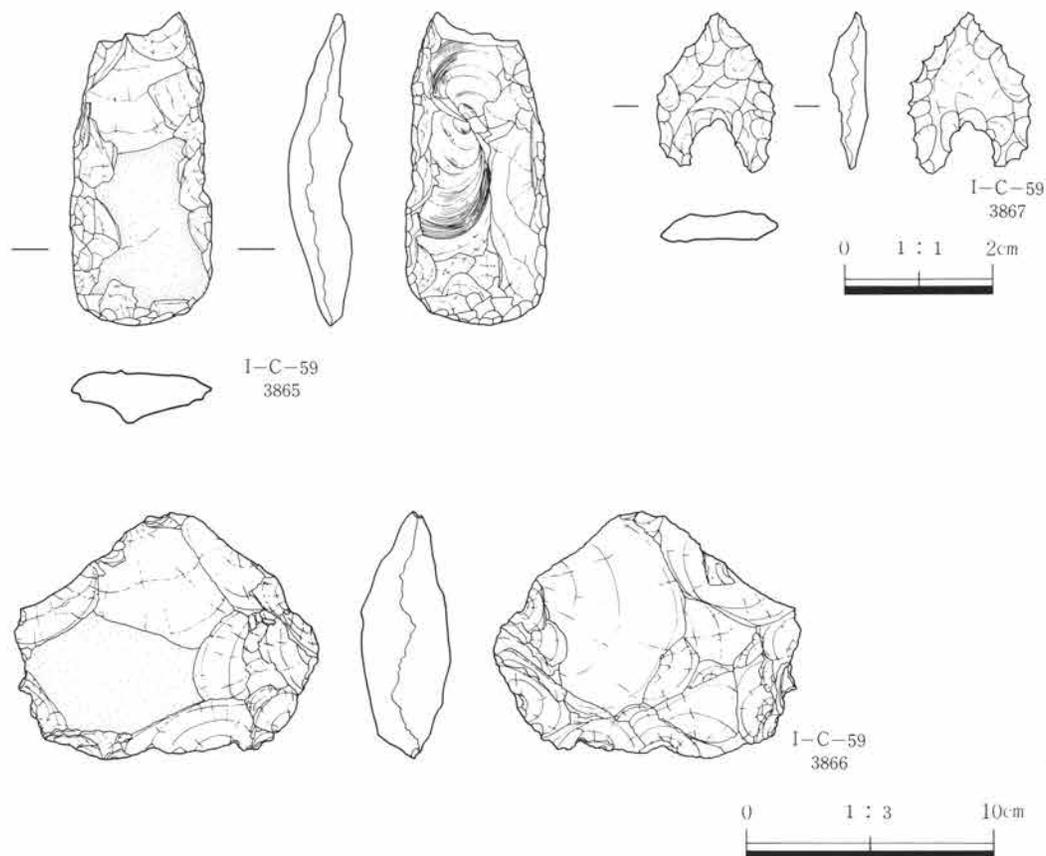
第55図 土坑遺物図（9）



第56図 土坑遺物図(10)



第57図 土坑遺物図 (11)



第58図 土坑遺物図(12)

第10表 I地区土坑石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
A区93号土坑 2847	礫器	198	52	41	649.9	黒色片岩。	表裏に弱い敲打、端部に磨耗。
144土坑 2848	石皿	492	275	65	8350.0	緑色片岩。	裏面平坦、摺り面は、故意に穿孔する。
2849	凹石	107	89	44	425.8	粗粒安山岩。	表裏研磨後、各1孔をあげる。
247号土坑 2845	打製石斧	71	55	19	96.8	硬質泥岩。	短冊型、刃部のみ。
2846	打製石斧	48	55	15	35.8	硬質泥岩。	分銅型か、刃部の一部。
253号土坑 2841	石皿	138	115	75	1450.0	粗粒安山岩。	裏面平坦、縁は直線的。

I 縄文時代（土坑）

C区9号土坑 3858 打製石斧	75	52	13	48.1	黒色頁岩。	短冊型、刃部のみ、先端のみ蛤刃状に研磨。
59号土坑 3865 打製石斧	124	56	24	176.6	硬質泥岩（化石含有）。	短冊型、頭部欠損、刃部磨耗、強い反り身を持つ。
3866 礫石	120	98	35	393.3	硬質泥岩。	縁辺に厚い刃部を持つ。
3867 石 鏃	21	15	5	1.1	黒色頁岩。	凹基式、完存。

土坑出土土器

I 地区 A 区60号土坑（第44・47図、第9表）

2774は、深鉢の体部破片、沈線による区画文が施され、中はLR縄文を充填施文している。

2775は、深鉢体部の小破片、集合する平行沈線で部分的に沈線間に縄文を充填施文する。2点とも堀之内II式である。（女屋）

I 地区 A 区75号土坑（第44・47図、第9表）

2785は、小形深鉢の口縁部破片である。地文にRL縄文施文後、貼付隆帯により半円状の区画を作り、端部は退化した渦巻文で2本の隆帯を垂下させる。頸部は無文帯である。

2786は、深鉢の体部破片、LR縄文を全面施文後に3本単位の沈線懸垂文で区画する。

2点は、加曽利EII式である。（女屋）

I 地区 A 区76号土坑（第44・47図、第9表）

2787・2788は、深鉢の口縁部～頸部にかけての破片で、貼付隆帯で階円状に区画、中を平行する沈線で充填、頸部に無文帯を持つ。時期は加曽利EII式である。（女屋）

I 地区 A 区83号土坑（第44・48図、第9表）

2791～2797までの深鉢の口縁部を主とした破片が8点出土している。

2796が加曽利EII式、2791・2793・2794が同EIII式、2795が称名寺式、2792・2797が堀之内式である。（女屋）

I 地区 A 区86号土坑（第44・47図、第9表）

2798は、円筒状の深鉢の把手状の口縁部の一つで、横位、縦位の沈線で区画された中に渦巻文、曲線文を施す。口唇部には、連続爪形文、縦位の隆帯上には「ハ」の字状の刻みを施す。

2799は、深鉢の口縁部破片で、貼付隆帯で渦巻文を作る。

2798が勝坂式、2799が加曽利EII式である。（女屋）

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

I 地区 A 区87号土坑 (第44・48図、第9表、図版11)

2800は、キャリパー状の深鉢の口縁部である。口縁は、撚糸地の上に隆帯による「∞」字状の渦巻文を貼付する。頸部は、貼付隆帯が横走り画される。

2801は、深鉢の体部破片である。貼付隆帯で隋円区画し、連結部に横向きに粘土紐を貼付する。区画内には、沈線による渦巻文を施す。

2800は加曾利E I式、2801は勝坂式である。 (女屋)

I 地区 A 区93号土坑 (第44・48・49図、第9・10表)

2802は、大形の深鉢の体部破片である。撚糸地文の上に隆帯を「J」字状に貼付し、3本を単位とする横位の沈線をめぐらす。76号住出土の深鉢に器形、文様等で類似が求められ、曾利II式である。

2803は、キャリパー状の深鉢の口縁部～頸部にかけての破片である。口縁部は、貼付隆帯により楕円状に区画しLR縄文を充填、区画間は渦巻文を配す。頸部は無文帯となって体部と画する。

2804は、キャリパー状の深鉢口縁部破片で2803に類似するが、貼付隆帯による渦巻文の一端は波状口縁の頸部となる。頸部は無文帯を持っている。この2点は加曾利E II式である。 (女屋)

I 地区 A 区100号土坑 (第44・49図、第9表、図版11)

2805は、深鉢の底部である。底径8.0cmを測る。体部は、7～8本を単位とする連歯状工具による条線が懸垂、条間は細い無文帯となって残っている。体部の底面から2cm程上の内面には、炭火物が付着、底部外面は砂粒が浮く程に荒れている。炉体とし使用か。加曾利E III式である。

(女屋)

I 地区 A 区111号土坑 (第44・49図、第9表)

2808は、大形の深鉢の体部縊部の破片である。縊部には、やや幅広で縦に刻みを施した隆帯を横位に貼付する。体部全体は、僅かな無文部を残して縦位の撚糸文を施文する。隆帯上には、刻みを施した2本の隆帯を楕円状に貼付する。加曾利E II式である。 (女屋)

I 地区 A 区118号土坑 (第45・49図、第9表)

2809は、キャリパー形の深鉢で口唇部と体部中央以下とを欠損する。最大径で24.5cmを測る。口縁部は、太い沈線による渦巻文で区画される。体部は、LR縄文を全面に施文した後、11単位の磨消無文帯を懸垂させる。加曾利E III式である。 (女屋)

I 地区 A 区131号土坑 (第45・50図、第9表)

2810は、深鉢体部中央の破片である。縦、横3本単位の沈線が接する部位に小さな円状を作る。

地文は、縦位の撚糸文を施す。

2811は、大形深鉢の体部である。地文に縦位の撚糸文を施し、2本単位の沈線懸垂文で区画する。2点ともに加曾利E II式である。（女屋）

I 地区 A 区143号土坑（第45・51図、第9表）

2816は、鉢形土器の大形破片で口径47cmを測る。口縁部は広い無文帯を持ち、「く」の字状に外反する。頸部は、横位の沈線で区画した中に竹管状工具による交互刺突文を施す。体部は、条線地文の上に2本の沈線で対をなす渦巻文を施文し、その間を縦位に沈線によるスペード状の施文で埋めている。

2817は、深鉢体部の破片で縦位の条線を地文とし、その上に2本の沈線と蛇行懸垂文を施して区画している。2816は曾利系、2817は加曾利E II式である。（女屋）

I 地区 A 区212号土坑（第45・53図、第9表、図版12）

2826は、深鉢の上半部で口径34cm、残高18cmを測る。口縁端部で「く」の字状に内折し、口唇は薄くなる。4単位の波状口縁を持ち、体部中央で縊れる器形である。沈線による区画文内はLR縄文が充填されている。器面は内外面とも研磨されている。称名寺I式期である。（女屋）

I 地区 A 区213号土坑（第45・55図、第9表）

2827は、浅鉢の体部屈曲部～底部である。器壁は5mm前後と薄く、内外面ともにヨコ方向に研磨、焼成も良好である。無文である。底部外面は全体に磨滅し、僅かに網代痕が見える。

2828～2830は、深鉢の口縁部、体部の小破片である。いずれも沈線による区画内をLR縄文で充填、あるいは刻みを施した隆帯を貼付する。4点ともに堀之内式後半である。（女屋）

I 地区 A 区210号土坑（第45・52図、第9表、図版12）

2831は、土坑内から単独で出土した深鉢で、ほぼ完形であるが底部の一部を欠損している。口径18.5cm、器高28.3cmを測る。口縁は「く」の字状に内折し、口唇も内側に突出する。口縁部は外反気味に開口し、体部中央で強く縊れた後にその下位で球形の膨みを持ちながら、小さな底部へと続く。口縁部の内折する部分には、渦巻状の貼付文が1箇所、把手1箇所に付けられ、把手の内側にはC字文が付けられている。体部中央の内面には、厚さ1mm前後で炭火物が付着している。文様は、J状文等で区画文を施し、縄文を充填している。称名寺I式である。（女屋）

I 地区 A 区214号土坑

2832は、口縁部を欠損した浅鉢である。残高11cm、底径8.20cmを測る。器壁は、厚さ5mm前後と均一に調整され、外面は内面が粗雑なのに対して丁寧に研磨されている。文様は、沈線で区画

した中を縄文で充填し、口縁から刻みを施した細紐状の隆帯を貼付する。堀之内Ⅱ式である。

(女屋)

I 地区 A 区225号土坑 (第45・51図、第9表)

2833～2835は、深鉢体部のいずれも小破片である。2833は、縊部の破片で沈線で区画した貼付隆帯上に角押状の刻みを施す。2834は、下位の破片で無文上に沈線による懸垂文を、ほぼ等間隔に施している。内面全体には、薄く炭火物が附着している。2835は、口縁部に近い破片でLR縄文を全面に施文後、沈線による楕円状の区画を施し、間を磨消無文帯としている。2833は、加曽利EⅡ式、2834、2835は同EⅢ式である。

(女屋)

I 地区 A 区247号土坑 (第45・54図、第10表)

2837は、深鉢の口縁部破片である。口縁部は、貼付隆帯により楕円状に区画しLR縄文を充填する。区画間には、やや隆起する渦巻文を配す。頸部は無文帯で、体部とは凹痕を施した貼付隆帯を持って画される。2838は、大形深鉢の体部破片で、幅広隆帯を楕円状に貼付し、中を平行する沈線で充填する。隆帯上にも縄文を施文し、中心に寄った部位に縦位の刻みを入れる。2点とも加曽利EⅡ式である。

(女屋)

I 地区 A 区251号土坑 (第45・54図、第9表)

2839は、堀之内Ⅱ式の深鉢体部の破片で、沈線区画内を縄文で充填。2840は、加曽利E式の深鉢体部の破片で、縦位の撚糸文を施す。

(女屋)

I 地区 A 区259号土坑 (第46・50図、第9表)

2842は、深鉢の体部中央～底部である。残高16.6cm、底径8.90cmを測り、円筒形を呈する。器壁は1cm前後と厚い。内外とも縦方向に研磨されている。勝坂式の深鉢の無文部か。

(女屋)

I 地区 A 区280号土坑 (第46・55図、第9表)

2844は、無文の深鉢の口縁部～体部である。口径27cm、残高17.8cmを測り、口径に最大径がある。口唇部は内側に肥厚する。堀之内Ⅰ式か。

(女屋)

I 地区 C 区9号土坑 (第46・56図、第9・10表)

3857は、平縁を呈す。口縁部に扇状の把手を4単位付す。口縁部は緩やかに内彎し、頸部～体部は僅かに反りながら底部に至る。

把手上縁は棒状工具の押圧による小型の刻み、側縁は大型の刻みが施される。把手間は1条の隆線で結び、方形の区画を把手間に配することで口縁部文様帯を作る。区画内は、口唇下に1条

I 縄文時代（土坑）

の結節沈線を施し、斜位の結節沈線を充填する。隆線には2ケ1組の刻みが等間隔に施される。頸部～体部の文様帯には明瞭な分割線はない。頸部に2条の沈線が巡り、体部上半の小突起が同レベルであることから、ある程度の頸部文様帯～体部文様帯の分割は意識されたのであろう。体部上半の突起は、口縁部の把手間の中位下に付され、突起下端より、断面三角の隆線が垂下する。隆線の描くモチーフは2種類あり、各々が交互に配されることにより、2A+2Bの2単位構成を取る。空白部には2本1組の沈線が2列横位施文されるが、結節沈線でV字状に垂れる箇所もあり、対称性を崩している。その他ヒダ状の指頭押圧痕が恐らく、輪積上に押される。体部の施文順位は、指頭押圧痕、隆線貼付、などで、沈線施文、撫でであろう。

本土器の類例資料は、高崎市雨壺遺跡62号住に把手の類例が見られ、また赤城村見立大久保遺跡3号住に全体観の類例した土器がある。見立大久保3住の土器はやや把手が低く耳状であり、本土器に先行するのであろう。又、雨壺62住のそれは、把手の類例のみで、体部文様帯などは著しく本土器より後行するものである。その他県北部であるが月夜野町宮地遺跡87号土坑に体部に逆U字状に垂下する隆線を貼付けたI b式土器が見られる。

類例資料は全て阿玉台I b式と報告されており、本土器も同時期ではあるが、扇状の把手がかなり独立して突出し、口縁部文様帯の結節沈線の充填、体部の突起形態からI b式期でもII式の要素を持った土器であろう。 (女屋)

I 地区C区58号土坑P-1 (第46・57図、第9表)

3863・3864とも同一の文様要素を持ち、同一個体の観さえ受けるが、別個体である。製作者、製作場所などに共通性が考えられ、製作、使用、廃棄（埋納）の過程で常に共存した可能性がある。

1は口縁部が緩やかに内彎し、膨らみを持たせる深鉢。口唇～口縁部に鈕状の突起を付す。突起は4ケ配されるのであろう。口唇部に撫でによる薄い稜を持ち、その直下から爪形文が横位に数段施文される。爪形文は比較的密に連続し、輪積痕に沿う。体部上半からY字状の隆線が垂下し、体部の器面を等分割するのであろう。垂下隆線には、指頭による押圧が施される。爪形文は、Yの上端にまで施文される。

3864は体部下半～底部まで残存する。1と比べ器肉が厚くややずんぐりした器形を呈す。1と同様に爪形文の施文、Y字状隆線の垂下が主な文様である。Y字状隆線の上端は、V字状の小突起になる。爪形文の施文部位は、やはり輪積痕に沿う。 (女屋)

(3) 表土出土遺物

a 土 器

本遺跡は、縄文時代の遺構上に方形周溝墓、古墳が築造され、更に平安時代の遺構が作られている。その結果、これまで報告してきた竪穴住居跡、土坑出土の遺物のほかに後代の遺構覆土中に混入する該期遺物も少なくない。石器については、後述する様に時代的特徴を反映した定型化したものを選択した様に、土器も多量の破片の中から器形を残すもの、時期の特徴を示すものを基準にして2885～2894・3008の11点だけを報告する。少量ではあるが、本遺跡の中では僅少な出土例である前期諸磯A式、同C式、前期末葉のもの、中期の顔面把手、土偶を含み、これまで記述してきた内容を一層肉付けする性格を持っている。

表土一括とした未報告の資料は、多量なものであるが大筋において竪穴住居跡、土坑に示される時期と時間幅の中に収まるものである。加曾利E II式、同III式のもののが圧倒的主体であるが、土坑に示される様に後期堀之内式のものも多い。分布状態は、A区に最も多く全体の9割以上を占め、B区、C区、寺前地区と続く。A区の中では、報告の遺構周辺に多いのは勿論だが、遺構分布の空白域からの混入遺物も多く、重複する遺構の中で該期のものが削平を受けて消えていることを示している。

2885は、底部の一部を欠損する他は完形に近い深鉢形土器である。器高24.7cm、口径23.5cm、底径10.3cmを測る。口縁部は、太めの撚糸文を縦位に施した上に隆帯を貼付して楕円状に区画する。口縁は、同じ隆帯を貼付した渦巻状、中空の把手を2箇所につける。頸部から体部へは、強い縊を持って続き、僅かに膨らみ底部に移る。文様は、口縁部と同じ撚糸文を全面に施文し、体部の縊部分には3本の平行する沈線がめぐり、加曾利E I（新）式である。

2886は、大形深鉢の頸部～底部の破片である。頸部は、横位の2本の沈線をめぐらし、体部は沈線による懸垂文間に蛇行文が垂下する。地文はLR縄文を施す。加曾利E II式である。

2887は、大形深鉢の体部破片で撚糸文地の上に3本単位の沈線を垂下させて区画している。加曾利E II式である。内面に炭火物が付着する。

2888は、円筒状の深鉢で口縁部～体部の破片である。口縁は、波状の小突起が1箇所つく。文様は、口縁と平行に横位の沈線1本がめぐり、体部は2本単位の沈線の懸垂文間を2本の連弧状文が繋いでいる。口径14.2cm、残高12.5cmを測る。堀之内II式である。

2889は、深鉢につく顔面把手である。顔全体の表現は、沈線のなぞりで縁取りされ、裏面も粗くなでつけられ、中空にあったことを示す。眉と鼻は、隆起による表現、目は工具による刺突で三日月状に表現されている。鼻下は長く、口は歪んだ円孔で表現されている。全体は、5.4×5cmで、周縁は故意に欠かれており、把手の一部から転用されている。中期勝坂期のものであろう。

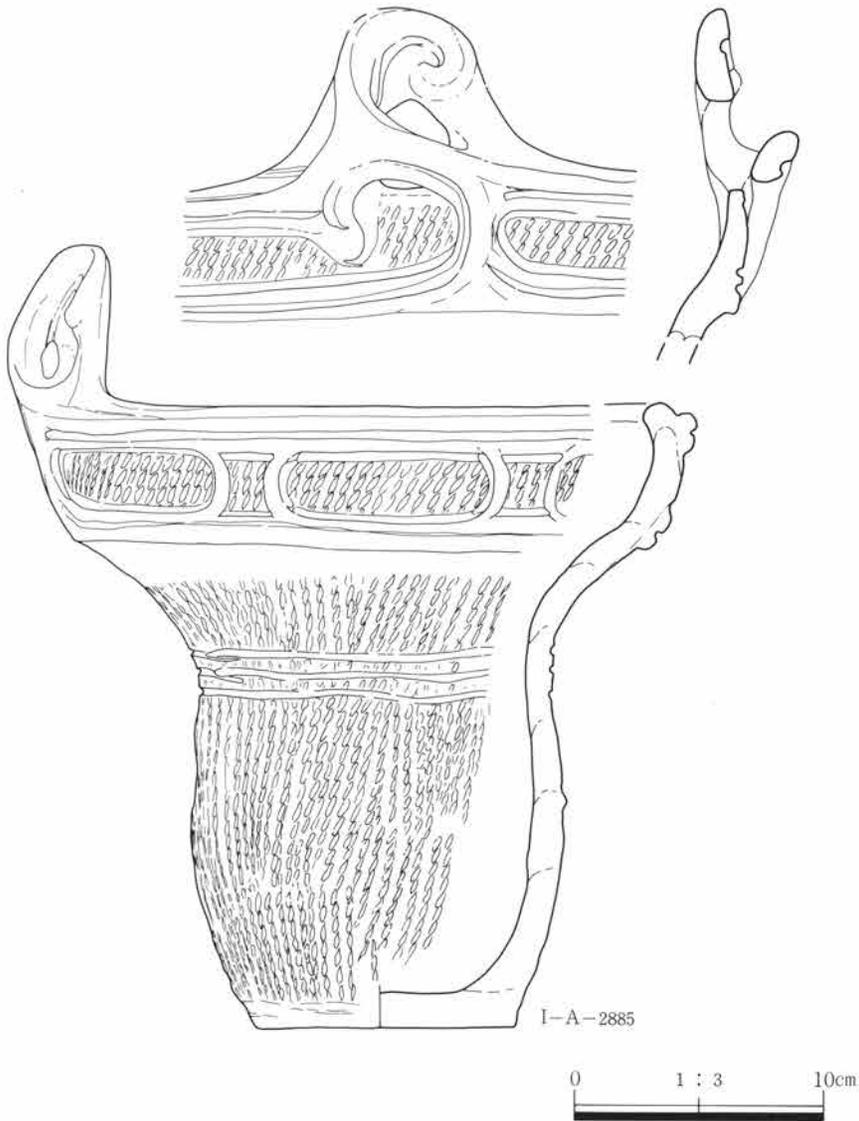
2890は、右手、右脚を欠損する土偶である。全長4.20cm、腕部での幅3.80cm、腰部での幅2.80cm、同厚さ2.10cmを測る。全体は、粘土塊から四肢を鈕出した程度で表現され、頭部は丸みのあ

I 縄文時代（表土出土遺物）

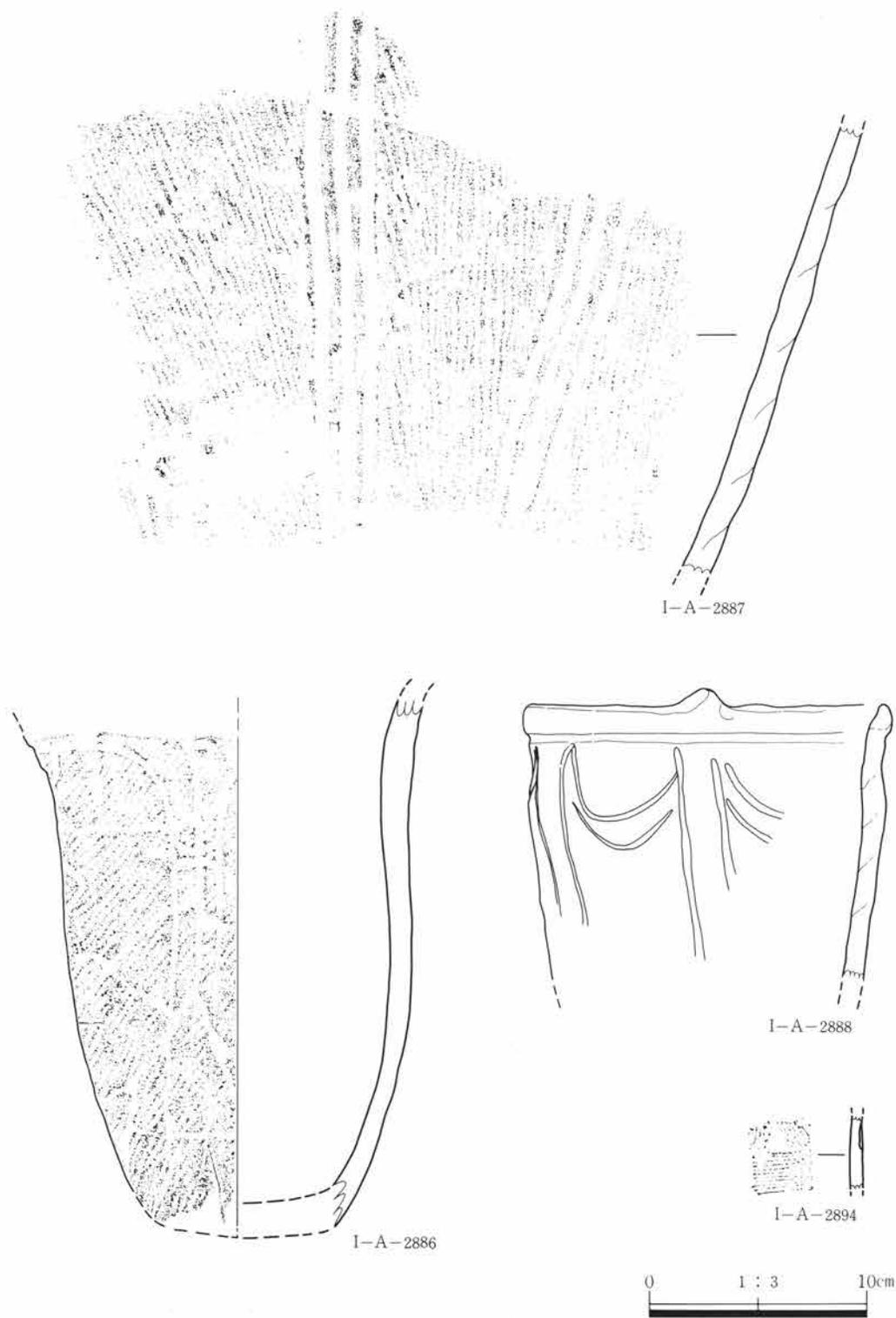
る突起だけに簡略化されている。文様、装飾はなく、正面は乳房状の突起2箇所、腹部に直径9mmの指頭凹痕がある。

2891~2894は、前期の土器である。2891・2892は、諸磯A式の深鉢の破片で別個体だが、共に地文のRL縄文の上に竹管による円形刺突文を縦位に施し、一部は円孔が開いている。2894は連歯状工具で集合沈線を施し、三角陰刻を施した諸磯C式である。2893は、結節縄文を施した前期末葉の土器である。

3008は、堀之内II式の深鉢体部の小破片である。沈線で区画された中にLR縄文が充填されている。 (女屋)

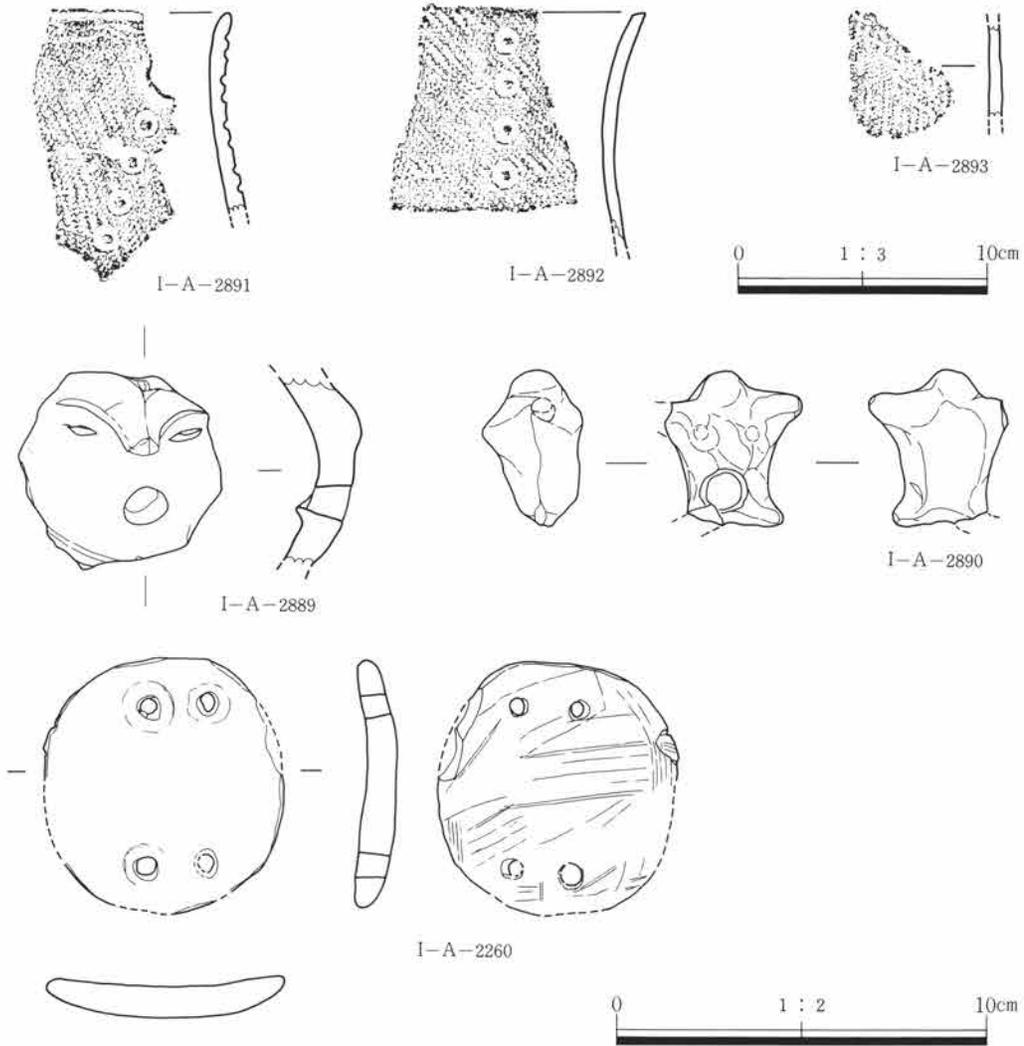


第59図 表土遺物図(1)



第60図 表土遺物図(2)

I 縄文時代（表土出土遺物）



第61図 表土遺物図（3）

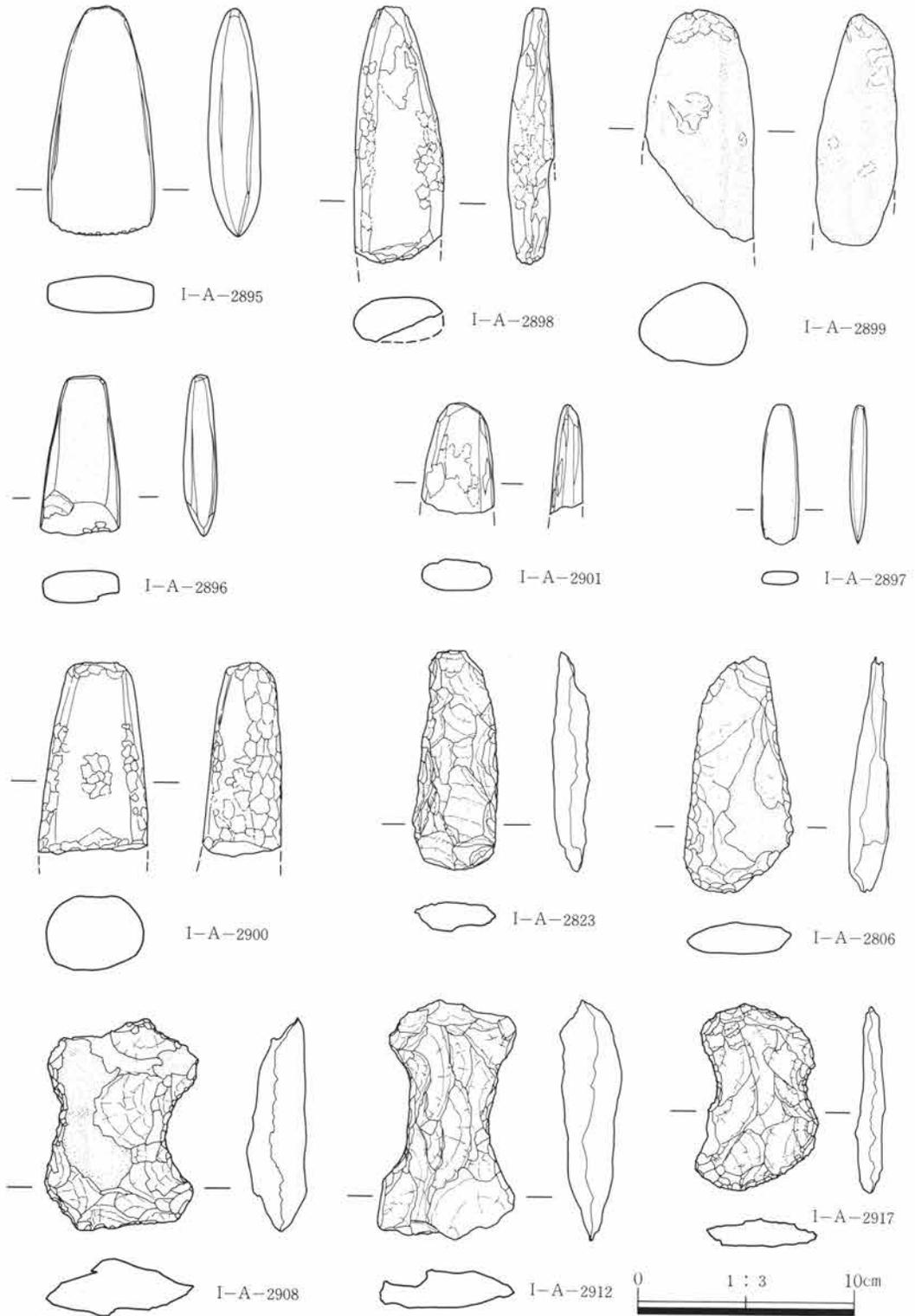
b 石器

石器は、A区から寺前地区までの遺構出土のもの、定型石器を中心にして15器種219点を報告する（第11表）。

内訳は、打製石斧132点（短冊型97点、分銅型33点、撥型2点）、磨製石斧9点、石鏃17点、石錐1点、礫器16点、スクレイパー7点、石皿7点、磨石11点、凹石8点、多孔石5点、台石3点、石棒2点、石斧垂飾1点である。

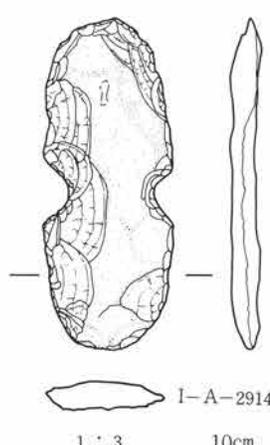
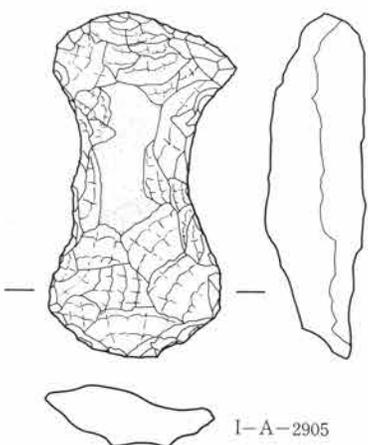
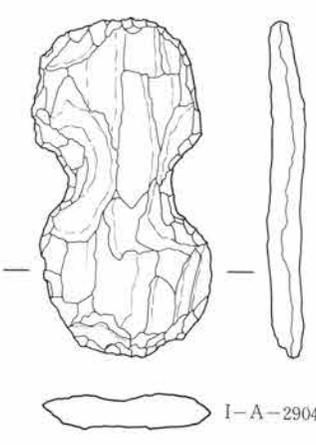
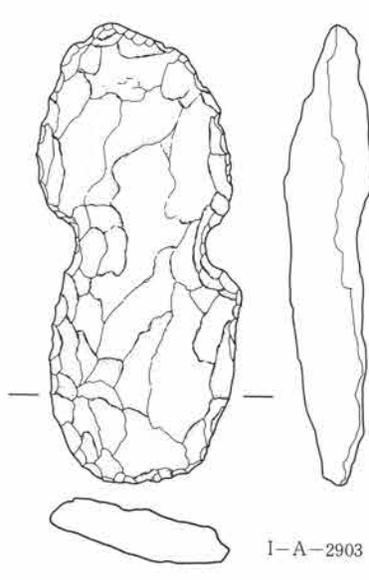
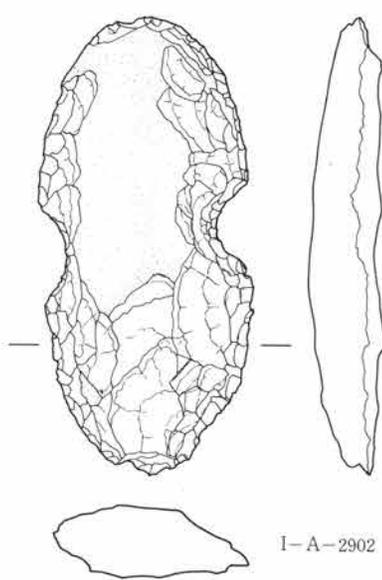
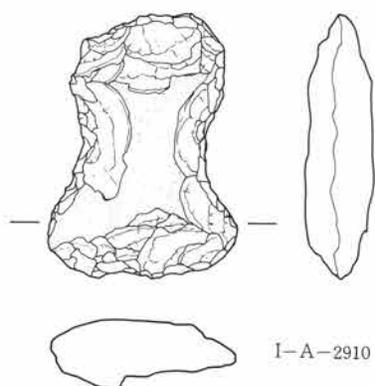
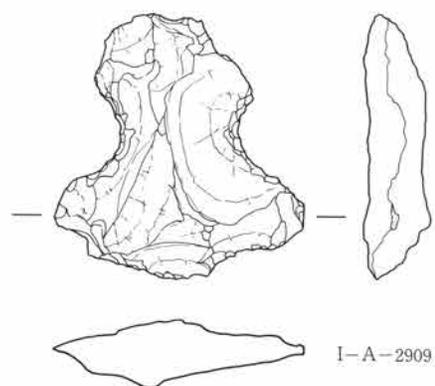
これらは、中期の石器群としての組成内容を示しているが、以上の他には、破損した石斧類、剥片の縁辺に軽く敲打して刃部を施した程度の剥片石器が多く見られ、組成上、欠くことができ

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



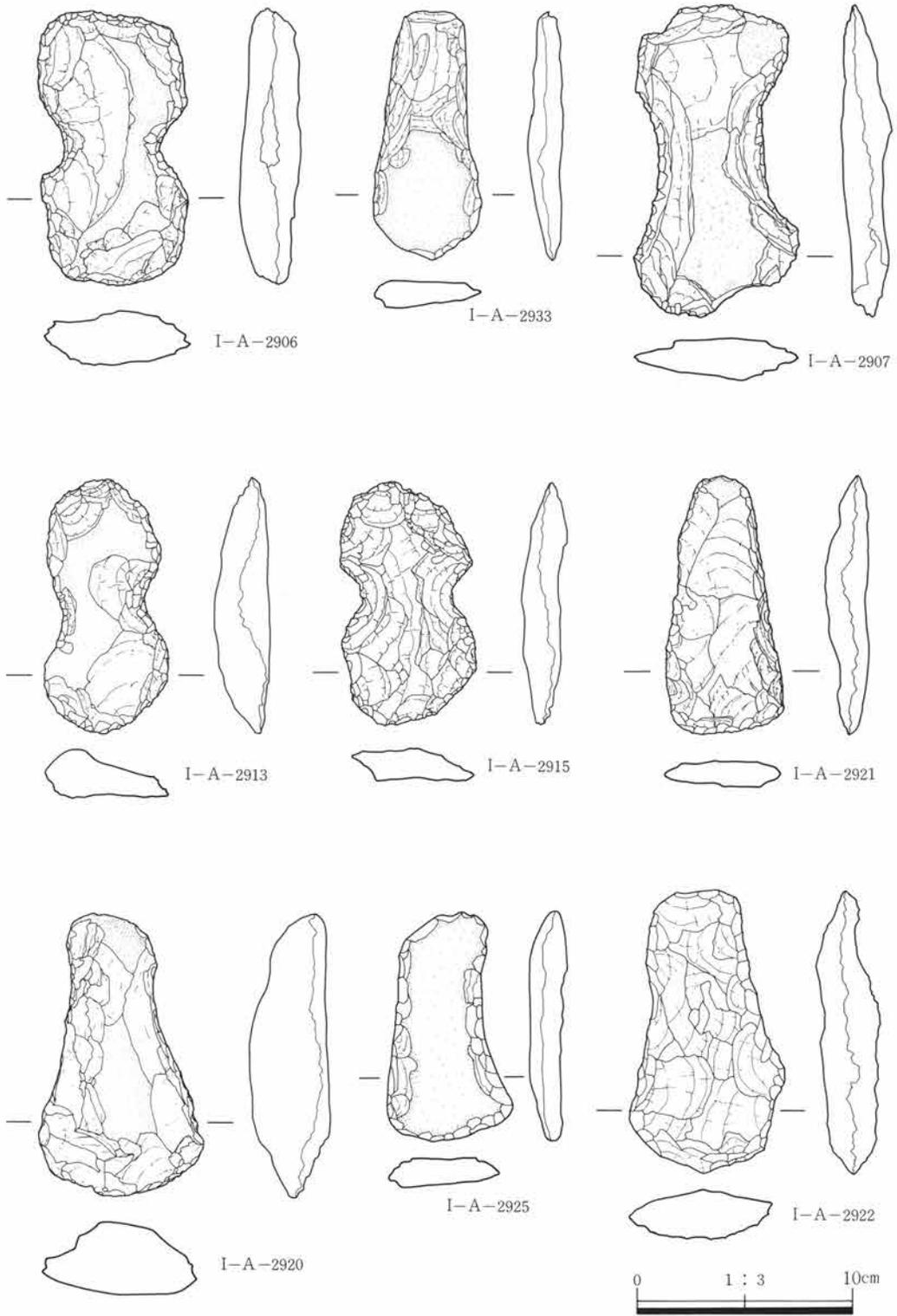
第62図 表土遺物図(4)

I 縄文時代（表土出土遺物）



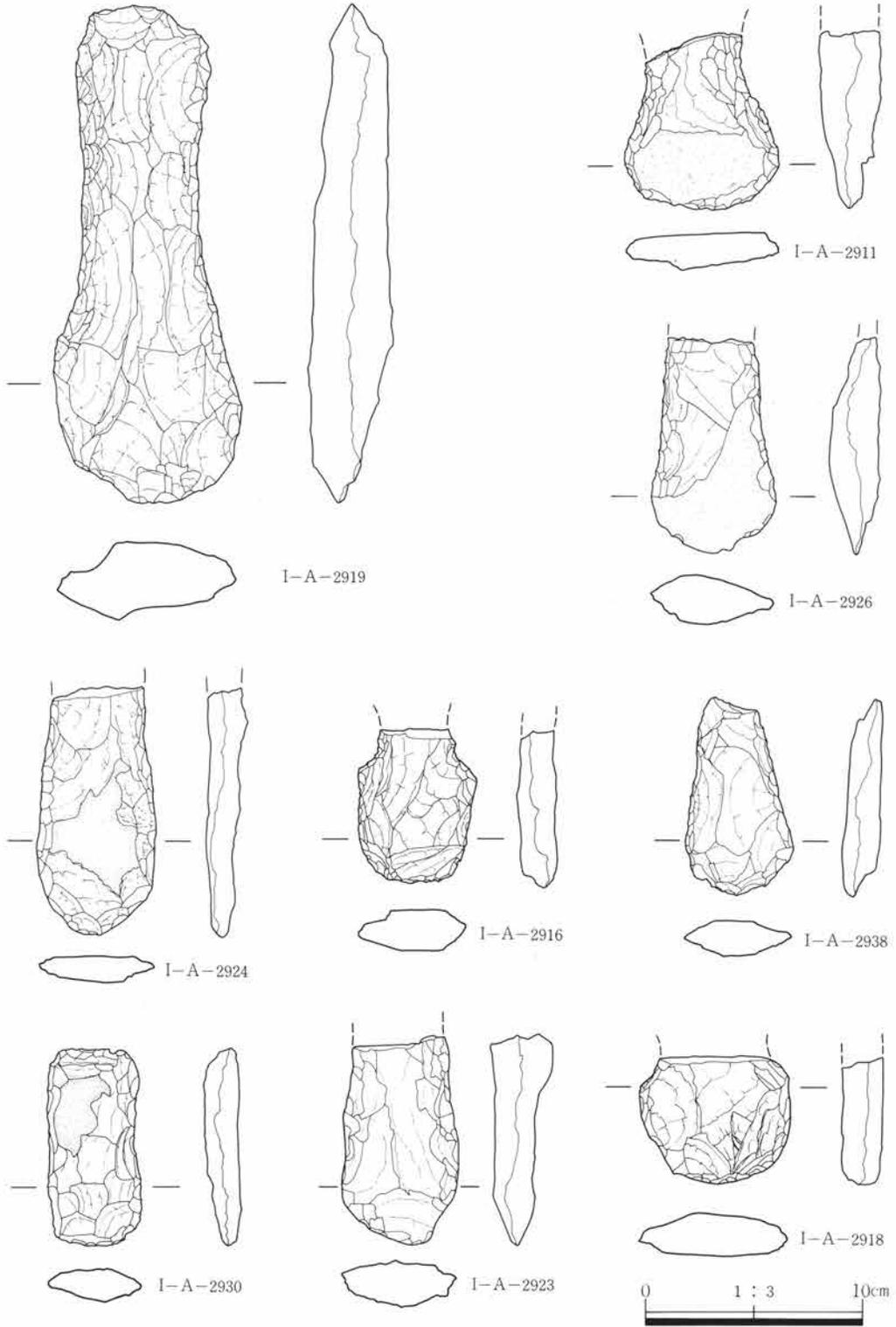
0 1 : 3 10cm

第63図 表土遺物図（5）

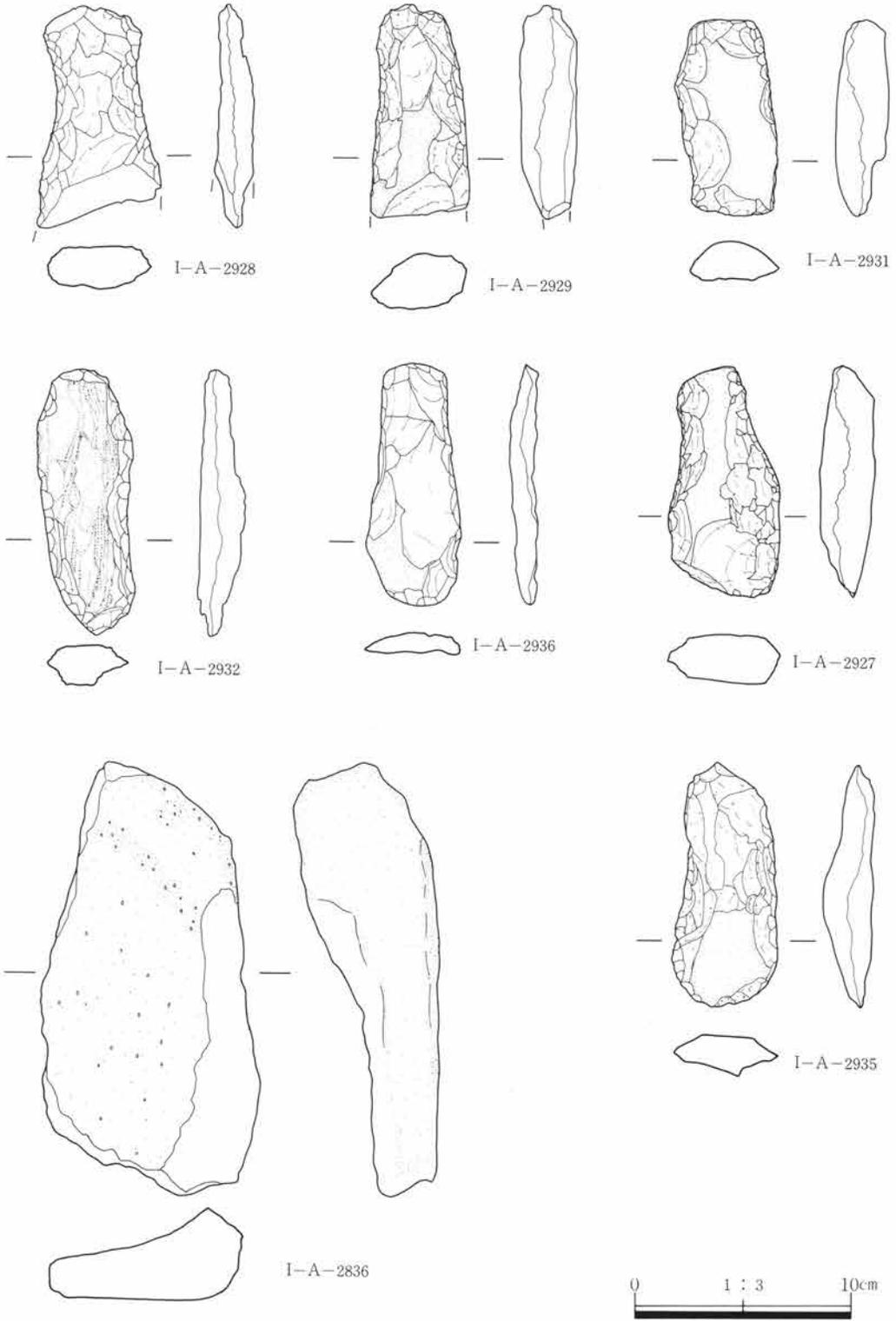


第64図 表土遺物区(6)

I 縄文時代（表土出土遺物）

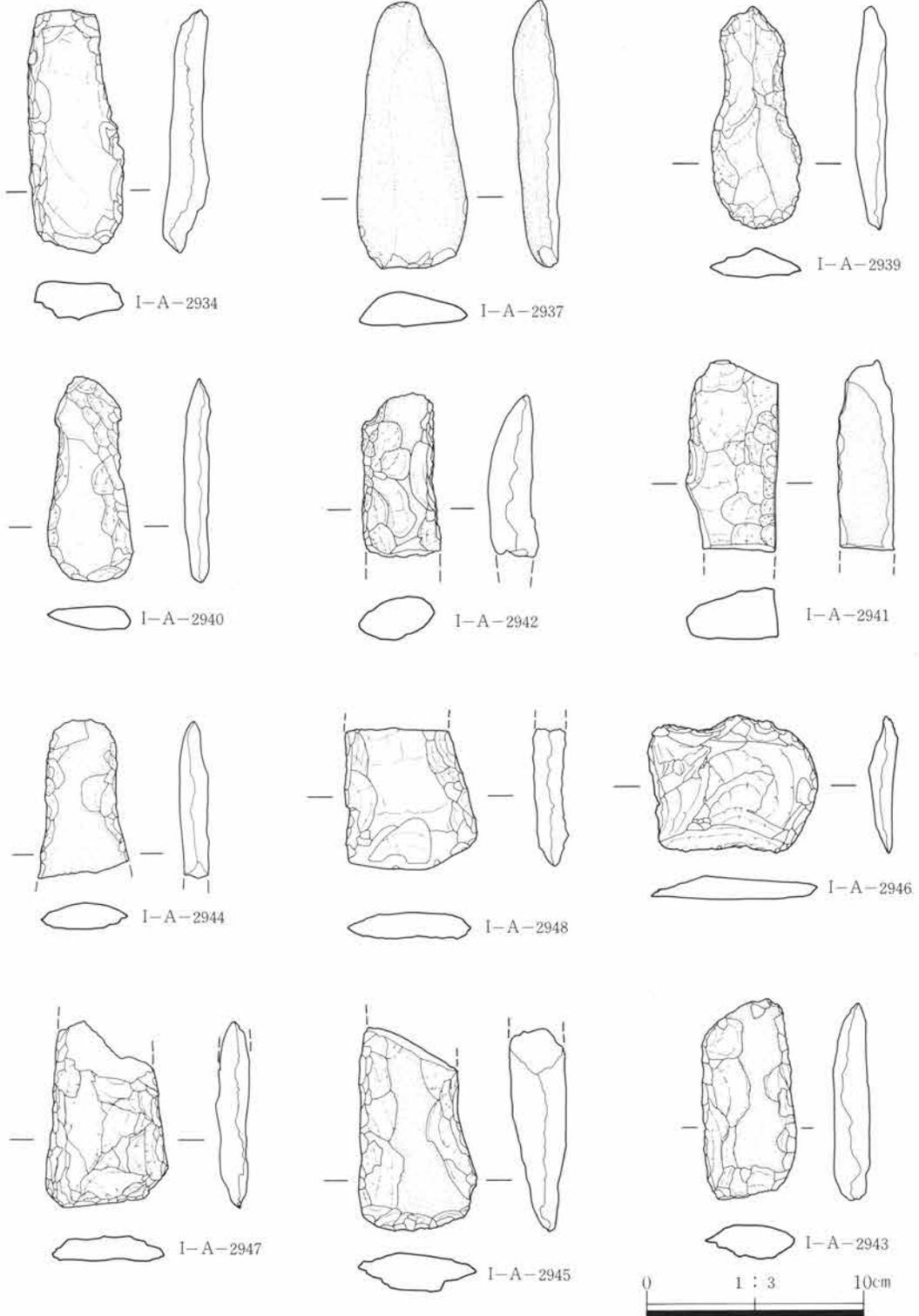


第65図 表土遺物図（7）



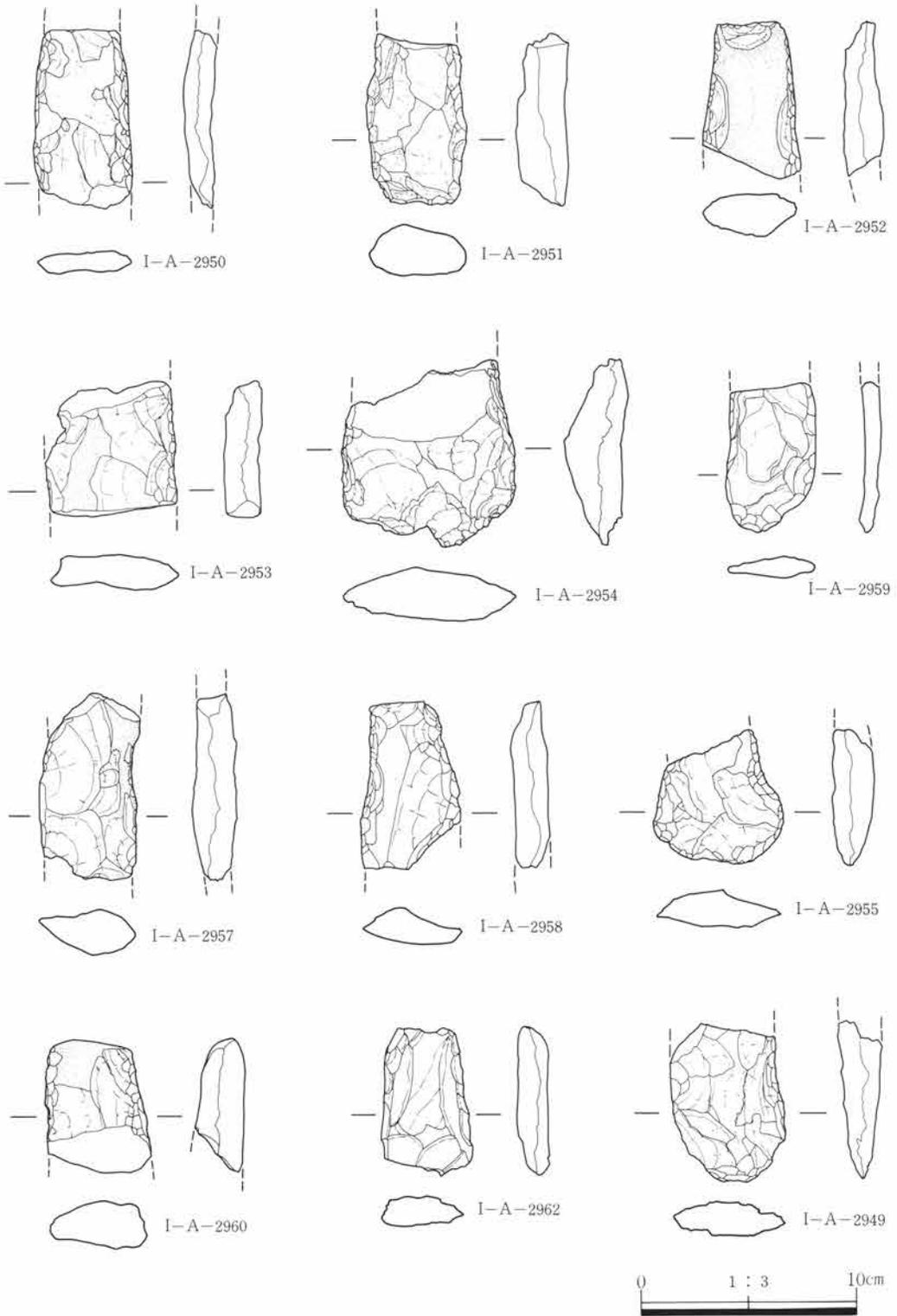
第66図 表土遺物図(8)

I 縄文時代（表土出土遺物）



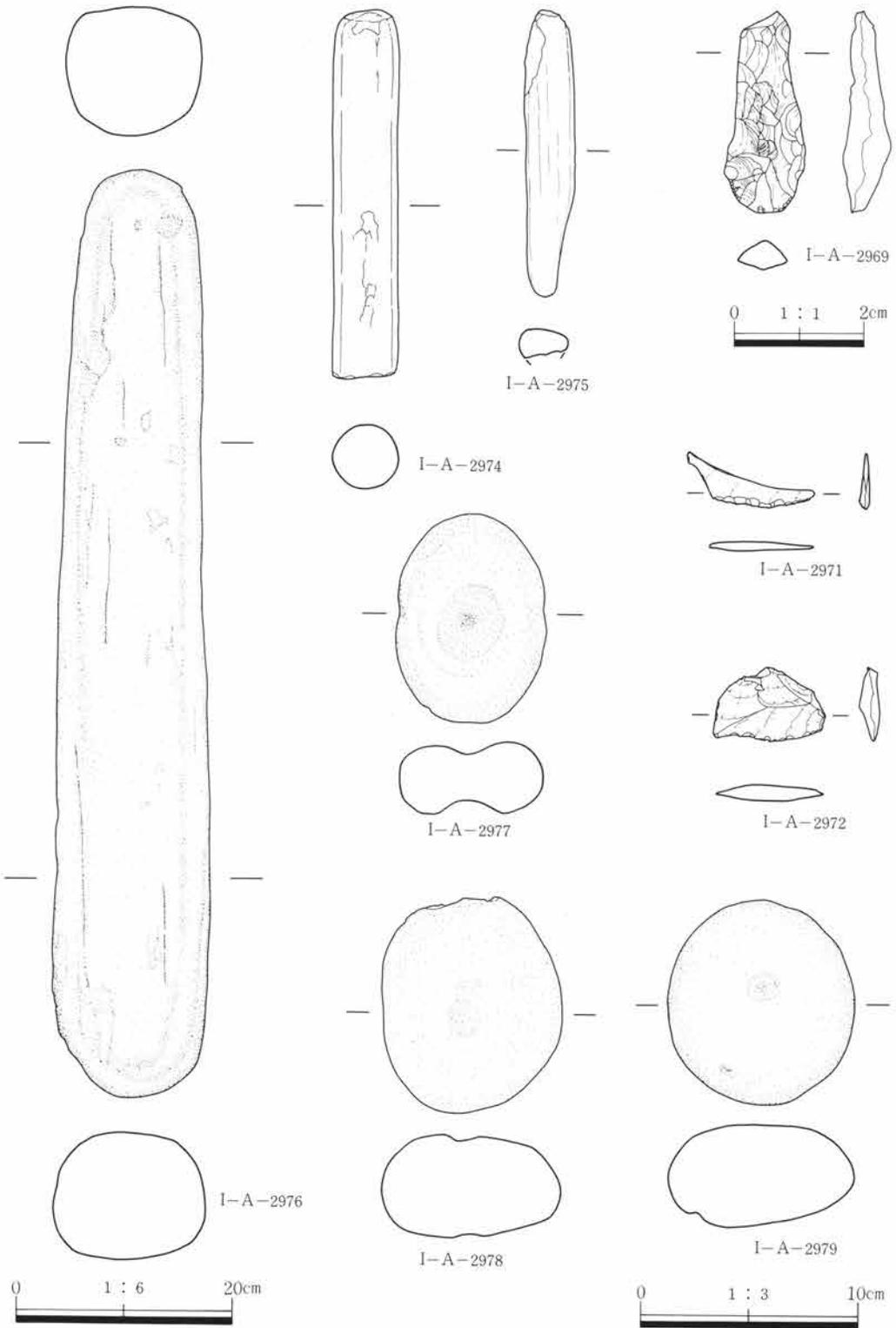
第67図 表土遺物図（9）

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

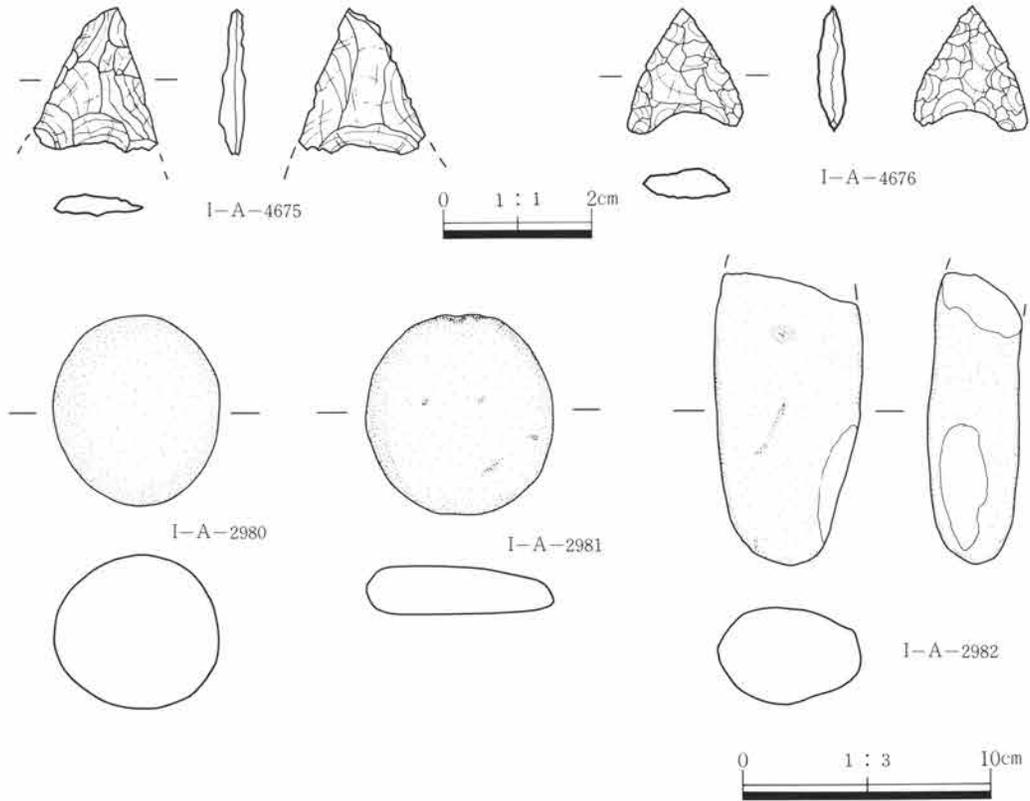


第68図 表土遺物図(10)

I 縄文時代（表土出土遺物）



第69図 表土遺物図（11）



第70図 表土遺物図(12)

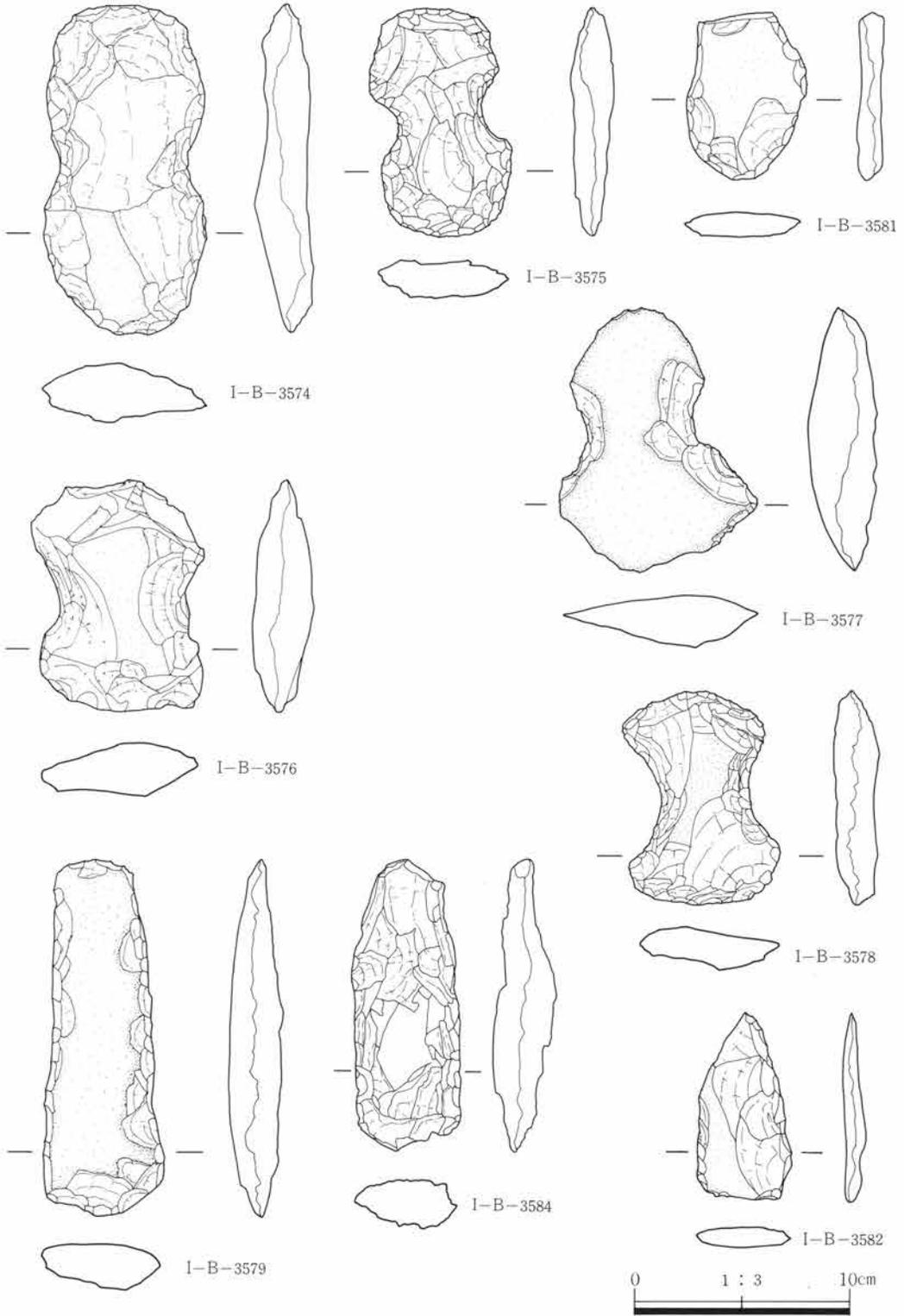
ないが定型石器を中心にしたためにほとんどを除外した。

第11表は、器種と石質との対応関係を見たものである。石質は28があり、安山岩系、頁岩系、砂岩、泥岩系に属するものが多く、219点中158点と全体の72%を占めている。日常の生産活動の中で消費されやすい打製石斧類は、上記の石質を使用したものがほとんどで、使用頻度の高い器種ほど供給が可能な石質を当てていることがわかる。一方、石棒、石皿の様に、基本形状が一定の制約下にあるものは、三波川変成帯に近い地域性のためか、用途にあった適性を持つ各種の片岩類が当てられている。

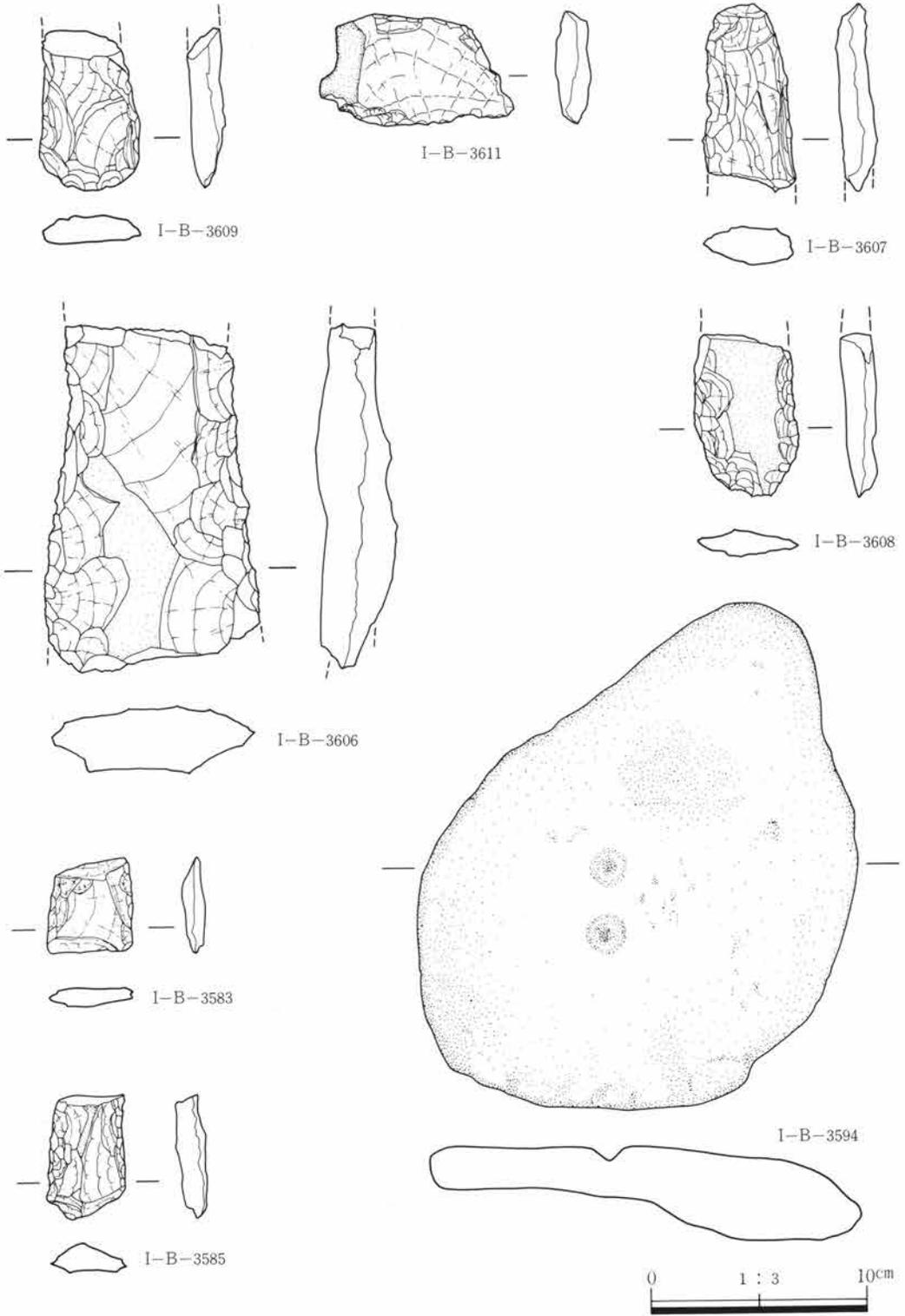
定型石器、しかも完存のものを主体に報告したが、打製石斧に限っても刃部を主体に使用痕である磨耗の著しいものが多く、中には剝離の様子が消える程に磨滅するものがある。着柄痕を持つものも数例ある。

(女屋)

I 縄文時代 (表土出土遺物)

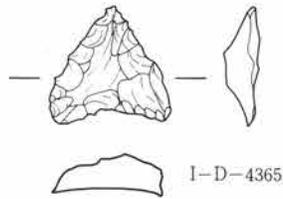
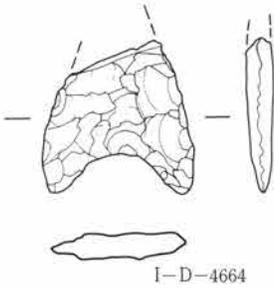
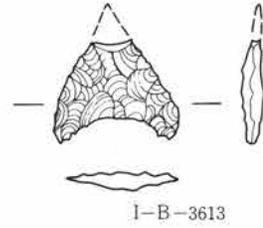
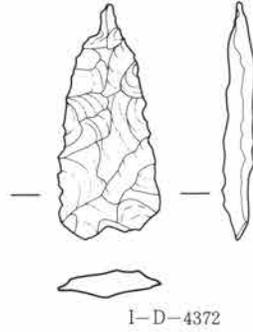
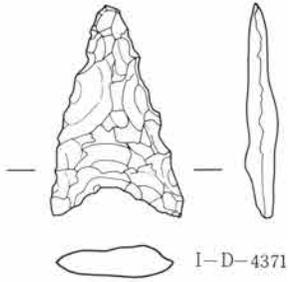
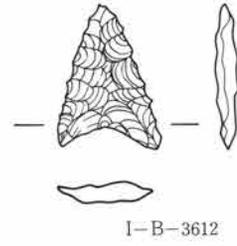
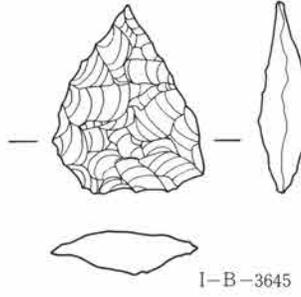
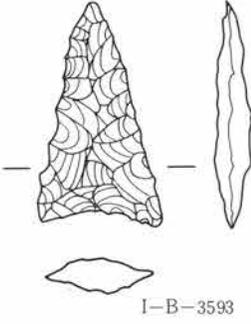
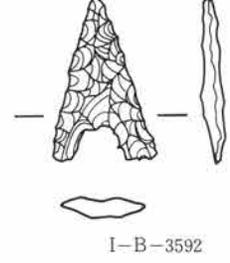
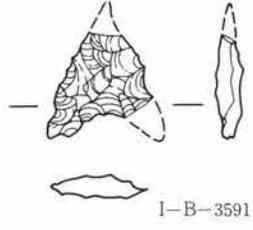
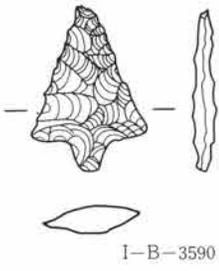


第71図 表土遺物図 (13)

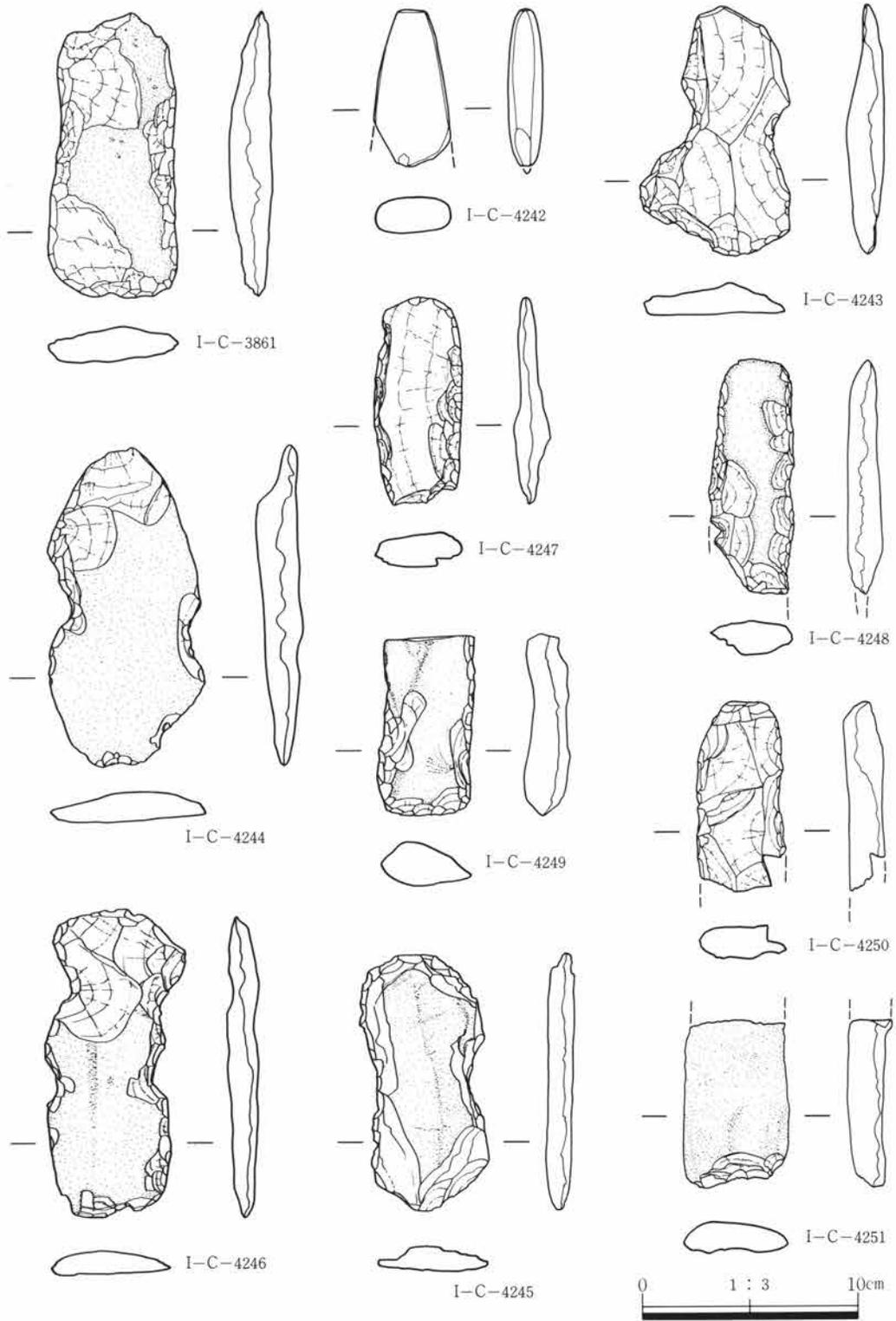


第72図 表土遺物図 (14)

I 縄文時代（表土出土遺物）

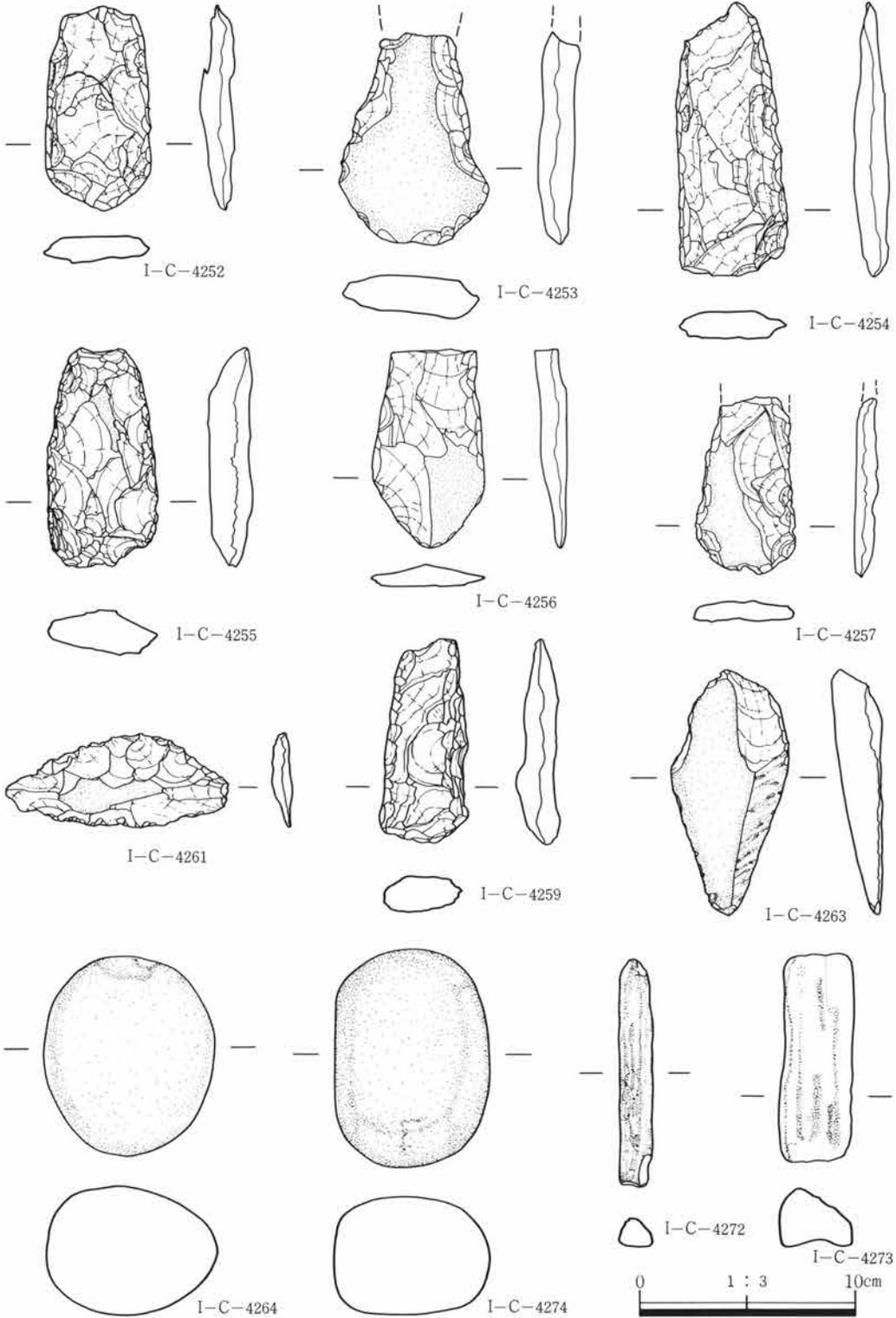


第73図 表土遺物図（15）

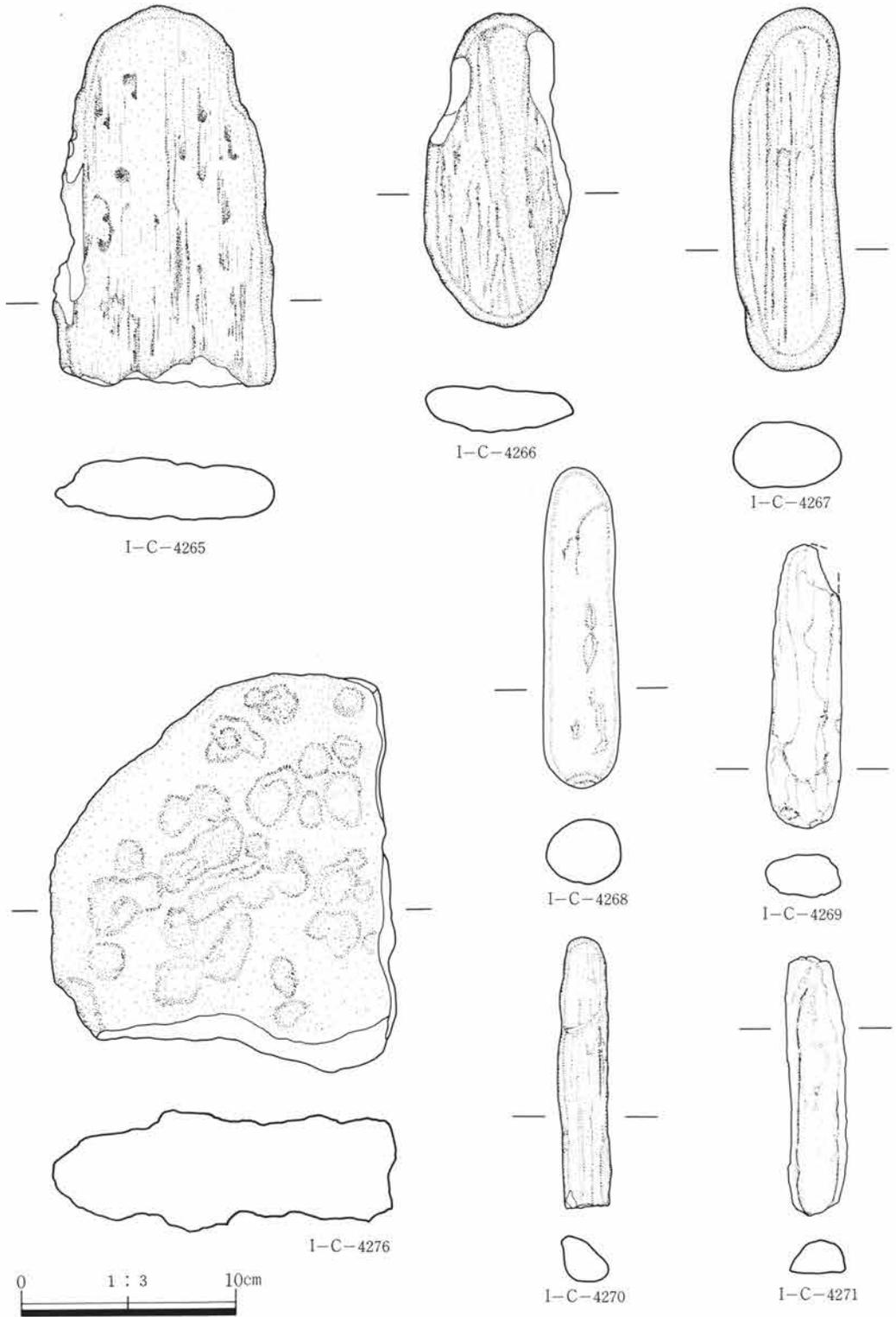


第74図 表土遺物図 (16)

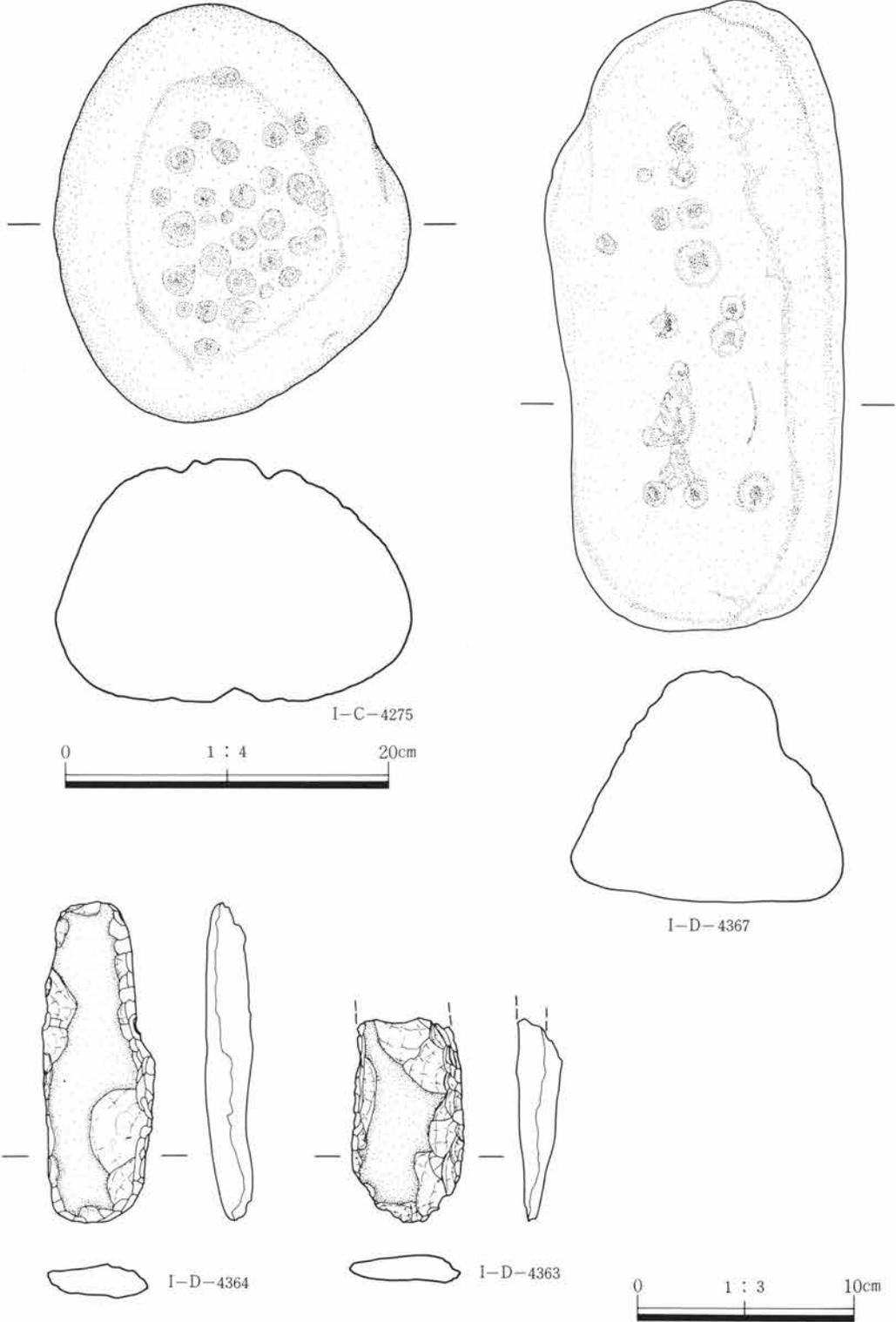
I 縄文時代（表土出土遺物）



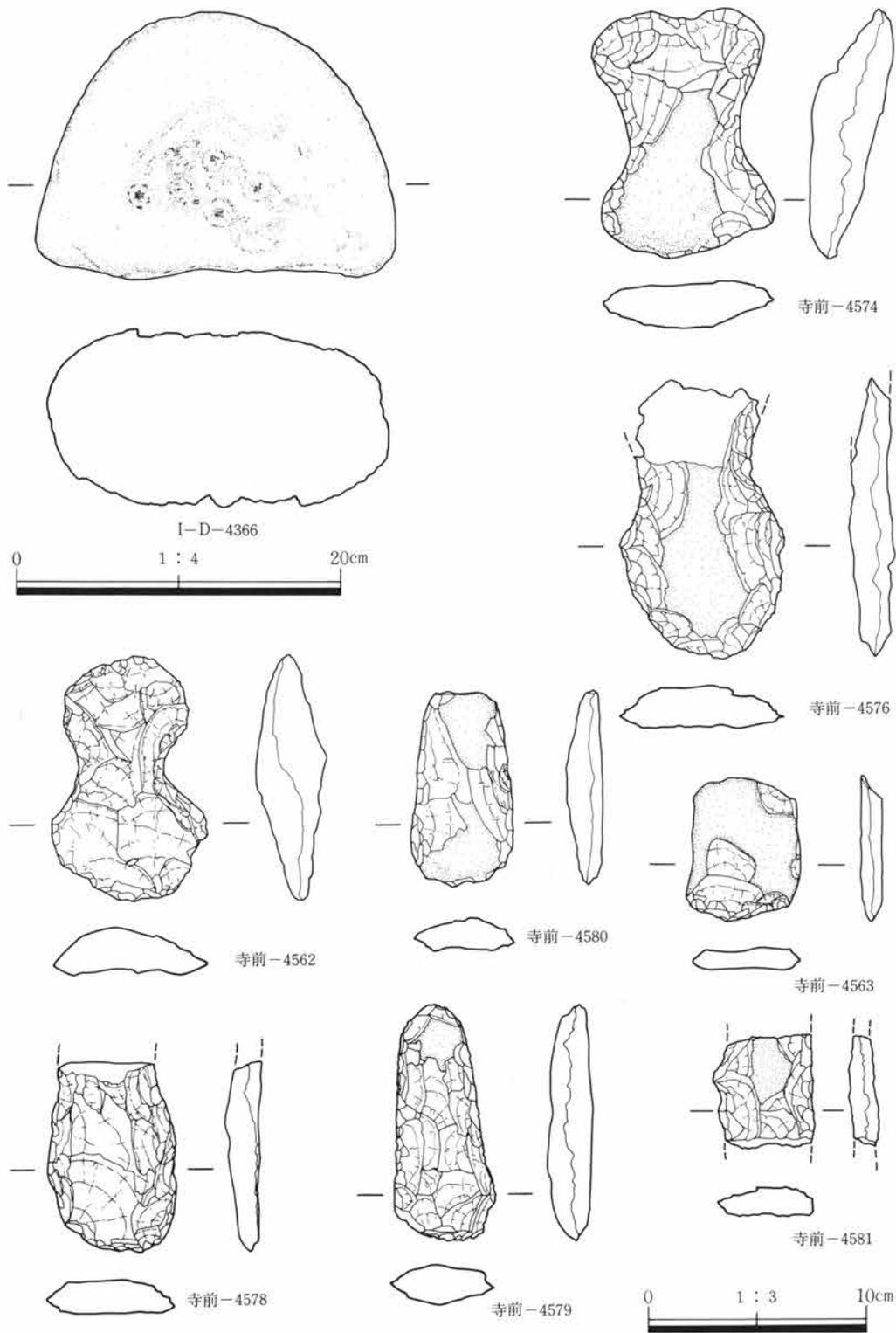
第75図 表土遺物図 (17)



第76図 表土遺物図 (18)

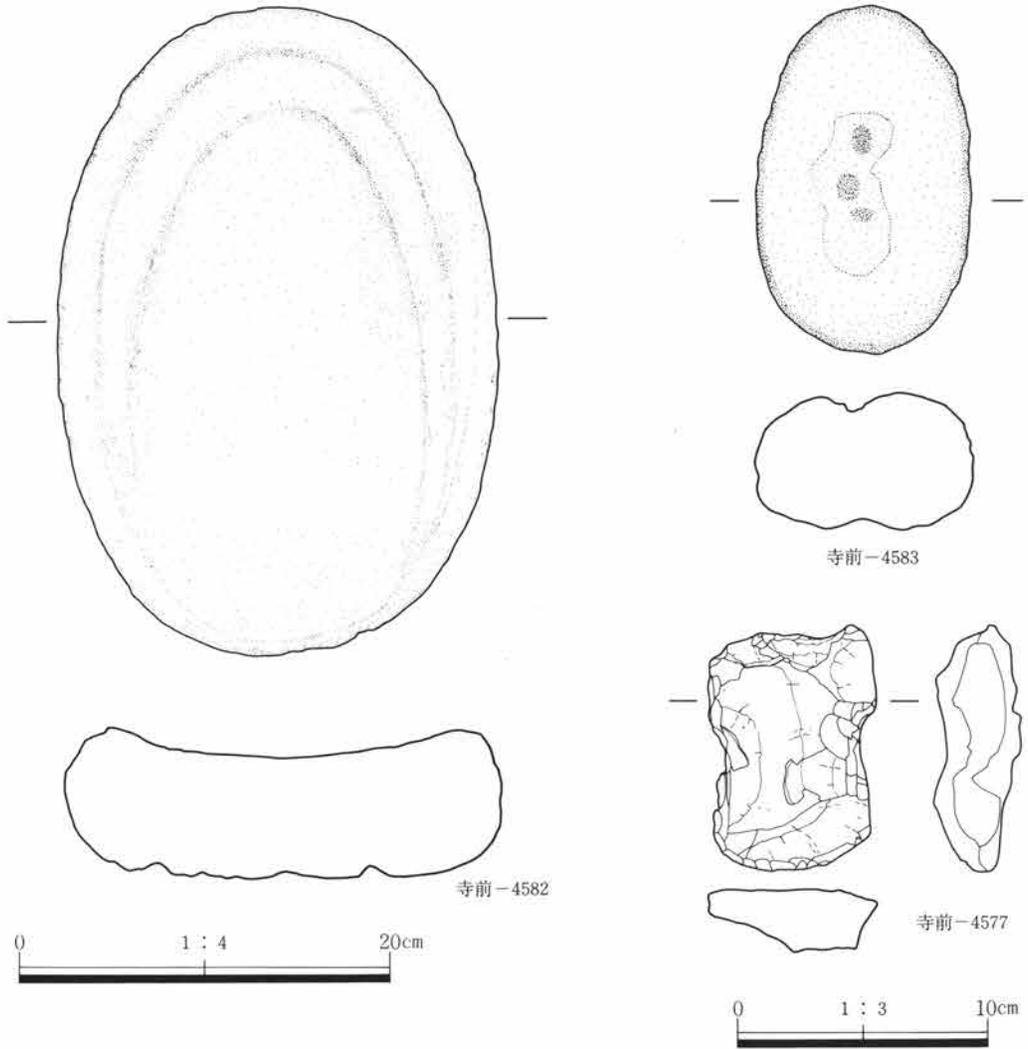


第77図 表土遺物図 (19)



第78図 表土遺物図 (20)

I 縄文時代（表土出土遺物）



第79図 表土遺物図（21）

第 11 表 I 地区表土石器観察表

番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
A区 2806	打製石斧	107	49	18	98.5	硬質泥岩。	短冊型、完存、頭部の表裏剥落。
2823	打製石斧	100	38	16	77.4	硬質泥岩。	短冊型、完存。
2836	石皿	200	98	50	1130.0	点紋緑色片岩。	裏面平坦。
2895	磨製石斧	105	50	24	187.4	変質蛇紋岩。	定格式、刃部蛤刃状。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

2896	磨製石斧	73	36	15	64.9	変玄武岩。	定格式、刃部はつけ直す、蛤刃状。
2897	磨製石斧	64	17	8	15.6	変質蛇紋岩。	定格式、裏面中央に装着用のへこみあり。
2898	磨製石斧	117	41	22	151.8	変玄武岩。	全体に粗く研磨、刃部欠損。
2899	磨製石斧	106	51	38	301.1	変玄武岩。	礫皮を利用、部分研磨、刃部欠損、厚い。
2900	磨製石斧	89	51	37	271.7	変玄武岩。	成形の敲打痕を残し、部分研磨、厚い。
2901	磨製石斧	51	34	15	33.7	変玄武岩。	定格式、頸部のみ。
2902	打製石斧	182	83	28	569.5	細粒安山岩。	分銅型、完存、端部磨耗。
2903	打製石斧	183	78	35	488.5	雲母石英片岩。	分銅型、完存、端部磨耗。
2904	打製石斧	134	67	13	171.2	雲母石英片岩。	分銅型、完存、端部磨耗、扁平。
2905	打製石斧	137	73	40	383.4	硬質泥岩。	分銅型、完存、反り身あり。
2906	打製石斧	126	67	27	296.5	硬質泥岩。	分銅型、完存、端部磨耗。
2907	打製石斧	143	76	24	258.9	細粒安山岩。	分銅型、略完存、扁平、端部磨耗。
2908	打製石斧	97	70	27	181.7	珪質頁岩。	分銅型、完存。
2909	打製石斧	105	100	27	209.8	珪質頁岩。	分銅型、完存、刃部は厚く、平縁。
2910	打製石斧	105	76	28	250.3	細粒安山岩。	分銅型、完存、刃部は厚く、磨耗。
2911	打製石斧	80	70	28	158.9	細粒安山岩。	分銅型、頭部欠損、刃部は薄く磨耗。
2912	打製石斧	110	63	28	183.7	砂岩。	分銅型、完存。
2913	打製石斧	107	58	26	183.9	珪質頁岩。	分銅型、完存、刃部磨耗、反り身あり。
2914	打製石斧	131	53	11	102.1	珪質頁岩。	分銅型、完存、刃部磨耗、全体に薄い。
2915	打製石斧	111	61	18	136.1	黒色頁岩。	分銅型、完存、両端薄く、僅かに磨耗。
2916	打製石斧	71	54	18	94.9	凝灰岩質砂岩。	分銅型、頭部欠損、刃部厚い。
2917	打製石斧	85	51	12	75.1	黒色砂岩。	分銅型、完存、刃部磨耗、全体に扁平。
2918	打製石斧	58	69	20	105.6	硬質泥岩。	分銅型、刃部のみ、全体に風化。
2919	打製石斧	226	85	33	726.7	硬質泥岩。	短冊型、完存、厚手、刃部磨耗。
2920	打製石斧	129	76	38	341.2	黒色頁岩。	短冊型、完存、厚手、反り身あり。
2921	打製石斧	119	54	20	122.8	硬質泥岩。	短冊型、完存。
2922	打製石斧	129	68	27	250.3	硬質泥岩。	短冊型、完存、刃部磨滅。

I 縄文時代（表土出土遺物）

2923	打製石斧	91	54	28	147.0	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損、刃部磨耗。
2924	打製石斧	113	54	18	141.7	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損、刃部磨耗。
2925	打製石斧	105	58	17	110.6	黒色頁岩。	短冊型、完存、刃部磨減。
2926	打製石斧	99	56	22	150.2	細粒安山岩。	短冊型、頭部欠損、刃部磨減。
2927	打製石斧	106	52	26	154.5	硬質泥岩。	短冊型、完存、両側粗く成形。
2928	打製石斧	102	56	19	112.6	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、全体に磨耗。
2929	打製石斧	97	45	26	157.3	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、厚手。
2930	打製石斧	89	42	16	90.8	硬質泥岩。	短冊型、完存、全体に磨耗。
2931	打製石斧	90	44	24	135.6	黒色頁岩。	短冊型、完存。
2932	打製石斧	121	44	21	116.2	珪質準片岩。	短冊型、完存。
2933	打製石斧	113	50	16	92.1	細粒安山岩。	短冊型、完存、刃部磨減。
2934	打製石斧	110	43	18	106.1	黒色頁岩。	短冊型、完存。
2935	打製石斧	111	49	23	109.3	硬質泥岩。	短冊型、完存、刃部磨減。
2936	打製石斧	110	43	12	71.0	かんらん岩。	短冊型、完存、刃部磨減。
2937	打製石斧	122	51	20	147.8	硬質泥岩。	短冊型、完存。
2938	打製石斧	90	49	17	79.6	硬質泥岩。	短冊型、頭部の一部欠損、刃部磨耗。
2939	打製石斧	102	40	13	53.7	黒色頁岩。	短冊型、完存。
2940	打製石斧	93	38	11	49.6	点紋頁岩。	短冊型、完存、全体に風化。
2941	打製石斧	85	41	26	134.0	硬質泥岩。	短冊型、刃部側欠損、側面の一部研磨。
2942	打製石斧	74	36	21	80.8	頁岩。	短冊型、刃部欠損、反り身あり。
2943	打製石斧	90	40	16	94.3	硬質泥岩。	短冊型、刃部の一部欠損、磨耗あり。
2944	打製石斧	72	40	13	44.6	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損。
2945	打製石斧	93	54	24	153.2	点紋頁岩。	短冊型、頭部欠損、刃部磨耗あり。
2946	スクレイパー	75	62	11	68.0	珪質頁岩。	縁辺を刃部として使用。
2947	打製石斧	85	56	14	75.4	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損、刃部表に磨耗あり。
2948	打製石斧	63	60	14	81.3	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損、刃部先端斜位に研磨。
2949	打製石斧	73	51	19	91.5	細粒安山岩。	短冊型、刃部欠損。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

2950	打製石斧	82	45	14	79.0	硬質泥岩。	短冊型、両端欠損、反り身あり。
2951	打製石斧	79	45	24	107.9	細粒安山岩。	短冊型、頭部欠損。
2952	打製石斧	72	43	19	72.6	黒色頁岩。	短冊型、刃部欠損、反り身あり。
2953	打製石斧	63	60	17	86.7	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、扁平幅広。
2954	打製石斧	85	80	26	170.0	珪質頁岩。	短冊型、頭部欠損、扁平幅広。
2955	打製石斧	65	60	20	82.2	細粒安山岩。	分銅型、刃部のみ、全体に磨耗。
2957	打製石斧	86	45	21	94.4	硬質泥岩。	短冊型、両端欠損。
2958	打製石斧	76	46	17	73.4	硬質泥岩。	短冊型、両端欠損。
2959	打製石斧	68	40	9	34.5	珪質準片岩。	短冊型、頭部欠損、薄手扁平。
2960	打製石斧	61	48	22	83.4	細粒安山岩。	短冊型、頭部のみ、厚手。
2962	打製石斧	68	41	14	56.9	雲母石英片岩。	短冊型、完存。
2969	石 錘	30	12	7	1.7	黒耀石。	つまみ近くまで調整し、稜を敲打して潰す。
2971	スクレイパー	48	25	4	3.4	黒色頁岩。	縁辺を刃部として使用。
2972	スクレイパー	32	50	9	13.7	黒色頁岩。	縁辺を刃部として使用。
2974	石 棒	167	31	29	291.4	雲母石英片岩。	全体を敲打後、丁寧に研磨。
2975	礫 器	131	23	13	66.0	緑色片岩。	先端ベン先状に剝離し、刃部とする。
2976	石 棒	850	145	112	28050.0	点紋緑色片岩。	裏面のみ敲打後、研磨し成形、ほかは自然面の状態。
2977	凹 石	96	69	33	249.0	粗粒安山岩。	表裏1孔、両側面に弱い抉りあり。
2978	凹 石	97	83	47	505.2	粗粒安山岩。	表裏2孔、片面が平坦。
2979	凹 石	94	85	46	541.9	粗粒安山岩	表のみ1孔、全体に磨耗。
2980	磨 石	76	67	61	401.0	粗粒安山岩。	全体に磨耗。
2981	磨 石	80	74	19	140.3	粗粒安山岩。	全体に磨耗、裏面上端に剝離あり。
2982	磨 石	115	59	38	405.6	変玄武岩。	下半部欠損、全体に風化。
4675	石 鏃	19	17	3.5	0.74	黒耀石。	凹基鏃、両脚と先端を欠損。
4676	石 鏃	16	15	4	0.8	黒耀石。	凹基鏃、完存。
B区 3574	打製石斧	151	75	26	334.0	珪質変質岩。	分銅型、完存、周縁磨耗。

I 縄文時代（表土出土遺物）

3575	打製石斧	105	59	20	159.3	珪質泥岩。	分銅型、完存、着柄部磨耗。
3576	打製石斧	106	77	27	286.8	硬質泥岩。	分銅型、略完存、抉り部分磨耗。
3577	打製石斧	121	92	31	291.6	変質安山岩。	分銅型、完存。
3578	打製石斧	99	67	20	164.3	黒色頁岩。	分銅型、完存、着柄部帯状に磨滅。
3579	打製石斧	165	57	25	284.8	細粒安山岩。	短冊型、完存、刃部磨耗。
3581	打製石斧	77	53	11	64.8	硬質泥岩。	短冊型、刃部舌状で磨滅。
3582	打製石斧	86	43	9	45.8	黒色頁岩。	短冊型、完存、刃部先端のみ磨耗。
3583	打製石斧	43	39	10	20.4	黒色頁岩。	短冊型、体部のみ、薄手扁平。
3584	打製石斧	135	49	27	170.5	細粒安山岩。	短冊型、完存。
3585	打製石斧	56	35	14	34.2	硬質泥岩。	短冊型、頭部のみ。
3590	石 鏃	21	16	4	0.8	チャート。	凸基式。
3591	石 鏃	13	13	3	0.4	黒耀石。	凹基式。
3592	石 鏃	22	14	3	0.5	チャート。	凹基式、抉りは方形に近く深い。
3593	石 鏃	30	16	5	1.6	チャート。	凹基式、完存。
3594	台 石	232	200	32	1918.7	粗粒安山岩。	縁辺に4箇所刻みあり、石皿としても使用。
3606	打製石斧	158	99	35	660.1	粗粒安山岩。	短冊型、大型、厚く重量に富む。
3607	打製石斧	85	41	16	74.7	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、全体に磨耗。
3608	打製石斧	75	47	15	64.8	細粒安山岩。	短冊型、頭部欠損。
3609	打製石斧	73	47	15	66.7	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損。
3611	スクレイパー	86	51	15	74.7	黒色頁岩。	縁辺を刃部としている。
3612	石 鏃	19	14	3	0.5	黒耀石。	凹基式、先端部欠損。
3613	石 鏃	14	16	3	0.4	黒耀石。	凹基式、先端部欠損。
3645	石 鏃	25	19	6	2.6	チャート。	三角鏃、一方の脚を欠損。
C区							
3861	打製石斧	130	60	20	199.7	変玄武岩。	短冊型、完存、刃部磨耗。
4242	磨製石斧	72	33	16	72.1	変玄武岩。	定格式、刃部の一部を欠損。
4243	打製石斧	114	69	17	117.8	硬質泥岩。	分銅型、頭部の一部を欠損。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

4244	打製石斧	146	71	19	230.9	硬質泥岩。	分銅型、完存、刃部に使用痕あり。
4245	打製石斧	117	56	11	104.8	緑色片岩。	分銅型、完存。
4246	打製石斧	137	56	13	139.6	硬質泥岩。	短冊型、完存、袢りは2対あり。
4247	打製石斧	95	40	16	77.2	緑色片岩。	短冊型、頭部の一部を欠損。
4248	打製石斧	107	38	15	87.2	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損。
4249	打製石斧	83	43	20	104.5	硬質泥岩。	短冊型、刃部欠損、反り身あり。
4250	打製石斧	86	40	17	77.8	黒色頁岩。	短冊型、刃部欠損。
4251	打製石斧	77	48	19	96.8	黒色頁岩。	短冊型、頭部欠損、反り身あり。
4252	打製石斧	93	49	14	74.4	硬質泥岩（化石含有）。	短冊型、完存。
4253	打製石斧	97	69	18	141.1	砂岩。	撥型、頭部欠損、端部磨耗。
4254	打製石斧	125	49	15	112.5	硬質泥岩。	短冊型、頭部の一部を欠損。
4255	打製石斧	100	50	20	128.6	硬質泥岩。	短冊型、略完存、反り身あり。
4256	打製石斧	90	51	12	67.8	細粒安山岩。	短冊型、頭部欠損、全体に磨耗。
4257	打製石斧	81	46	9	52.0	緑色片岩。	短冊型、略完存、端部磨耗。
4259	打製石斧	93	40	17	70.6	硬質泥岩。	短冊型、略完存、刃部に磨耗。
4261	スクレイパー	102	43	9	34.2	硬質泥岩。	端部を刃部とする。
4263	スクレイパー	112	53	22	112.3	硬質泥岩。	端部を刃部とする。
4264	磨石	92	79	59	603.3	粗粒安山岩。	裏面に強い磨耗痕、側面に敲打痕。
4265	礫石	175	102	28	852.8	緑色片岩。	扁平な円礫を切断、周縁に敲打痕。
4266	礫石	144	58	21	316.6	緑色片岩。	石斧の用途、両側上端に袢りあり。
4267	礫石	166	50	30	453.6	黒色片岩。	上下両端に磨耗痕。
4268	礫石	147	35	29	238.6	雲母石英片岩。	上下両端に磨耗痕。
4269	礫石	130	35	20	132.7	雲母石英片岩。	上下両端に敲打痕。
4270	礫石	125	23	21	86.3	雲母石英片岩。	側面に弱い敲打痕。
4271	礫石	120	27	15	69.9	緑色片岩。	石斧の用途。
4272	礫石	104	16	13	35.9	黒色片岩。	
4273	礫石	95	33	26	118.2	雲母石英片岩。	
4274	磨石	100	72	54	653.8	粗粒安山岩。	表面に磨滅部分あり。

I 縄文時代（表土出土遺物）

4275	多孔石	255	220	148	8690.0	粗粒安山岩。	裏面の平坦面は、台石として使用、敲打痕あり。
4276	多孔石	183	160	55	1920.0	粗粒安山岩。	扁平、分割した側面に刻みがあり、固定して使用か。
D区							
4363	打製石斧	145	51	21	193.3	細粒安山岩。	短冊型、完存、全体に磨耗。
4364	打製石斧	92	51	20	107.2	黒色頁岩。	短冊型、頭部欠損、刃部磨耗。
4365	石 鏃	16	16	4	0.9	黒耀石。	凹基鏃、表面の稜を研磨する。
4366	多孔石	221	158	105	5450.0	粗粒安山岩。	
4367	多孔石	286	138	105	4860.0	粗粒安山岩。	裏の平坦面を台石として使用。
4371	石 鏃	28	18	4	1.2	黒色安山岩。	凹基鏃、完存。
4372	石 鏃	31	13	4	1.4	チャート。	凹基鏃、両脚欠損。
4664	石 鏃	20	20	4	1.3	黒色安山岩。	凹基鏃、先端欠損。
寺前区							
4562	打製石斧	110	71	32	195.4	黒色頁岩。	分銅型、完存、刃部は少し磨耗。
4563	打製石斧	66	50	10	49.4	黒色頁岩。	短冊型、刃部のみ、全体が磨耗している。
4574	打製石斧	113	79	32	307.9	火山礫凝灰岩。	分銅型、完存、両端部磨耗。
4576	打製石斧	126	75	19	212.0	黒色頁岩。	分銅型、頭部欠損。
4577	打製石斧	97	67	31	219.5	砂粒安山岩。	分銅型、完存。
4578	打製石斧	86	58	15	100.1	硬質泥岩。	短冊型、頭部欠損、反り身あり。
4579	打製石斧	107	46	20	120.5	硬質泥岩。	短冊型、完存、端部磨耗。
4580	打製石斧	88	46	16	77.3	硬質泥岩。	短冊型、端部磨耗。
4581	打製石斧	50	46	13	51.0	硬質泥岩。	短冊型、両端部欠損。
4582	石 皿	345	236	75	9850.0	粗粒安山岩。	使用面は馬蹄型、全面と部分の二つの使用方法がある。
4583	凹 石	138	85	53	635.5	粗粒安山岩。	表裏に凹穴と研磨面を持つ。

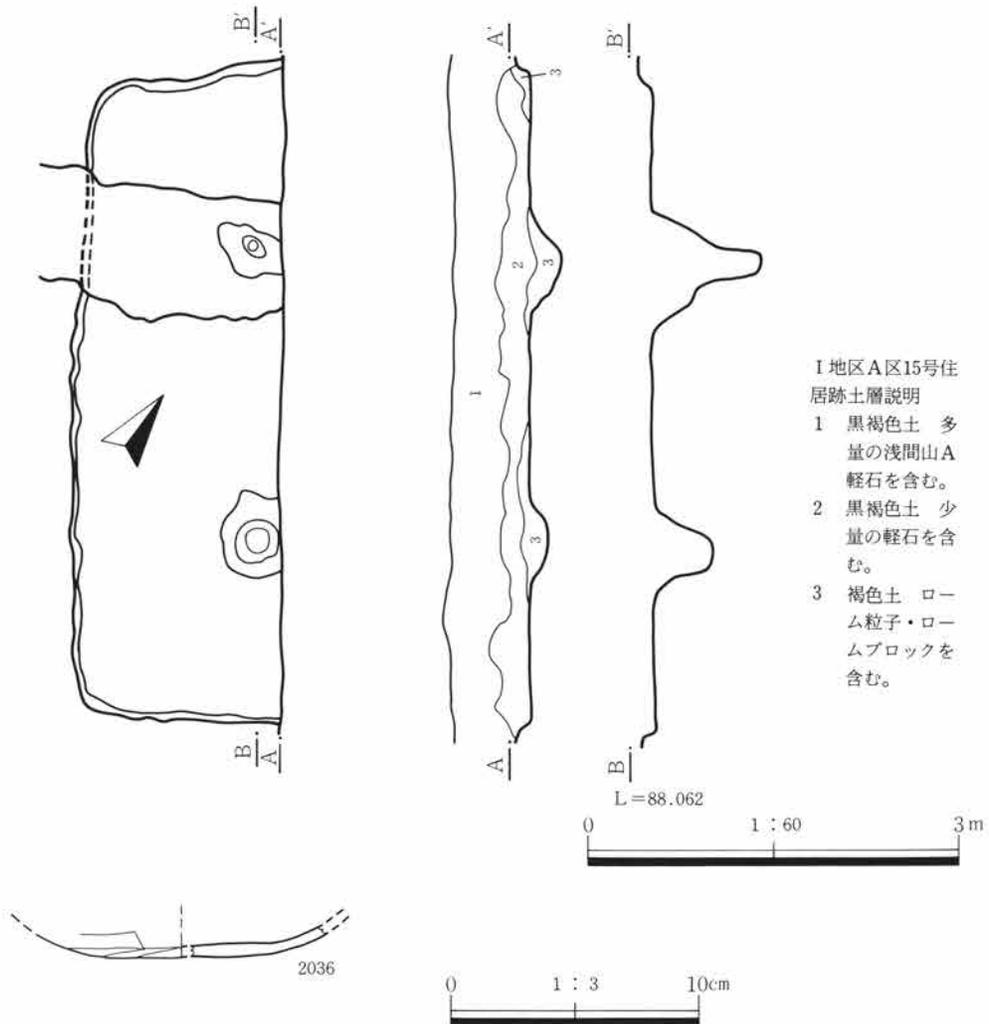
II. 古墳時代

(1) 竪穴住居跡

I 地区 A 区15号住居跡 (第80図、第12表)

当住居跡は、A区1号館跡・A区11号溝跡と重複する。A区1号館跡との新旧関係は、直接的に断定することはできないが、遺物等から当住居跡の方が古い。A区11号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東側部分が調査区域外になるために不明であるが、南北は約5.2mであり、



第80図 I 地区 A 区15号住居跡遺構図遺物区

II 古墳時代（竪穴住居跡）

平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10cmであり、残存状態は悪い。床面は比較的硬く、ほぼ平坦である。主軸は不明である。

竈は、調査区域内からは検出できなかった。支柱穴は、4基と考えられるが、検出できたのは2基である。規模は、径約50～70cm・床面からの深さ約50～80cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形である。調査区域内からは、貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物は、土師器の小片が一片出土しているだけであり、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周囲の遺構との関係から推定する時期は、古墳時代の後期である。（井川）

第 12 表 I 地区A区15号住居跡遺物観察表

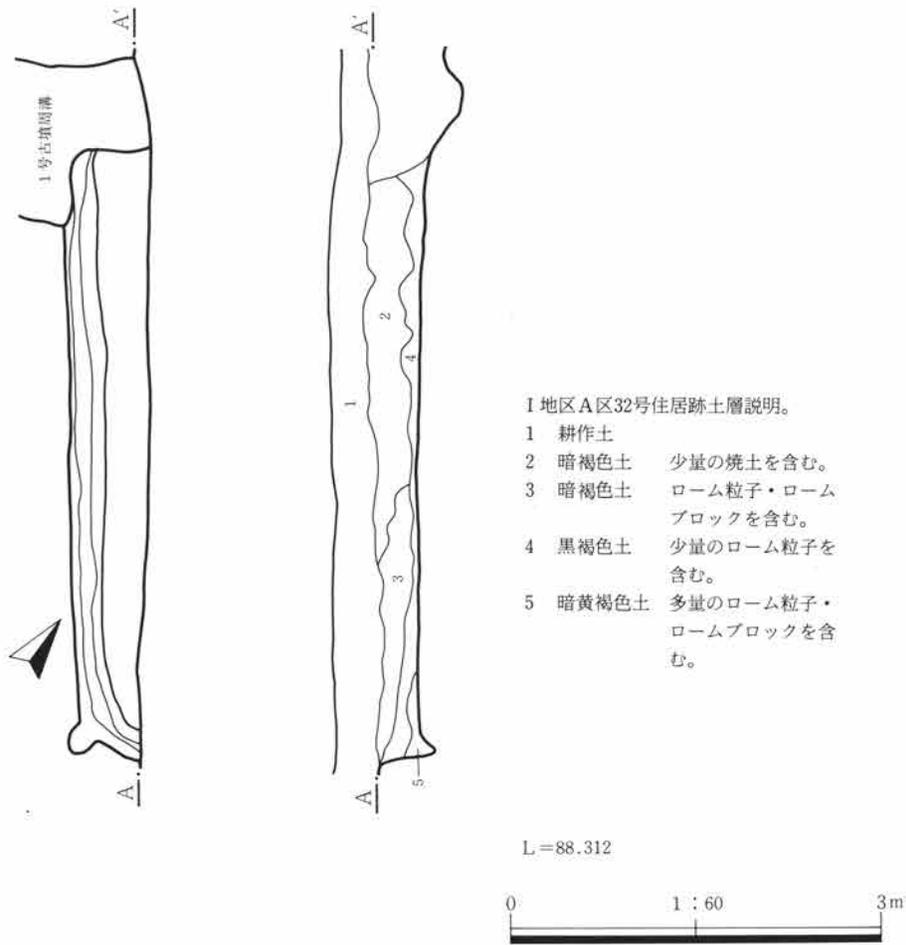
番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
2036	甕? 土 師 器	器 高:(12mm)口 径: 一底径:一底部下端 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3～4mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	外面:体部下半～底部は篋削り。内 面:体部下半～底部はなで。	住居内覆土。

A区32号住居跡（第81図）

当住居跡は、A区1号古墳の墳丘北部分で検出された住居跡である。A区1号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の検出面がA区1号古墳の墳丘下に当たること、同古墳の周溝が当住居跡の北側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の大部分は東側の調査区域外になり、北端部はA区1号古墳の周溝により破壊されているために規模・主軸は不明である。平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定している。確認面からの壁の立ち上がりは約30～40cmであり、床面も比較的堅く、残存状態は良好である。壁・床が確認出来た部分では幅約15～20cm・床面からの深さ約10～15cmの壁溝が確認出来た。炉・柱穴・貯蔵穴は不明である。

遺物はないが、A区1号古墳との関係・覆土の状態・住居跡の形から推定出来る、当住居跡の時期は古墳時代の前期である。（井川）



第81図 I 地区A区32号住居跡遺構図

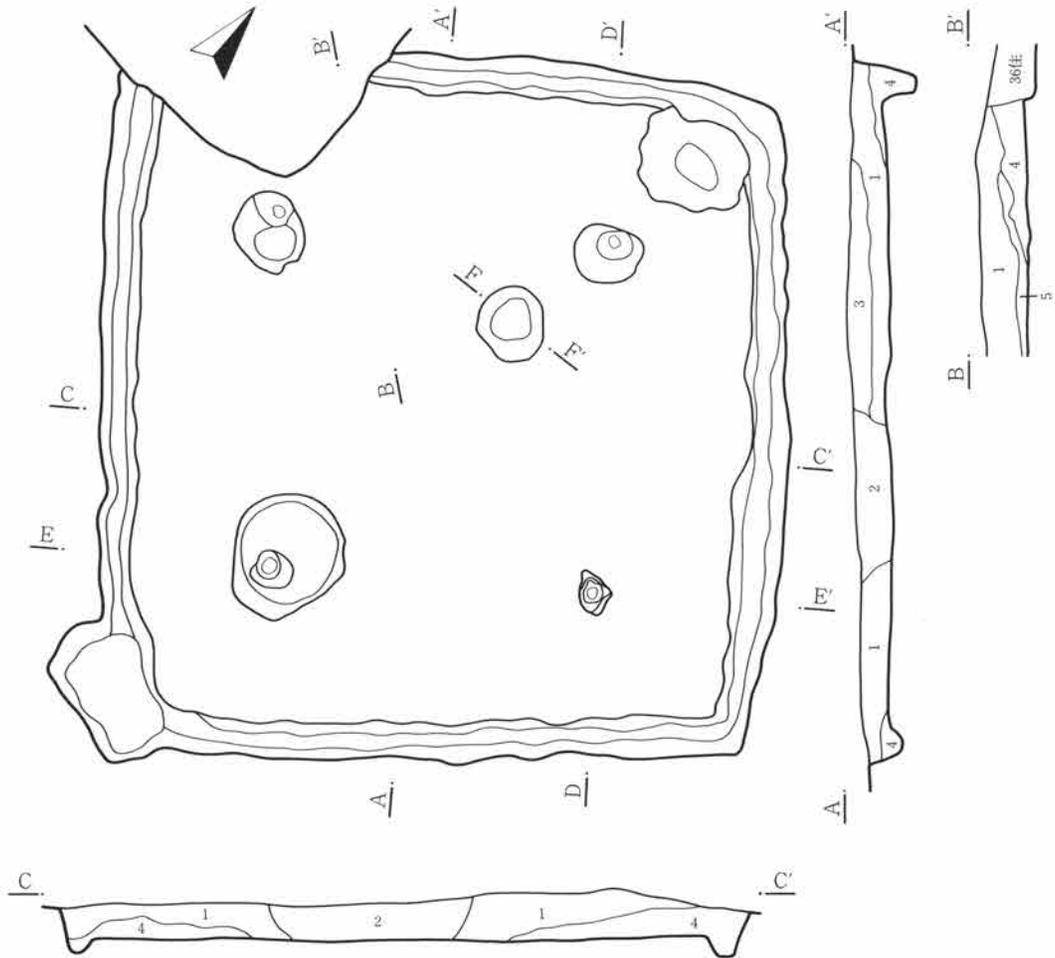
I 地区A区35号住居跡 (第82~85図、第13表、図版14・17)

当住居跡は、36号住居跡・37号住居跡・1号古墳と重複する。36号住居跡との新旧関係は、断面観察による覆土の相違により当住居跡の方が古い。37号住居跡との新旧関係は不明である。1号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面が1号古墳の墳丘下であることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西方向約5.5m・南北方向約5.6mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-40°-Wである。確認面からの壁の立ち上がりは約25~35cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は炉を中心として堅く締まっており、平坦で良好な床である。住居跡南西部隅が広がっているが、外の遺構(土坑)の重複である。壁の内側には、幅約20~30cm・床面からの深さ約10~15cmの壁溝が巡っている。36号住居跡との重複部分については確認できなかったが、全周するものと推定出来る。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

炉は住居内中央部やや北よりに作られている。炉内からは炉石が1個と台付甕が検出でき、厚い焼土が確認できた。支柱穴は4本であり、規模は直径約30~50cm・床面からの深さ約60~105cmを測り、平面形は円形・不整形な円形を呈する。住居内北東部隅からは、貯蔵穴と考えられる土坑が検出できた。穴の規模は南北方向約40cm・東西方向約60cmであり、床面からの深さは約40cmである。平面形は不整形な長方形を呈する。また、貯蔵穴の上面には拳大から人頭大の石が詰まっており、住居跡の廃絶時には使用されていなかったと考えられる。



I 地区A区35号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 やや多量の黒褐色土ブロック・少量のロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 少量の軽石・ローム粒子を含む。
- 3 黒褐色土 少量のロームブロックを含む。
- 4 暗褐色土 少量のロームブロック・ローム粒子を含む。
- 5 黒褐色土 少量の軽石・ローム粒子を含む。

L=88.362

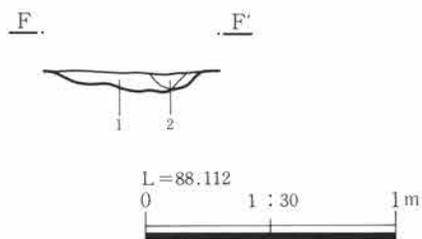
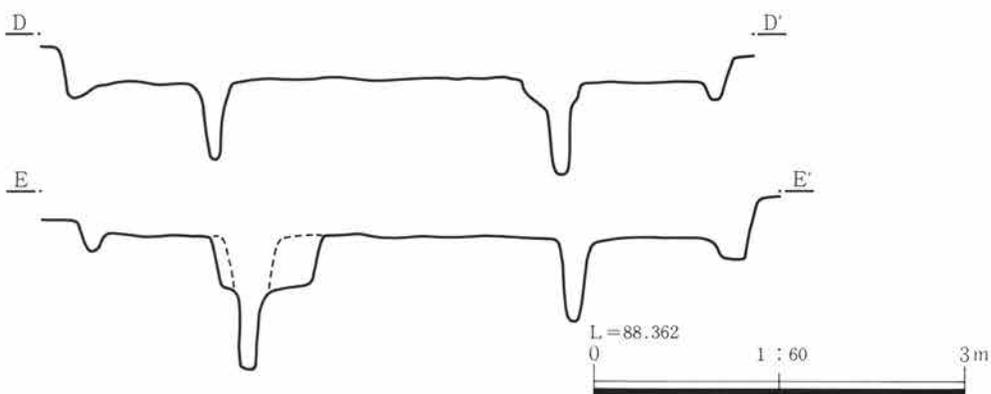
0 1 : 60 3m

第82図 I 地区A区35号住居跡遺構図(1)

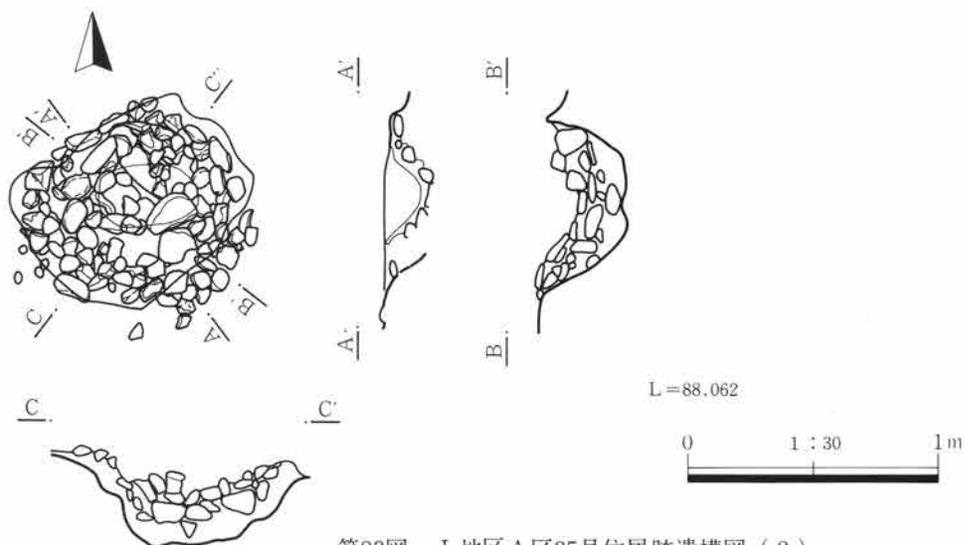
第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

住居内中央部の床面からは、南北方向の、鍵の手に曲がる溝が検出された。溝の規模は、幅約15~30cm・床面からの深さ約15~20cmである。溝の用途等は不明であるが、溝中には拳大の石が詰まっていた。また、住居の掘形は中央部分が高く、周囲が低くなっている。床面で確認された溝は、その高い部分にまで掘り込みが達している。

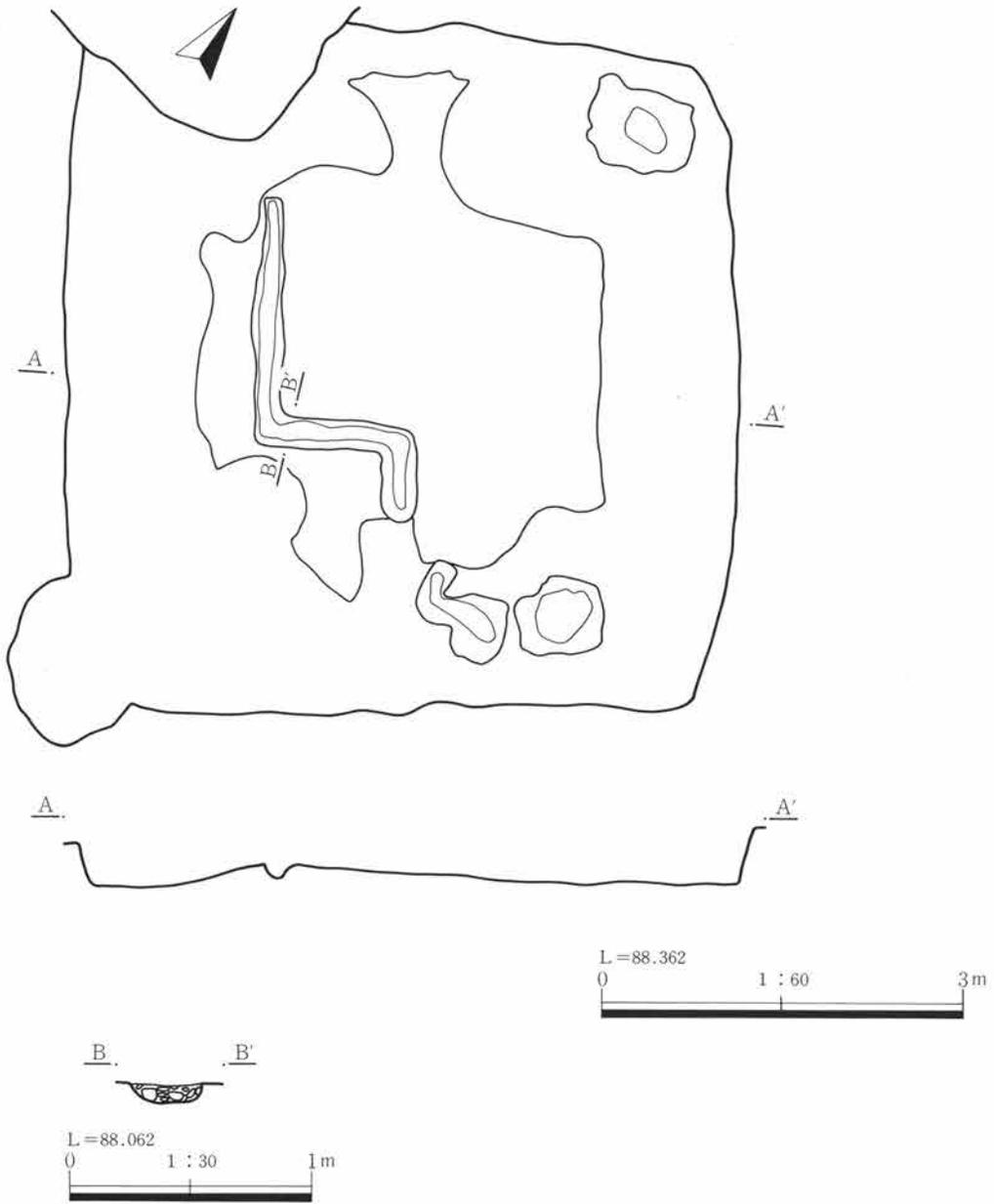
遺物は甕・台付甕・高杯などが出土している。住居の形態・遺物等から推定される当住居跡の時期は、古墳時代前期である。(井川)



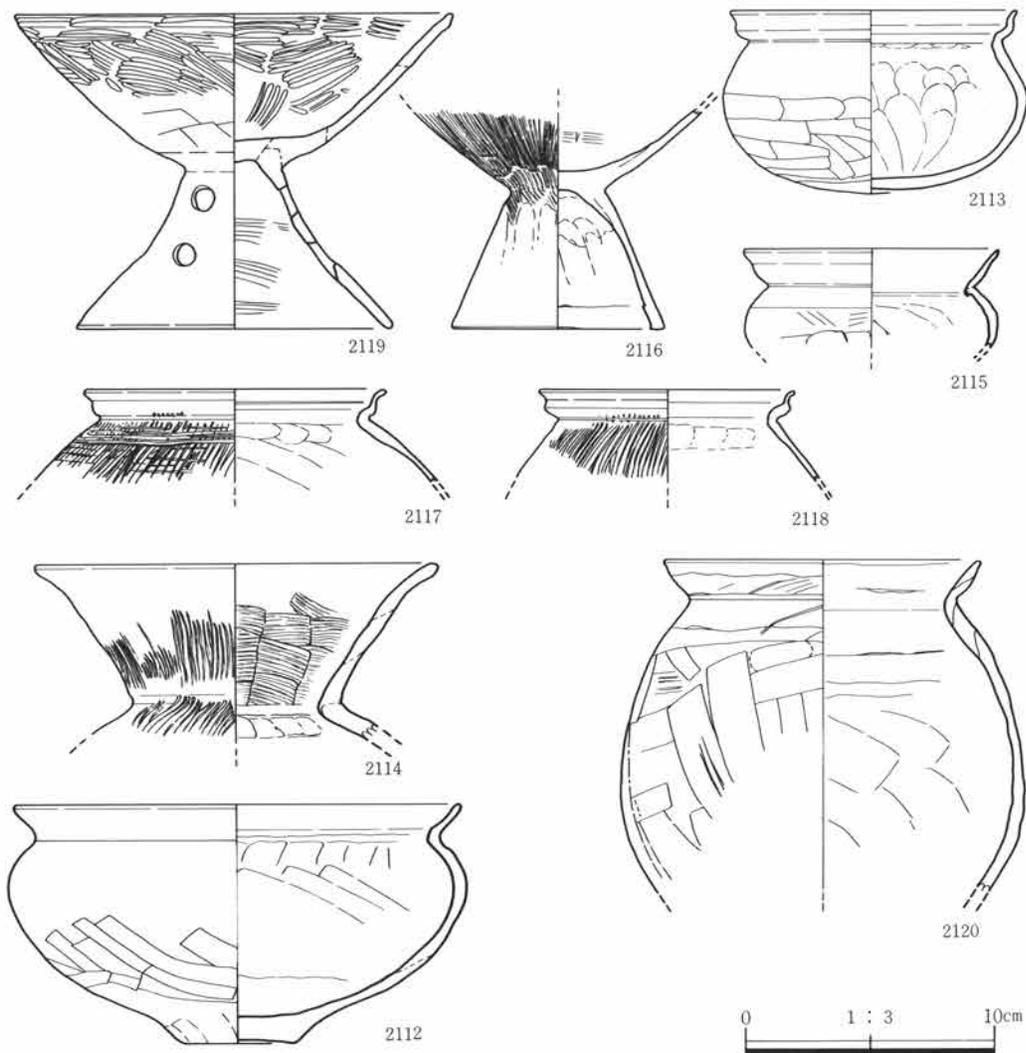
- I地区A区35号住居跡炉土層説明
- 1 焼土・小ロームブロック・暗褐色土の混合。
 - 2 暗褐色土 微量の小ロームブロックを含む。



第83図 I地区A区35号住居跡遺構図(2)



第84図 I地区A区35号住居跡遺構図(3)



第85図 I地区A区35号住居跡遺物図

第13表 I地区A区35号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2112	甕土師器	器高:95mm口径:180mm底径:46mm最大径:184mm口縁部~底部%残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。淡橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで	住居内中央部床直内外面に所以付着
2113	甕土師器	器高:73mm口径:115mm底径:—最大径:123mmほぼ完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。丸底。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部は指なで。	住居内南東部床上10cm。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

2114	壺 土師器	器高:(70mm)口径: [162mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。浅黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁 部は横なで、頸部~体部上端は縦ハ ケ目。内面:口縁部は横なで、頸部は 横ハケ目。	住居内覆土。内面 に油煙付着。
2115	甕 土師器	器高:(39mm)口径: [103mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い褐。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁 部は横なで、体部上半はなで、体部下 半は篋削り。内面:口縁部~体部はな で。	住居内中央部床直 内外面に油煙付着
2116	台付甕 土師器	器高:(88mm)口径: 一底径:[86mm]体部 下端~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い褐。	脚端部は折返し。外面:体部~脚部上 半はハケ目。内面:体部は篋なで、脚 部はなで。	住居内中央部床直 内外面に油煙付着
2117	台付甕 土師器	器高:(36mm)口径: [122mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部はクシ目。内面:口縁部は 横なで、体部はなで。	住居内中央部床直 内外面に油煙付着
2118	台付甕 土師器	器高:(35mm)口径: [102mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い黄褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部はクシ目。内面:口縁部は 横なで、体部はなで。	住居内覆土。内外 面に油煙付着。
2119	高杯 土師器	器高:125mm口径: [176mm]底径:127mm 口縁部~脚部 $\frac{2}{3}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	体部~底部は直線的に広がる。脚部 に円形の透孔が縦に並んで2個、3 列、計6個あり。外面:口縁部~体部 上半は篋磨き、体部下半は篋削り、脚 部はなで。内面:口縁部~体部は篋 磨き、底部はなで、脚部はハケなで。	住居内中央部床直
2120	甕 土師器	器高:(130mm)口径: [128mm]底径:一最大 径:[167mm]口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。黄褐。	口縁部は「く」字状に外湾。内面に輪 積み痕が顕著に残る。外面:口縁部は 横なで、体部は篋なで。内面:口縁部 は横なで、体部は篋なで。	住居内中央部床直 内外面に多量の油 煙付着。

I 地区A区36号住居跡（第86~88図、第14表、図版15）

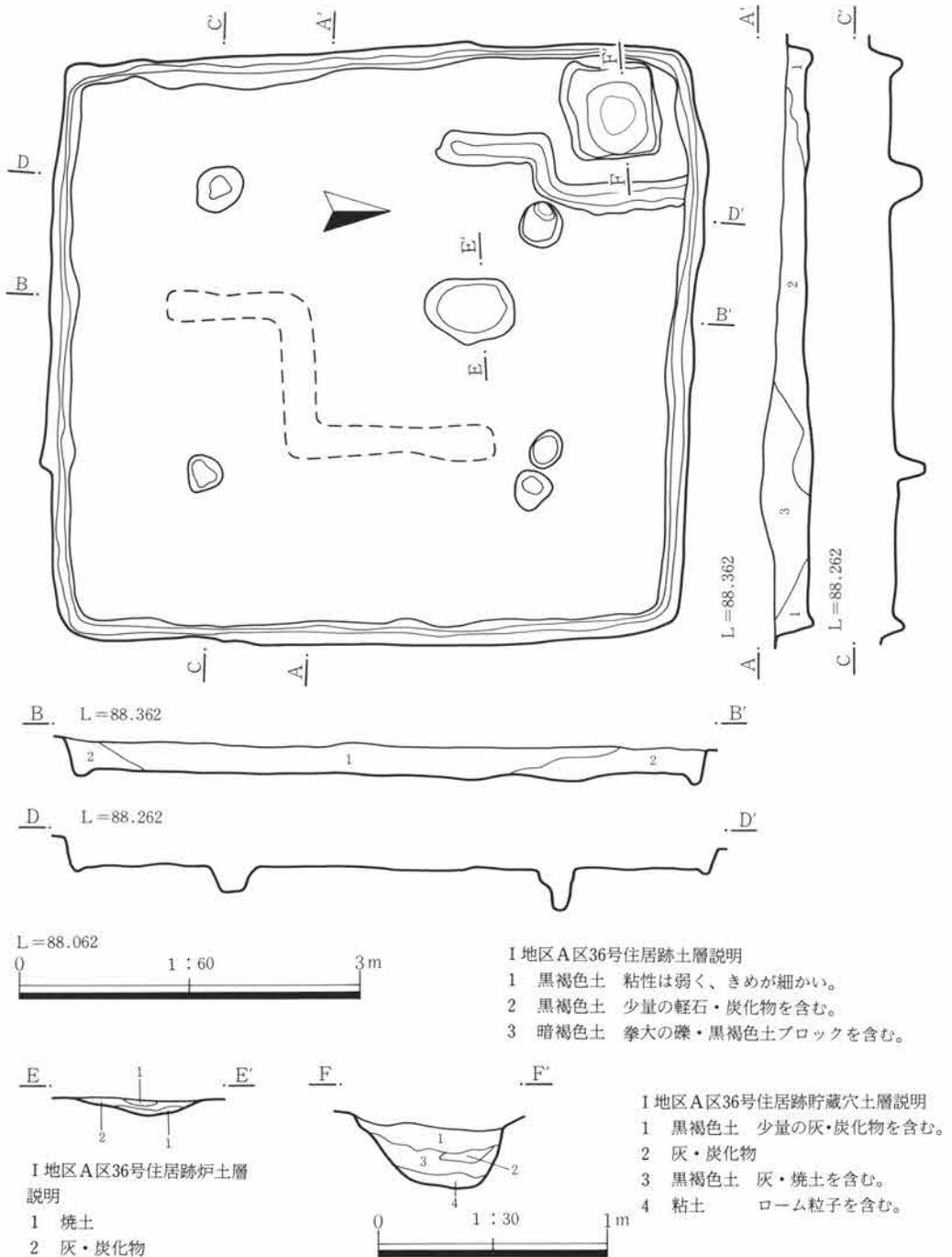
当住居跡は、A区35号住居跡・A区38号住居跡・A区39号住居跡・A区1号古墳と重複する。A区35号住居跡・A区39号住居跡との新旧関係は重複部分の当住居跡の壁・床の状態、覆土の相違等により、当住居跡の方が新しい。A区38号住居跡との新旧関係は不明である。A区1号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がA区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西方向約5.1m・南北方向約5.6mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-1°-Wである。確認面からの壁の立ち上がりは約20~35cmであり、残存状態は比較的良好である。床は比較的古く、ほぼ平坦である。壁の内側には、幅約15~30cm・床面からの深さ約10cmの壁溝が巡っている。壁溝は、住居跡全体を巡っている。

炉は住居内中央部やや北よりに築かれている。炉は良好な状態で検出された。囲いの石は抜かれていたが、焼土・炭化物・灰の層は確認できた。主柱穴は4本である。柱穴の規模は直径約30~40

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

cm・床面からの深さ約20~30cmであり、平面形は円形・不整形な円形を呈する。貯蔵穴は、住居内北西部隅に築かれている。貯蔵穴の規模は、一辺約80cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は上面が方形、中段が楕円形を呈する。



第86図 I 地区A区36号住居跡遺構図(1)

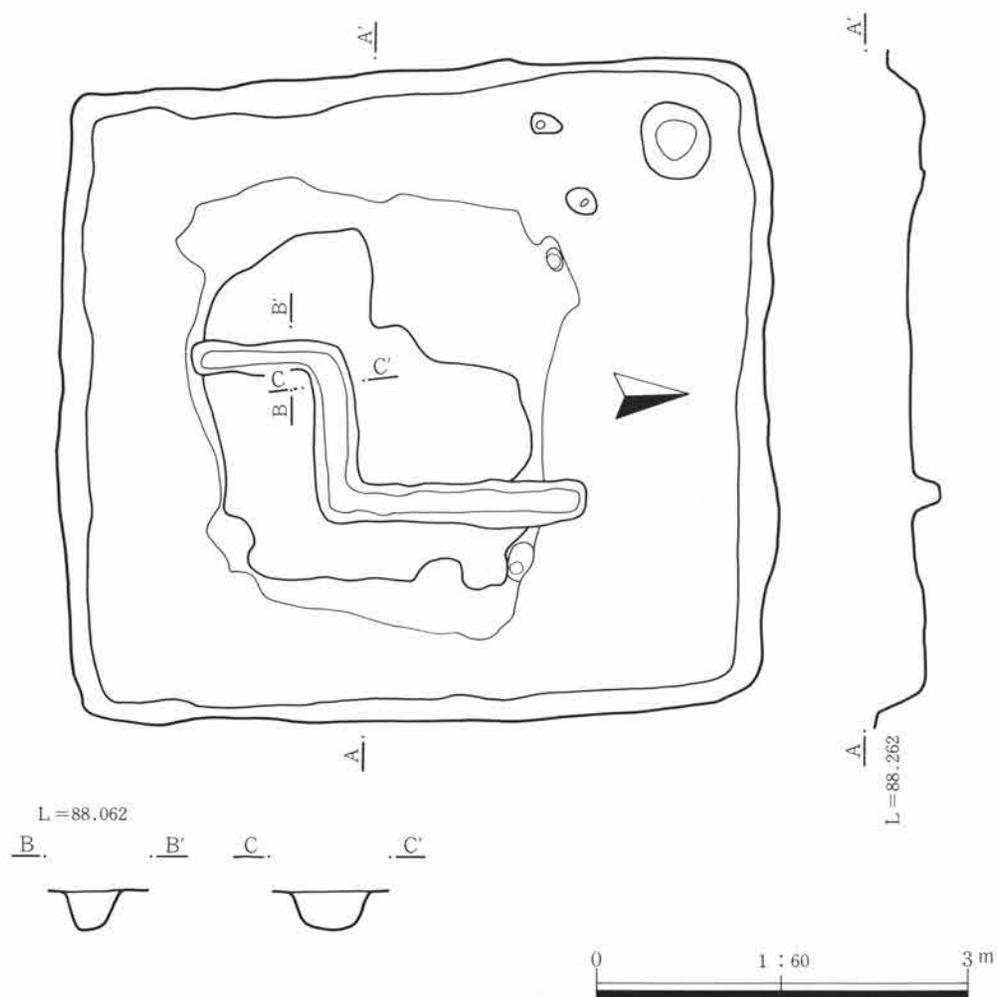
II 古墳時代（竪穴住居跡）

住居内中央部・貯蔵穴の周辺からは、それぞれ鍵の手に曲がる溝が検出された。貯蔵穴周辺の溝は、全長が約2.3mであり、一端は北側壁の壁溝に接続している。溝の規模は幅約20～25cmであり、床面からの深さは約5cmと浅い。間仕切りの可能性が考えられる。住居内中央部の溝は、全長約2.8mであり、規模は幅20～35cm・床面からの深さ約15cmである。溝内には拳大から人頭大の石が詰まっており、住居廃絶時には埋まっていたものと考えられる。

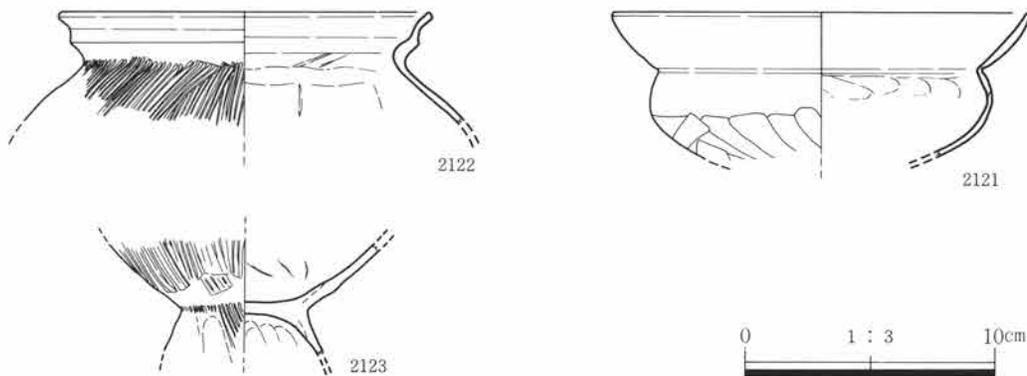
当住居跡の掘形は中央部が高く、周囲が低く掘り込まれている。住居内中央部の溝は掘形まで達しているが、貯蔵穴周辺の溝は掘形では確認できなかった。

遺物は非常に少ないが、「S」字状口縁を持つ台付甕や土師器の鉢が出土している。遺物・住居跡の形態・他の遺構との切り合い関係等から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。

(井川)



第87図 I地区A区36号住居跡遺構図(2)



第88図 I地区A区36号住居跡遺物図

第14表 I地区A区36号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2121	鉢 土師器	器高:(58mm)口径: [168mm]底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部下半は寛削り。内面:口縁部は横なで、体部は指なで。	住居内北西部床直内外面に油煙付着
2122	台付 土師器	器高:(43mm)口径: [150mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質灰白。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部はハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南東部床直外面に油煙付着。
2123	台付 土師器	器高:(45mm)口径: 一底径:一体部下半 ~脚部上半残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	外面:体部下半~脚部上半はハケ目。内面:体部下半~底部は寛なで。	住居内南東部床直内外面に油煙付着

I地区A区37号住居跡(第89図)

当住居跡は、A区35号住居跡・A区1号古墳と重複する。A区35号住居跡との新旧関係は不明である。A区1号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がA区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

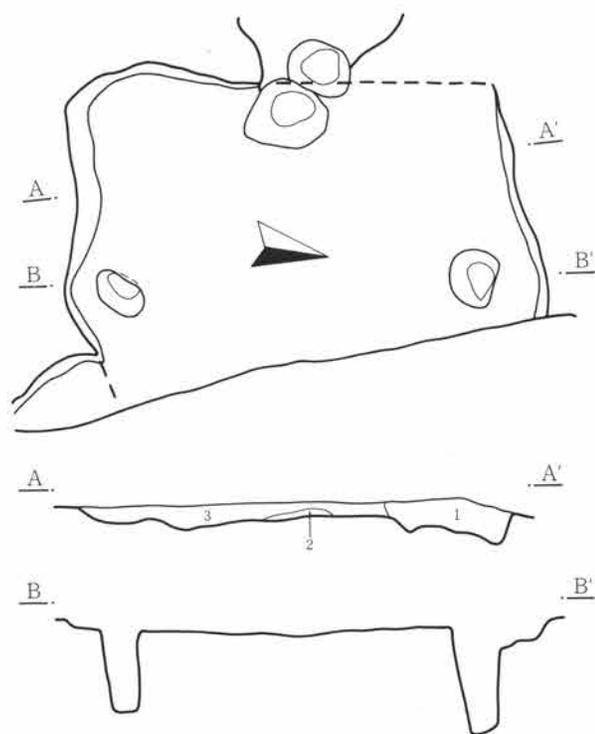
当住居跡の規模は、東側部分が新幹線路線外であり、未調査であるが、南北方向は約3.5mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。主軸は不明である。確認面からの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は軟弱であり、やや凹凸が多い。

炉・貯蔵穴等は不明である。南側・北側・西側それぞれの壁際に3基のピットを検出できた。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

ピットの規模は、直径約30～50cm・床面からの深さは約40～80cmを測り、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。柱穴の可能性も考えられるが、位置的には不自然な面が残る。遺物はなく、当住居跡の時期の断定はできないが、A区1号古墳との関係から、古墳時代前期以前の遺構であり、更に、周囲の状態から類推して、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

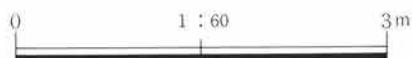
(井川)



I 地区A区37号住居跡土層説明

- 1 黄褐色土 多量のローム粒子・少量の黒褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 ロームと暗褐色土の混合

L=88.462



第89図 I 地区A区37号住居跡遺構図

I 地区A区38号住居跡（第90～92図、第15表）

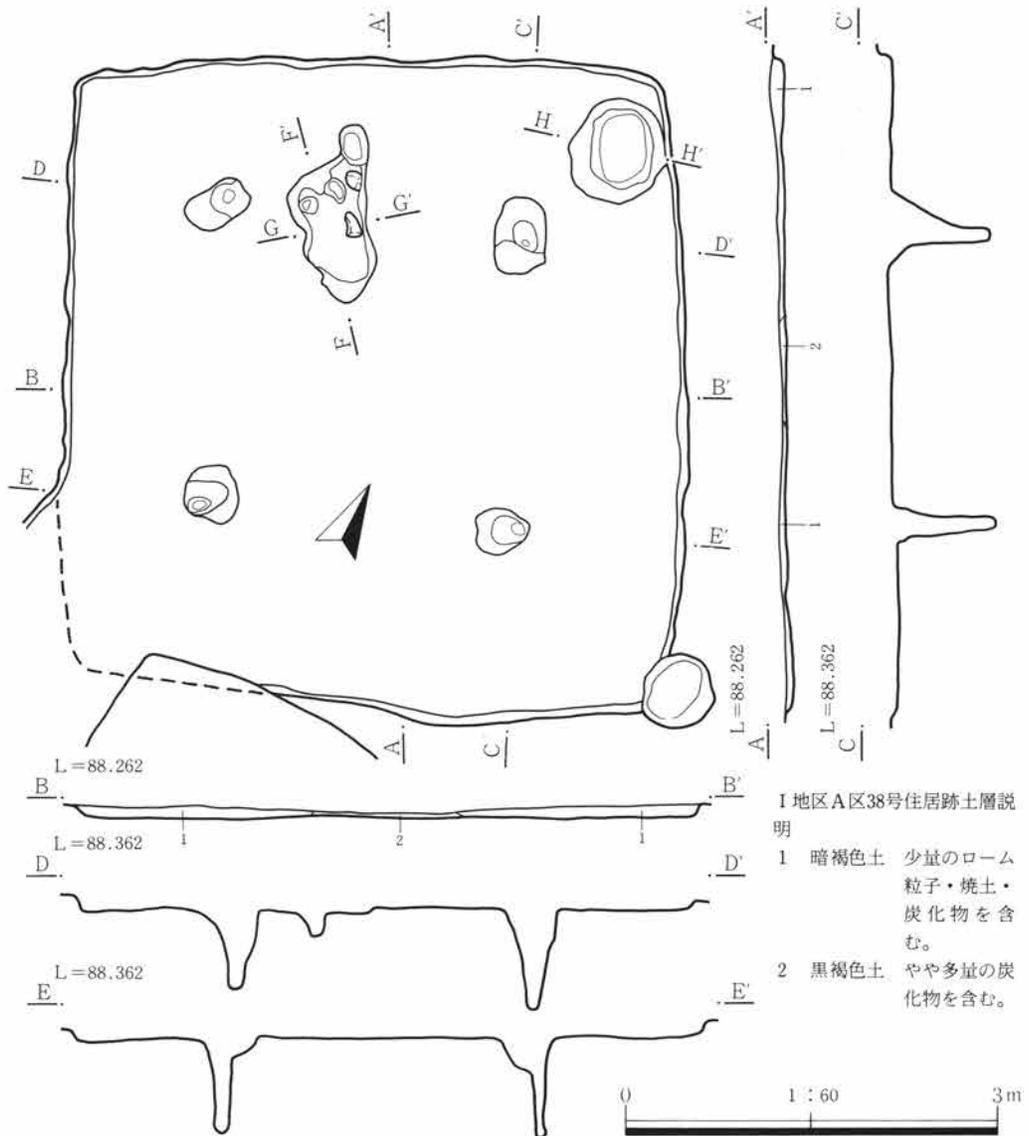
当住居跡は、A区36号住居跡・A区39号住居跡・A区1号古墳と重複する。A区36号住居跡との新旧関係は、不明である。A区39号住居跡との新旧関係は、当住居跡の壁・床がA区39号住居跡の覆土中に構築されていることから、当住居跡の方が新しい。A区1号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がA区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西方向約4.9m・南北方向約5.2mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-28°-Wである。確認面からの壁の立ち上がりは約10～15cmであり、残存状態は不良である。床面はA区39号住居跡との重複部分がやや軟弱であるが、比較的堅く良好な床面であり、ほぼ平坦である。壁溝は確認できなかった。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

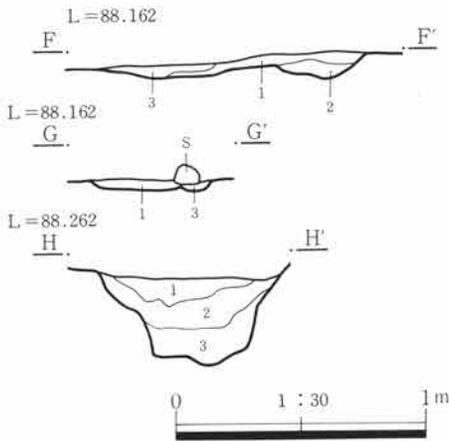
炉は北側柱穴の中間やや中央寄りに築かれている。炉を囲む石は、一個残されていたが他は抜かれていた。炉内の焼土の厚さは約3cmである。主柱穴は4本である。柱穴の規模は直径約30～40cm・床面からの深さ約60～80cmを測り、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は住居内北東部隅に築かれている。規模は長軸約80cm・短軸約70cm・床面からの深さ約35cmであり、平面形は楕円形を呈する。貯蔵穴内北側部分には、拳大から人頭大の河原石が入っていた。

遺物の出土量は非常に少ないが、「S」字状を持つ台付甕が出土している。出土遺物・他の遺構との重複関係から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。 (井川)



第90図 I 地区A区38号住居跡遺構図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



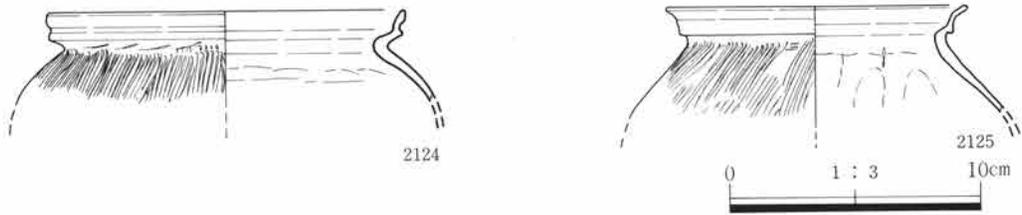
I 地区A区38号住居跡炉土層説明

- 1 暗褐色土 多量のローム粒子・少量の焼土を含む。
- 2 灰・焼土
- 3 暗褐色土 多量の焼土・灰を含む。

I 地区A区38号住居跡貯蔵穴土層説明

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物を含む。
- 2 焼土・炭化物
- 3 暗褐色土 多量のロームブロックを含む。

第91図 I 地区38号住居跡遺構図（2）



第92図 I 地区A区38号住居跡遺物図

第 15 表 I 地区A区38号住居跡遺物観察表

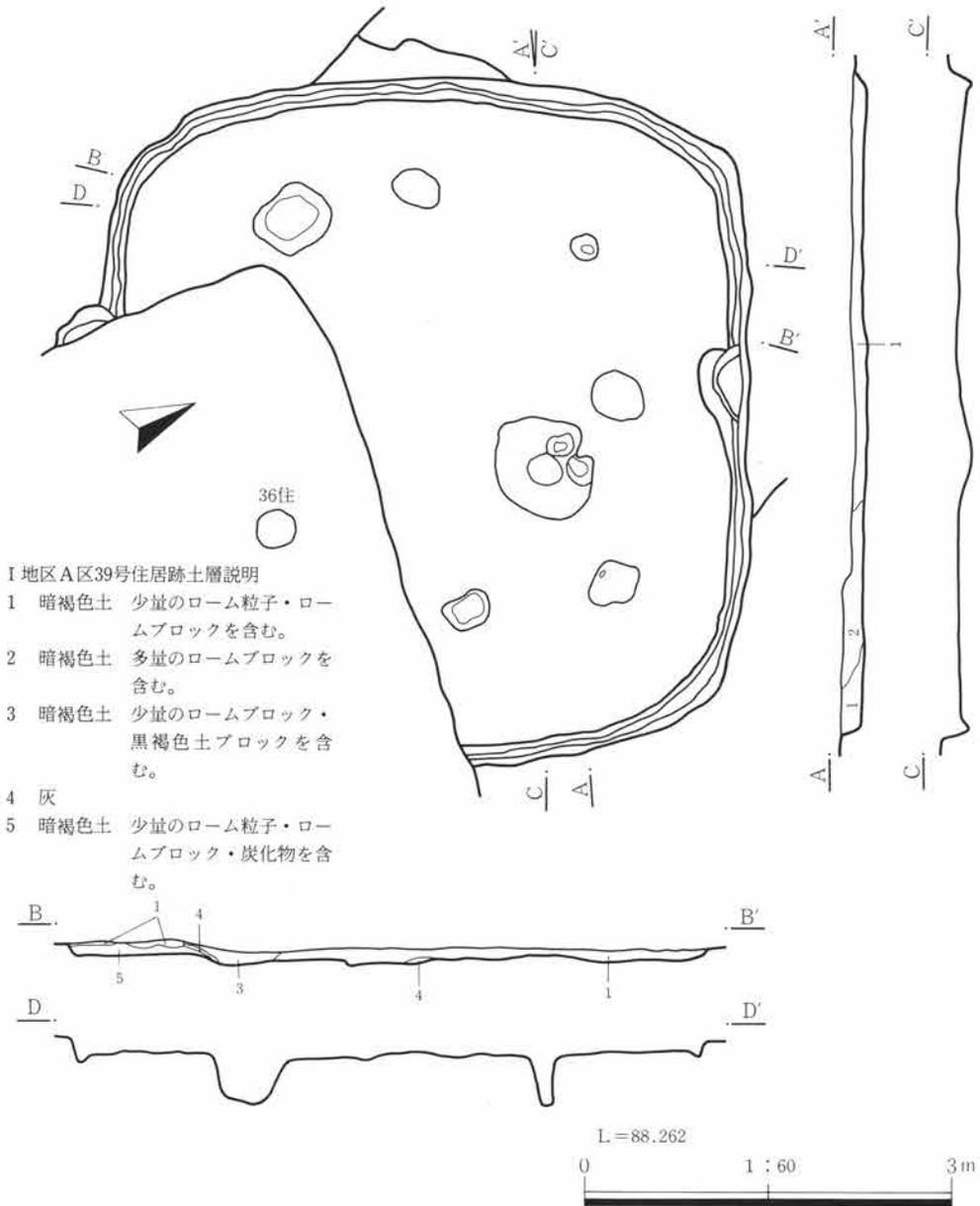
番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
2124	台付壺 土 師 器	器高:(36mm)口径: [144mm]底径:一口縁 部~体部上半残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。褐灰。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部はハケ目。内面:口縁部は 横なで、体部はなで。	住居内北西隅床直 内外面に油煙附着
2125	台付壺 土 師 器	器高:(42mm)口径: [120mm]底径:一口縁 部~体部上半残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部はハケ目。内面:口縁部は 横なで、体部はなで。	貯蔵穴内。外面に 油煙附着。

I 地区A区39号住居跡（第93・94図、第16表）

当住居跡は、A区36号住居跡・A区38号住居跡・A区1号古墳と重複する。A区36号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。A区38号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南側部分の壁・床が当住居跡の覆土中に築かれていることから、当住居跡の方が古い。A区1号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面が

同古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、南東部分がA区36号住居跡に破壊されているが、東西方向約5.4m・南北方向約5.2mであり、平面形は胴の張った隅丸方形を呈する。主軸はN-22°-Eである。確認面からの壁の立ち上がりは約5~15cmであり、残存状態は不良である。床面は比較的堅く良好であるが、



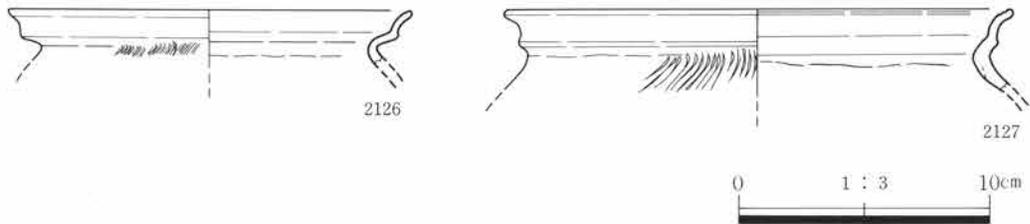
第93図 I 地区A区39号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）

南東部分はA区36号住居跡に破壊されている。壁の内側には壁溝が巡っている。A区36号住居跡に破壊されている部分は不明であるが、全周するものと考えられる。溝の規模は、幅約20～30cm・床面からの深さ約5～10cmである。

炉は北側柱穴の中間やや中央寄りに築かれている。炉を囲む石等は検出できなかったが、焼土は確認できた。支柱穴は4本である。柱穴の規模は直径20～50cm・床面からの深さ約30～40cmであり、平面形は不整形な円形・不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は不明である。

遺物の出土量は非常に少ないが、「S」字状口縁を持つ台付甕が出土している。出土遺物・他の遺構との重複関係から推定される当住居跡の時期は、古墳時代前期である。（井川）



第94図 I地区A区39号住居跡遺物区

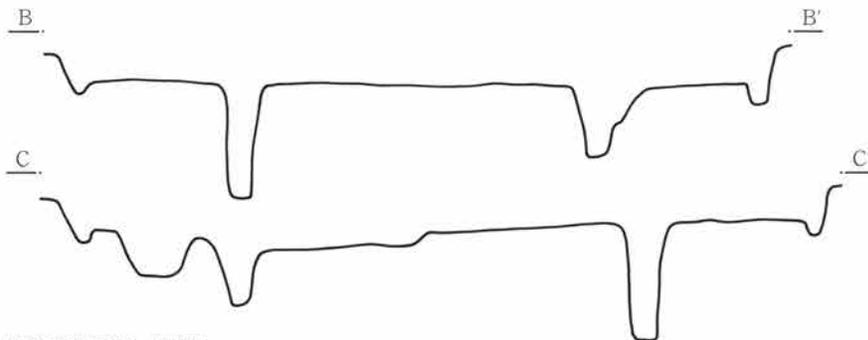
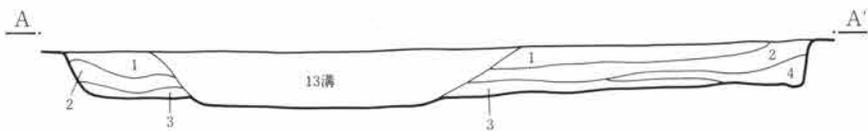
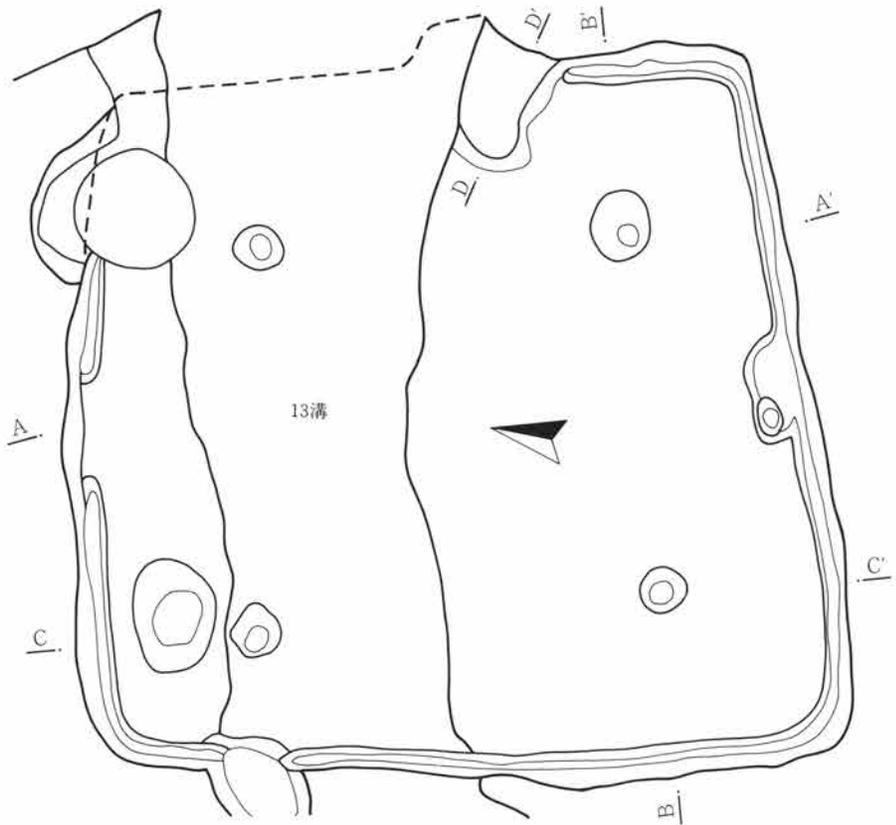
第16表 I地区A区39号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2126	台付甕 土師器	器高:(21mm)口径: [162mm]底径:一口縁部 ~体部上端 ^{1/2} 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質褐色。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端はクシ目。内面:口縁部は横なで。	住居内南東部床直内外面に油煙付着
2127	台付甕 土師器	器高:(32mm)口径: [204mm]底径:一口縁部 ~体部上端一部残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質灰白。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端はクシ目。内面:口縁部は横なで。	住居内覆土。

I地区A区47号住居跡（第95～100図、第17・18表、図版16・17）

当住居跡は、A区13号溝跡と重複する。新旧関係は、A区13号溝跡が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、ほぼ東西方向に走るA区13号溝跡に破壊されている部分があるが、東西方向は約5.8m・南北方向は約6.0mであり、ややいびつな平面形は隅丸方形を呈する。軸はN-13°-Wである。確認面からの壁の立ち上がりは、約20～30cmであり、比較的良好である。床は比較的良好であるが、北側部分はA区13号溝跡に破壊されている。壁の内側には、壁溝が巡っている。壁溝の規模は、幅約15～20cmであり、床面からの深さは約5～10cmである。A区13号溝



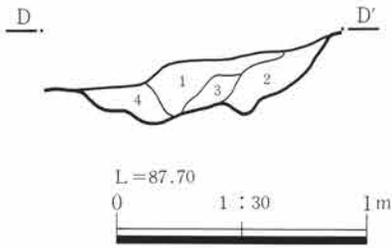
I 地区A区47号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 少量の焼土粒子を含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3 褐色土 やや多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
- 4 褐色土 ローム粒子を含む。



第95図 I 地区A区47号住居跡遺構図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



I 地区A区47号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- 2 褐色土 やや多量のローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 3 明褐色土 多量のローム粒子・焼土を含む。
- 4 褐色土 少量のローム粒子及び多量の焼土・炭化物を含む。

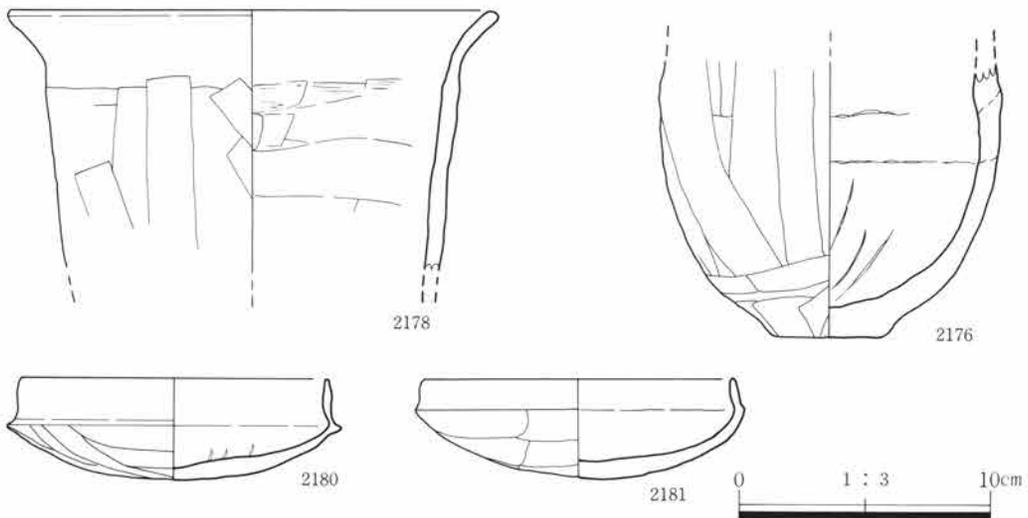
第96図 I 地区A区47号住居跡遺構図（2）

跡に破壊されている部分があるが、竈部分を除きほぼ全周するものと推定される。

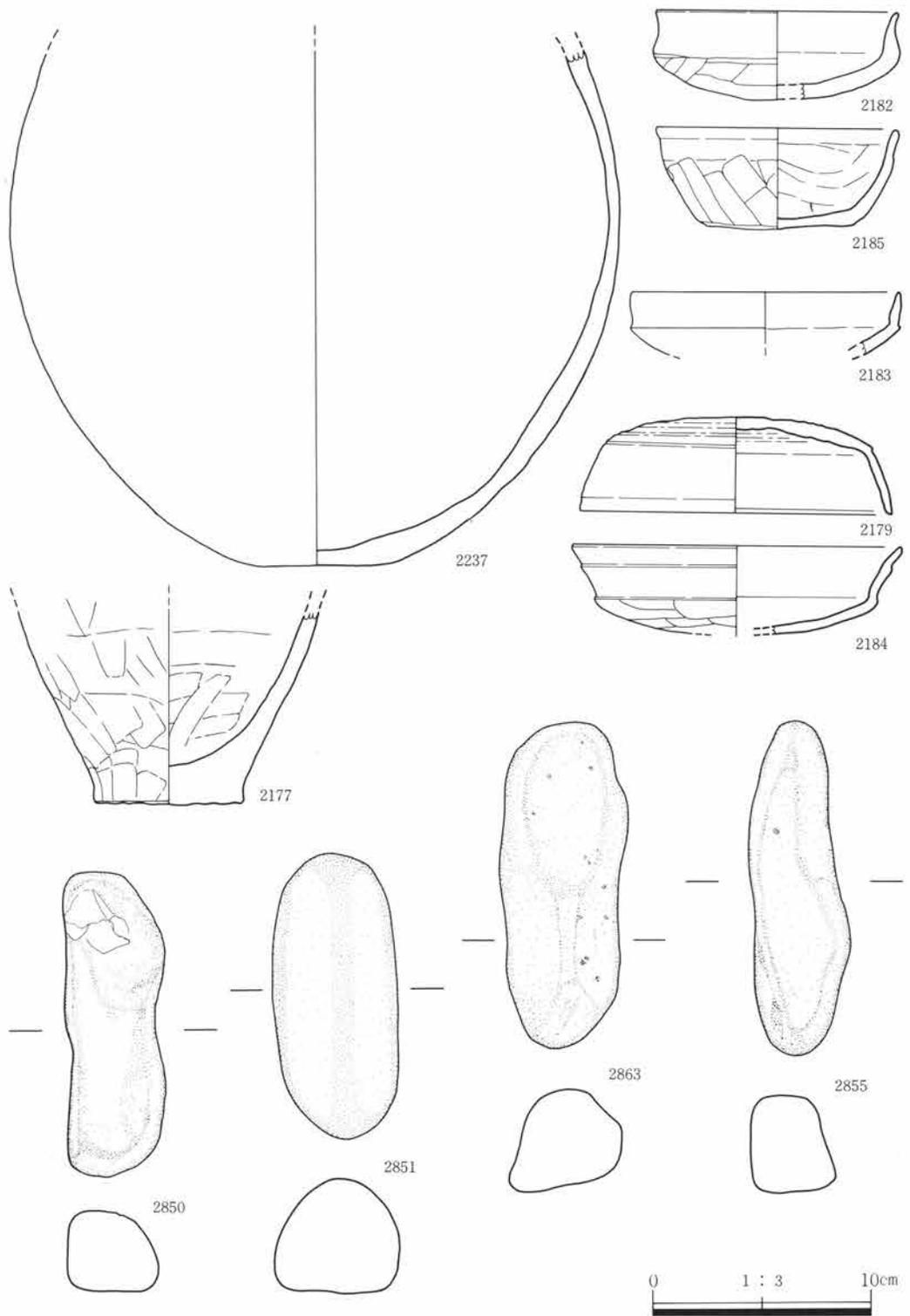
竈は東側壁のほぼ中央部に築かれているが、A区13号溝跡に破壊されており、右側の一部のみが確認できた。袖はほとんど破壊されており、焼土・炭化物の堆積が確認できた。主柱穴は4本である。柱穴の規模は、直径約35～50cm・床面からの深さ約50～90cmであり、平面形は不整形な円形ないし不整形な楕円形を呈する。住居内北西部隅に、住居内土坑が検出できた。規模は長軸約90cm・短軸約70cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。

遺物は住居内全体に散って出土し、土師器の甕・杯・その他、薦編み石と考えられる小石が16個西側壁の中央部脇から出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期6世後半～7世紀前半である。

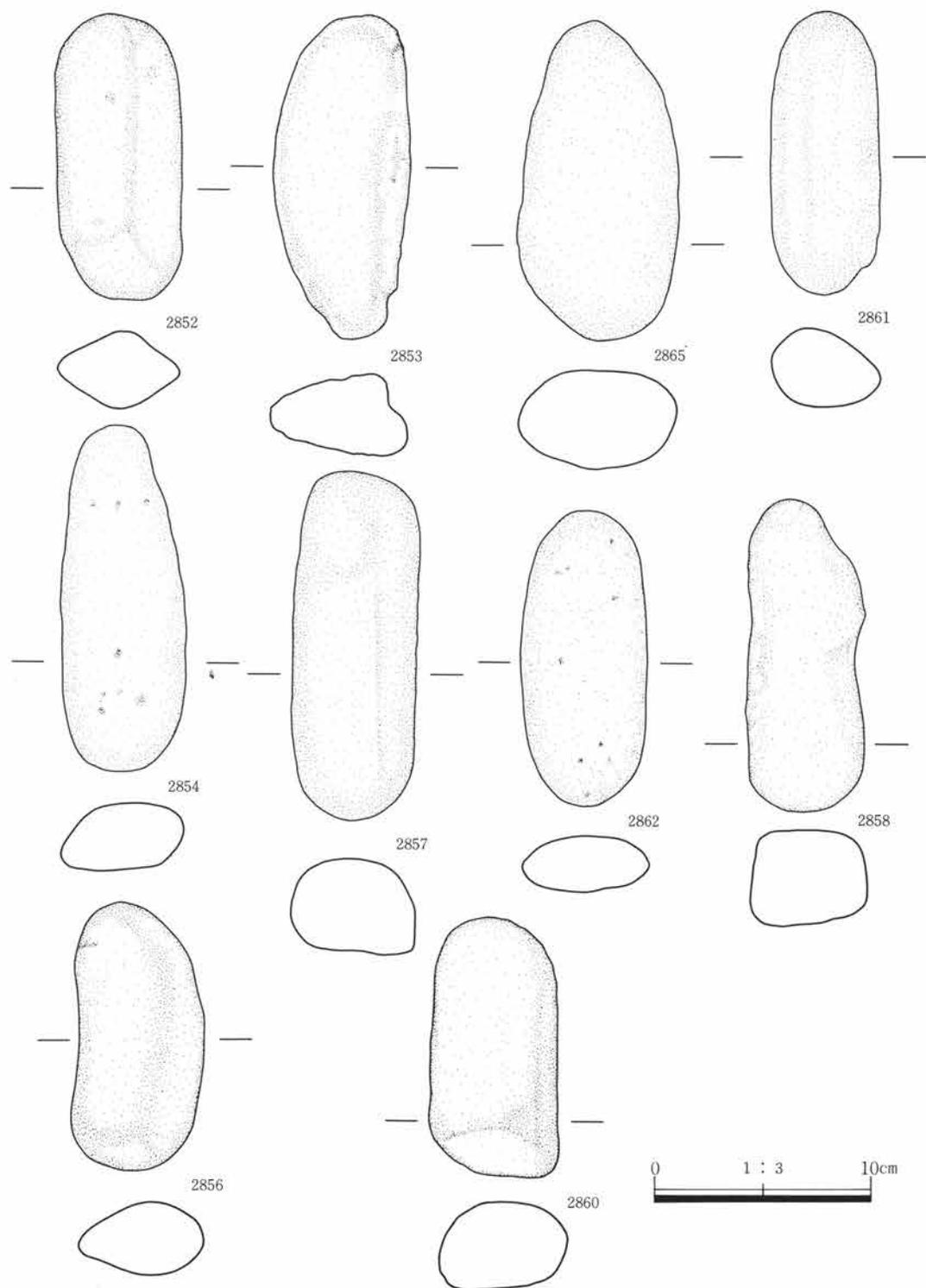
（井川）



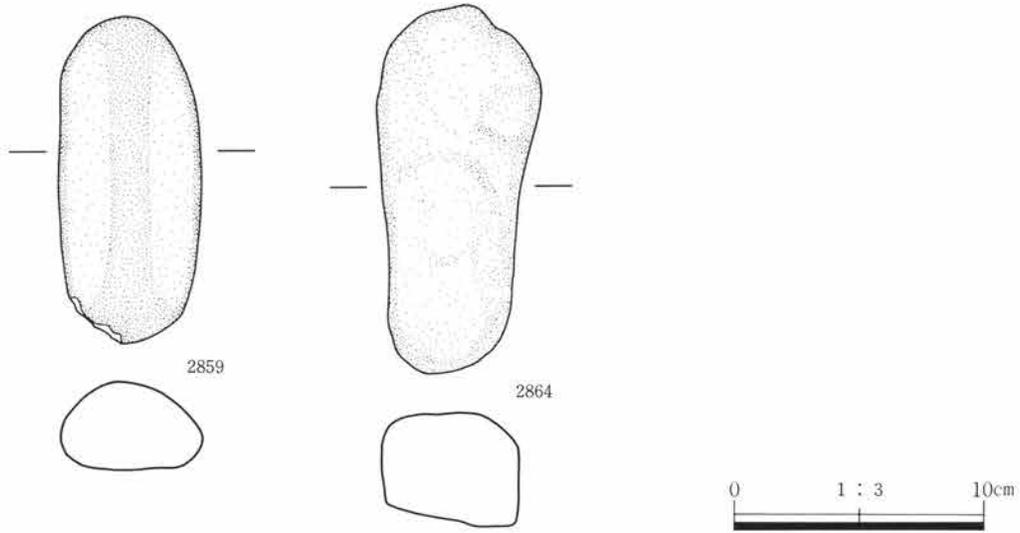
第97図 I 地区A区47号住居跡遺物図（1）



第98図 I地区A区47号住居跡遺物図(2)



第99図 I地区A区47号住居跡遺物図(3)



第100図 I地区A区47号住居跡遺物図(4)

第17表 I地区A区47号住居跡遺物観察表

番号	器器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2176	甕 土師器	器高:(110mm)底径: 一口径:45mm体部下 半~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径4~5mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い赤褐。	体部の立ち上がりは円みを持つ。外 面:体部下半は篋削り。内面:体部下 半~底部は篋なで。	南東柱穴脇。床直。 内外面に油煙附着
2177	甕 土師器	器高:(88mm)口径: 一底径:68mm体部下 半~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質。 明黄褐。	体部の立ち上がりは直線的。内外面 共に体部下半~底部は篋なで。	住居内覆土。
2178	甕 土師器	器高:(104mm)口径: [196mm]底径一口縁 部~下半部残	砂粒を含む。酸化。硬質。 鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁 部は横なで、体部上半は篋削り。内 面:口縁部は横なで、体部上半は篋な で。	南東部柱穴脇床直 内外面に油煙附着
2179	蓋 須恵器	器高:44mm口径:144 mm天井部~口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。還元。硬質。 浅黄橙、外面は黒。	肩部に沈線一条。外面:天井部は回転 篋削り、口縁部は横なで。内面:轆轤 整形、口縁部は横なで。	住居内中央部床上 10cm。
2180	杯 土師器	器高:41mm口径:[124 mm]底径一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。明黄褐。	外面に顕著な稜を持つ。外面:口縁部 は横なで、体部~底部は篋削り。内 面:口縁部は横なで、底部は篋なで。	住居内南東部竈右 袖脇床直。内外面 に油煙附着。
2181	杯 土師器	器高:40mm口径:125 mm底径一	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。明黄褐。淡橙。	外面に稜を持つ。外面:口縁部は横な で、体部~底部は篋削り。内面:口縁 部~体部は横なで、底部はなで。	床下。
2182	杯 土師器	器高:(40mm)口径: [110mm]底径一口縁 部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質。 鈍い黄橙。	外面に稜を持つ。外面:口縁部は横な で、体部~底部は篋削り。内面:口縁 部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南東部床上 20cm。内外面に油 煙附着。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

2183	杯 土師器	器高(28mm)口径[125mm]底径-口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	外面に稜を持つ。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内床下。
2184	杯 土師器	器高:(40mm)口径:[152mm]底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質。赤褐。	外面に二段の稜を持つ。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	住居内覆土。外面に油煙付着。
2185	椀 土師器	器高:46mm口径:110mm底径:71mmほぼ完形	直径4~5mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質鈍い橙。	平底。口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。	住居内中央部床上10cm。内外面に油煙付着。
2237	甕 土師器	器高:(235mm)口径:一底径:58mm体部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径4~5mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。暗灰黄	体部は緩やかな円みを持つ。技法は剥落が激しく観察不能。	住居内北西部床直

第 18 表 I 地区 A 区 47 号住居跡石器観察表

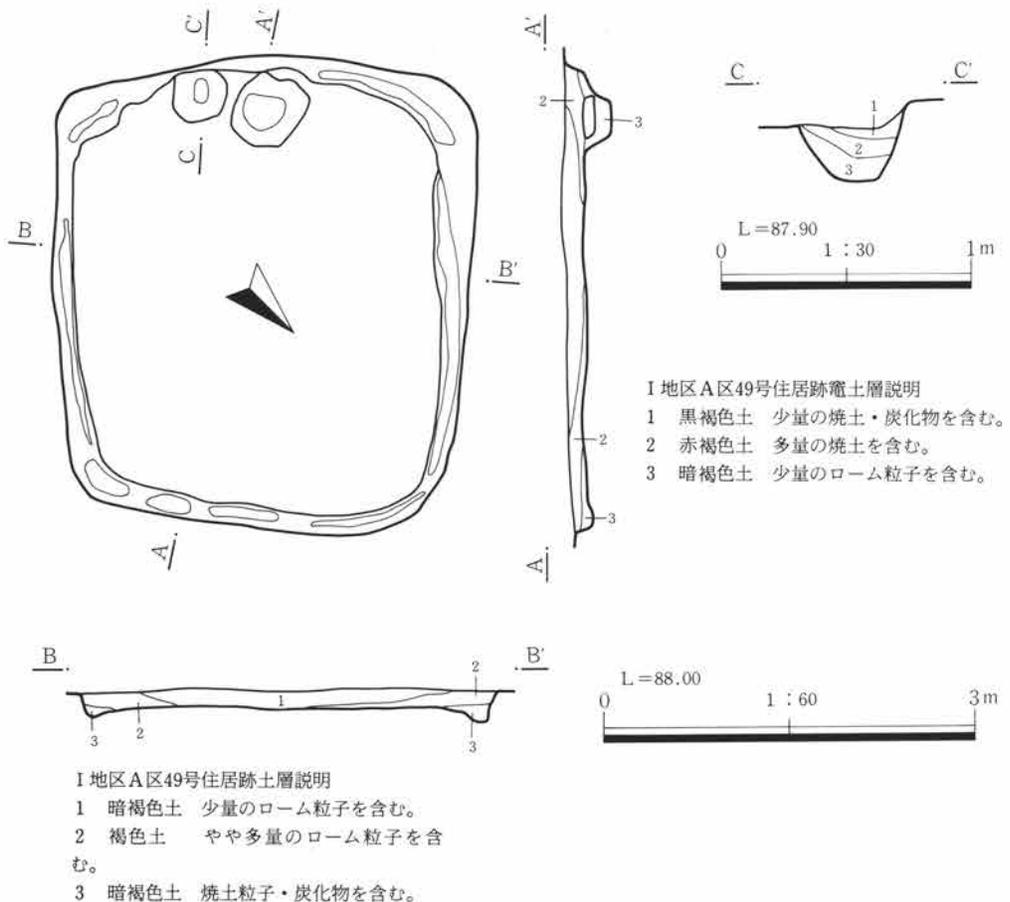
番号	器種	長さ 最大長 (mm)	幅 最大幅 (mm)	厚さ 最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
2850	薦石	139	45	36	410.0	粗粒安山岩	断面は不整形な四角形。
2851	薦石	129	57	52	683.2	粗粒安山岩	断面は不整形な隅丸三角形。
2852	薦石	132	58	35	436.5	粗粒安山岩	断面は不整形な隅丸菱形。
2853	薦石	149	63	47	460.6	粗粒安山岩	断面は不整形な三角形。
2854	薦石	160	58	31	476.3	粗粒安山岩	断面は不整形な楕円形。
2855	薦石	152	44	44	451.8	粗粒安山岩	断面は不整形な四角形。
2856	薦石	123	58	34	422.8	粗粒安山岩	断面は不整形な楕円形。
2857	薦石	161	58	43	688.7	粗粒安山岩	断面は不整形な四角形。
2858	薦石	144	54	44	571.5	粗粒安山岩	断面は四角形。
2859	薦石	129	57	35	433.2	粗粒安山岩	断面は不整形な三角形。
2860	薦石	120	60	40	404.5	粗粒安山岩	断面は不整形な楕円形。
2861	薦石	130	50	36	353.3	粗粒安山岩	断面は不整形な楕円形。
2862	薦石	136	59	26	346.8	粗粒安山岩	断面は細長い楕円形。
2863	薦石	149	57	44	588.7	粗粒安山岩	断面は不定形。
2864	薦石	147	65	45	672.4	粗粒安山岩	断面は不整形な四角形。
2865	薦石	147	74	45	829.4	粗粒安山岩	断面は不整形な楕円形。

I地区A区49号住居跡 (第101・102図、第19表、図版18)

周囲に広がる2号不明遺構の埋土中で確認された。そのため同遺構よりは新しい。長辺が3.0~3.6m、短辺が3.0mほどの台形状の平面形を呈し、主軸はN-47°-Eである。床面はほぼ平坦で、途切れがちな周溝が全周している。南西側壁に沿った中央に70×50×20cmほどのピットがあり、内部に方形に組まれたような石が2個ある。そしてそこから反対側に延びる形で、柱材的なものを含めた炭火物層が床の上に続いていた。そのため、このピットが礎石を入れた柱穴と考えられることもできる。南側角に焼土が広がっており南西壁の角寄りに径40cm深さ20cm程の焼土を埋土とするピットがあるが、竈とは断定し難い。

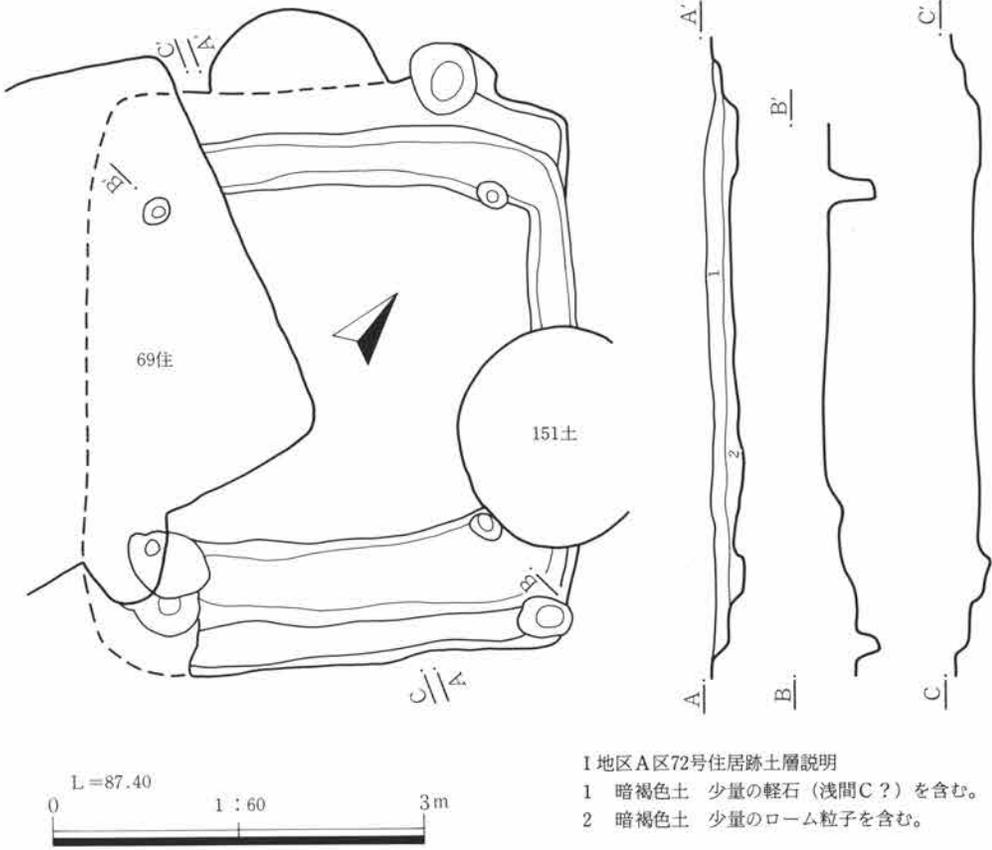
遺物は、北と南の床面近くから須恵器の鉢(2188)が出土しているだけであり、時期の限定は困難であるが、周囲の遺構との関係を含めて考え、7世紀~8世紀と推測する。

本遺構は、かなり特異な特徴を持っており、一般的な竪穴住居とは異なる建物跡と考えられるが、性格は不明である。 (坂井)

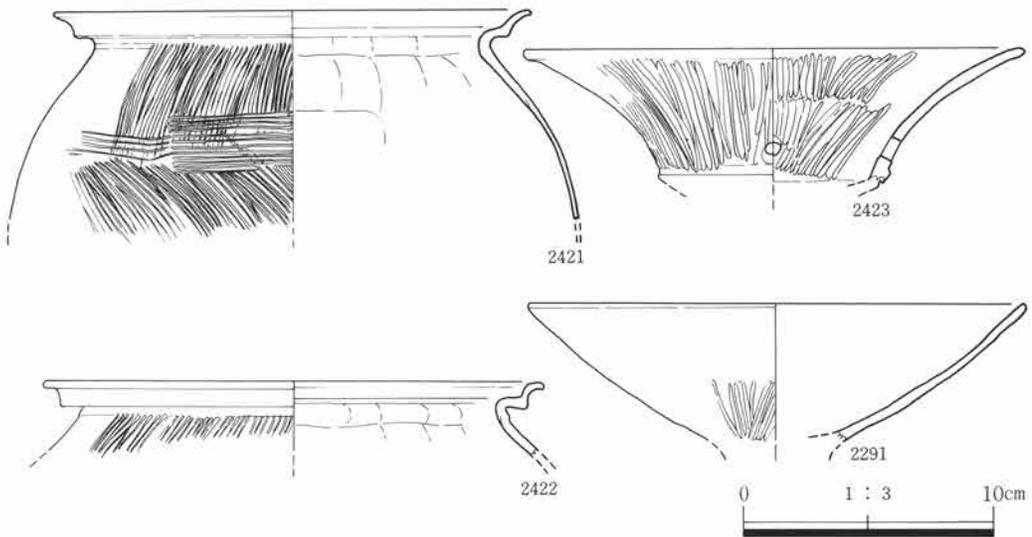


第101図 I地区A区49号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）

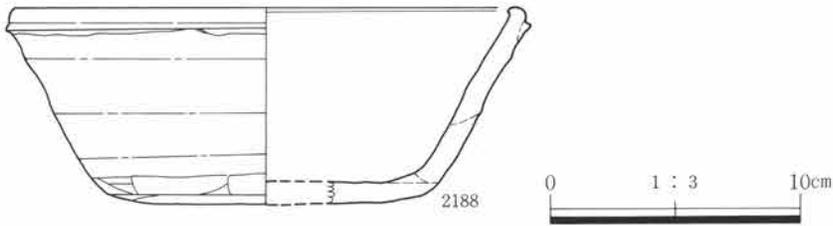


第103図 I 地区A区72号住居跡遺構図



第104図 I 地区A区72号住居跡遺物図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第102図 I地区A区49号住居跡遺物図

第19表 I地区A区49号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2188	鉢 須恵器	器高:(78mm)口径: [204mm]底径:[120 mm]口縁部~底部% 残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。還元。硬質灰白。	口縁部に凸帯一条。口縁部~体部は直線的に広がる。外面:口縁部は横なで体部は轆轤なで、底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部は轆轤なで底部はなで。	住居内北東部床直

I地区A区72号住居跡 (第103・104図、第20表)

2号墳周溝の北側で確認された。周辺はかなり遺構が重複しており、東側で151号土坑、西側で69号住居跡が本住居跡を壊している。又、南側角は、2号墳周溝によって切られ、北と東で重なるピットも新しく、北西側の150号土坑も本住居跡を壊していると思われる。そのため規模は片側の長さ4.5mが確認できただけであるが、全体の形状は隅丸正方形的な感じを持つ。主軸はN-40°-Wである。極めて特徴的なこととして、壁際に床面より10cmほど高い幅20cmほどのテラスがまわり、その内側に床からの深さ5cmで幅が20~50cmの周溝が四隅が切れる感じで巡っていることである。更にこの周溝の内側立ち上がり部分で、径約20cm、深さ30~40cmの柱穴が4個検出された。この各柱穴は芯々距離約2.7mの正方形を呈している。従って4本の柱のすぐ外側に幅広の周溝が巡り、その外にテラスがあるという構造をなす。炬やその他の施設は不明。

遺物は、中央部分の主軸に沿って礫がやや浮いて並んで見られた。又、北柱穴のすぐ脇の床近くから土師器壺口縁部(2423)が、テラスと同じ高さで土師器甕口縁部(2421・22)が見られた。そして北東側周溝で床よりやや浮いて土師器高杯杯部(2291)が出土している。この出土状態から考えると、周溝は使用時には床がない状態で埋っていた可能性もある。構築時期は、古墳時代前期である。

(坂井)

第 20 表 I 地区 A 区 72 号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2291	高杯土師器	器高:(55mm)口径:[200mm]底径:一口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部~体部は直線的に広がる。外面には篋磨きが観察できるが、内面は磨減が激しく観察不能。	住居内北西部床直
2421	台付甕土師器	器高:(83mm)口径:[192mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部は縦クシ目、体部上半に横クシ目が一列。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北西部床上15cm。
2422	台付甕土師器	器高:(30mm)口径:[200mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの鉱物粒を含む。砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内北西部床上10cm。外面に油煙付着。
2423	器台土師器	器高:(53mm)口径:[200mm]底径:一口縁部~体部 $\frac{1}{4}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	口縁部~体部は大きく外湾。体部に4個の円形穿孔。内外面共に口縁部~体部は篋磨き後、赤色顔料塗布。	住居内北西部床直

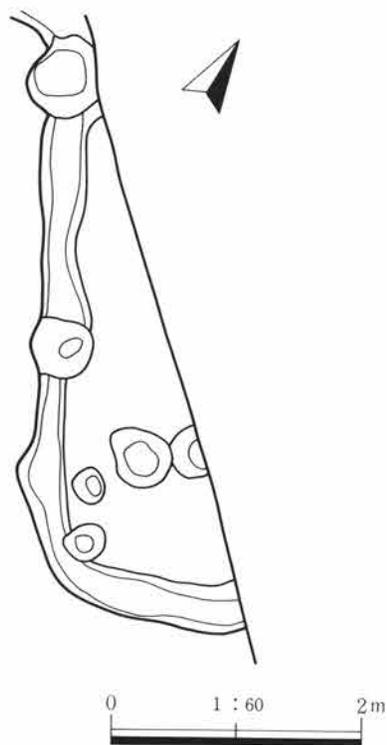
I 地区 A 区 73 号住居跡（第105・106図、第21表、

図版18）

当住居跡は、A区74号住居跡・A区2号古墳と重複する。A区74号住居跡との新旧関係は不明である。A区2号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がA区2号古墳の墳丘上であることにより、当住居跡の方が古い。当住居跡の大部分は、現代の攪乱坑により破壊されており、西側部分の僅かだけが壁溝の検出により、確認することができた。壁溝の規模は、幅約20~30cm・確認面からの深さ約5~10cmである。

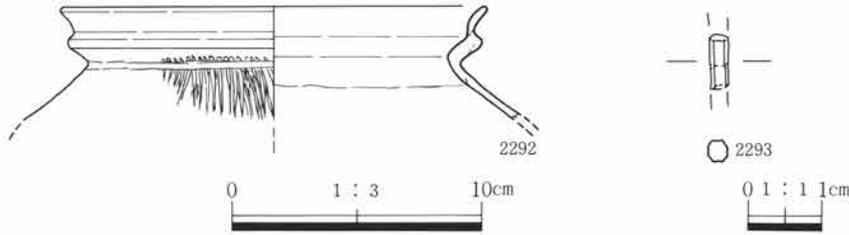
大部分が攪乱坑に破壊されているために、規模・平面形・壁・床・炉・貯蔵穴等は不明であるが、南西部隅から柱穴と考えられる小ピットが検出できた。規模は、半分破壊されているが、直径約40cmであり、確認面からの深さ約60cmである。

遺物の出土は非常に少ないが、「S」字状を持つ土師器の台付甕、管玉が出土している。遺物・A区2号古墳との関係から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）



第105図 I 地区 A 区 73 号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第106図 I地区A区73号住居跡遺物図

第21表 I地区A区73号住居跡遺物観察表

番号	器 種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
2292	台付甕 土師器	器高:(45mm)口径: [170mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。比較的硬質。鈍い黄橙。	「S」字状口縁の台付甕。外面:口縁部は横なで。体部上端はタテハケ。内面:口縁部は横なで、体部上端は篋なで	住居内北西部床直
2293	管 玉	長さ7.5mm直径:3mm		穿孔なし。周囲は8面に削られている	住居内南西部床直

I地区A区74号住居跡 (第107~109図、第22表、図版18~20)

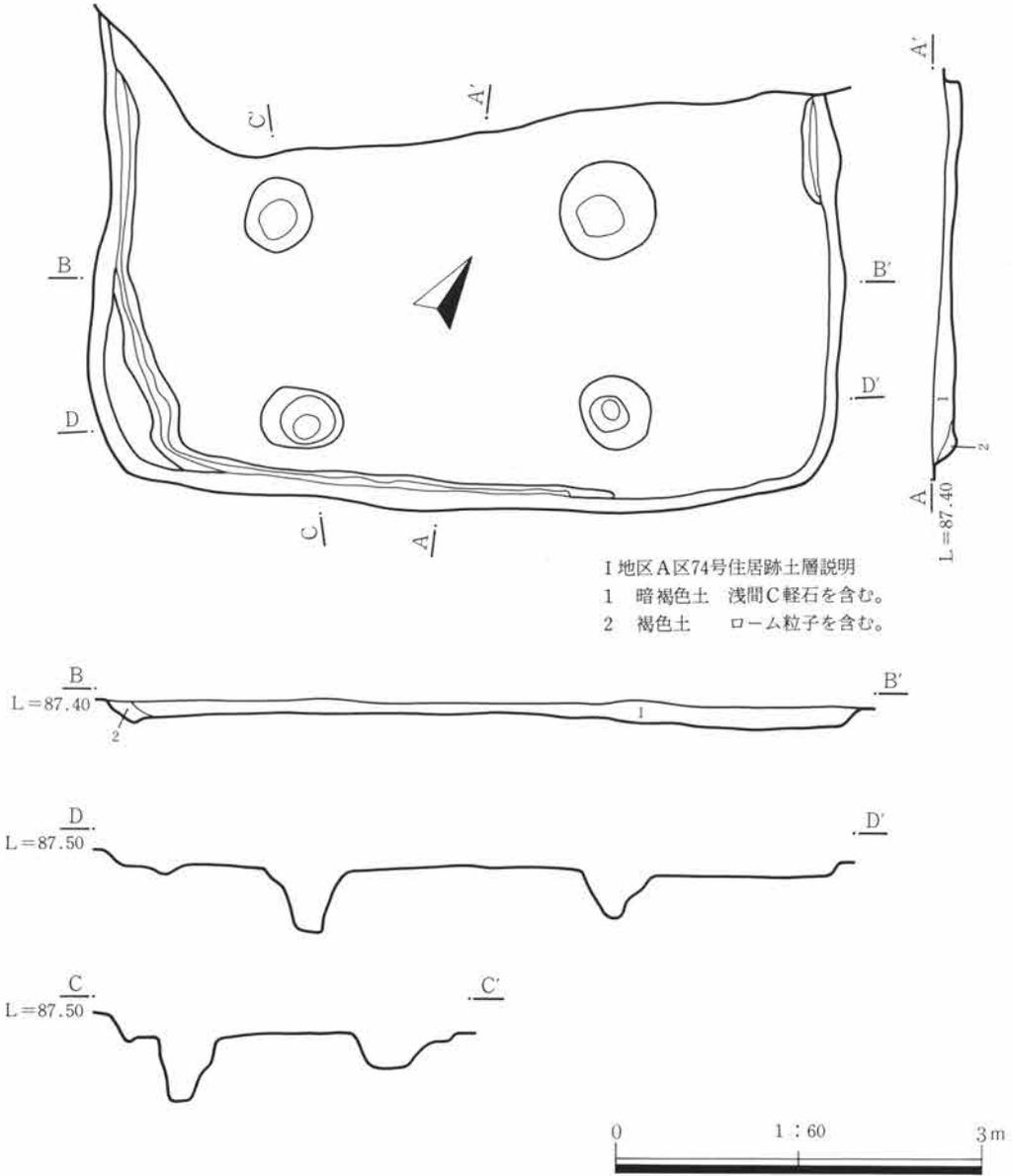
2号墳周溝の北内側で確認された。北西側半分ほどが、先行工事による攪乱で破壊されている。東西側で縄文時代の75・100号住居跡を切り、又、西側で73号住居跡と重複するが新旧関係は不明。確認できる辺長は約5.8mを測る。全体としては隅丸正方形の形状が想定される。床面は、南側が北側より5cmほど高い。又、一部途切れながら周溝が巡っている。柱穴は、調査できた範囲内で、上径60~80cm深さ30~40cmのものが4個検出できた。位置的に見れば、最低6個は存在しただろう。炉は確認できなかったが、西側柱穴近くの床面に2ヶ所の焼土分布域があり、同柱穴埋土上には径10cmほどの粘土塊があった。

遺物は、極めて多く残されていた。まず西柱穴の周辺では、土師器の台付甕(2295)・同壺(2302)・同小形甕(2312)・同甕(2313)、南柱穴周辺では同台付甕(2294)・同壺(2303)・同器台(2304)・同高杯(2308・10)、北柱穴外では同器台(2306)・同高杯(2309)、そして中央部分では同台付甕(2296・97・98・99)・同甕(2300・01)・同小形甕(2305)・同高杯(2307)・同壺(2311)が、いずれもほぼ床面直上で出土している。又、これらの土器に混じって、発火用石材と思われる石英塊があちこちに散乱していた。

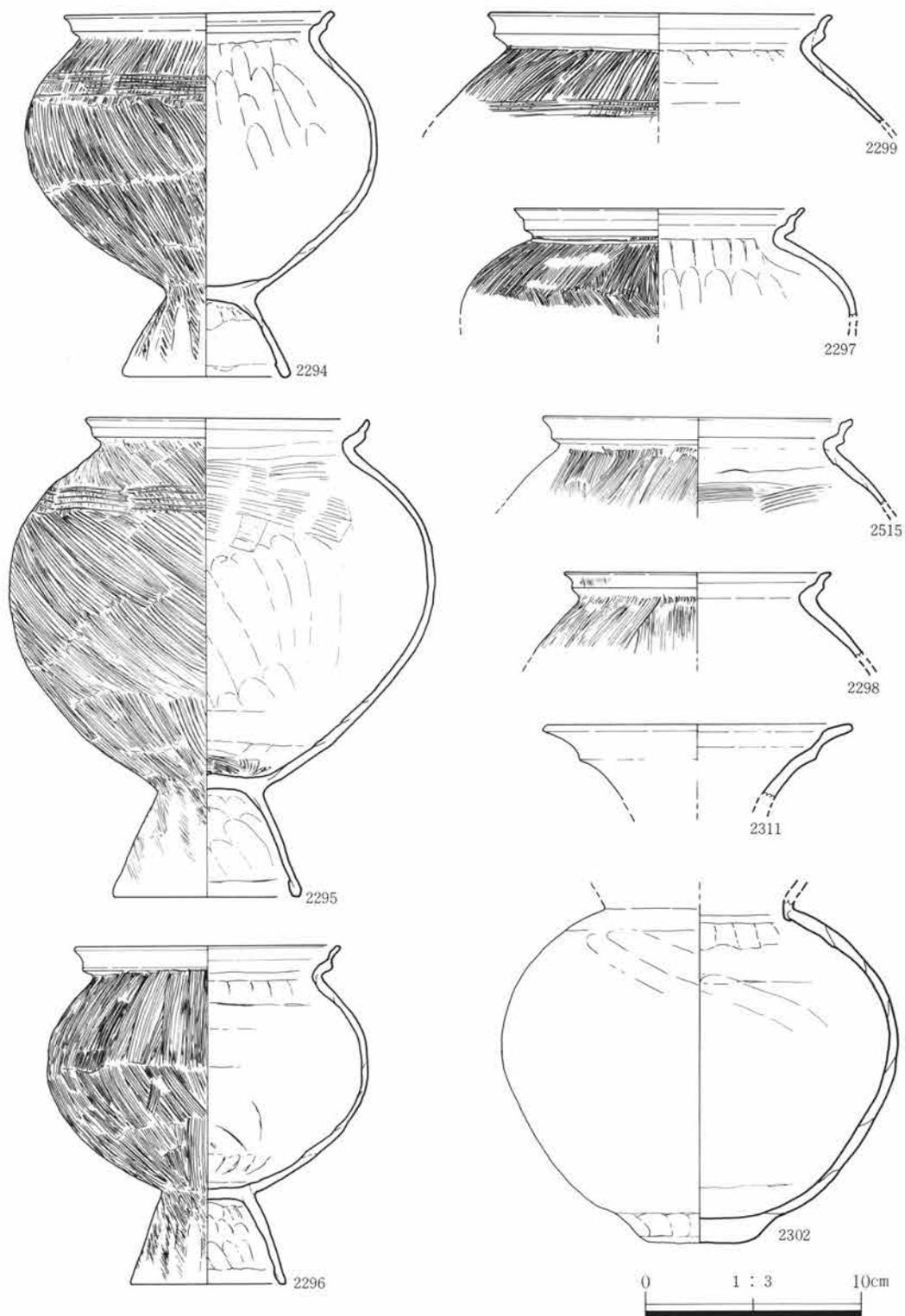
これらの同種多量の遺物出土状態を考えると、本住居跡は少なくとも単純な一家族の居住域と

II 古墳時代（竪穴住居跡）

は考えにくく、特別な一般とは異なった役割を果たしていたと思われる。構築時期は、古墳時代前期である。(坂井)

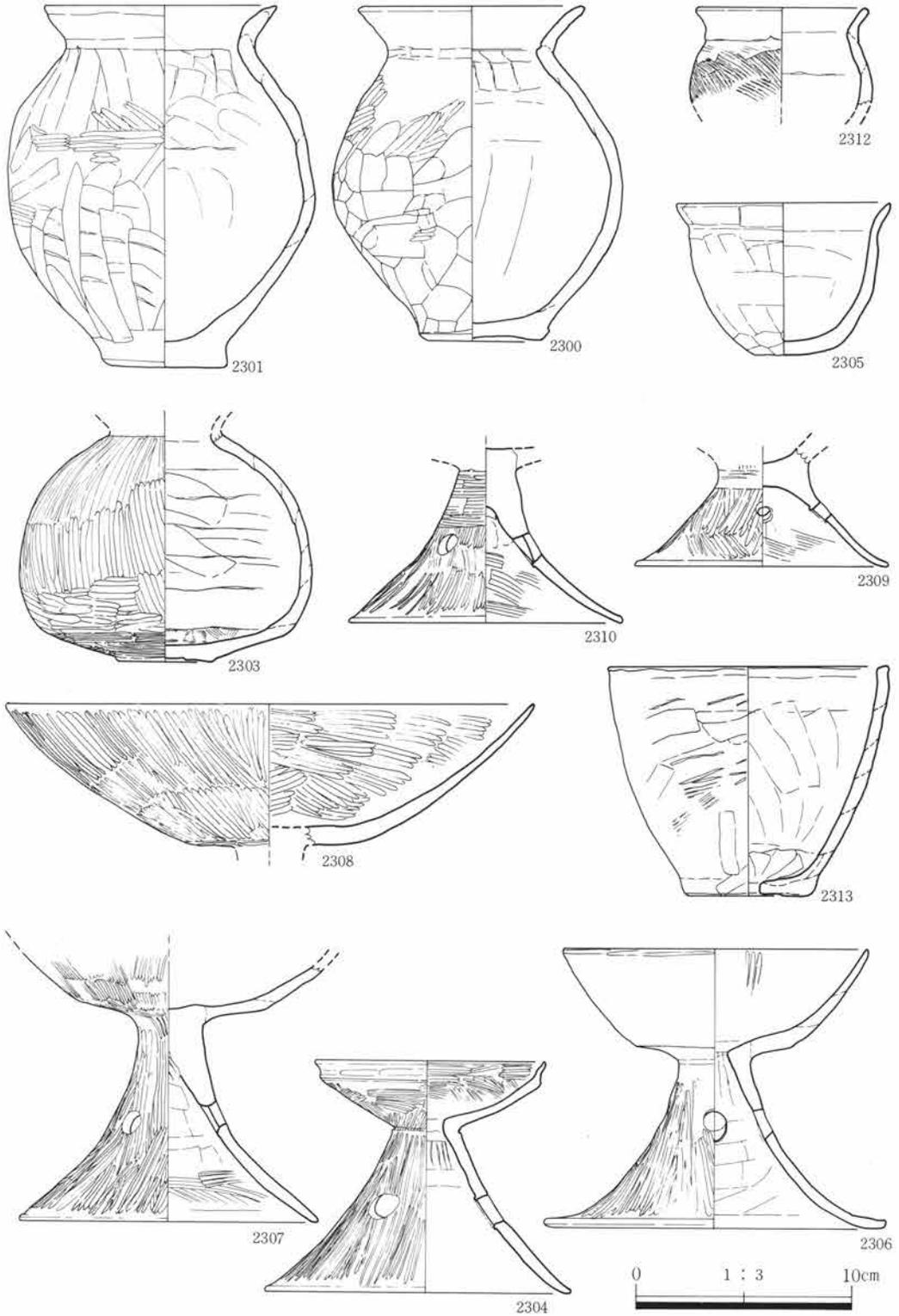


第107図 I 地区A区74号住居跡遺構図



第108図 I地区A区74号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第109図 I地区A区74号住居跡遺物図(2)

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

第22表 I地区A区74号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2294	台付甕土師器	器高:168mm口径:126mm底径:78mm最大径:163mm体部一部欠	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。脚部下端は折返し。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部~脚部は縦クシ目、体部上半に横クシ目が一列。内面:口縁部は横なで、体部~脚部はなで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
2295	台付甕土師器	器高:221mm口径:132mm底径:88mm最大径:197mm体部一部欠	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「S」字状。脚部下端は折返し。最大径は体部上半。外面:口縁部横なで、体部は縦クシ目、体部上半に横クシ目が一列、脚部はなで。内面:口縁部は横なで、体部上半はクシ目、体部下半~脚部はなで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
2296	台付甕土師器	器高:156mm口径:[124mm]底径:72mm最大径:[149mm]口縁部~脚部残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。脚部下端は折返し。外面:口縁部は横なで、体部~脚部は縦クシ目。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで、脚部は指なで。	住居内中央部床上5cm内外面に油煙付着。
2297	台付甕土師器	器高:(50mm)口径:135mm底径:一口縁部~体部上半残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部は縦クシ目。内面:口縁部は横なで体部上半は指なで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
2298	台付甕土師器	器高:(38mm)口径:123mm底径:一口縁部~体部上端残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。淡黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦クシ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内中央部床上5cm内外面に油煙付着。
2299	台付甕土師器	器高:(50mm)口径:160mm底径:一口縁部~体部上端残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦クシ目、及び横クシ目一列。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内中央部床直
2300	甕土師器	器高:155mm口径:105mm底径:53mm最大径:134mm体部一部欠	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部~頸部は横なで、体部上半は寛なで後磨き。体部下半~底部は寛削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部は寛なで。	住居内中央部床直内外面に油煙付着
2301	甕土師器	器高:167mm口径:108mm底径:54mm最大径:143mmほぼ完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部~底部は寛削り、体部中央は一部磨き。内面:口縁部は横なで、体部~底部は寛なで及び指なで。	住居内中央部床直内外面に油煙付着
2302	壺土師器	器高:(158mm)口径:一底径:50mm最大径:184mm体部~底部残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	体部は緩やかな円みを持つ。外面:体部上半に僅かに寛削りの痕跡が認められるが、他は観察不能。内面:体部上端は指なで、体部~底部は寛なで。	住居内中央部床直
2303	壺土師器	器高:(107mm)口径:一底径:43mm最大	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質	体部下半が大きく膨らむ。最大径は体部下半と推定。外面:体部は磨き	住居内北西部床直内外面に油煙付着

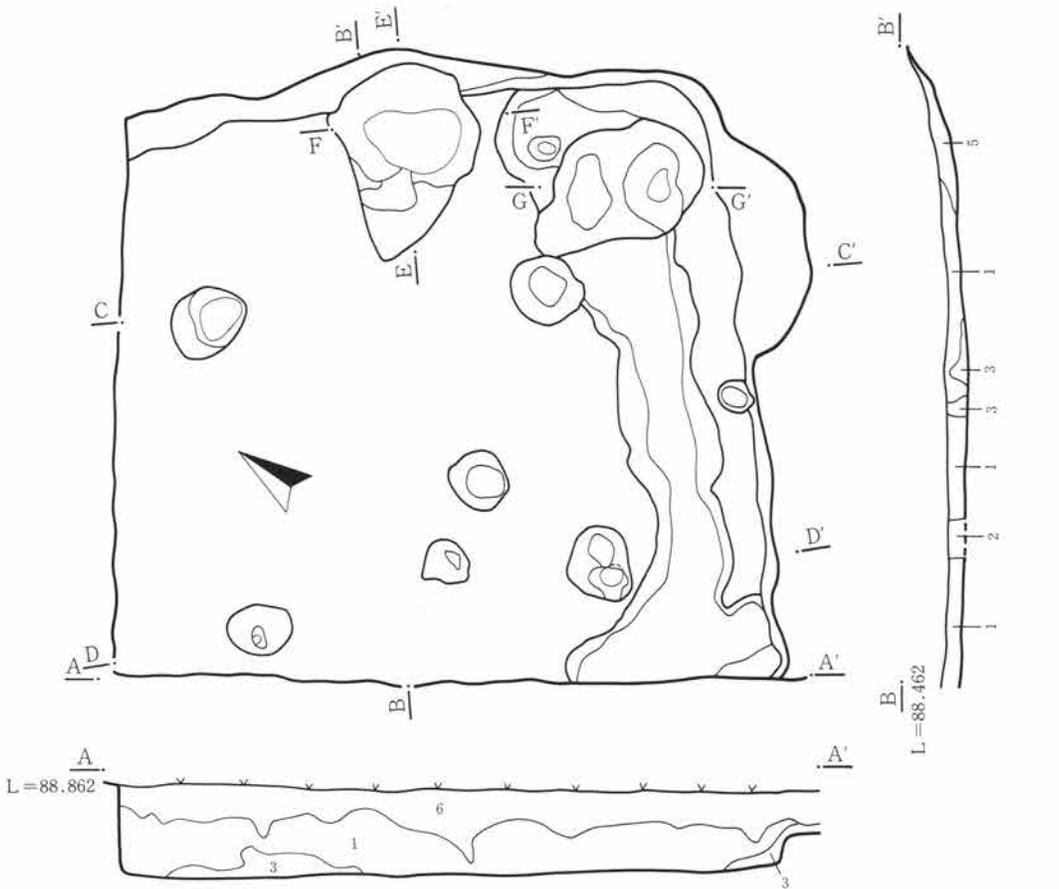
II 古墳時代（竪穴住居跡）

		径:[136mm]体部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	灰白。	内面:体部はなで、底部はハケ目。	
2304	器台 土師器	器高:107mm口径:108mm底径:143mm杯部一部欠	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄橙。	杯部は稜を持って立ち上がり、やや外湾。脚部は円錐状。脚部に3個、杯部底面に1個、計4個の円形穿孔。外面:口縁部は横なで、体部～脚部は篋磨き、口縁部～脚部に赤色顔料塗布。内面:口縁部～底部は篋磨き、脚部は横なで、口縁部～底部に赤色顔料塗布。	住居内南西隅床直
2305	埴 土師器	器高:70mm口径:100mm底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋なで体部下半～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで体部～底部はなで。	住居内中央部床直
2306	器台 土師器	器高:129mm口径:[142mm]底径:[160mm]口縁部～脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	体部は稜を持って立ち上がる。脚部はロート状に開く。脚部に4個、底面に1個、計5個の円形穿孔。外面:口縁部～体部は観察不能、脚部は篋磨き、内面:口縁部～底部は篋磨き痕あり。脚部は篋削り。	住居内北東部床直
2307	高杯 土師器	器高:(120mm)口径:一底径:140mm体部～脚部残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	体部は稜を持って立ち上がる。脚部は円錐状に開く。脚部に3個の円形穿孔あり。外面:体部～脚部は篋磨き。内面:体部～底部はなで、脚部上半は篋削り、脚部下半はハケ目。	住居内中央部床直
2308	高杯 土師器	器高:(65mm)口径:246mm底径:一杯部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部～体部はやや内湾きみに立ち上がる。内外面共に口縁部～底部は篋磨き。	住居内南西部床直 内外面に油煙付着
2309	高杯 土師器	器高:(55mm)口径:一底径:[118mm]脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3～4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	脚部は円錐状に広がる。円形穿孔4個。外面:クシ目後篋磨き。内面:脚部上半はなで、脚部下半はクシ目。	住居内中央部床直
2310	高杯 土師器	器高:(81mm)口径:一底径:[128mm]脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。灰黄。	脚部は円錐状に広がる。円形穿孔3個。外面:脚部は篋磨き。内面:脚部はクシ目。	住居内南西柱穴脇床直。
2311	壺 土師器	器高:(35mm)口径:[144mm]底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。褐灰。	口縁部は「S」字状。内外面共に口縁部は横なで。	住居内中央部床上5cm。内外面共に燻しあり。
2312	壺 土師器	器高:(45mm)口径:[80mm]底径:一口縁部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部～体部上半は横なで、体部下半はクシ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南西部床直
2313	甗 土師器	器高:106mm口径:[130mm]底径:[60mm]孔径:[10mm]口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	口縁部～底部はやや内湾きみに立ち上がる。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋なでで工具痕が残る、体部下半はなで。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで、底部は指押しえ。	住居内南西部床直

2515	台付壺 土師器	器高:(40mm)口径: [144mm]底径:一口縁部~体部上端ノ残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦クシ目。内面:口縁部は横なで、体部上端は横なで、体部上半は横クシ目。	住居内南西部床直外面に油煙付着。
------	------------	---------------------------------------	---------------------------------	---	------------------

I地区B区3号住居跡 (第110~112図、第23表)

当住居跡に調査範囲内での重複は無い。規模は、西側部分が調査区域外であり、北側部分に現代の生活道路が通っており、不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するもの



I地区B区3号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- 3 褐色土 やや多量のローム粒子を含む。
- 4 暗褐色土 やや多量の焼土粒子を含む。
- 5 焼土
- 6 耕作土

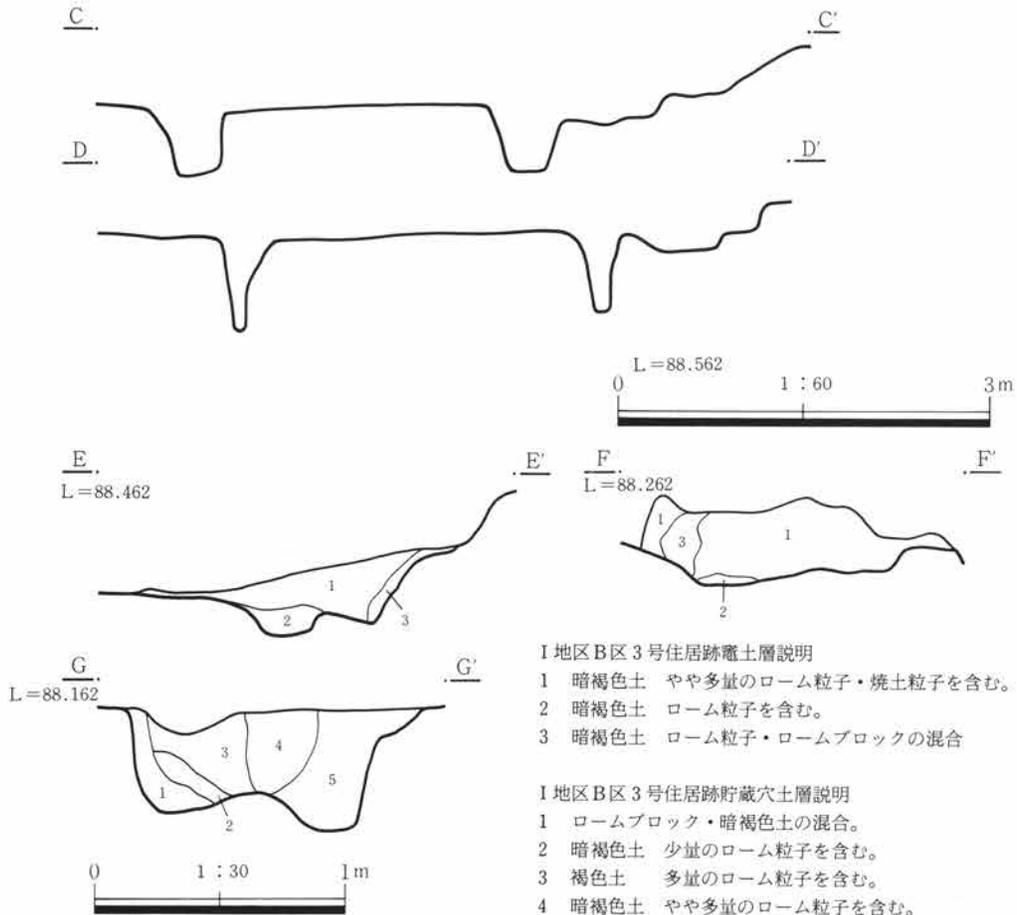
第110図 I地区B区3号住居跡遺構図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）

と推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約30cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は、竈の周辺を中心に比較的堅く、ほぼ平坦である。南側の壁の内側からは、一部壁溝が確認できたが、規模は不明である。

竈は、東側壁の南寄りに築かれている。大部分が破壊されており、袖・天井部は検出できなかったが、燃烧部の覆土から、構築材にはロームを使用したものと考えられる。燃烧部からは、焼土を検出することができた。確認面での煙道部の壁外への張り出しは、僅かである。竈の右、住居内の南東部隅からは、ピットを検出することができた。規模は長軸約120cm・短軸約80cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不定形である。貯蔵穴と考えることができる。支柱穴は4本である。規模は、直径約40~50cm・床面からの深さ約50~70cmを測り、平面形は不整形な円形を呈する。

遺物は竈内から出土した土師器の長胴甕の他、土師器の杯・椀が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は7世紀前半である。 (井川)



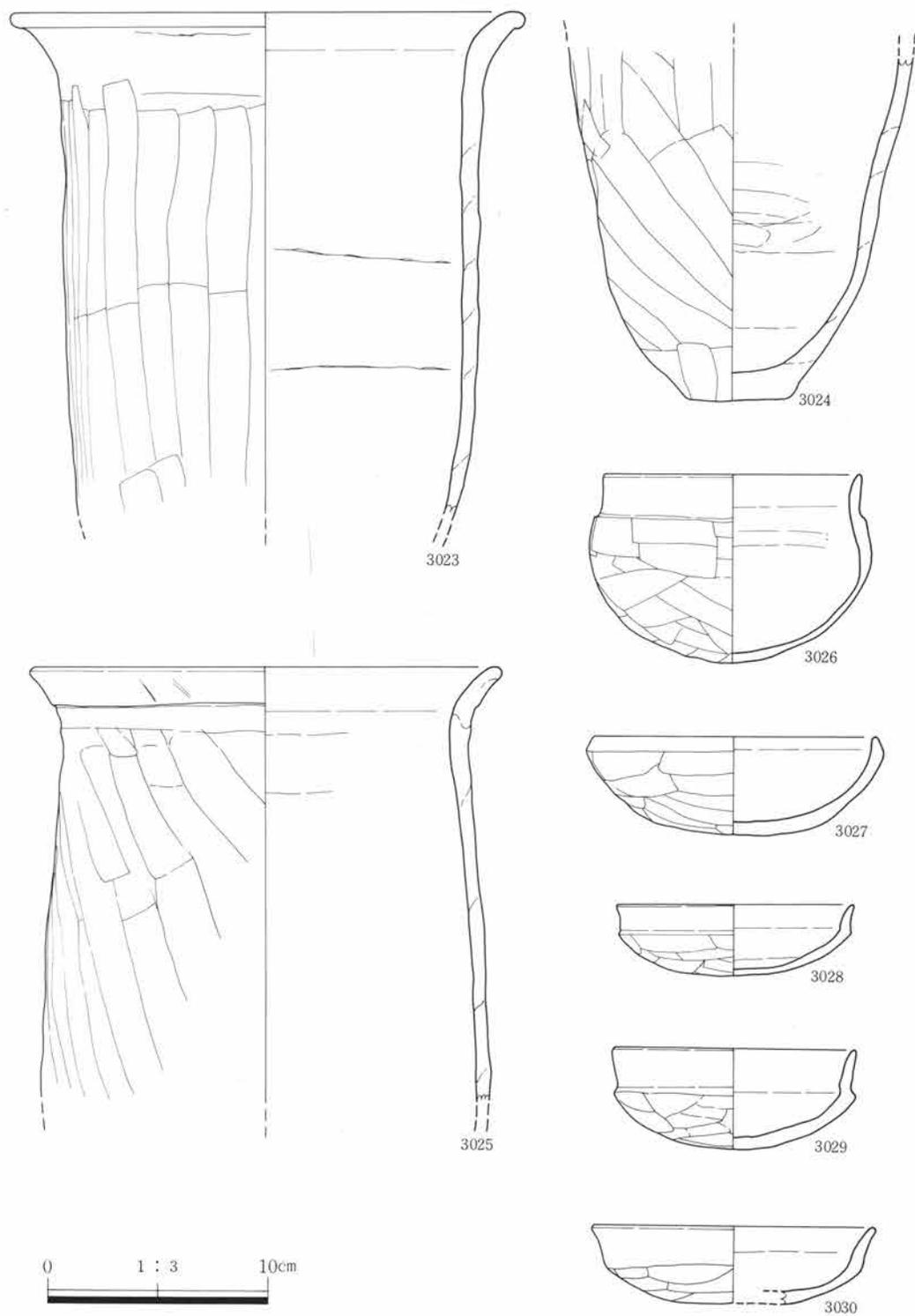
I 地区B区3号住居跡竈土層説明

- 1 暗褐色土 やや多量のローム粒子・焼土粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックの混合

I 地区B区3号住居跡貯蔵穴土層説明

- 1 ロームブロック・暗褐色土の混合。
- 2 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- 3 褐色土 多量のローム粒子を含む。
- 4 暗褐色土 やや多量のローム粒子を含む。

第111図 I 地区B区3号住居跡遺構図(2)



第112図 I地区B区3号住居跡遺物図

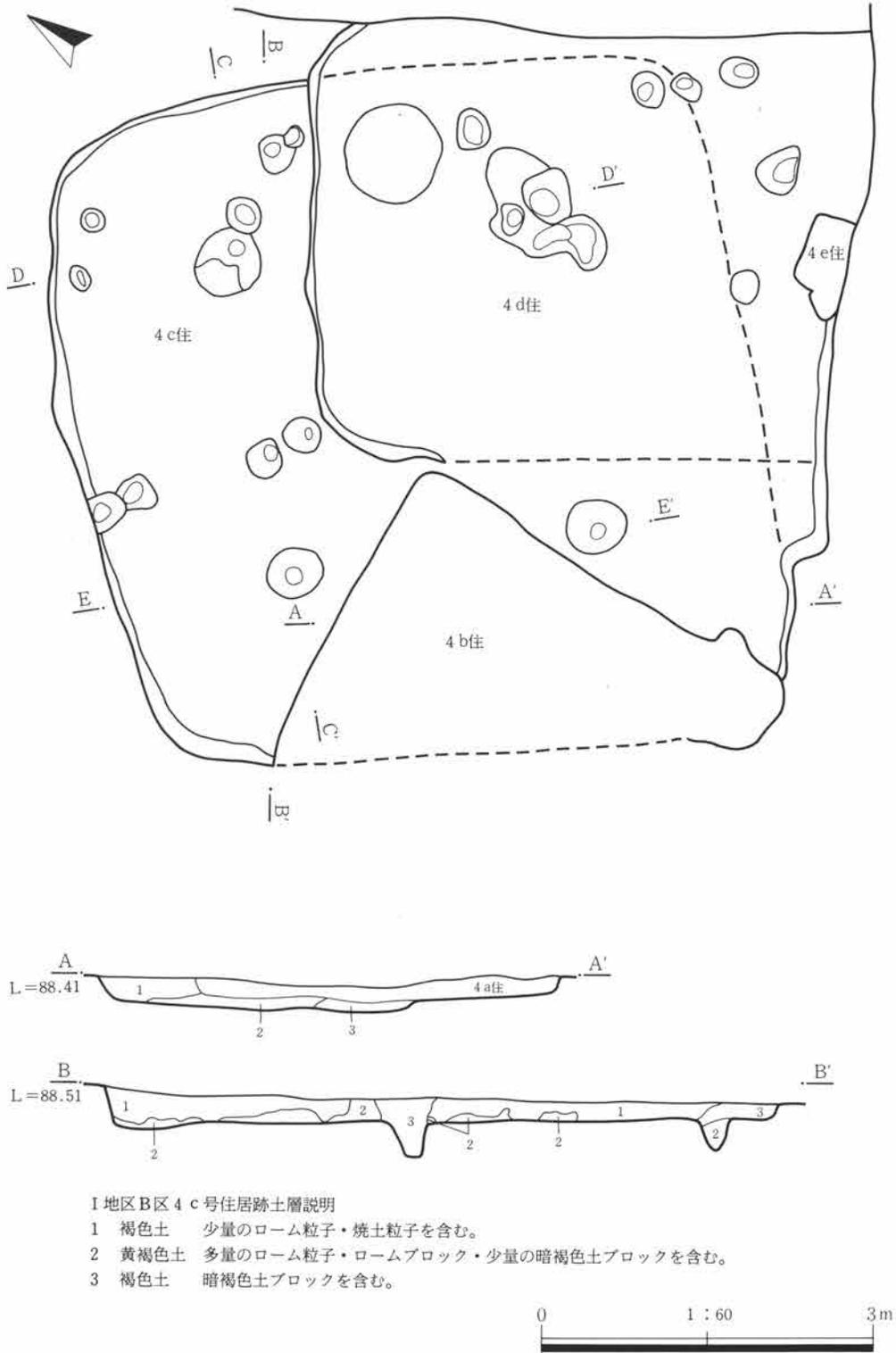
第 23 表 I 地区 B 区 3 号住居跡遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備 考
3023	甕 土 師 器	器高:(237mm)口径: 234mm底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 4~5mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで 体部は篋削り。内面:口縁部は横なで 体部は篋なで。	竈内。内外面に油 煙付着。
3024	甕 土 師 器	器高:(195mm)口径: [214mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径 4~5mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで 体部は篋削り。内面:口縁部は横なで 体部はなで。	竈内。内外面に油 煙付着。
3025	甕 土 師 器	器高:(157mm)口径: 一底径:48mm体部下 半~底部残	直径 4~5mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	外面:体部下半~底部は篋削り。内 面:体部下半~底部は篋なで。	住居内北東部床上 15cm。内外面に油 煙付着。
3026	椀 土 師 器	器高:85mm口径:117 mm底径:一最大径: 128mmほぼ完形	直径 2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	体部上半は内湾し、口縁部は僅かに 外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体 部~底部は篋削り。内面:口縁部は横 なで、体部~底部はなで。	住居内南東部床直
3027	杯 土 師 器	器高:45mm口径:128 mm底径:一口縁部~ 底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は内湾。丸底。外面:口縁部は 横なで、体部~底部は篋削り。内面: 口縁部は横なで、体部~底部はなで。	竈右袖脇床上20cm 外面に油煙付着。
3028	杯 土 師 器	器高:33mm口径:108 mm底径:一口縁部~ 底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	外稜を持つ。口縁部は僅かに外湾。外 面:口縁部は横なで、体部~底部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部はなで。	竈左袖脇床直。
3029	杯 土 師 器	器高:46mm口径:[112 mm]底径:一口縁部~ 底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	外稜を持つ。口縁部は僅かに外湾。外 面:口縁部は横なで、体部~底部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部はなで。	住居内中央部床直 内外面に油煙付着
3030	杯 土 師 器	器高:(36mm)口径: [128mm]底径:一口縁 部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	外稜を持つ。口縁部はやや外湾。外 面:口縁部は横なで、体部~底部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部はなで。	竈前床直。内外面 に油煙付着。

I 地区 B 区 4 c 号住居跡（第113~115図、第24表）

本住居跡は、4 a、4 b号住居跡調査中確認された。4 a、4 b、4 d、4 f号住居跡と重複する。規模は東西方向で約5.8m、南辺は推定線である。平面形は東西にやや長い方形を呈すると推定され、それぞれの辺は緩やかな弧を描く。

床面は、ロームを踏み固めている。柱穴は4本の主柱穴があり、約2.5mの距離を以て確認された。径は約40~50cm、床面からの深さ約50~80cmである。炉・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。出土遺物は土師器の甕・台付甕・高杯がある。出土遺物から古墳時代前期とする。（秋池）

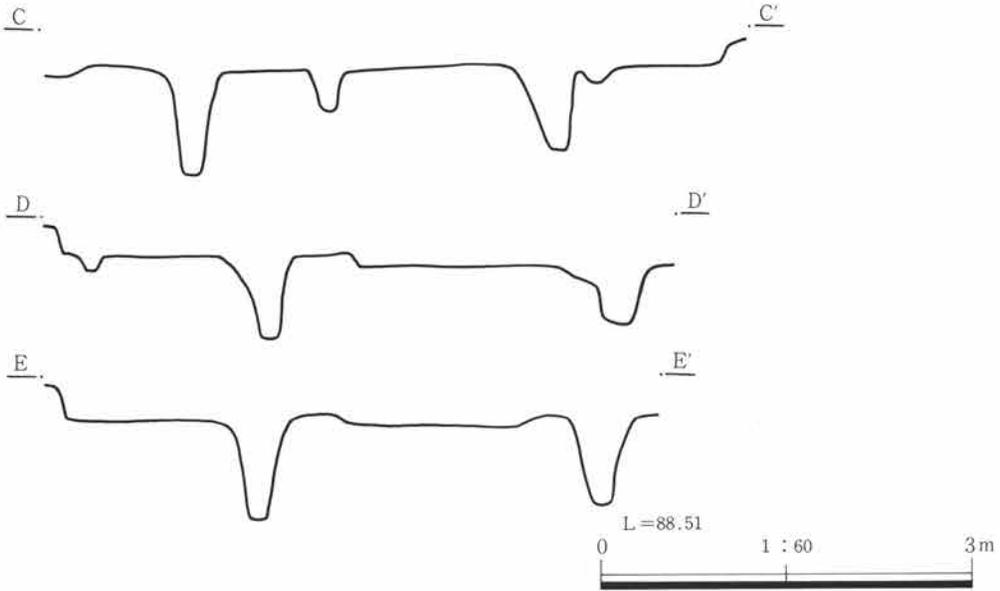


第113図 I地区B区4c号住居跡・4d号住居跡遺構図(1)

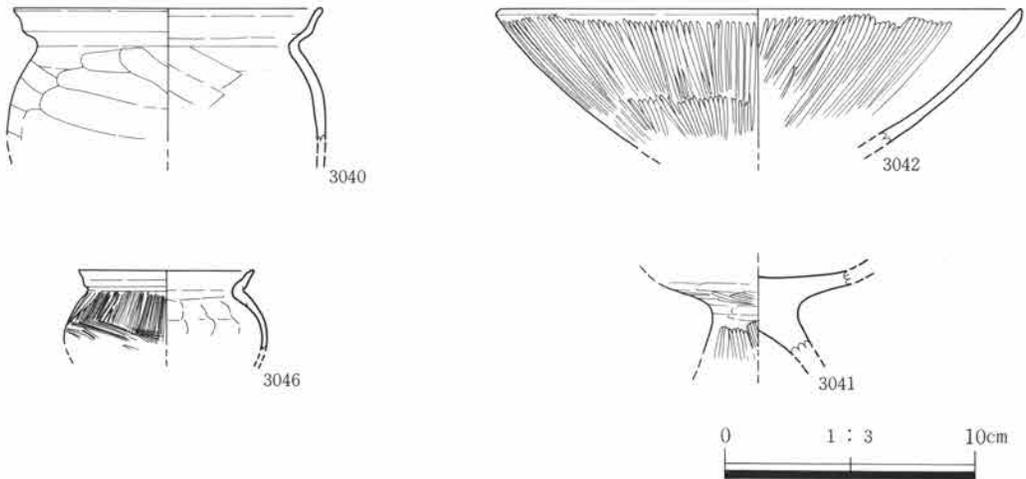
II 古墳時代（竪穴住居跡）

I 地区B区4d号住居跡（第113・114・116図、第25表）

本住居跡は、4a、4b号住居跡調査中確認された。4a号住居跡、4c号住居跡、4e号住居跡、1号古墳周堀部分と重複する。4aより古いが、他の3遺構との新旧関係については明らかにすることはできなかった。北辺部分の壁立ち上がりが僅かに確認できるのみで他は不明である。炉・柱穴・貯蔵穴は不明である。遺物は、「S」字状口縁を持つ台付甕が出土している。出土遺物から、古墳時代前期とする。（秋池）



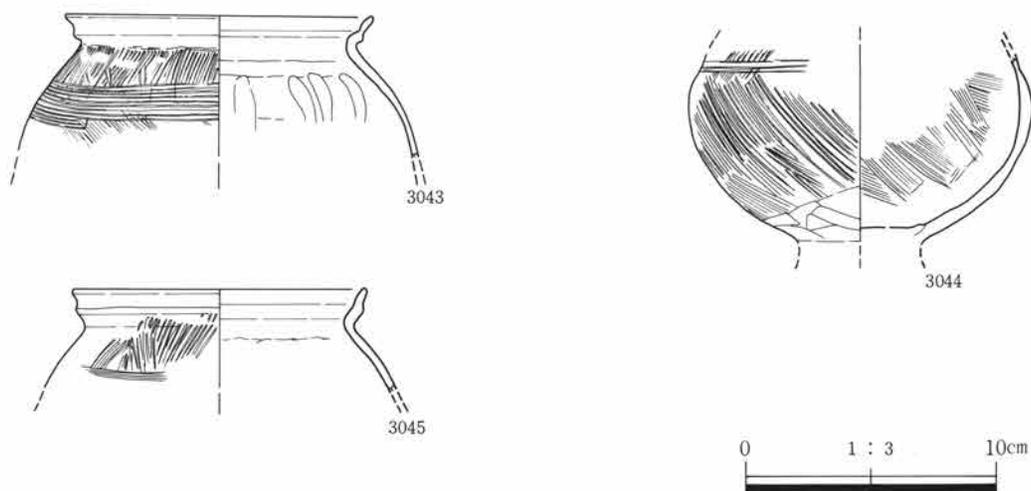
第114図 I地区B区4c号住居跡・4d号住居跡遺構図（2）



第115図 I地区B区4c号住居跡遺物図

第24表 I地区B区4c号住居跡遺物観察表

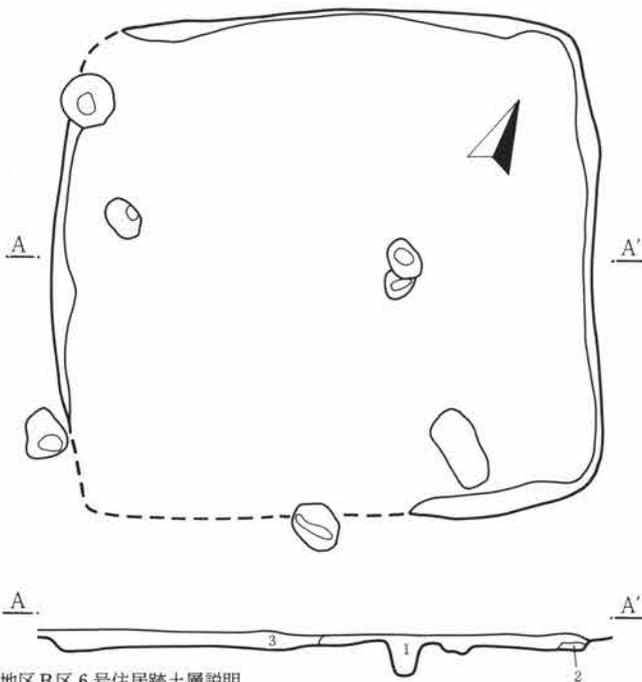
番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3040	壺 土師器	器高:(52mm)口径: 123mm底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
3041	高杯 土師器	器高:(34mm)口径: 一底径:一底部~脚部残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	脚部に3個の円形穿孔。外面:底部~脚部は篋磨き。内面:底部は篋磨き。底部断面に接合の為の刻みあり。	住居内中央部床直
3042	高杯 土師器	器高:(55mm)口径: [210mm]底径:一口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	口縁部~体部は僅かに内湾。内外面共に口縁部~体部は篋磨き。	住居内覆土。
3046	台付壺 土師器	器高:(31mm)口径: [70mm]底径:一最大径:[80mm]口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目、体部中央は横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで指頭痕が残る。	住居内覆土。



第116図 I地区B区4d号住居跡遺物図

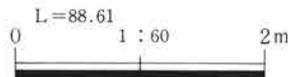
第 25 表 I 地区B区 4 d 号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3043	台付壺土器	器高:(56mm)口径:[124mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。浅黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ目一列。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、指頭痕が残る。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3044	台付壺土器	器高:(74mm)口径:一底径:一体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	外面:体部は縦ハケ目、体部上半に横ハケ目一列、体部下端は篋削り。内面体部はハケなで、体部下端に指頭痕。	住居内覆土。
3045	台付壺土器	器高:(41mm)口径:[118mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ目一列。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内覆土。



I 地区B区 6号住居跡土層説明

- 1 褐色土 緻密である。
 2 黄褐色土 少量の焼土を含む。
 3 褐色土 ローム小ブロック・軽石を含む。



第117図 I 地区B区 6号住居跡遺構図

I 地区B区 6号住居

跡 (第117・118図、第26表)

当住居跡は、B区3号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面がB区3号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

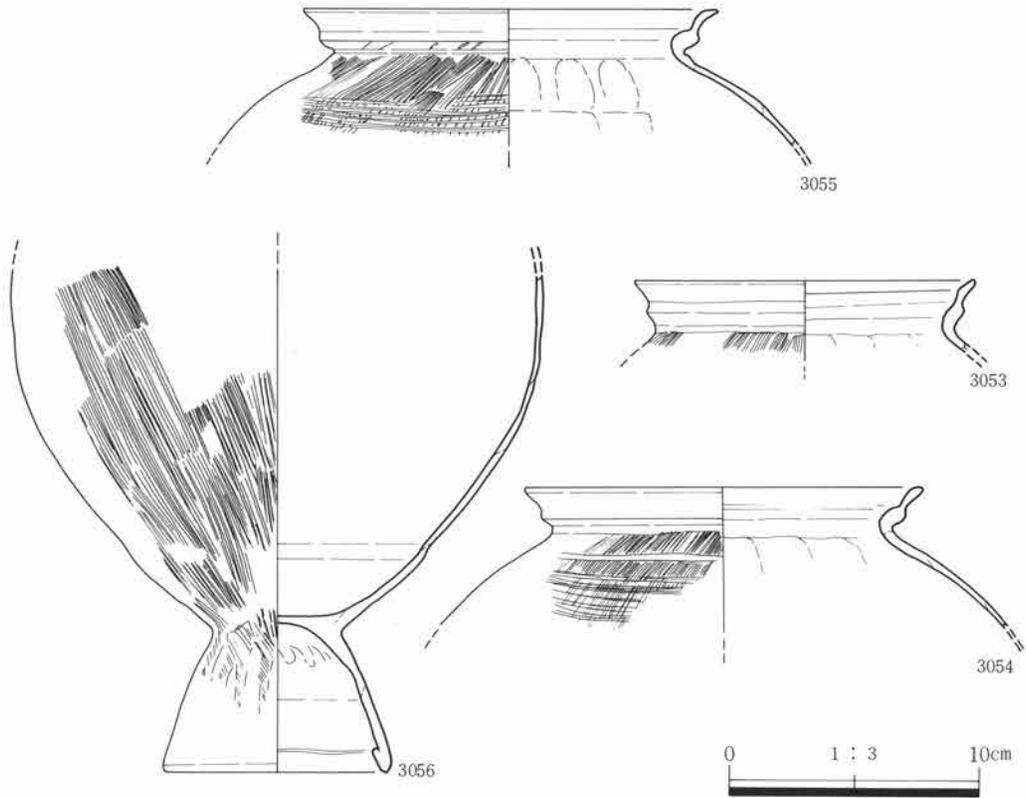
当住居跡の規模は、東西方向約4.4m・南北方向約4.0mであり、平面形は、隅丸長方形を呈する。主軸はN-65°-Eである。床面は中央部分でしか確認できず、確認できた部分の床面も、軟弱で細かい凹凸が多い。掘形から確認面までの高さは、約5~10cmであり、上面はほとんど削られている状態である。

炉は確認できなかった

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

が、中央部北西よりの床面に焼土の散布が認められる。このことから、炉の位置は中央部北西よりと推定している。住居内からは、壁際も含め、5基の小ピットが検出できたが、ピットの形態・位置から、柱穴と考えるには難が残る。壁溝・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕が出土しているが、出土量は非常に少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は、古墳時代前期である。(井川)



第118図 I地区B区6号住居跡遺物図

第26表 I地区B区6号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3053	台付甕 土師器	器高:(28mm)口径: 136mm底径:一口縁部 ~体部上端残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内南西部床直
3054	台付甕 土師器	器高:(56mm)口径: [160mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。浅黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。内外面に油煙付着。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

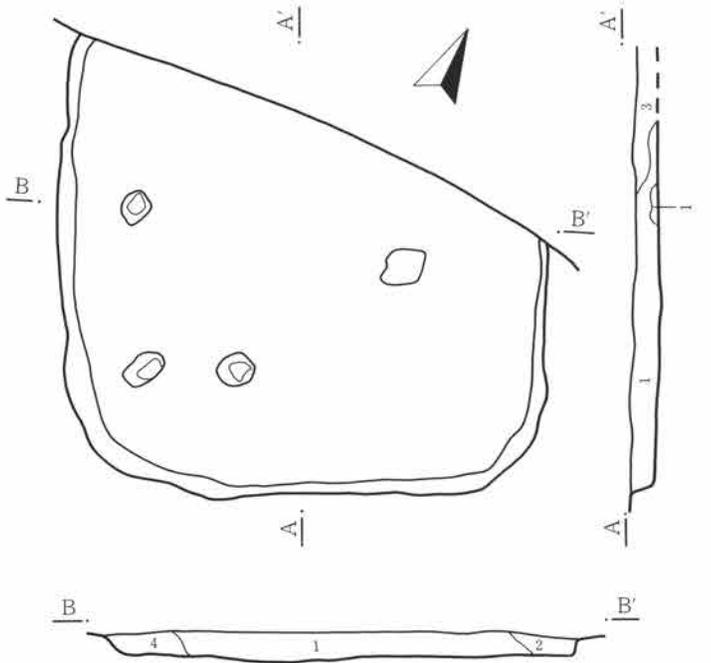
3055	台付 土師器	器高:(54mm)口径: [166mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。灰褐色。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、体部上端に指頭痕。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3056	台付 土師器	器高:(200mm)口径: 一底径:[92mm]体部~高台部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐色。	高台部先端は折り返し。外面:体部は縦ハケ目、高台部は斜めハケ目後なで。内面:体部はなで、高台部は横なで。	住居内南西部床上10cm。外面に油煙付着。

I 地区B区8号住居

跡（第119・120図、第27表）

当住居跡は、B区21号住居跡・B区24号住居跡・B区1号古墳と重複する。B区21号住居跡との新旧関係は、覆土の相違から、当住居跡の方が古い。B区24号住居跡との新旧関係は、不明である。B区1号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、北側部分がB区1号古墳によって破壊されているために不明であるが、東西方向は約4.0mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmであり、



I 地区B区8号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土を含む。
- 3 黒褐色土 B区1号古墳周溝覆土。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を含む。



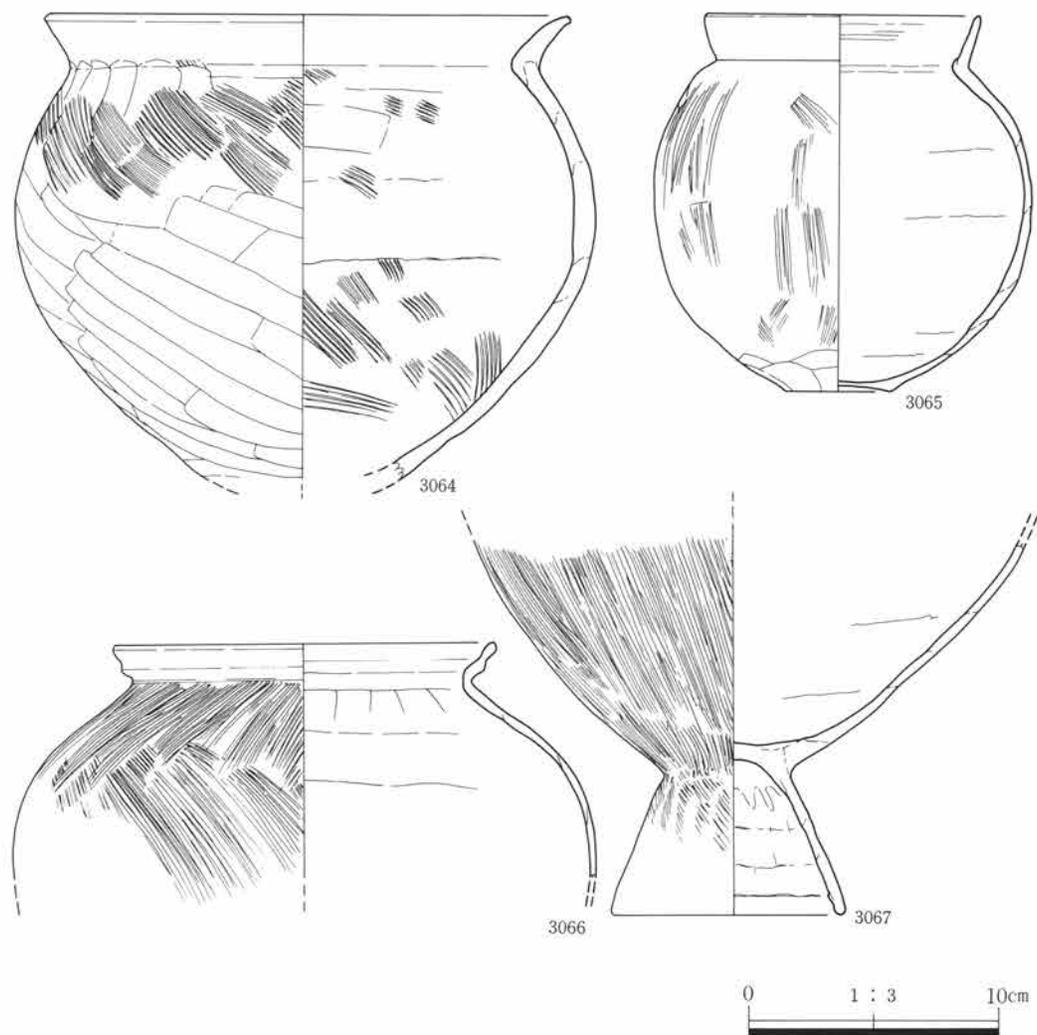
第119図 I 地区B区8号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

残存状態は悪い。床面は、比較的堅いが、やや凹凸が多い。壁溝は確認できなかった。

住居内の南西部隅から焼土の堆積を確認することができたが、炉を検出することはできなかった。住居内の南西部分に3基・中央部東よりに1基のピットを確認できたが、形態・位置等から柱穴と考えるには無理がある。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の甕・「S」字状口縁を持つ台付甕が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。
(井川)



第120図 I地区B区8号住居跡遺物図

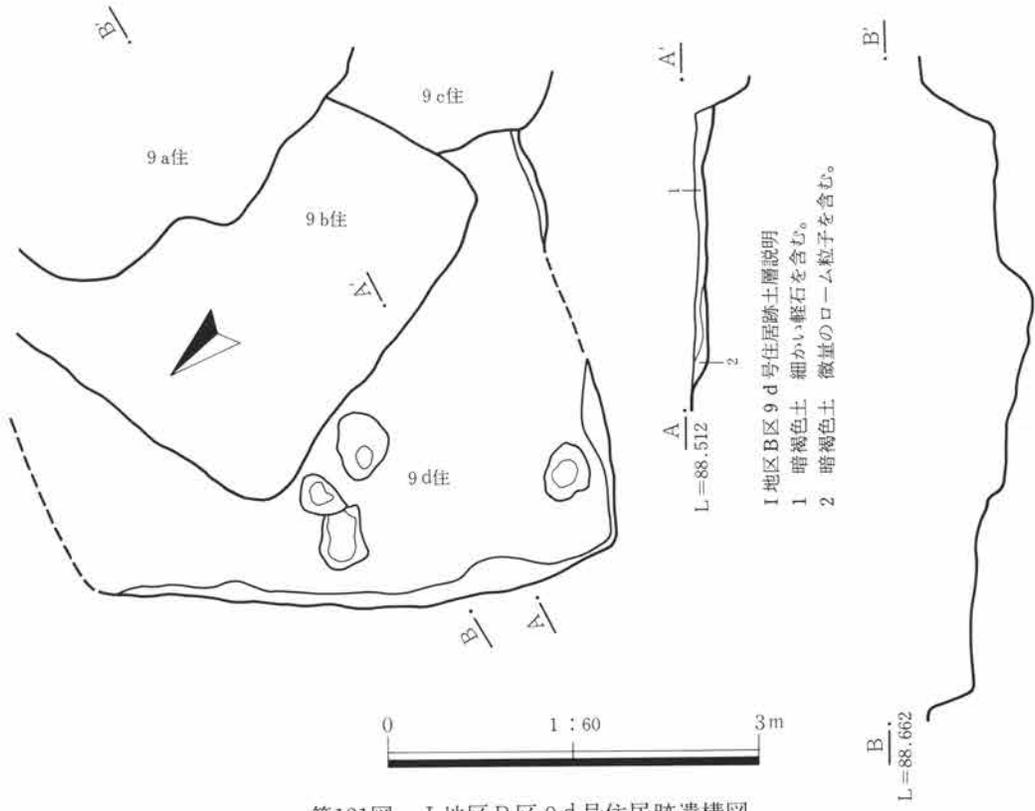
第 27 表 I 地区 B 区 8 号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3064	甕土師器	器高:(185mm)口径:[210mm]底径:一最大径:[232mm]口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2～3 mm の小石、及び砂粒を含む。酸化。軟質橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半はハケ目、体部下半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はハケなで。	住居内南東部床上 10cm。外面に多量の油煙付着。外面は荒れている。
3065	甕土師器	器高:150mm口径:110mm底径:42mm最大径:150mm口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2～3 mm の小石、及び砂粒を含む。酸化。軟質橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部はハケなで、体部下端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	炉内。
3066	台付甕土師器	器高:(93mm)口径:153mm底径:一口縁部～体部上半残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内北西部床直外面に油煙付着。
3067	台付甕土師器	器高:(150mm)口径:一底径:94mm体部下半～台部残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄褐。	台部先端は折り返し。外面:体部下半は縦ハケ目、台部は斜めハケ目後なで。内面:体部下半～底部はなで、台部は指なで。	住居内北西部床直外面に油煙付着。

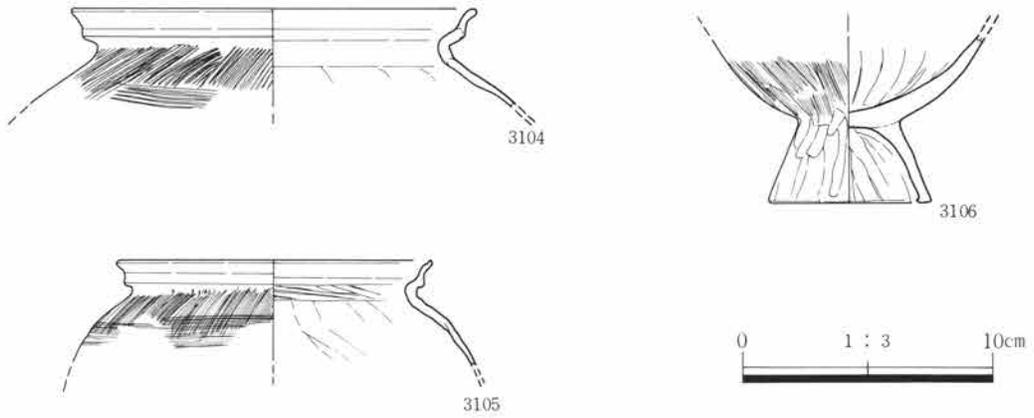
I 地区 B 区 9 d 号住居跡（第121・122図、第28表）

本住居跡は耕作土下、黄褐色土中に於いて確認された。1号古墳周堀、9 a、9 b、9 c号住居跡と重複するが、本住居跡が最も古い。規模の推定は困難である。平面形は方形を呈すると推定される。遺物は「S」字状口縁を持つ台付甕が出土している。出土遺物から古墳時代前期とする。

(秋池)



第121図 I地区B区9d号住居跡遺構図



第122図 I地区B区9d号住居跡遺物図

第 28 表 I 地区 B 区 9 d 号住居跡遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
3104	台付甕 土 器	器高:(38mm)口径: 162mm底径:一口縁部 ~体部上端 $\frac{2}{3}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目後、横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、体部上端 は寛なで。	住居内覆土。
3105	台付甕 土 器	器高:(42mm)口径: [126mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬 質。灰黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、頸部は横 ハケ目、体部上半はなで。	住居内覆土。内面 に油煙付着。
3106	台付甕 土 器	器高:(66mm)口径: 一底径:64mm体部下 端~脚部 $\frac{2}{3}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	脚部は「ハ」の字に開く。外面:体部下 端は縦ハケ目、脚部は寛削り。内面: 体部下端底部は指なで、脚部は指な で。	住居内覆土。内外 面に油煙付着。

I 地区 B 区 10 a 号住居跡（第123~125図、第29表、図版21）

当住居跡は、B区10b号住居跡・B区3号古墳と重複する。B区10b号住居跡との新旧関係は不明である。B区3号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がB区3号古墳の墳丘下であることから、当住居跡の方が古い。

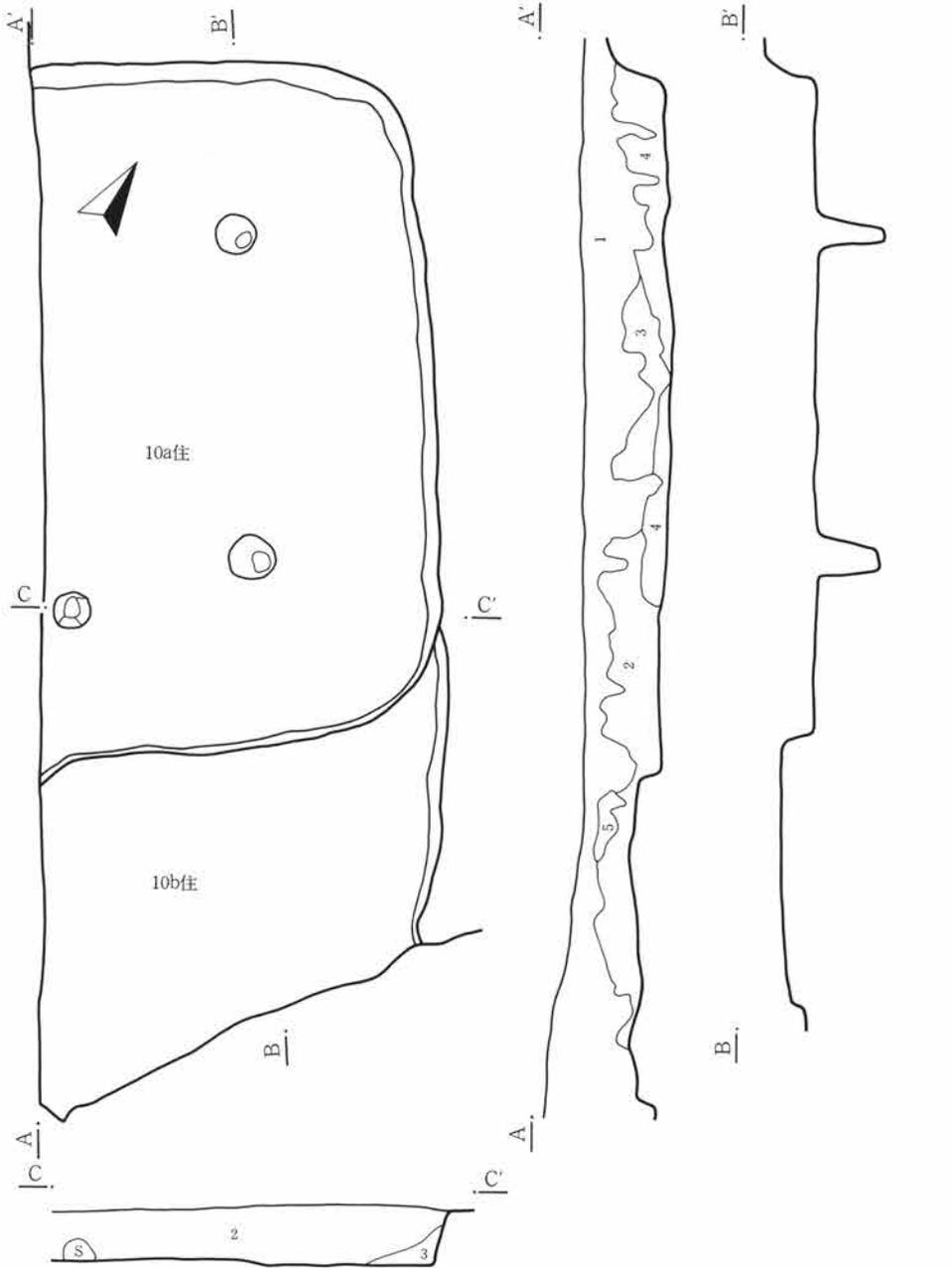
当住居跡の規模は、西側の約半分が調査区域外のために不明であるが、南北方向は約5.5mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約20~50cmを測り、残存状態は良好である。床面は、堅く、平坦である。壁溝は、検出できなかった。

住居跡内の南東部隅から焼土の堆積が検出できたが、調査区域内から、炉は検出できなかった。主柱穴は4本と推定できるが、調査区域内から検出できたのは2本である。規模は直径約30~35cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は、土師器の甕・「S」字状口縁を持つ台付甕・高杯・杯・罎・器台が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）

I 地区 B 区 10 b 号住居跡（第123図）

当住居跡は、B区10a号住居跡・B区16号住居跡・B区3号古墳と重複する。B区10a号住居跡との新旧関係は不明である。B区16号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区3号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面



I 地区B区10a号住居跡土層説明

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 5 黄褐色土 多量のローム粒子を含む。

L=88.56
0 1:60 3m

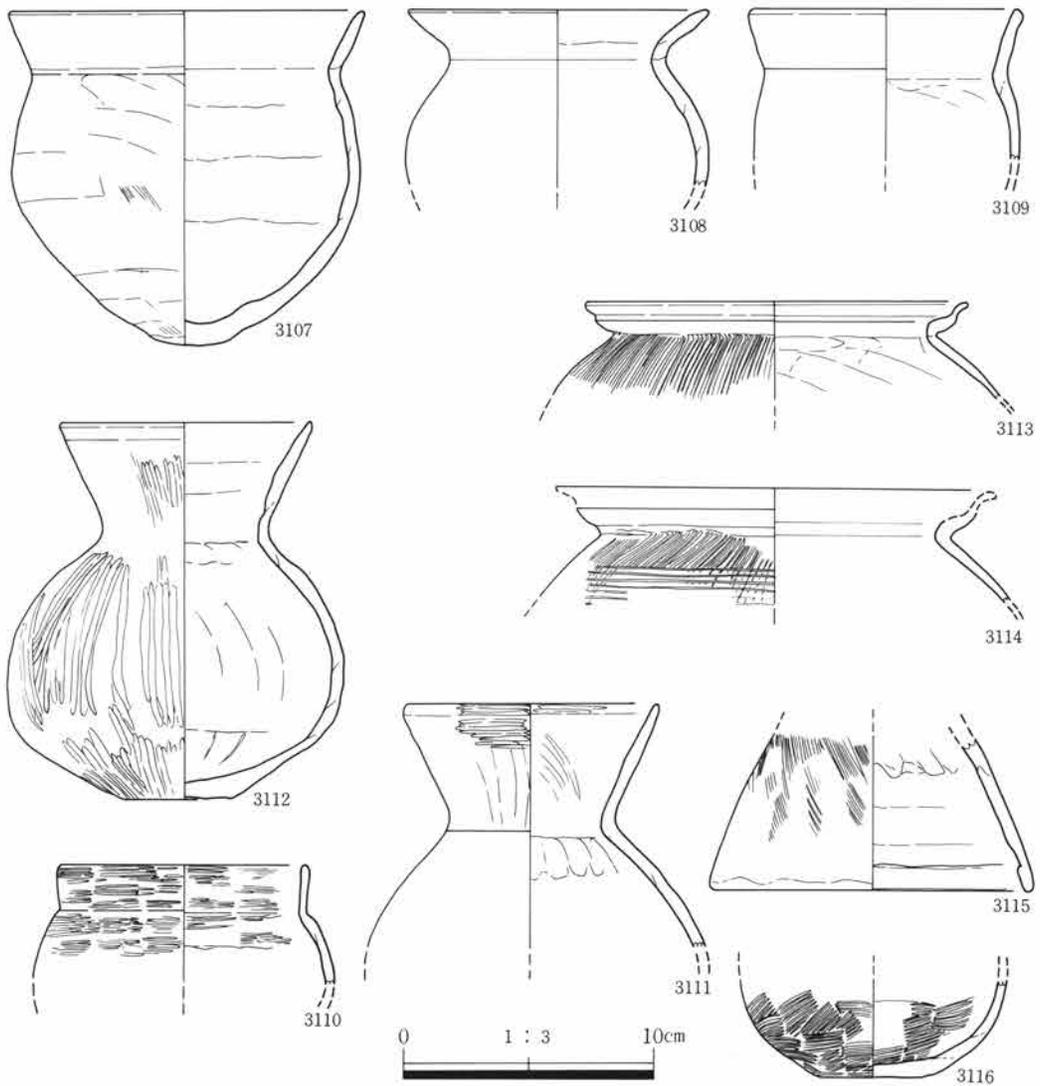
第123図 I 地区B区10a号・10b号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）

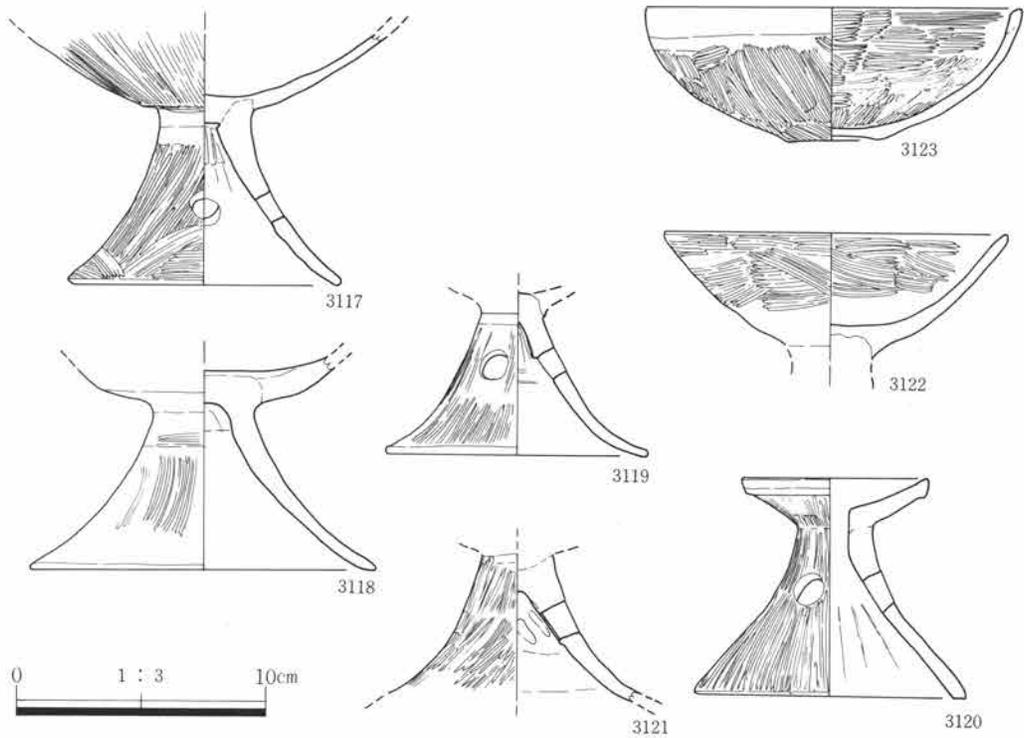
がB区3号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、北側部分がB区10a号住居跡との重複により確認できず、南側部分はB区16号住居跡により破壊されていることから不明である。平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定している。確認面までの壁の立ち上がりは、約20～25cmである。床面はやや軟弱であり、凹凸が多い。住居跡内からは、2基のピットが検出できたが、柱穴とは考えにくい。炉・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

当住居跡からは、遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、覆土の状態・周辺の遺構との関係から推定する時期は、古墳時代前期である。（井川）



第124図 I地区B区10a号住居跡遺物図(1)



第125図 I地区B区10a号住居跡遺物図(2)

第29表 I地区B区10a号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態
3107	甕土師器	器高:133mm口径:[142mm]底径:32mm口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの多量の小石、及び砂粒を含む。酸化。軟質。赤。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は口縁部。外面:口縁部は横なで、体部~底部はハケなで後、篋なで。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内北東部床上10cm。内外面に油煙付着。
3108	甕土師器	器高:(70mm)口径:[120mm]底径:一最大径:[122mm]口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。淡黄。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。内外面共に口縁部は横なで、体部上半はなで。外面口縁部~体部上半に赤色顔料塗布。	住居内北東部床上10cm。内外面に油煙付着。
3109	甕土師器	器高:(60mm)口径:108mm底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの多量の小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は口縁部。内外面共に口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3110	甕土師器	器高:(47mm)口径:[98mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部はやや外湾。内面口縁部、外面口縁部~体部上半に赤色顔料塗布。内外面共に口縁部~体部上半は篋磨き。	住居内覆土。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

3111	埴土師器	器高:(97mm)口径:100mm底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部上半は縦磨き、下半は篋などで、体部上半はなで。内面:口縁部は縦磨き口縁部~体部上半はなで。	住居内南東部床上5cm。内外面に油煙付着。
3112	埴土師器	器高:150mm口径:[100mm]底径:43mm最大径:134mm口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部下半。外面:口縁部は横なで、口縁部~体部は縦磨き。内面:口縁部は横なで、口縁部は縦磨き、体部~底部は篋なで。	住居内北東部床直
3113	台付甕土師器	器高:(39mm)口径:[153mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内覆土。外面に油煙付着。
3114	台付甕土師器	器高:(36mm)口径:一底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。褐灰。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。外面に油煙付着。
3115	台付甕土師器	器高:(62mm)口径:一底径:127mm脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	脚部端部は内側に折り返し。外面:縦ハケ目後、篋なで。内面:なで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
3116	壺土師器	器高:(38mm)口径:一底径:42mm体部下半~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。淡橙。	外面体部下半に赤色顔料塗布。内外面共に体部下半~底部は縦磨き。	住居内覆土。
3117	高杯土師器	器高:(100mm)口径:一底径:109mm体部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	脚部は「ハ」の字に開く。脚部に4個の円形穿孔。外面:体部~脚部は縦磨き。内面:体部は縦磨き、脚部は横なで。	住居内覆土。
3118	高杯土師器	器高:(84mm)口径:一底径:[140mm]体部下端~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	脚部は「ハ」の字に開く。外面:体部下端はなで、脚部は縦磨き。内面:脚部は横なで。	住居内南東部床上15cm。外面に油煙付着。
3119	高杯土師器	器高:(63mm)口径:一底径:105mm脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	脚部は「ハ」の字に開く。脚部に3個の円形穿孔。外面:脚部は縦磨き。内面:なで。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3120	器台土師器	器高:87mm口径:75mm底径:109mm完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	脚部は「ハ」の字に開く。脚部に3個の円形穿孔。外面:口縁部は横なで、体部~脚部は縦磨き。内面:口縁部~底部はなで、脚部は横なで。	住居内南東部床直外面に油煙付着。
3121	高杯土師器	器高:(58mm)口径:一底径:一脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	脚部は「ハ」の字に開く。脚部上半に1対、下半に1個、計3個の円形穿孔を確認。外面:脚部は縦磨き。内面:脚部はなで。	住居内南東部床直
3122	高杯土師器	器高:(50mm)口径:137mm底径:一杯部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。	口縁部~体部は緩やかに内湾。外面:口縁部~体部は横磨き。内面:口縁部~底部は縦磨き。	住居内覆土。

3123	杯 土師器	器高:53mm 口径:150mm 底径:37mm 完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明褐。	口縁部~体部は緩やかに内湾。平底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は寛磨き。内面:口縁部~底部は寛磨き。	住居内北東部床直内外面に多量の油煙付着。
------	----------	--------------------------------	--------------------------------	--	----------------------

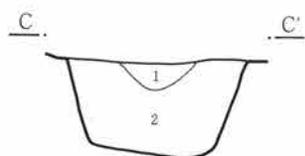
I 地区 B 区 12 a 号住居跡 (第126~129図、第30表、図版22)

当住居跡は、B区12b号住居跡・B区3号古墳と重複する。B区12b号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区3号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B区12b号住居跡・B区3号古墳に破壊されており確定はできないが、一辺約7.5mであり、平面形は隅丸方形を呈するものと推定している。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~35cmであるが南東部分は確認できず、残存状態は悪い。床面は、確認できる南西部では比較的堅く、平坦である。壁溝は検出できなかった。

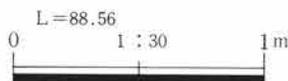
床面の確認できる範囲では、炉は検出できなかった。主柱穴は4本である。規模は、直径約30~40cm・床面からの深さ約70~80cmであり、平面形は、円形ないしは不整形な円形を呈する。住居跡内の北東部隅からは、ピットが検出できた。規模は、長軸約80cm・短軸約70cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は、不整形な円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。

遺物は、土師器の「S」字状口縁を持つ台付甕の他、土師器の高杯・器台・埴・手づくね土器などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。 (井川)



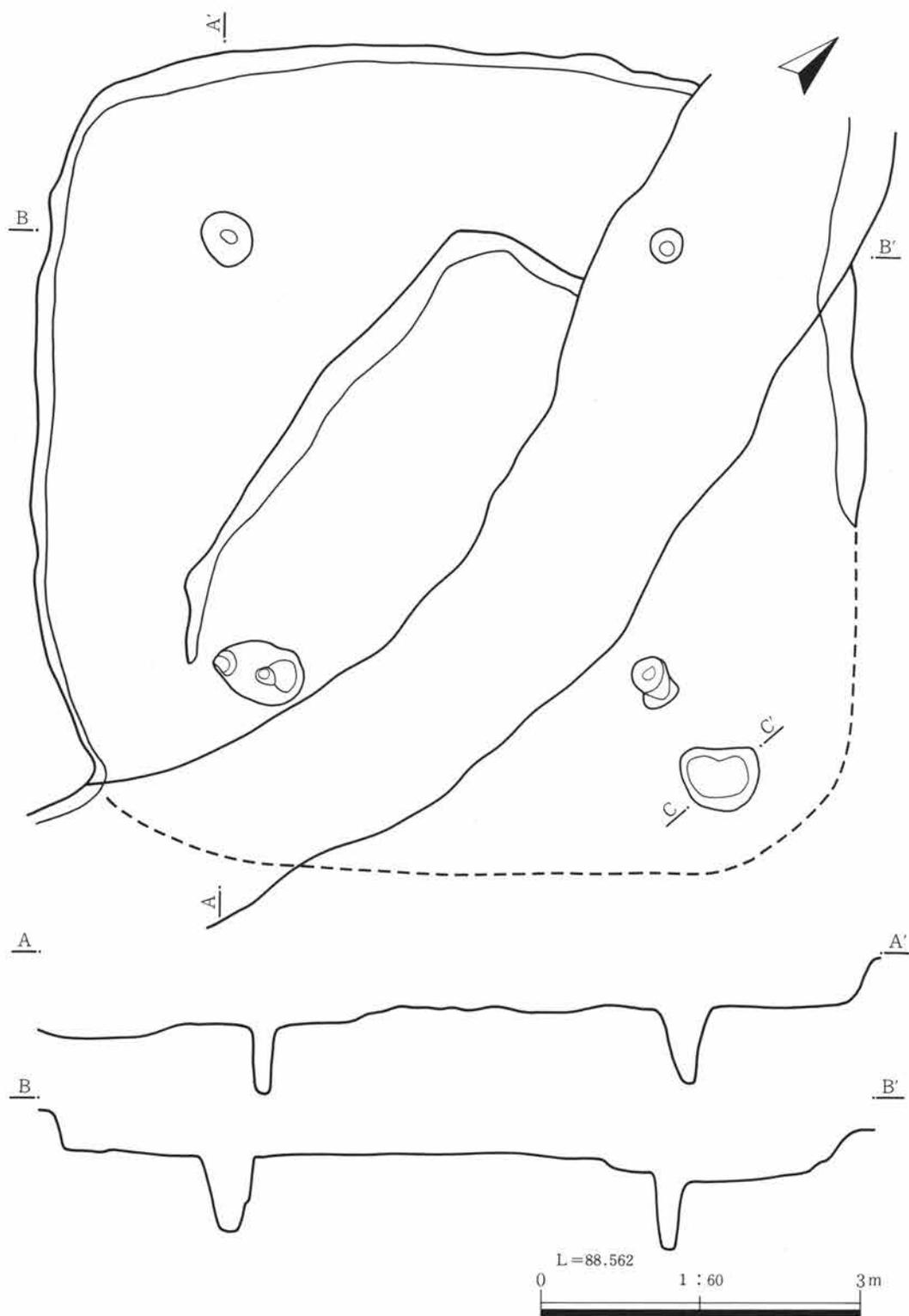
I 地区 B 区 12 a 号住居跡貯蔵穴土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- 2 褐色土 多量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。

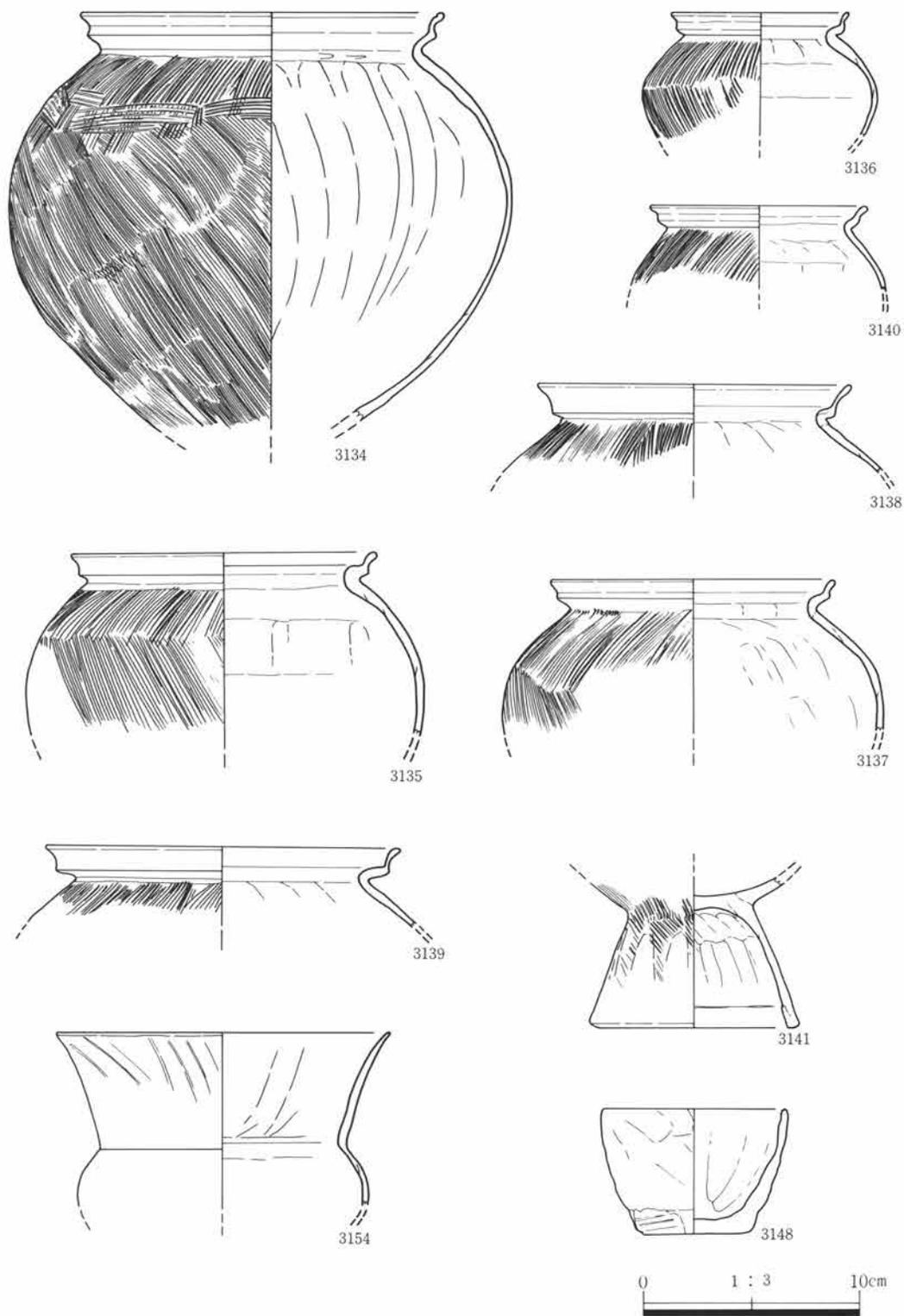


第126図 I 地区 B 区 12a 号住居跡遺構図 (1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）

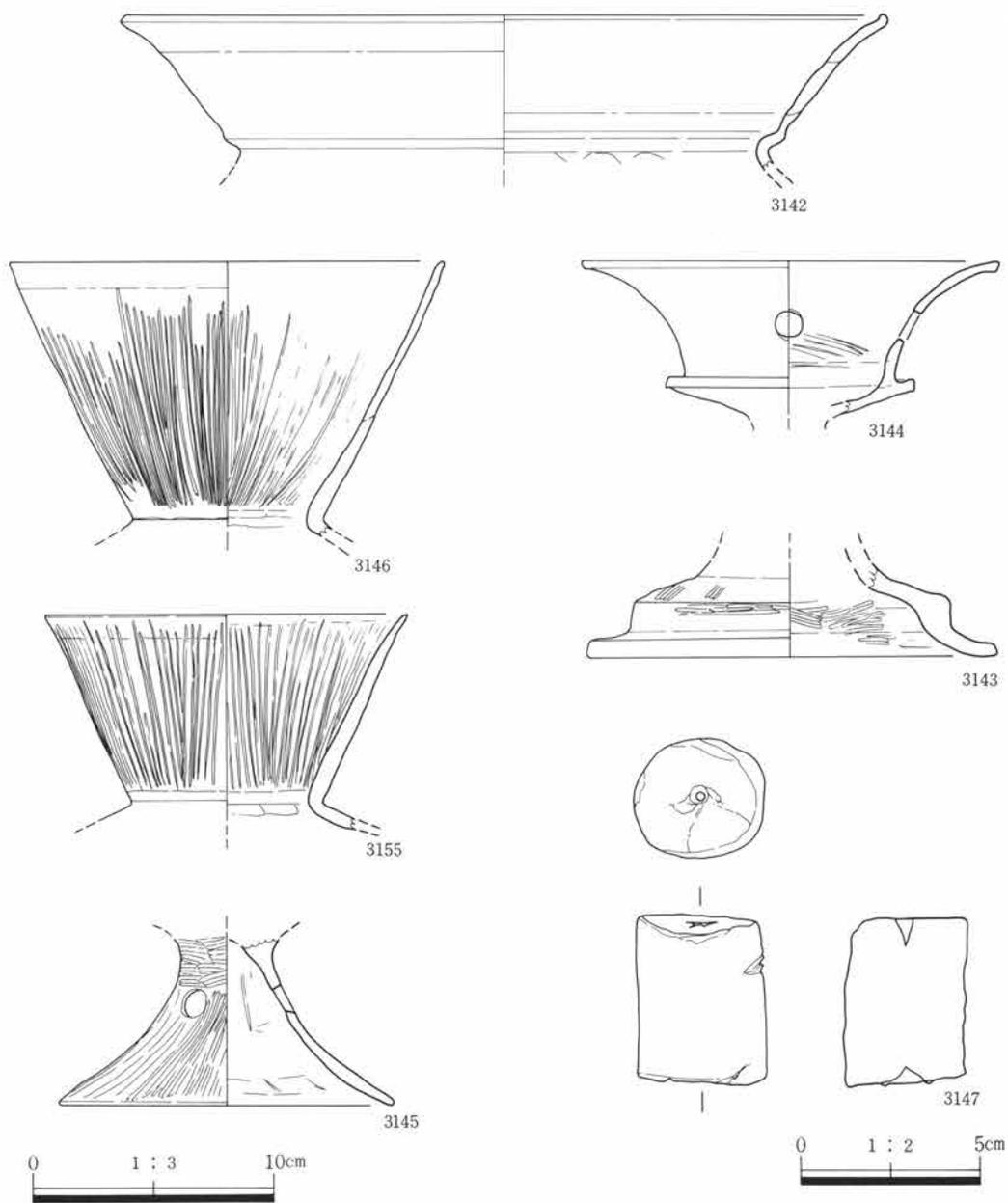


第127図 I地区B区12a号住居跡遺構図(2)



第128図 I地区B区12a号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第129図 I地区B区12a号住居跡遺物図(2)

第30表 I地区B区12a号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3134	台付甕土師器	器高:(192mm)口径:[168mm]底径:一最大径:232mm口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ目、体部下半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北西部床直内外面に油煙付着
3135	台付甕土師器	器高:(85mm)口径:141mm底径:一最大径:184mm口縁部～体部上半残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い赤褐。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半は寛なで。	住居内中央部床土5cm。内外面に油煙付着。
3136	台付甕土師器	器高:(58mm)口径:[82mm]底径:一最大径:[108mm]口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北東部床土10cm。内外面に油煙付着。
3137	台付甕土師器	器高:(70mm)口径:[132mm]底径:一最大径:[176mm]口縁部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで、指頭痕が残る。	住居内北東部床直外面に油煙付着。
3138	台付甕土師器	器高:(41mm)口径:[144mm]底径:一口縁部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内中央部床土5cm。内外面に多量の油煙付着。
3139	台付甕土師器	器高:(36mm)口径:[164mm]底径:一口縁部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内中央部床土5cm。内外面に油煙付着。
3140	台付甕土師器	器高:(39mm)口径:[100mm]底径:一口縁部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。灰黄褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3141	台付甕土師器	器高:(69mm)口径:一底径:97mm体部下端～脚部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	脚部は「ハ」の字に開き、端部は折り返し。外面:体部下端は縦ハケ目、脚部は縦ハケ目後寛なで。内面:体部下端～底部はなで、脚部は縦なで。	住居内中央部床直内外面に油煙付着
3142	台付甕土師器	器高:(63mm)口径:[312mm]底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質。褐灰。	口縁部は長大化し外湾。口縁部下端に段を持つ。内外面共に口縁部は横なで。	住居内中央部床土5cm。内外面に油煙付着。
3143	高杯土師器	器高:(39mm)口径:一底径:170mm脚部下半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	脚部下半に段を持ち、開く。内外面共に脚部下半は磨き。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3144	器台土師器	器高:(65mm)口径:[174mm]底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	直径3～4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	水平な円盤状底部に体部が付く。体部～口縁部は外湾。体部の円形穿孔は4個と推定。外面は器面が荒れているため観察不能。内面:体部は磨き、外は観察不能。	住居内南西部床土5cm。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

3145	高杯土師器	器高:(69mm)口径: 一底径:[140mm]脚 部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	脚部は「ハ」の字に開く。円形穿孔3 個。外面:脚部は篋磨き。内面:脚部 は篋まで。	住居内中央部床直 内外面に油煙附着
3146	埴土師器	器高:(113mm)口径: [180mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い黄橙。	口縁部は直線的にひらく。内外面共 に口縁端部は横なで、口縁部は篋磨 き。	住居内北東部床上 20cm。
3147	土製品	長さ:47mm直径:35mm 孔径:4mm	砂粒を含む。酸化。硬質。 鈍い黄橙。	棒状。穿孔は貫通せず。	住居内北西部床上 20cm。
3148	手づくね土器	器高:58mm口径:[84 mm]底径:47mm口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い赤褐。	口縁部~体部はやや内湾。外面:口縁 部~体部は指なで、体部下端は横な で底部は篋削り。内面:口縁部~底部 は指なで、指頭痕が残る。	住居内北西部床直
3154	埴土師器	器高:(80mm)口径: [154mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質。 鈍い橙。	口縁部はやや外湾。外面:口縁部上半 は篋磨き、口縁部下半~体部上半は なで。内面:口縁部~体部上半はな で。	住居内中央部床上 10cm。
3155	埴土師器	器高:(89mm)口径: 150mm底径:一口縁部 ~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 浅黄橙。	口縁部~体部は直線的にひらき、口 縁端部は僅かに外湾。外面:口縁部は 篋磨き、体部上端はなで。内面:口縁 部は篋磨き、体部上端はなで。	住居内北西部床上 10cm。外面に油煙 附着。

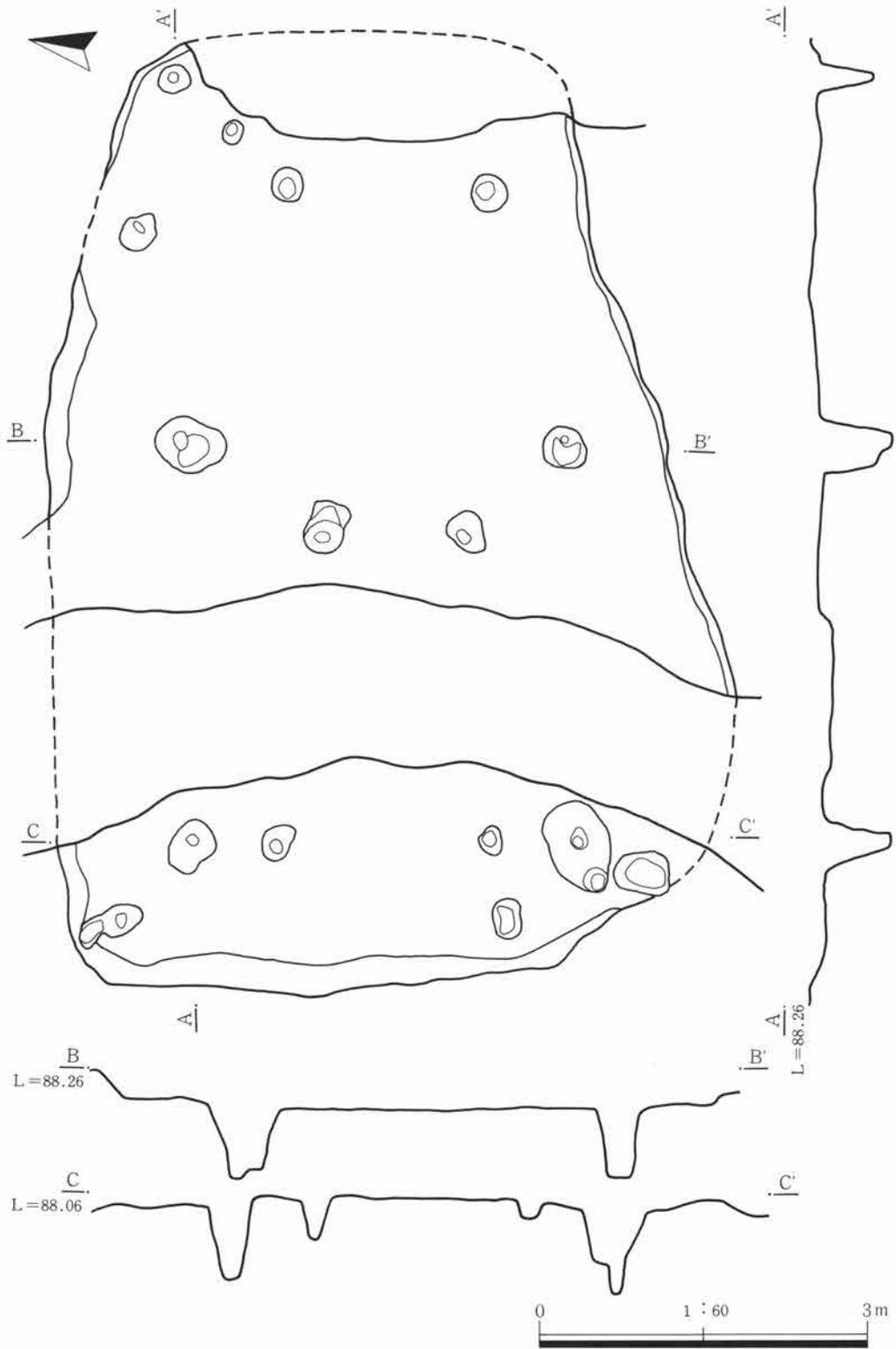
I 地区B区12b号住居跡（第130・131図、第31表）

当住居跡は、B区12a号住居跡・B区2号古墳・B区3号古墳と重複する。B区12a号住居跡との新旧関係は、同住居跡の南東部分の壁・床を破壊して当住居跡の壁・床が築かれていることから、当住居跡の方が新しい。B区2号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の東側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区3号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の西側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B区2号古墳・B区3号古墳に破壊されており、確定することはできないが、東西方向約8.5m・南北方向約6.2~4.5mであり、平面形は、西側が広く東側が狭い隅丸の四角形を呈している。主軸はN-70°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~15cmであり、残存状態は悪い。壁溝は検出することができなかった。

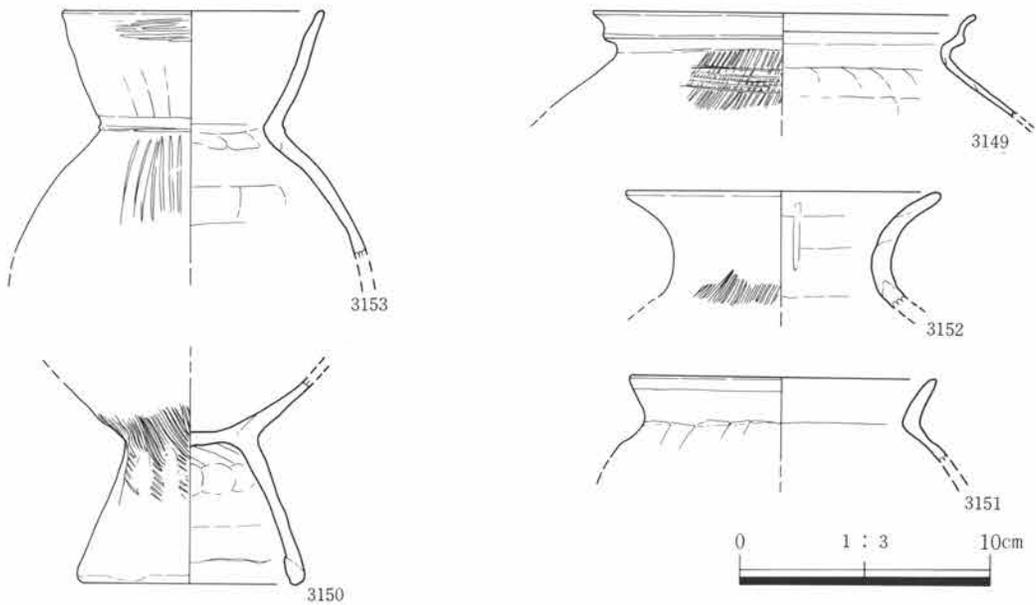
主柱穴は6本である。規模は、直径約30~50cm・床面からの深さ約50~70cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。その他、補助柱穴と考えられるピットが検出されたが、炉・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の「S」字状口縁を持つ台付甕の他、土師器の甕・壺が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。当住居跡は、同時期の外の住居跡とは形態が異なり、一般の住居跡とは異なった機能を持つことも考えられる。（井川）



第130図 I地区B区12b号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第131図 I地区B区12b号住居跡遺物図

第 31 表 I地区B区12b号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3149	台付甕土師器	器高:(40mm)口径:[152mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。
3150	台付甕土師器	器高:(81mm)口径:[88mm]底径:一体部下端~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	脚部は「ハ」の字に開く。脚端部は折り返し。外面:体部下端は縦ハケ目、脚部は斜めハケ目後、篋なで。内面:体部下端~底部はなで、脚部はなで指頭痕が残る。	住居内北西部床土30cm。
3151	甕土師器	器高:(32mm)口径:[122mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内北西部床直
3152	甕土師器	器高:(46mm)口径:[126mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部は大きく外湾。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。
3153	壺土師器	器高:(98mm)口径:[104mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部上半は篋磨き、下半は篋削り、体部上半はなで。内面:口縁部上半は横なで、下半~体部上半ははなで。	住居内北西部床土10cm。

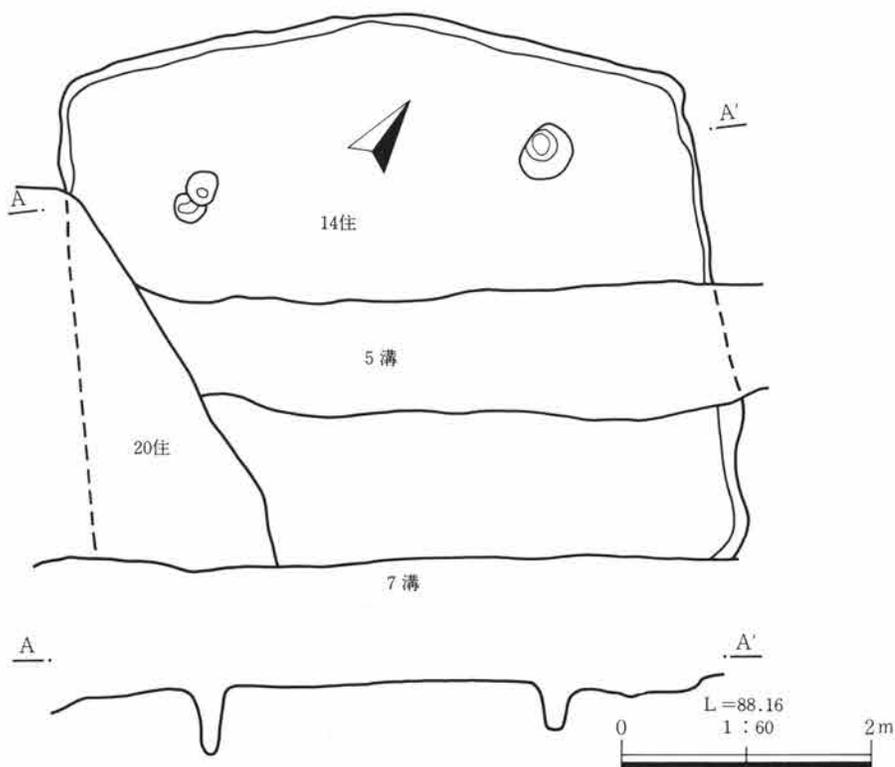
I 地区B区14号住居跡 (第132図)

当住居跡は、B区17号住居跡・B区20号住居跡・B区5号溝跡・B区7号溝跡と重複する。B区17号住居跡との新旧関係は不明である。B区20号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区5号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区7号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の南端部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B区20号住居跡・B区5号溝跡・B区7号溝跡により破壊され確定できないが、東西方向約5.3mであり、平面形は、不整形な隅丸長方形を呈するものと推定している。確認面までの壁の立ち上がりは、検出できた北側部分で約10~15cmであり、残存状態は悪い。床面は、やや軟弱であり、細かい凹凸が覆い。壁溝は検出できなかった。

主柱穴は、4本と推定されるが、検出できたのは北側部分の2基である。規模は、直径約25~30cm・床面からの深さ約35~50cmであり、平面形は、不整形な円形を呈する。炉・貯蔵穴は検出できなかった。

当住居跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、住居跡の覆土・形態、周辺の遺構との関係から、古墳時代前期の住居跡と推定している。(井川)



第132図 I 地区B区14号住居跡遺構図

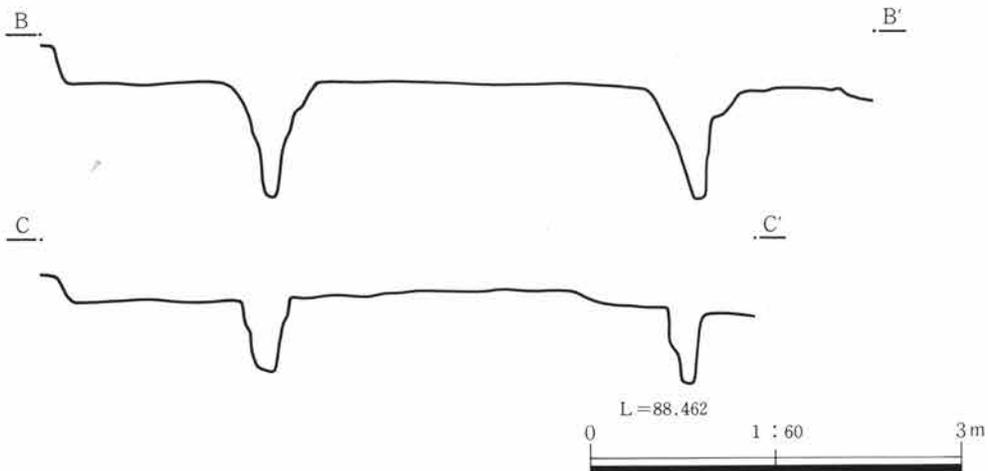
I 地区B区16号住居跡（第133～135図、第32表）

当住居跡は、B区10b号住居跡・B区11号住居跡・B区3号古墳と重複する。B区10b号住居跡との新旧関係は、当住居跡がB区10b号住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。B区3号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面が同古墳の墳丘下であること、同古墳の周溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区11号住居跡との直接的な新旧関係を確認することはできないが、同住居跡とB区3号古墳との新旧関係から、当住居跡の方が古い。

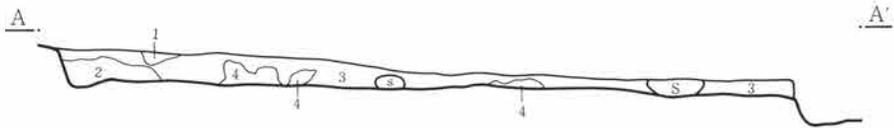
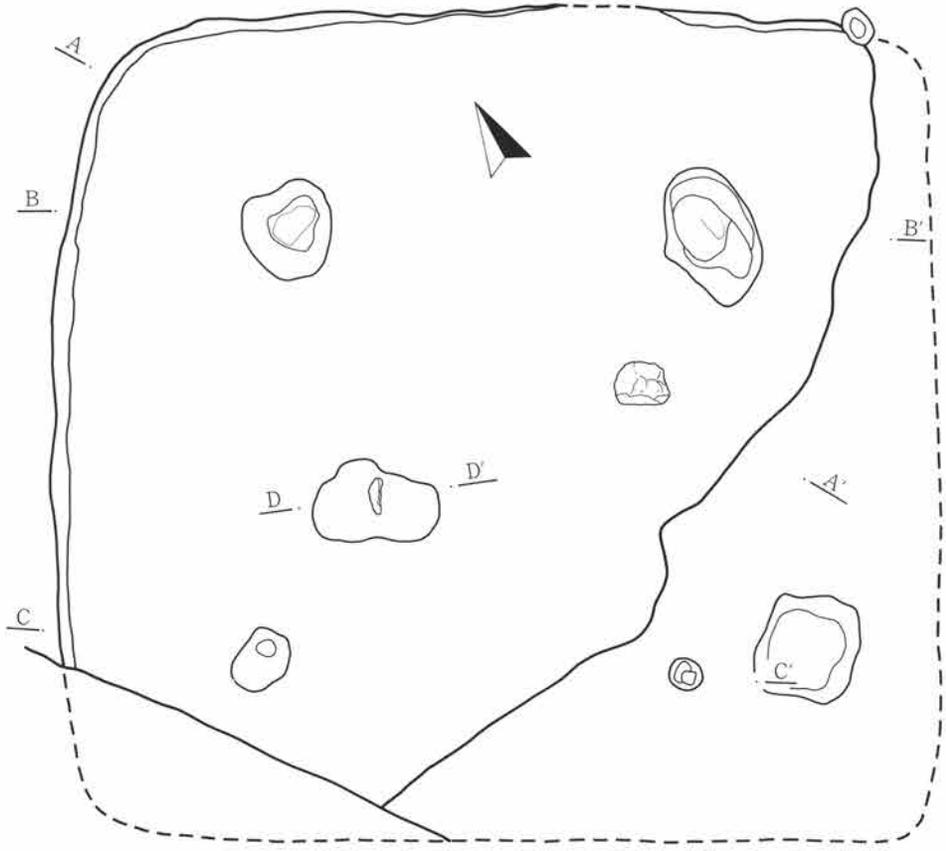
当住居跡の規模は、B区3号古墳の周溝により破壊されており不明であるが、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定している。残存状態は北西部分で約30cmをはかるが、南東部分へ行くほど悪くなる。検出できた部分での床面の状態は、比較的堅く、平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は、東側柱穴の中間やや中央部よりに築かれている。炉内からは、囲みに使用されたと考えられる河原石・「S」字状口縁を持つ甕・及び焼土が検出できた。支柱穴は4本である。規模は、直径40～70cmであり、平面形は、不定型である。特に北側部分の柱穴の形は異常であり、柱を引き抜いた可能性がある。住居内の南東部隅付近と推定される位置からは、貯蔵穴と考えられるピットを検出することができた。規模は、一辺約80cm・確認面からの深さ約30cmであり、平面形は方形を呈する。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の壺・高杯・器台・埴が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）

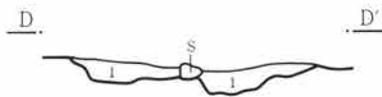


第133図 I地区B区16号住居跡遺構図（1）



I地区B区16号住居跡土層説明

- 1 褐色土 やや多量のローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 少量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックの混合。



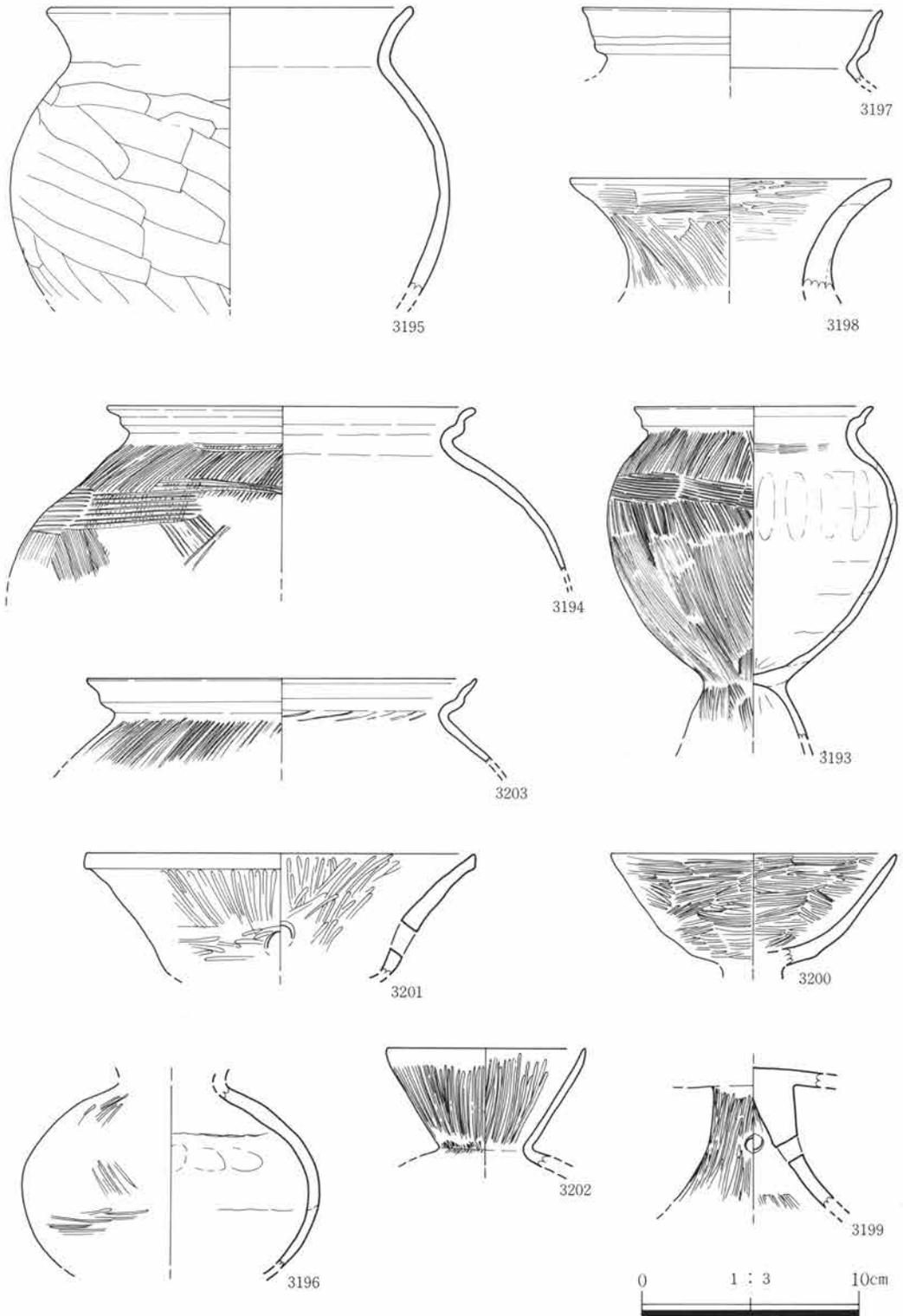
I地区B区16号住居跡炉土層説明

- 1 暗褐色土 多量のローム粒子・少量の焼土粒子を含む。



第134図 I地区B区16号住居跡遺構図(2)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第135図 I 地区B区16号住居跡遺物図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

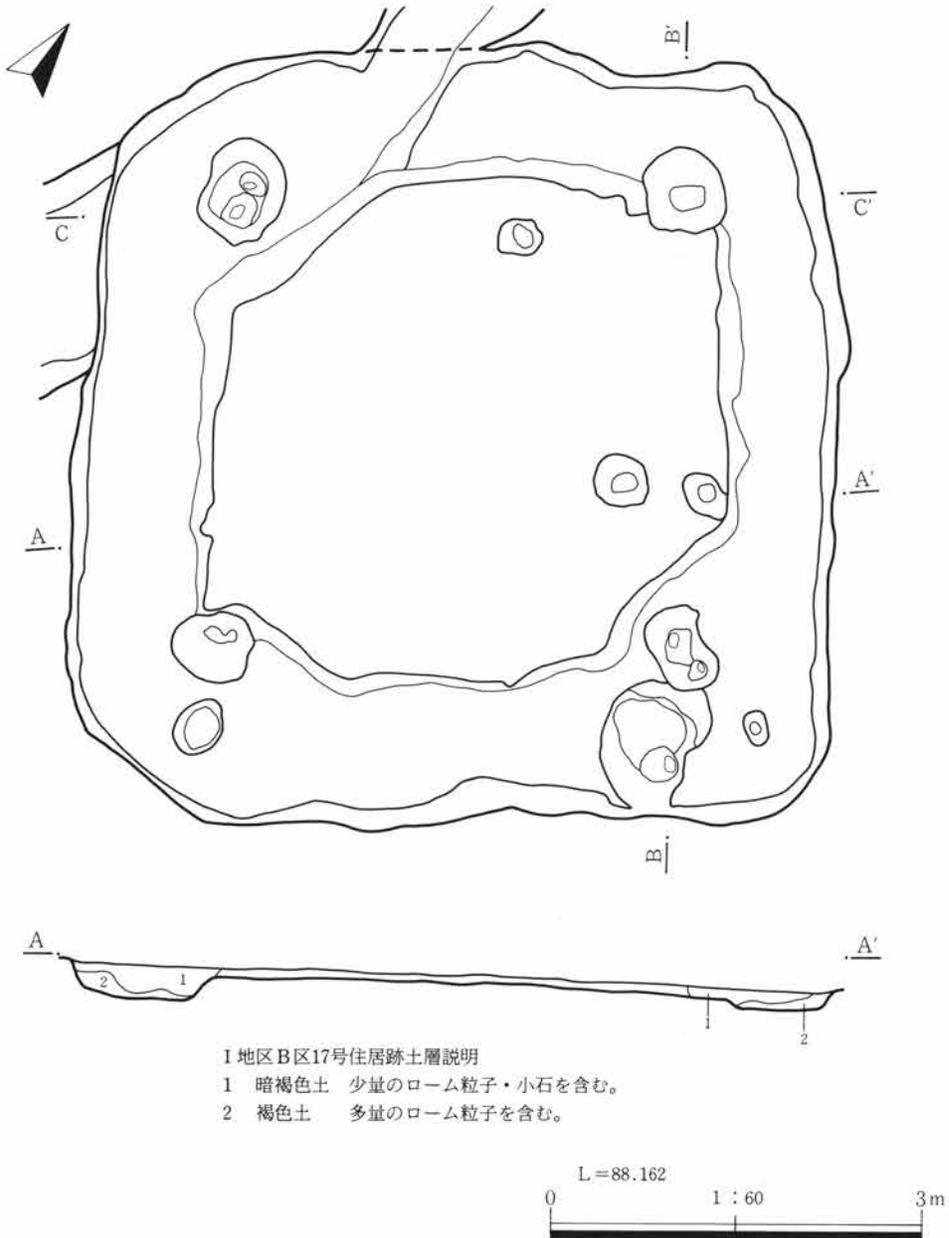
第32表 I地区B区16号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3193	台付壺土師器	器高:(153mm)口径:110mm底径:一最大径:134mm口縁部～底部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。脚部は「ハ」の字にひらく。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ目、体部下半～脚部上半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで、体部上半に指頭痕が残る。	貯蔵穴内。内外面に油煙付着。
3194	台付壺土師器	器高:(75mm)口径:170mm底径:一口縁部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。浅黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	炉北。内外面に油煙付着。
3195	壺土師器	器高:(132mm)口径:[169mm]底径:一最大径:[202mm]口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北東部床直内外面に油煙付着
3196	埴土師器	器高:(84mm)口径:一底径:一底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。やや軟質。酸化。鈍い黄橙。	体部は球形。外面:体部は篋磨き。内面:体部はなで、上半に指頭痕が残る	住居内中央部床直外面に油煙付着。
3197	壺土師器	器高:(33mm)口径:138mm底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	口縁部は段を持ち、外湾。内外面共に口縁部は横なで。	住居内南西部床直内外面に油煙付着
3198	壺土師器	器高:(50mm)口径:[148mm]底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部は大きく外湾。外面:口縁部上半は横ハケ目、下半は横ハケ目。内面:口縁部は横篋磨き。	住居内北東部床上5cm。
3199	高杯土師器	器高:(64mm)口径:一底径:一底部～脚部上半残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い橙。	脚部は「ハ」の字にひらき、4個の円形穿孔。外面:脚部は縦篋磨き。内面:底部は篋磨き、脚部下半は縦ハケ目。	住居内南東部床上10cm。
3200	高杯土師器	器高:(51mm)口径:[132mm]底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い橙。	底部に稜を持ち、体部～口縁部はひろがる。内外面共に口縁部～底部は篋磨き。	住居内覆土。
3201	器台土師器	器高:()口径:[]底径:一口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。浅黄橙。	口縁部～体部は外湾。体部に円形穿孔あり。内外面共に口縁部～体部は篋磨き。	住居内北西部床上5cm。
3202	埴土師器	器高:(54mm)口径:[92mm]底径:一口縁部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は外湾し、ひろがる。外面:口縁端部は横なで、口縁部は篋磨き、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁端部は横なで、口縁部は篋磨き。	住居内中央部床直内面に油煙付着。
3203	台付壺土師器	器高:(38mm)口径:[180mm]底径:一口縁部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、頸部は斜めハケ目、体部上端はなで。	住居内中央部床直

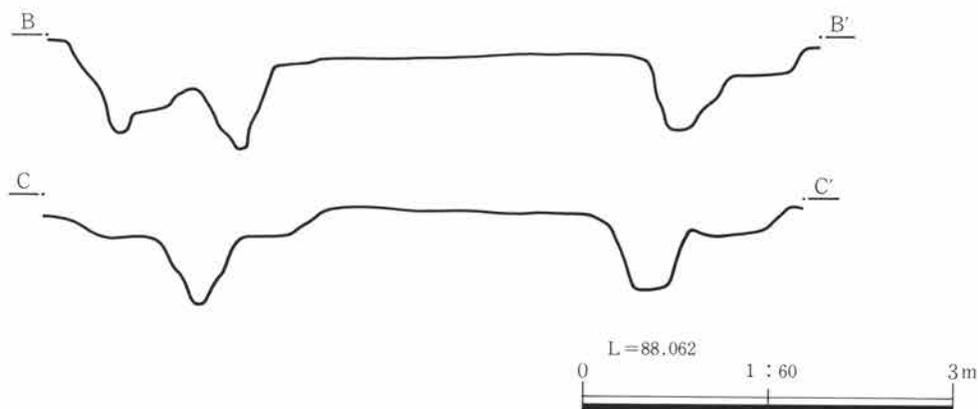
I 地区 B 区 17 号住居跡（第136～138図、第33表）

当住居跡は、B 区 14 号住居跡・B 区 3 号古墳と重複する。B 区 14 号住居跡との新旧関係は不明である。B 区 3 号古墳との新旧関係は、同古墳が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西方向約6.1m・南北方向約6.2mであり、平面形は、隅丸長方形を呈する。



第136図 I 地区 B 区 17 号住居跡遺構図（1）

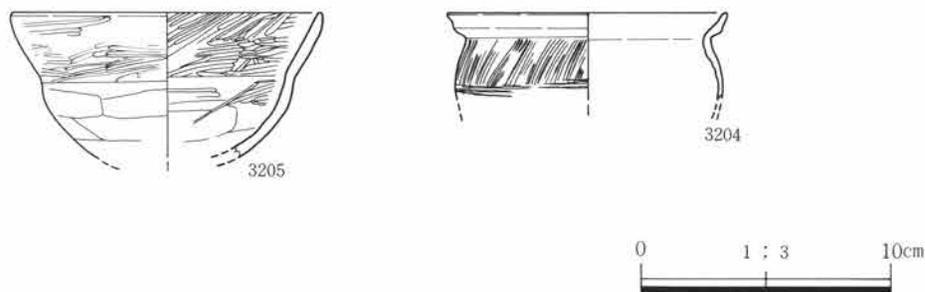


第137図 I地区B区17号住居跡遺構図(2)

主軸はN-33°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、掘形で約10~15cmであり、残存状態は悪い。床面は中央部分でのみ確認できた。確認できた部分の床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は検出することはできなかった。主柱穴は4本である。規模は、直径約50~80cm・床面からの深さ約50~70cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不定型を呈する。住居内の南東部隅からは、ピットを検出することができた。規模は、長軸約100cm・短軸約70cm・確認面からの深さ約30cmであり、平面形は、不定型である。貯蔵穴と考えられる。その他、当住居跡からは5基の小ピットが検出できた。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の罎が出土しているが、出土量は非常に少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。(井川)



第138図 I地区B区17号住居跡遺物図

第 33 表 I 地区 B 区 17 号住居跡遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
3204	台付甕 土 師 器	器高:(35mm)口径: [112mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径 2~3 mm の小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、体部上半 はなで。	住居内覆土。
3205	罎 土 師 器	器高:(58mm)口径: [124mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 1~2 mm の小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	内面に稜を持つ。外面:口縁部は篋磨 き、体部は篋なで。内面:口縁部~体 部は篋磨き。	住居内覆土。

I 地区 B 区 24 号住居跡 (第 139・140 図、第 34 表、図版 22)

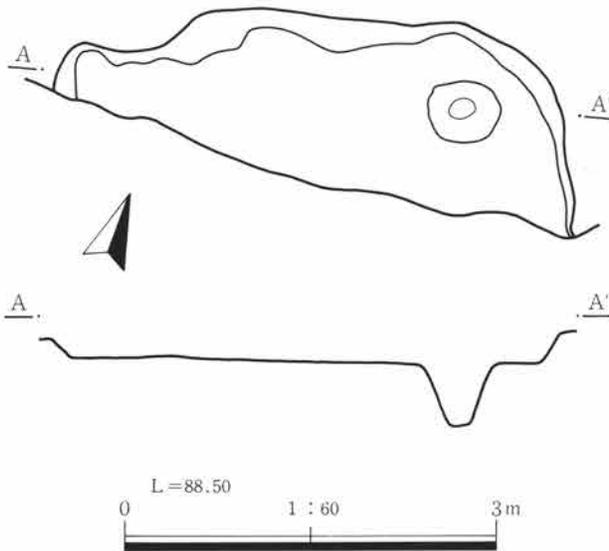
当住居跡は、B 区 8 号住居跡・B 区 1 号古墳と重複する。B 区 8 号住居跡との新旧関係は不明である。B 区 1 号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B 区 1 号古墳により大部分が破壊されているために不明であるが、東西方向は約 4.0m であり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約 5~30cm である。検出できた部分の床面は、やや軟弱であり、凹凸が多い。壁溝は検出できなかった。

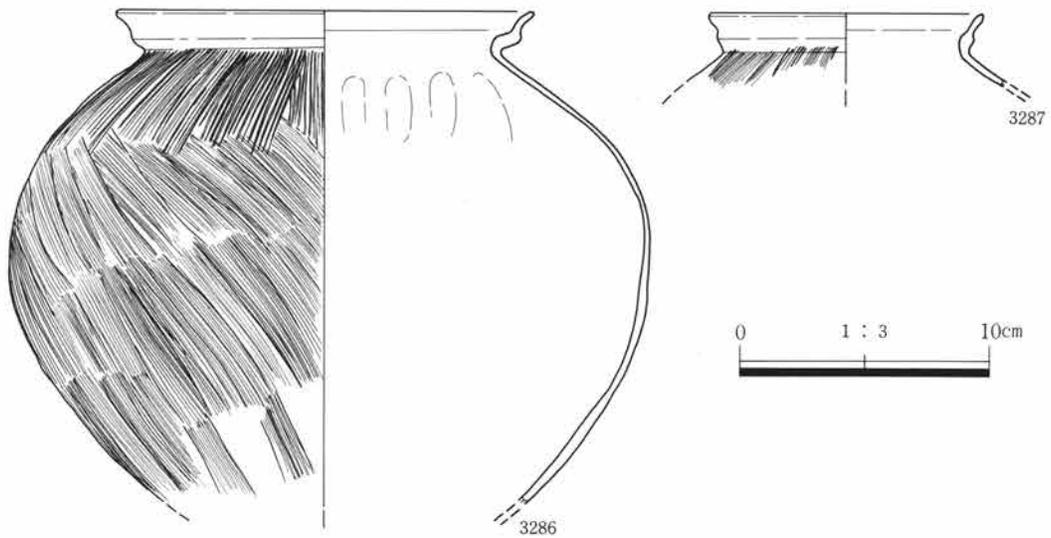
住居跡内の北東部隅からはピットが検出できた。規模は、長軸約 60cm・短軸約 50cm・床面からの深さ約 50cm であり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。ピット内からは、台付甕が出土して

おり、柱穴若しくは貯蔵穴と考えられる。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕が出土しているが、出土量は非常に少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。(井川)



第 139 図 I 地区 B 区 24 号住居跡遺構図



第140図 I地区B区24号住居跡遺物図

第34表 I地区B区24号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3286	台付壺 土師器	器高:(196mm)口径: 167mm 底径:一最大 径:256mm口縁部~体 部%残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部は縦ハケ目。内面:口縁部 は横なで、体部上端に指頭痕が残り、 体部はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙附着
3287	台付壺 土師器	器高:(29mm)口径: [110mm]底径:一口縁 部~体部上端%残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。明黄褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。

I地区B区25号住居跡 (第141~144図、第35表、図版24)

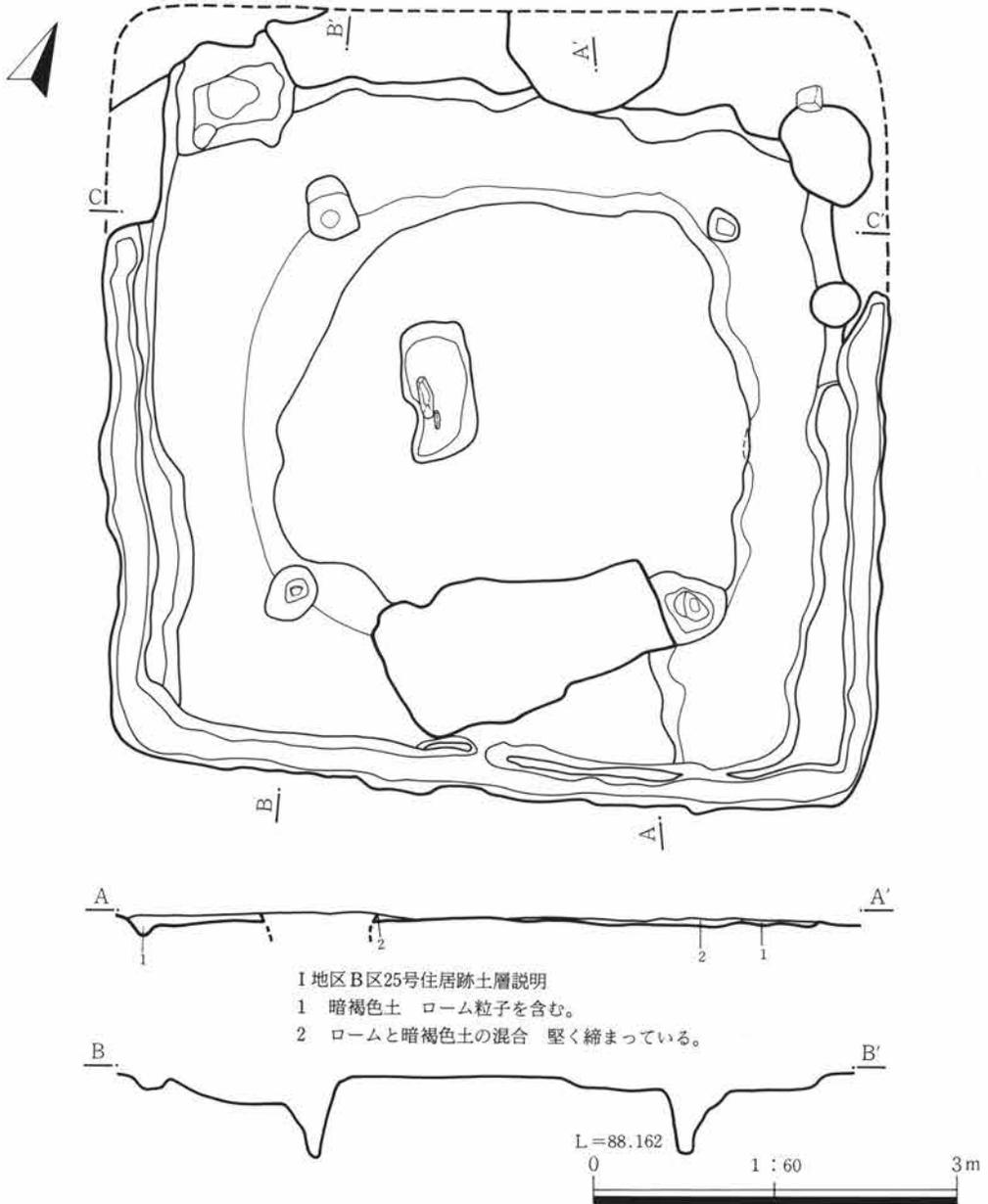
当住居跡は、B区1号石槨・B区12号溝跡・B区5号土坑と重複する。B区1号石槨との新旧関係は、同石槨が当住居跡の床面を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。B区12号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の貯蔵穴の一部を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区5号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡は壁溝と掘形で確認できた住居跡であり、北側の壁が確認できなかったために規模の確定はできないが、東西方向は約6.3mであり、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。壁溝底面からの壁の立ち上がりは、約10cmである。床面は比較的堅く、平坦

II 古墳時代（竪穴住居跡）

である。壁溝は、東側部分の北よりから南側部分を通り、西側部分の北よりまで検出できたが、北側部分からは検出できなかった。規模は、幅約30cm・床面からの深さ約10cmである。

炉は、中央部のやや西よりから検出された。規模は、長辺約100cm・短辺約60cmであり、平面形は、楕円形に近い長方形を呈する。炉内からは、囲み石に使用されたと考えられる河原石と焼土が検出できた。支柱穴は4本である。規模は、直径約25~40cm・床面からの深さ約70~100cmであ



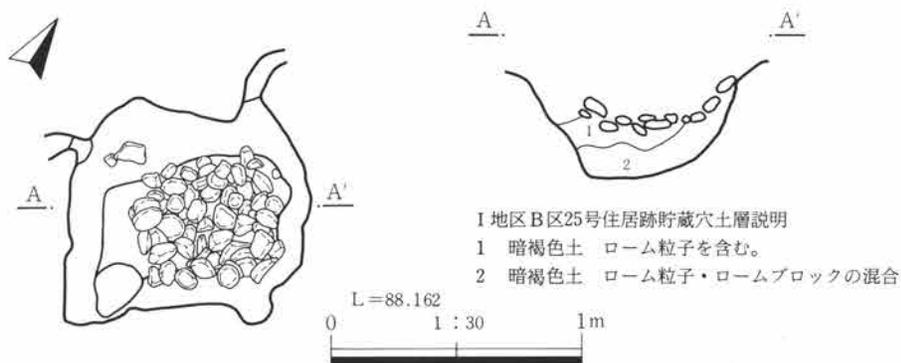
第141図 I 地区B区25号住居跡遺構図（1）



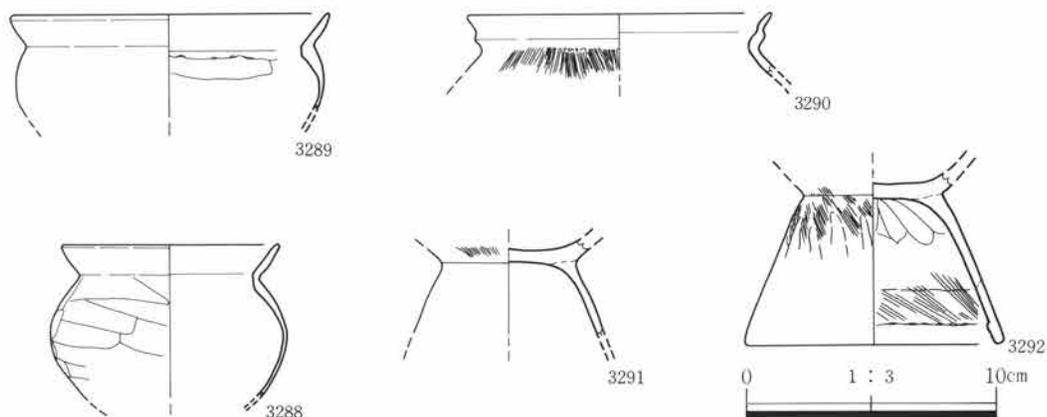
第142図 I地区B区25号住居跡遺構図(2)

り、平面形は、不整形な円形を呈する。貯蔵穴は住居跡内の北西部隅付近と考えられる位置に築かれている。規模は、長辺約100cm・短辺約80cm・確認面からの深さ約50cmであり、平面形は、不整形な長方形を呈する。内部には、拳大から人頭大の河原石が敷き詰められている状態で検出できた。掘形は、中央部分が高く、周囲を掘り込んでいる状態である。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の甕が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。(井川)



第143図 I地区B区25号住居跡遺構図(3)



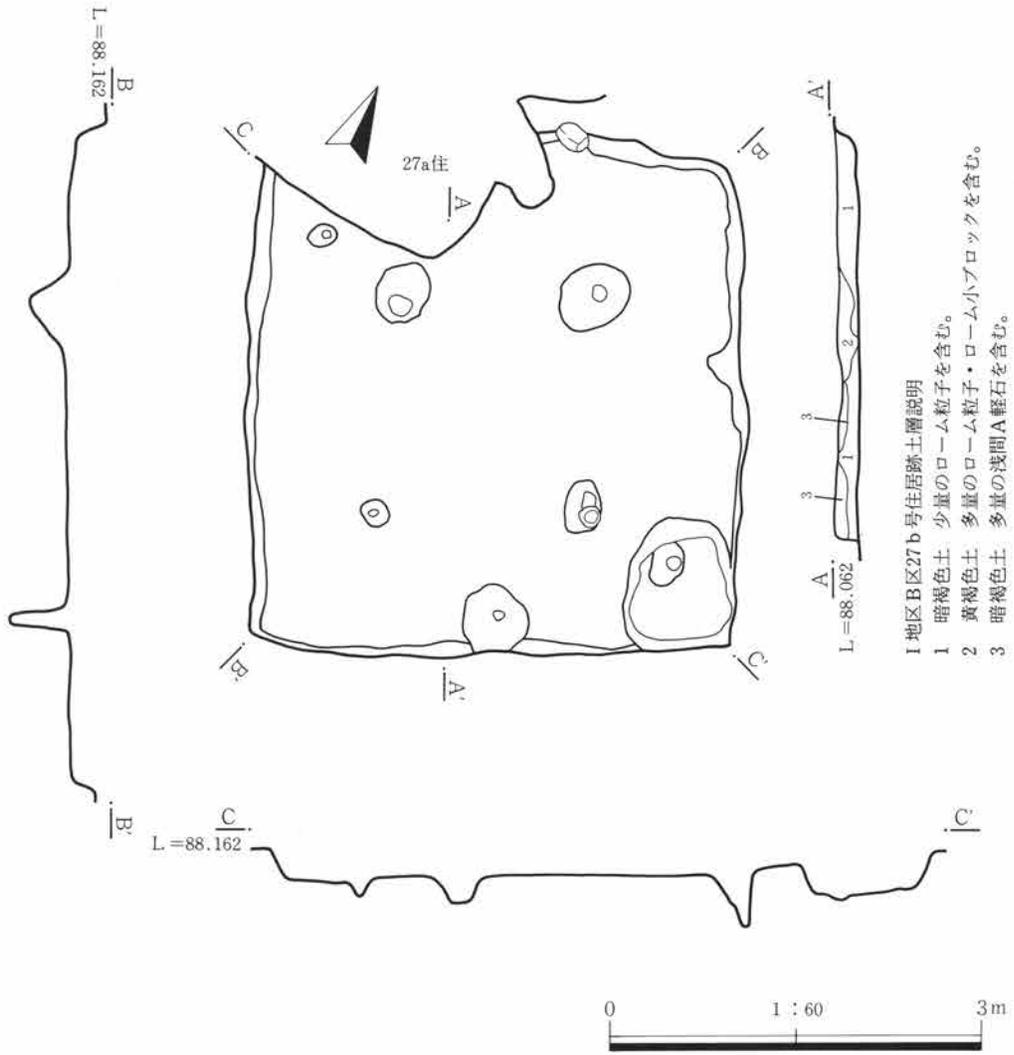
第144図 I地区B区25号住居跡遺物図

第 35 表 I 地区 B 区 25 号住居跡遺物観察表

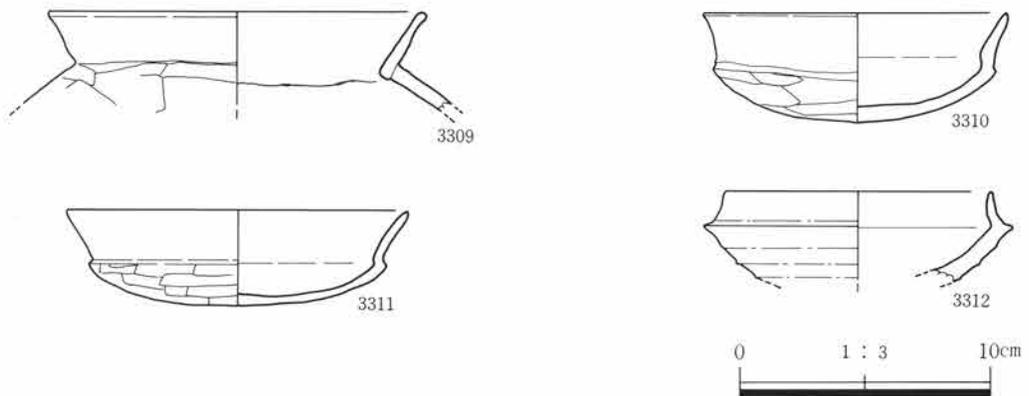
番号	器 土 器 種 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出 土 状 態 備 考
3288	甕 土 師 器	器高:(62mm)口径: [88mm]底径:一最大 径:95mm口縁部～体 部 $\frac{3}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。赤灰。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は 体部中央。外面:口縁部は横なで、体 部は鋭削り。内面:口縁部は横なで、 体部はなで。	住居内床下。内外 面に油煙付着。
3289	甕 土 師 器	器高:(41mm)口径: [128mm]底径:一口縁 部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は 口縁部。内外面共に口縁部は横なで、 体部上半はなで。	住居内覆土。
3290	台付甕 土 師 器	器高:(25mm)口径: [122mm]底径:一口縁 部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。外面 に油煙付着。
3291	台付甕 土 師 器	器高:(33mm)口径: 一底径:一体部下端 ～脚部上半 $\frac{3}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	脚部は「ハ」の字にひらく。外面:体部 下端は縦ハケ目、脚部上半はなで。内 面:体部下端～脚部上半はなで。	住居内北西部床直 内外面に油煙付着
3292	台付甕 土 師 器	器高:(68mm)口径: 一底径:104mm体部下 端～脚部 $\frac{3}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い黄褐。	脚部は「ハ」の字にひらく。脚部下 端は内側に折り返し。外面:体部下 端は縦ハケ目、脚部は斜めハケ目なで。 内面:底部～脚部上半はなで、脚部下 半はハケ目。	住居内南東部床直 内外面に油煙付着

I 地区 B 区 27 b 号住居跡（第145・146図、第36表、図版24）

本住居跡は、耕作土、黄褐色土中で確認された。27 a 号住居跡と重複する。27 a 号住居跡より古い。北辺は27 a 号住居跡により破壊されている。規模は、東西方向で約4.0m。南北方向で約4.2mを測り、方位は西辺でN-70°-Wである。平面形は隅丸長方形を呈する。床面はローム層で固く締まっている。支柱穴は4本で、径約25～50cm、床面からの深さ約25～50cmで、柱間は約1.6mである。貯蔵穴は東南隅にあり、長径約100cm・短径85cm・床面からの深さ約25cmを測る。出土遺物は土師器の甕・杯、須恵器の杯身が出土している。出土遺物から古墳時代後期とする。（秋池）



第145図 I 地区B区27b号住居跡遺構図



第146図 I 地区B区27b号住居跡遺物図

第 36 表 I 地区 B 区 27 b 号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3309	甕土師器	器高:(38mm)口径:[151mm]底径:一口縁部~体部上端%残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。褐。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篔削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内中央部床上10cm。内外面に油煙付着。
3310	杯土師器	器高:44mm口径:122mm底径:一口縁部~底部%残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	外稜をもつ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篔削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内覆土。
3311	杯土師器	器高:38mm口径:[136mm]底径:一口縁部~底部%残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	外稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篔削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内覆土。
3312	杯身須恵器	器高:(36mm)口径:[106mm]底径:一口縁部~体部%残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。還元。硬質灰白。	口縁部は内湾。受け部はほぼ平坦。外面:口縁部~受け部は回転なで、体部は回転篔削り。内面:口縁部~体部は回転なで。	住居内覆土。

I 地区 B 区 28 号住居跡（第147~149図、第37表、図版23）

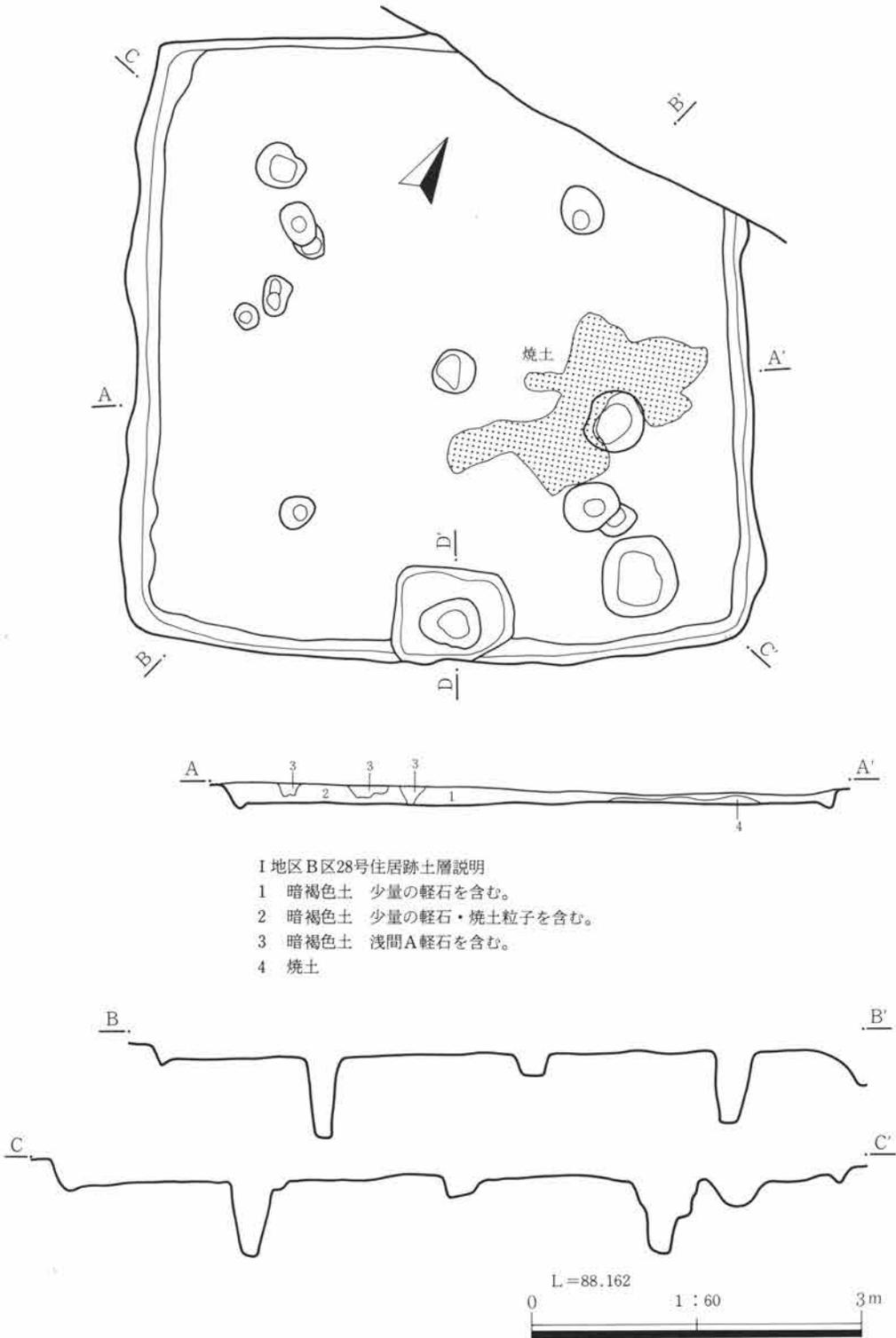
当住居跡は、B区11号溝跡と重複する。新旧関係は、B区11号溝跡が当住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、一辺約5.5mであり、平面形は隅丸方形を呈する。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。東側部分・南側部分・西側部分からは壁溝が検出できたが、北側部分からは検出できなかった。規模は、幅約15~20cm・床面からの深さ約5~10cmである。

炉は、東側柱穴の中間に築かれている。炉石は検出できなかったが、浅いピットと、そのピットの周辺部分に焼土が散布しているのを検出することができた。主柱穴は4基検出できた。規模は、直径約30~50cm・床面からの深さ約60~70cmであり、平面形は、不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられるピットは2基検出できた。1基は南側中央の壁際に築かれている。規模は、上面が長辺約70cm・短辺約50cmであり、平面形は不整形な長方形を呈し、下面は長軸約40cm・短軸約30cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。床面からの深さは約30cmである。覆土中には炭化物・灰の混入が確認できた。他方は南東部隅付近に築かれている。規模は、直径約70cm・床面からの深さ約35cmであり、平面形は方形に近い不整形な円形を呈する。その他住居跡内からは、5基の小ピットが検出できた。

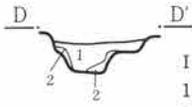
遺物は、土師器の甕・壺・高杯・杯の他、土錘が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。

(井川)



第147図 I 地区B区28号住居跡遺構図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



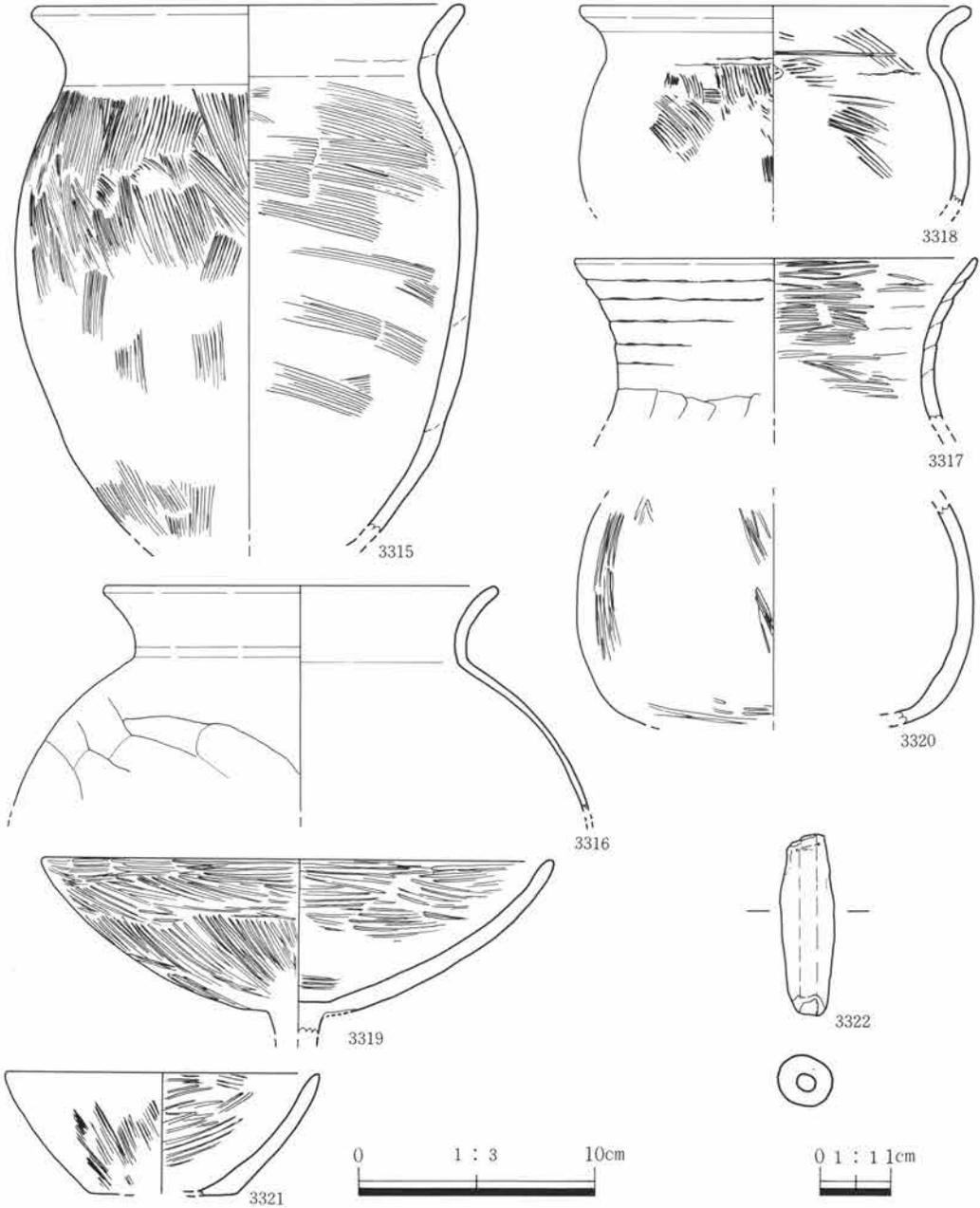
I 地区B区28号住居跡貯蔵穴土層説明 (D-D')

- 1 褐色土 少量の灰・炭化物を含む。
- 2 褐色土 ローム小ブロックを含む。

L=88.162



第148図 I 地区B区28号住居跡遺構図 (2)



第149図 I 地区B区28号住居跡遺物図

第37表 I地区B区28号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3315	甕土師器	器高:(222mm)口径:183mm底径:一最大径:196mm口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径4~5mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで体部は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部は横ハケ目、体部下端はなで	住居内中央部床直外面に多量の油煙付着。
3316	甕土師器	器高:(93mm)口径:[167mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。軟質赤灰。	口縁部は大きく外湾。外面:口縁部は横なで、頸部にハケ目が残、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで体部上半はなで。	住居内中央部床直内外面に油煙付着
3317	甕土師器	器高:(68mm)口径:[170mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。黄灰。	口縁部は外湾。外面に輪積み痕が顕著に残る。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は篋磨き、体部上端はなで。	住居内中央部床直内外面に多量の油煙付着。
3318	甕土師器	器高:(83mm)口径:[165mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い褐。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで体部上半はハケ目。内面:口縁部上半は横なで、口縁部下半~体部上半はハケ目。	住居内北西部隅床上10cm。内外面に油煙付着。
3319	高杯土師器	器高:(73mm)口径:[216mm]底径:一口縁部~脚部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部~体部は僅かに内湾しつつひろがる。外面:口縁部~体部は篋磨き。内面:口縁部~底部は篋磨き。	住居内中央部床直外面に油煙付着。
3320	壺土師器	器高:(92mm)口径:一底径:一体部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	体部は大きく湾曲。外面:体部は篋磨き。内面:体部はなで。	住居内北東部床直内外面に多量の油煙付着。
3321	杯土師器	器高:(51mm)口径:[134mm]底径:[62mm]口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は僅かに外湾。平底。外面:口縁部は横なで、体部は縦ハケ目後、篋なで、底部は篋削り。内面:口縁部~体部はハケ目、底部はなで。	住居内中央部床直内外面に赤色顔料塗布。
3322	土錘	長さ:(51mm)直径:15mm孔径:4mm	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い褐。	棒状。両端がやや細くなる。	住居内覆土。

I地区B区30c号住居跡(第150・151図、第38表、図版23・24)

当住居跡は、B区30b号住居跡・B区11号溝跡と重複する。B区30b号住居跡との新旧関係は、当住居跡の覆土中にB区30b号住居跡の壁・床が築かれていることから、当住居跡の方が古い。B区11号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の南東部分から北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

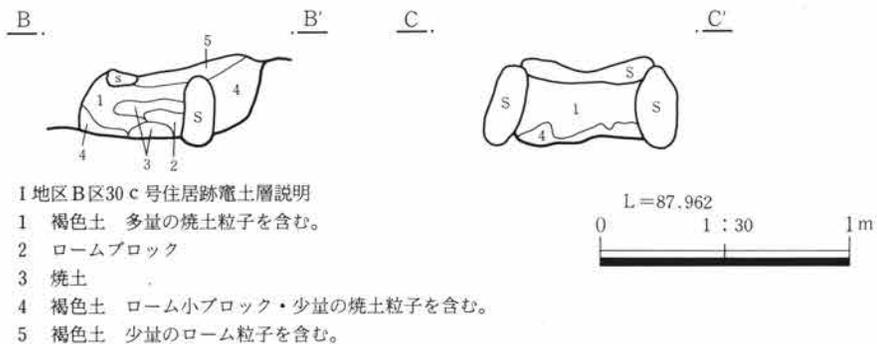
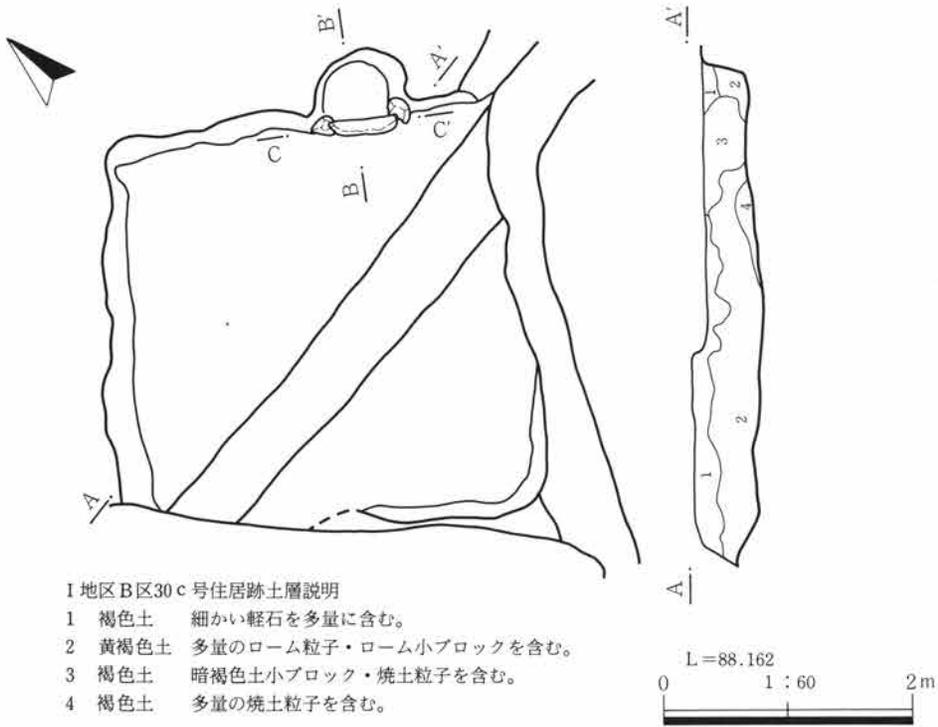
当住居跡の規模は、東西方向約3.4m・南北方向約3.5mであり、平面形は隅丸方形を呈すると推定される。主軸はN-48°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約35~40cmであり、残存

II 古墳時代（竪穴住居跡）

状態は比較的良好である。床面は堅く、平坦である。壁溝は検出できなかった。

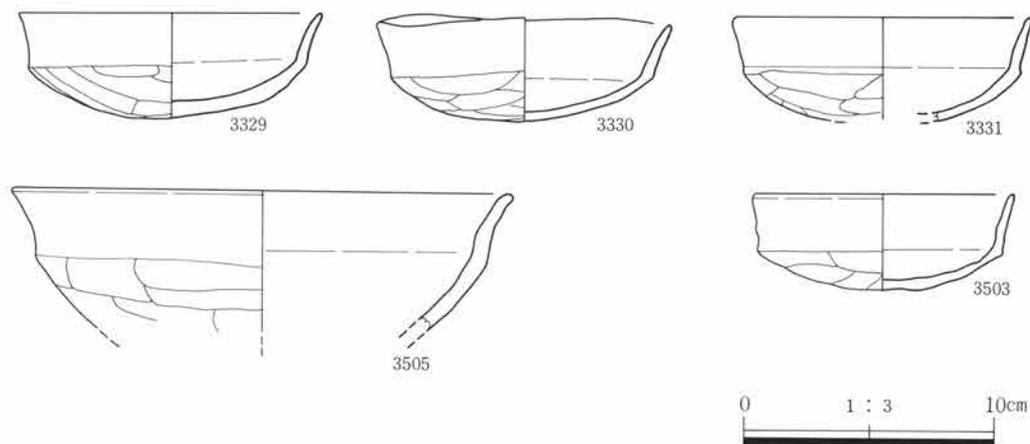
竈は、東側壁のやや南よりに築かれている。残存状態は良好である。袖は短く、角閃石安山岩を用いており、そのうえには砂岩の天井石が据えられている状態であった。また、燃烧部の中央やや奥よりには、角閃石安山岩の支脚が地山に埋め込まれている状態で検出できた。燃烧部は壁外にあり、竈の壁外への張り出しは約40cmである。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の杯が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、6世紀末～7世紀初である。 (井川)



第150図 I 地区B区30c号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第151図 I地区B区30c号住居跡遺物図

第38表 I地区B区30c号住居跡遺物観察表

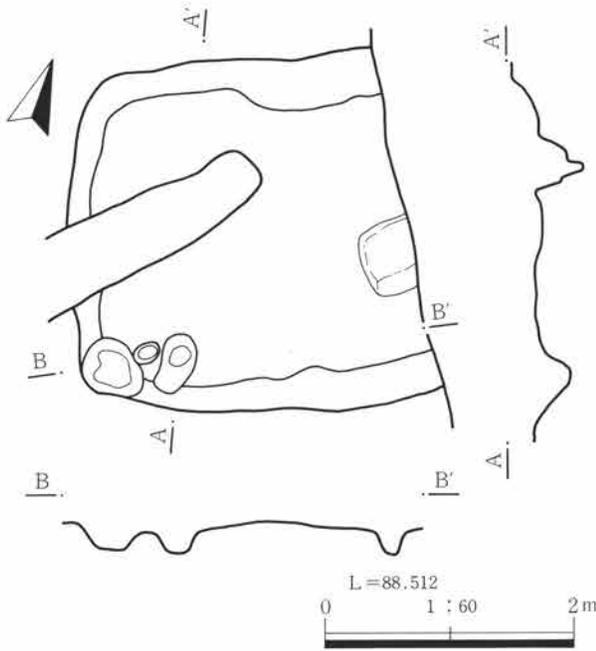
番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3329	杯土師器	器高:42mm口径:122mm底径:一ほぼ完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	竈内。内外面に油煙付着。
3330	杯土師器	器高:41mm口径:118mm底径:一完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	竈内。
3331	杯土師器	器高:(41mm)口径:[118mm]底径:一口縁部~底部 $\frac{2}{3}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	外稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	竈内。
3503	杯土師器	器高:38mm口径:104mm底径:一口縁部の一部欠	砂粒を含む。酸化。軟質。橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで。体部~底部はなで。	
3505	杯土師器	器高:(56mm)口径:[200mm]底径:一全体の $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を僅かに含む。酸化。やや軟質。橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	

II 古墳時代（竪穴住居跡）

I 地区 B 区 31 号住居跡（第 152～154 図、第 39 表、図版 25）

当住居跡は、B 区 2 号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面が B 区 2 号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

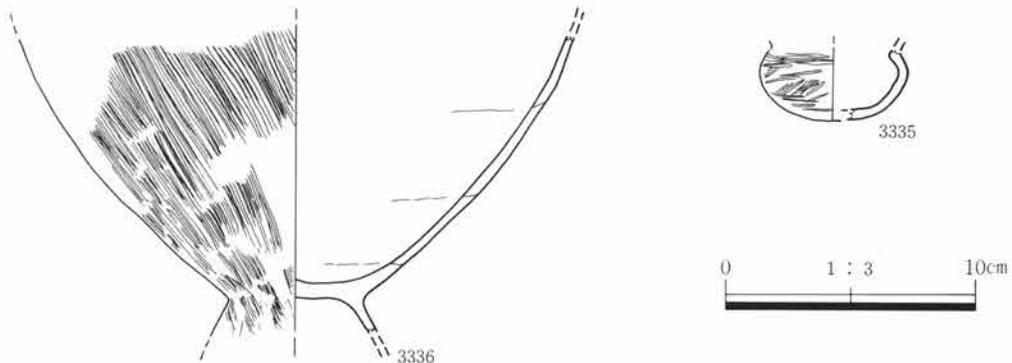
当住居跡の規模は、東側部分が調査区域外のために不明であるが、南北方向は約 2.8m であり、平面形は隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約 10～20cm であり、残存状態は不良である。床面は比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。



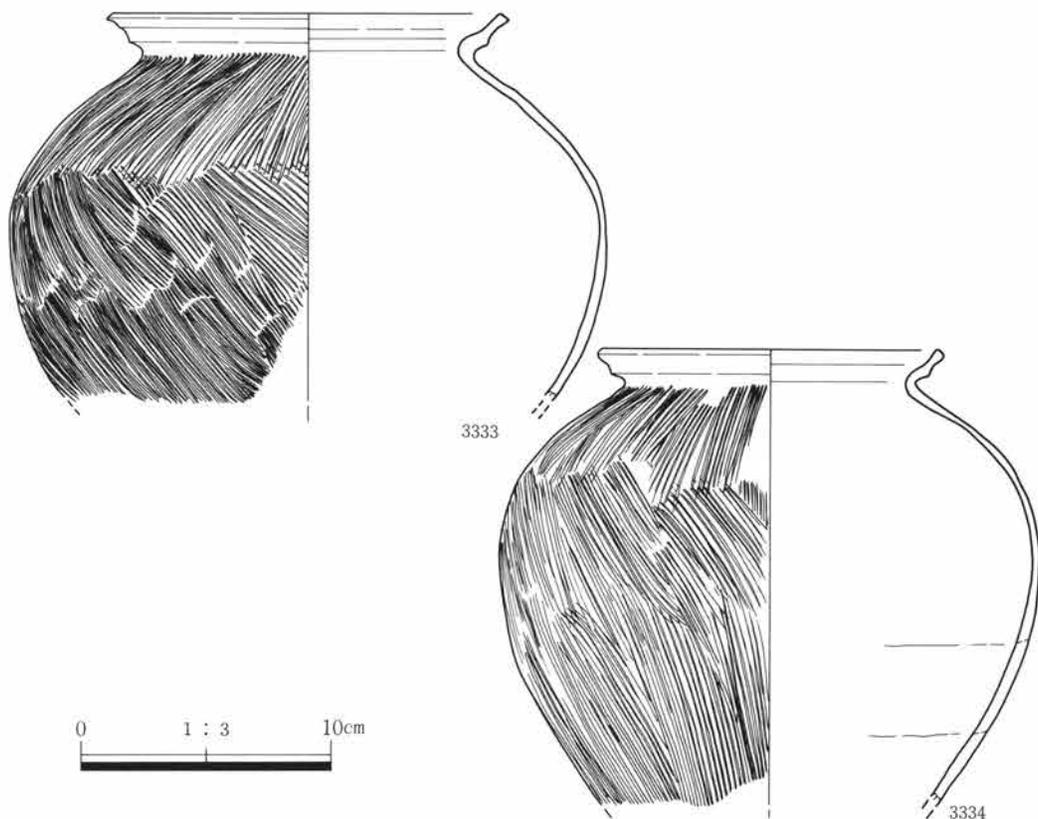
第 152 図 I 地区 B 区 31 号住居跡遺構図

調査範囲から炉は検出できなかったが、5 基のピットが検出できた。南西部隅のピットの規模は、長軸約 50cm・短軸約 40cm・床面からの深さ約 15cm であり、内部から台付甕が出土している。貯蔵穴の可能性も考えられる。この東に接する小ピットを除く 2 基のピットは、柱穴と考えられる。規模は、直径約 25～40cm・床面からの深さ約 20～40cm であり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕、土師器の壺が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）



第 153 図 I 地区 B 区 31 号住居跡遺物図（1）



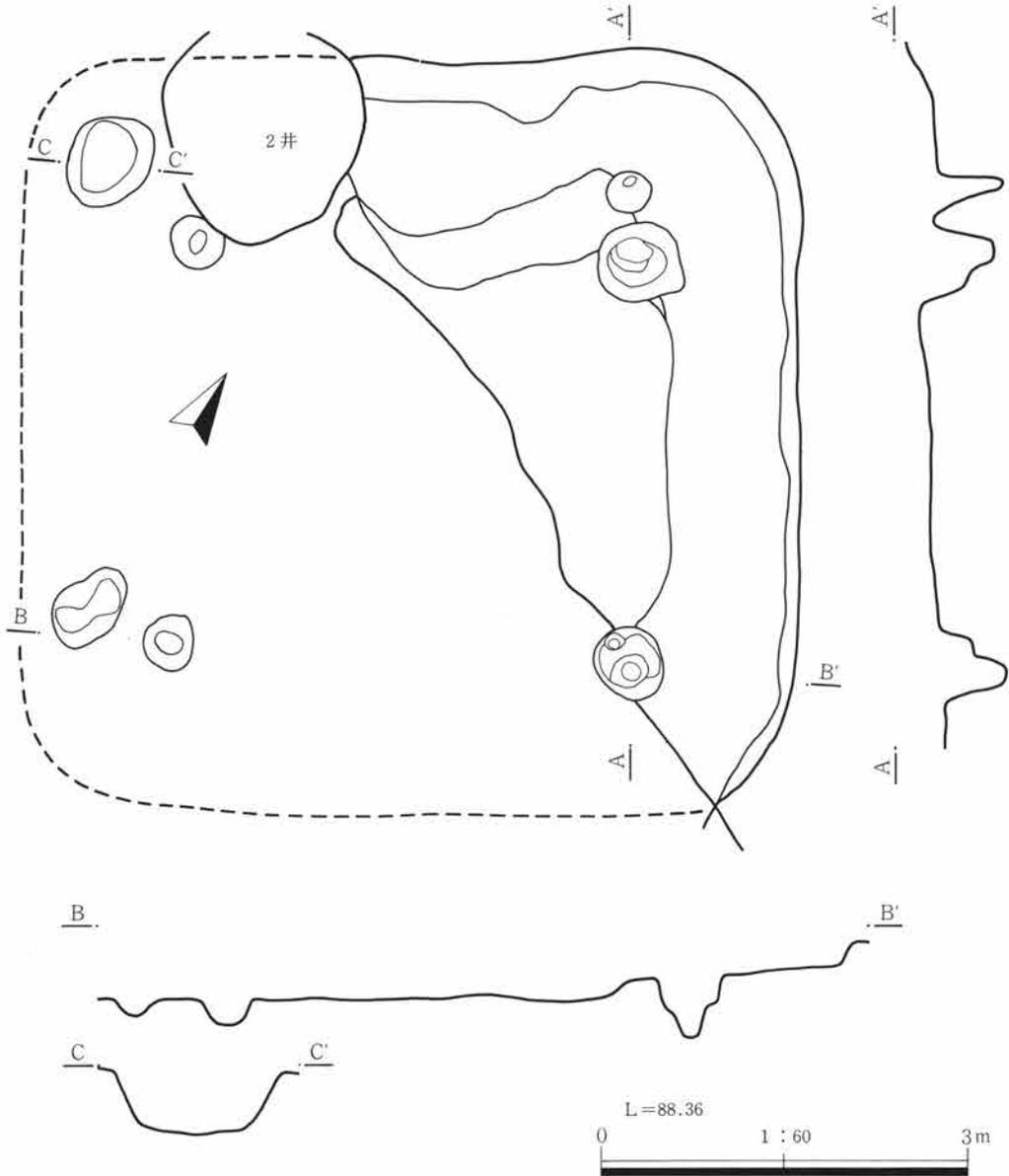
第154図 I地区B区31号住居跡遺物図(2)

第39表 I地区B区31号住居跡遺物観察表

番号	器種 土器	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3333	台付甕 土師器	器高:(153mm)口径: 161mm 底径:—最大 径:[238mm]口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上 半。外面:口縁部は横なで、体部は縦 ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部 はなで。	住居内南西部隅床 直。内外面に油煙 附着。
3334	台付甕 土師器	器高:(181mm)口径: 138mm 底径:—最大 径:216mm口縁部~体 部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上 半。外面:口縁部は横なで、体部は縦 ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部 はなで。	住居内南西部隅床 直他。内外面に油 煙附着。
3335	壺 土師器	器高:(28mm)口径: —底径:—体部~底 部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い橙。	体部は大きく湾曲する。外面:体部は 篋磨き、底部は篋削り。内面:体部 ~底部はなで。	住居内覆土。
3336	台付甕 土師器	器高:(122mm)口径: —底径:—体部下半 ~脚部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い橙。	外面:体部下半は縦ハケ目、脚部上半 は斜めハケ目後、なで。内面:体部下 半~底部はなで。	住居内南西部隅床 直。内外面に油煙 附着。

I 地区 B 区 32 号住居跡（第155図）

当住居跡は、B区2号古墳・B区5号井戸跡と重複する。B区2号古墳との重複関係は、当住居跡の確認面が同古墳の墳丘下になること、同古墳の周溝が当住居跡の西側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区5号井戸跡との新旧関係は、同井戸跡が当住居跡の北側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。



第155図 I 地区 B 区 32 号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

当住居跡の規模は、B区2号古墳の周溝に破壊されており不明であるが、一辺約6mで、平面形は方形を呈するものと推定される。壁は掘形での検出であるが、確認面までの立ち上がりは、検出できた東側部分で約10～20cmであり、残存状態は悪い。床面は、中央部分の一部が検出できただけである。壁溝は確認できなかった。

炉は検出することができなかったが、B区2号古墳の周溝内も含め、4基の支柱穴を検出することができた。規模は、直径約40～60cm・確認面からの深さ約20～50cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。住居内の北西部隅と推定される部分からは、貯蔵穴と考えられるピットが検出できた。規模は、長軸約80cm・短軸約65cm・確認面からの深さ約25cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。

当住居跡からは遺物の出土がなく、時期を限定することは困難であるが、住居跡の形態・周辺の遺構との関係から推定する当住居跡の時期は、古墳時代前期である。(井川)

I 地区 B区34号住居跡 (第157～159図、第40表、図版25)

当住居跡は、B区38号住居跡と重複する。新旧関係は、当住居跡がB区38号住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東西方向は約3.9m・南北方向は約4.3mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-32°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約20～40cmであり、残存状態は比較的良好である。床面は、比較的堅く、平坦である。壁溝は検出できなかった。

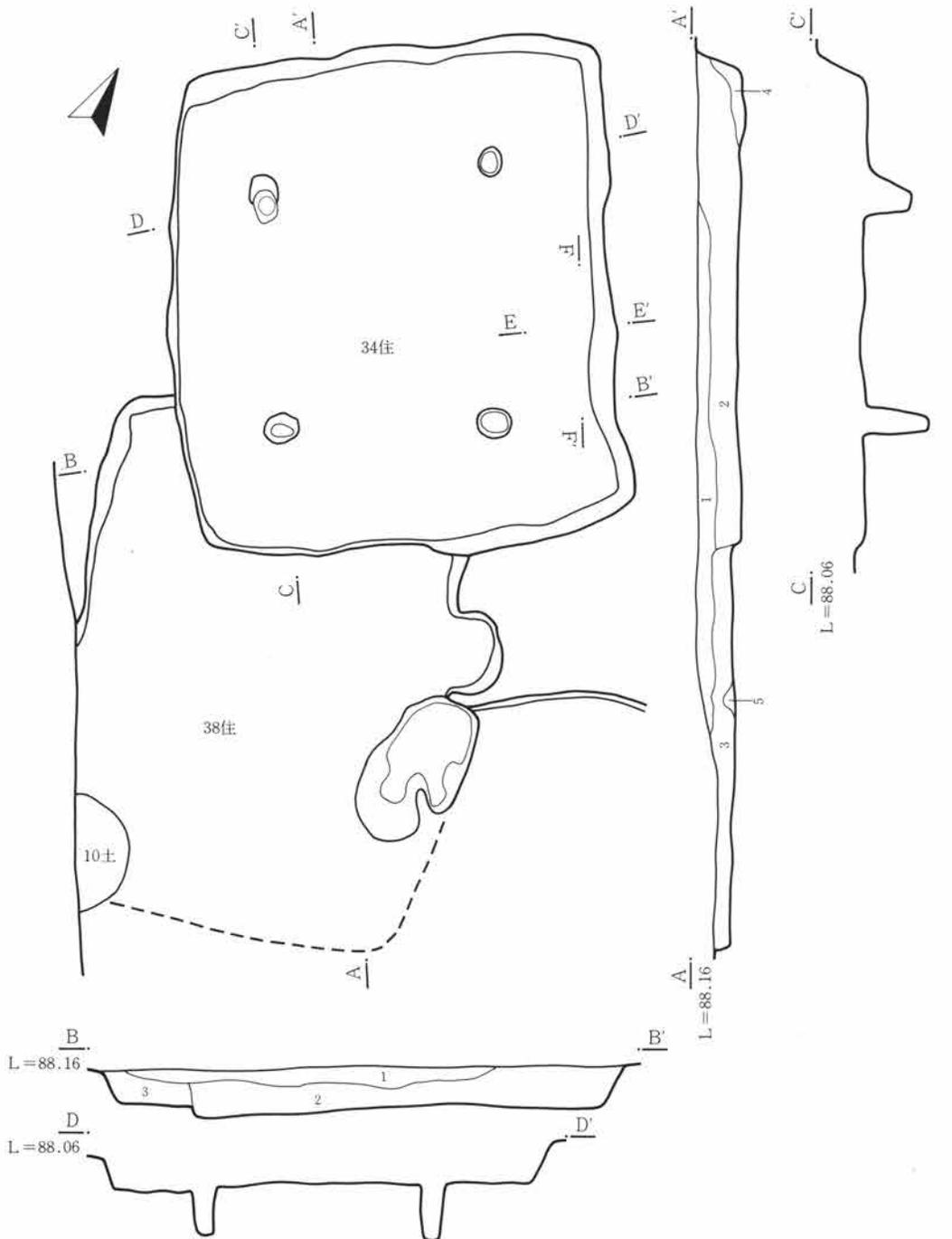
竈は、東側壁のやや南よりに築かれている。袖は検出できなかったが、焼土・灰の堆積を検出することができた。竈の壁外への張り出しはない。支柱穴は4基である。規模は、直径20～30cm・床面からの深さ約40～50cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は検出することができなかった。

遺物は、竈内及びその周辺を中心に土師器の長胴甕・須恵器の甕・土師器の杯・須恵器の短頸壺・鉢などが出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は7世紀中葉である。(井川)

I 地区 B区38号住居跡 (第160・161図、第41表、図版25)

当住居跡は、B区34号住居跡・B区37号住居跡・B区10号土坑と重複する。B区34号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区37号住居跡との新旧関係は確認できなかったが、当住居跡の竈を中心とする焼土の範囲から、当住居跡の方が新しいと考えられる。B区10号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B区34号住居跡・B区37号住居跡との重複により確定できないが、東西方

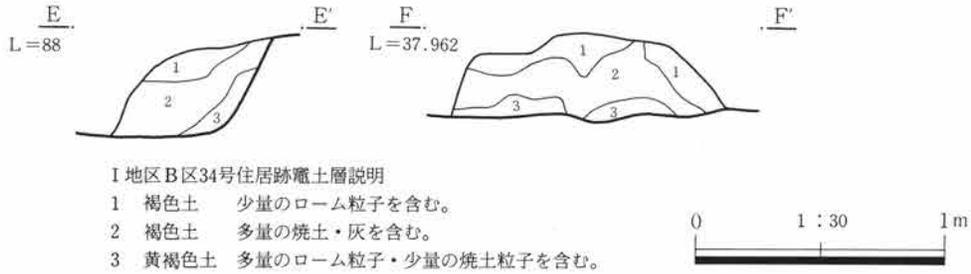


I 地区B区34号・38号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 軽石を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 褐色土 やや多量のローム粒子を含む。
- 4 暗褐色土 少量のロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒子を含む。

第156図 I 地区B区34号・38号住居跡遺構図（1）

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

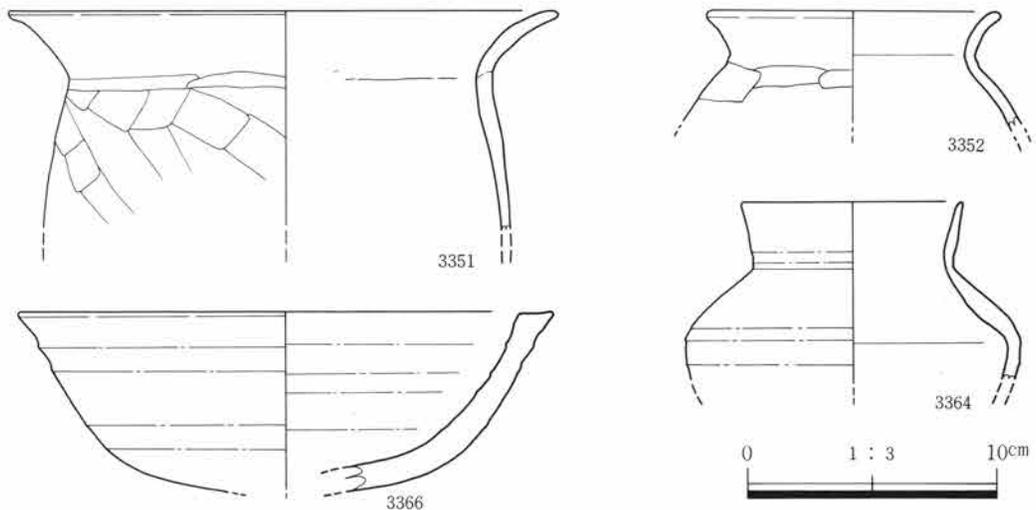


第157図 I 地区B区34号住居跡遺構図(2)

向は約3.3mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmであり、残存状態は悪い。確認できた部分の床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。

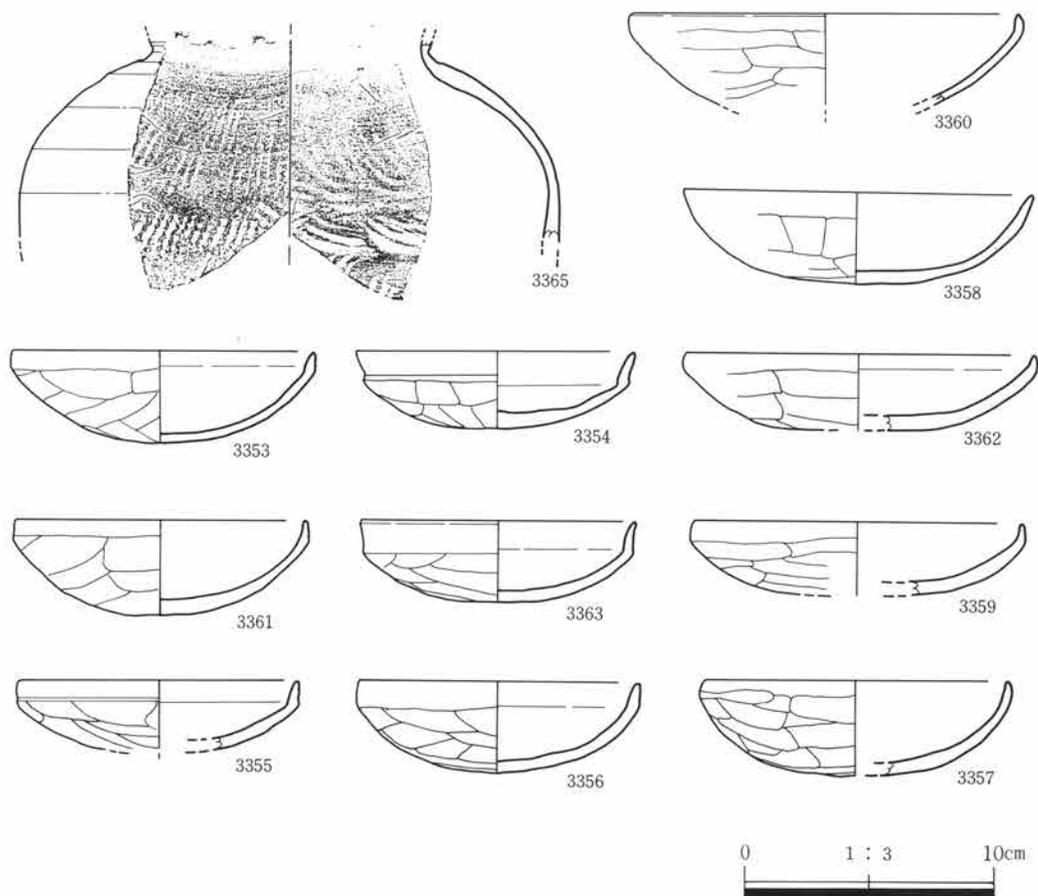
竈は、東側の壁に築かれている。袖等は検出できなかったが、燃焼部からは構築材に使用されたと考えられる河原石と焼土が検出できた。竈の右脇からは、ピットが検出できた。規模は、120×80cm・床面からの深さ約15cmであり、平面形は不定型である。貯蔵穴と考えることも可能である。柱穴は検出できなかった。

遺物は土師器の甕・甑・杯・椀、須恵器の椀の他、手づくね土器、石製紡錘車が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、6世紀末~7世紀初である。(井川)



第158図 I 地区B区34号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第159図 I地区B区34号住居跡遺物図（2）

第 40 表 I地区B区34号住居跡遺物観察表

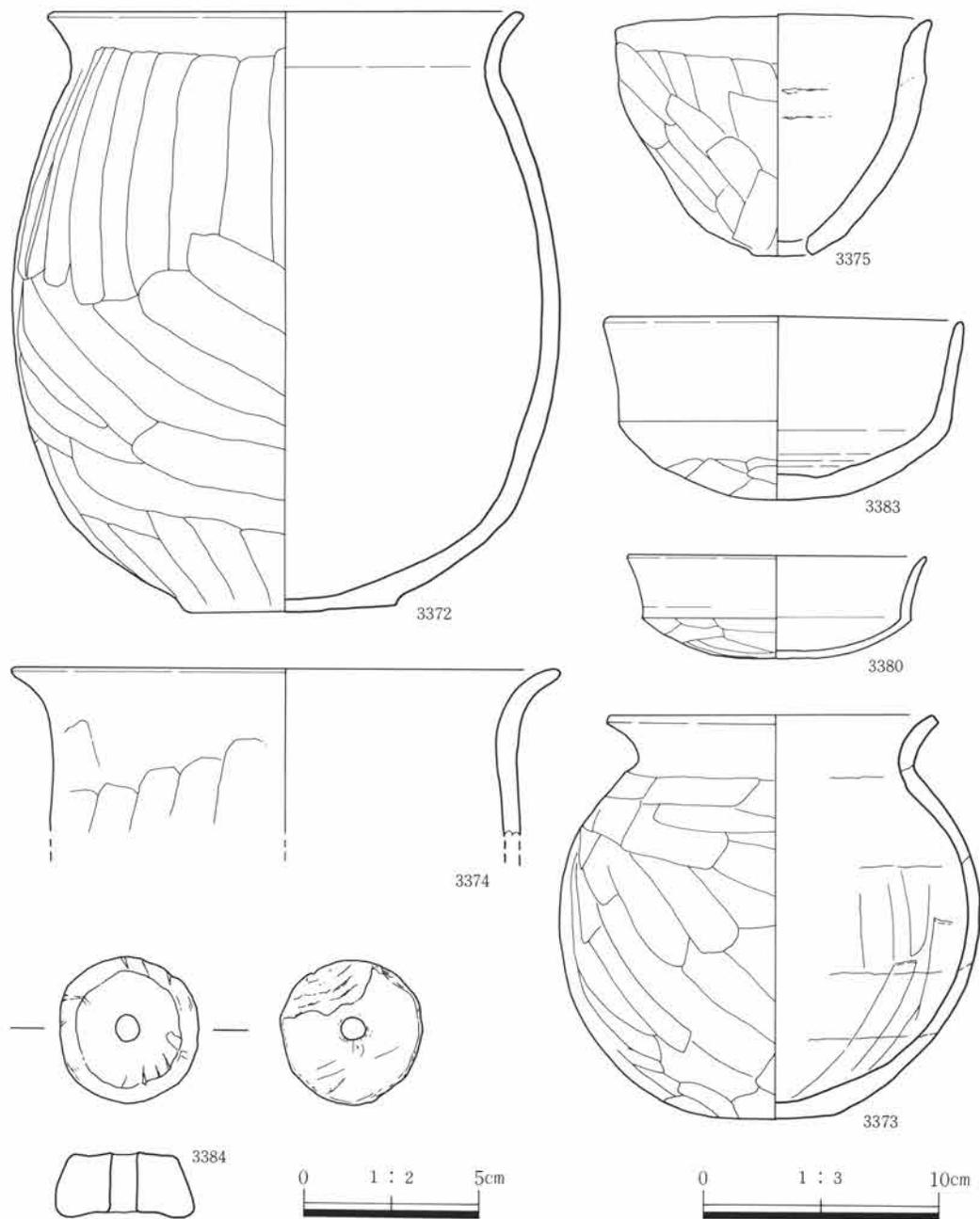
番号	器 種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3351	甕 土 師 器	器高(87mm)口径: [219mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い赤褐。	口縁部は大きく外湾。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上半は篋なで。	住居内南東部床直他。内外面に油煙付着。
3352	甕 土 師 器	器高:(47mm)口径: 118mm底径:一口縁部 ~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い赤褐。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。内外面に油煙付着。
3353	杯 土 師 器	器高:37mm口径:121mm 底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	口縁部はやや内湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	竈内。内外面に油煙付着。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

3354	杯 土師器	器高:31mm口径:112mm 底径:一ほぼ完形	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	竈内。
3355	杯 土師器	器高:(28mm)口径:[112mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い赤褐。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部～体部は横なで。	竈内他。内外面に油煙付着。
3356	杯 土師器	器高:37mm口径:112mm 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部は直立。丸底。外面:口縁部は横なで体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内南東部床直
3357	杯 土師器	器高:(38mm)口径:[122mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部はやや内湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部～体部は横なで、底部はなで。	住居内覆土。
3358	杯 土師器	器高:37mm口径:[140mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部～体部は内湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内南東部床直
3359	杯 土師器	器高:(29mm)口径:[131mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	口縁部はやや内湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内覆土。
3360	杯 土師器	器高:(36mm)口径:[154mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	口縁部はやや内湾。丸底。内面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:内面:口縁部～体部は横なで。	住居内覆土。
3361	杯 土師器	器高:38mm口径:[116mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部は僅かに内湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部底部はなで。	住居内南西部床直
3362	杯 土師器	器高:(30mm)口径:[140mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	口縁部はやや内湾。丸底:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内南西部床直
3363	杯 土師器	器高:33mm口径:[110mm] 底径:一口縁部～底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内南東部床直
3364	短頸壺 須恵器	器高:(71mm)口径:[88mm] 底径:一最大径:[134mm]口縁部～体部上半 $\frac{1}{4}$ 残	砂粒を含む。還元。硬質。灰。	口縁部はやや外湾。口縁部下端に沈線一条。最大径は体部上半。外面:口縁部～体部上半は回転なで、体部中央は回転篋削り。内面:口縁部～体部は回転なで。	住居内覆土。
3365	壺 須恵器	器高:(81mm)口径:一底径:一頸部～体部上半 $\frac{1}{4}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。還元。硬質。灰白。	内外面共に頸部～体部上端は回転なで、体部上半は叩き目。	住居内南西部床直

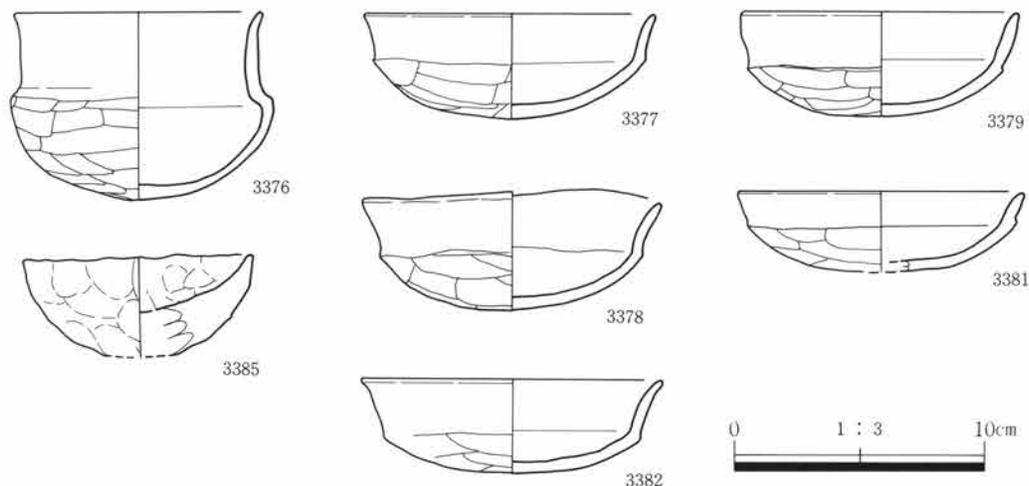
II 古墳時代（竪穴住居跡）

3366	鉢 須恵器	器高:(72mm)口径: [204mm]底径:一口縁 部~底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。還元。硬質 灰。	内外面共に口縁部は横なで、体部 ~底部は回転なで。	住居内覆土。
------	----------	---	------------------------------------	------------------------------	--------



第160図 I地区B区38号住居跡遺物図(1)

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第161図 I地区B区38号住居跡遺物図(2)

第41表 I地区B区38号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3372	甕土師器	器高:253mm口径:[202mm]底径:91mm最大径:[233mm]口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い赤褐。	口縁部は外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	竈前床直。外面に油煙付着。
3373	甕土師器	器高:170mm口径:138mm底径:63mm最大径:179mmほぼ完形	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部は篋なで。	住居内南東部床直内面は燻し。
3374	甕土師器	器高:(71mm)口径:[232mm]底径:-口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内南東部床直外面に油煙付着。
3375	甕土師器	器高:103mm口径:135mm底径:25mmほぼ完形	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄褐。	口縁部は僅かに外湾。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南東部床直外面に油煙付着。
3376	椀土師器	器高:75mm口径:100mm底径:-一完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。口縁端部はやや外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南東部床直
3377	杯土師器	器高:42mm口径:117mm底径:-一完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	竈前床直。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

3378	杯 土師器	器高:47mm 口径:120mm 底径:一ほぼ完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	竈前床直。
3379	杯 土師器	器高:42mm 口径:111mm 底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内北東部床直 外面に油煙付着。
3380	杯 土師器	器高:43mm 口径:[127mm] 底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	竈内他。
3381	杯 土師器	器高:(32mm) 口径:[115mm] 底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙付着
3382	杯 土師器	器高:38mm 口径:[120mm] 底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内中央部床上 20cm。
3383	碗 須恵器	器高:78mm 口径:152mm 底径:一ほぼ完形	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。還元。硬質灰白。	口縁部は僅かに外湾。外面:口縁部~体部上半は回転なで、体部下半~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は回転なで、底部はなで。	住居内南東部床直
3384	紡錘車 滑石	上部径:33mm 下部径:42mm 厚さ:18mm 孔径:6mm ほぼ完形	滑石製。	断面はほぼ台形。錠面は僅かに膨らむ。	住居内南西部床直
3385	手づくね 土器 土師器	器高:(39mm) 口径:[92mm] 底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄褐。	丸底。内外面共に口縁部~底部は指頭痕が残る。	住居内南西部床直 内外面に油煙付着

I 地区 B 区 37号住居跡（第162・163図、第42表）

当住居跡は、B区38号住居跡・B区44号住居跡・B区45号住居跡と重複する。B区38号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区44号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。B区45号住居跡との新旧関係も、同住居跡が当住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

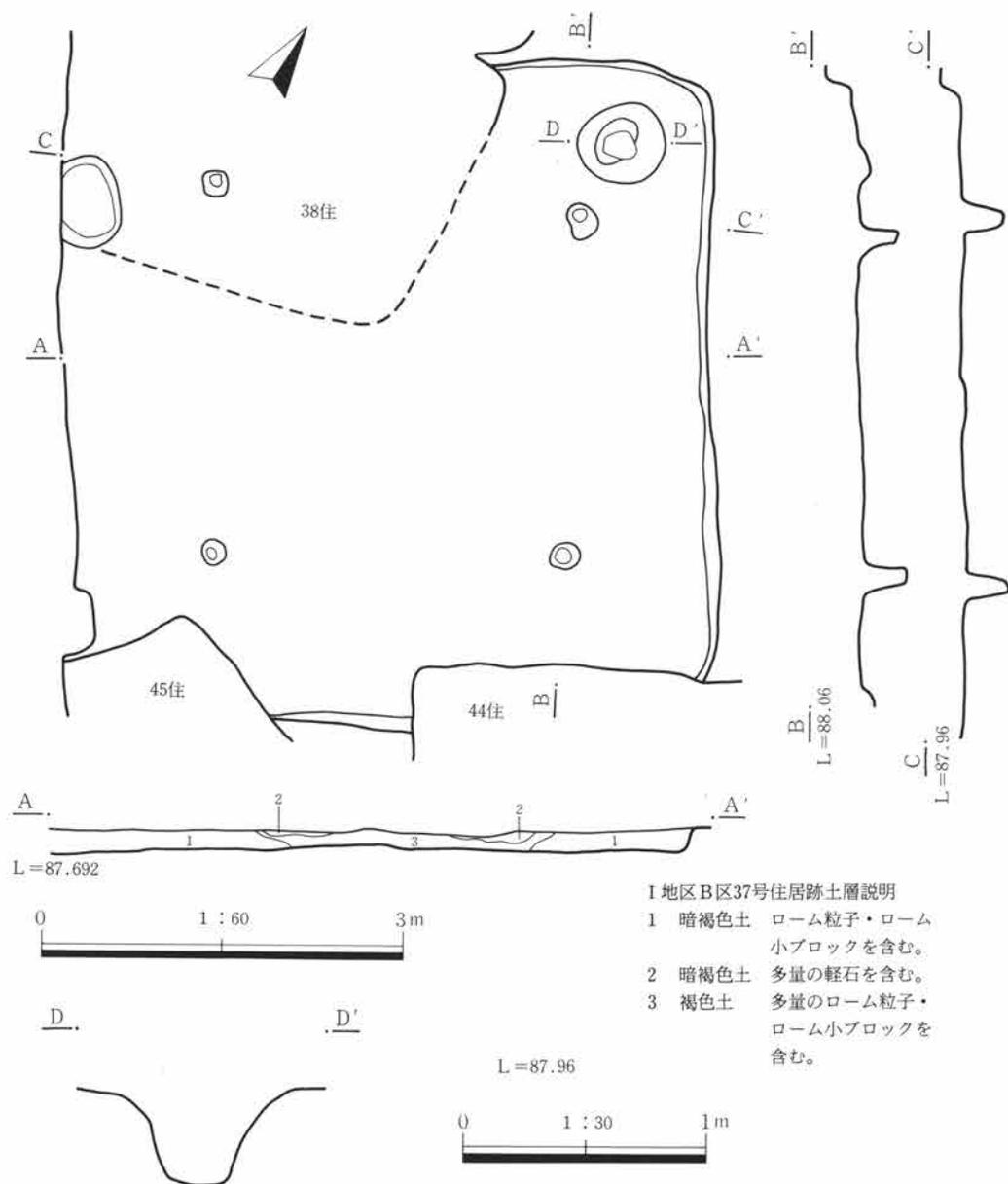
当住居跡の規模は、破壊されている部分が多く確定できないが、南北方向は約5.5mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約15~20cmである。床面は比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

主柱穴は4基である。規模は、直径約20~25cm・床面からの深さ約30~35cmであり、平面形は

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

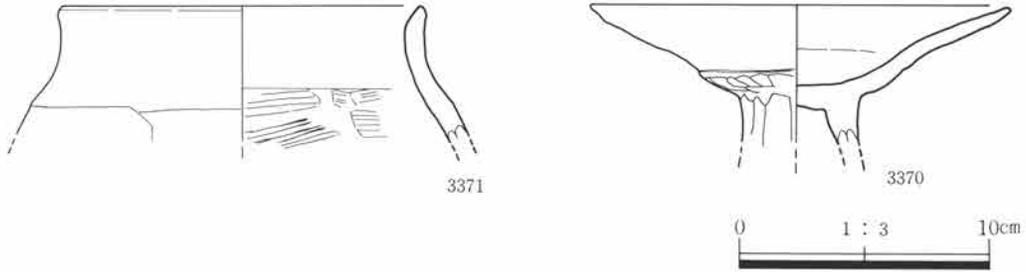
円形ないしは不整形な円形を呈する。住居跡内の北東部隅からは、ピットが1基検出できた。規模は、長軸約70cm・短軸約60cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は、不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。

遺物は、土師器の甕・高杯が出土しているが、出土量は非常に少ない。遺物・周辺の遺構との関係から推定する当住居跡の時期は、古墳時代後期である。(井川)



第162図 I 地区B区37号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第163図 I地区B区37号住居跡遺物図

第 42 表 I地区B区37号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3370	高杯土師器	器高:(55mm)口径:169mm底径:一口縁部~脚部上端 $\frac{2}{3}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質橙。	体部下端に不明瞭な稜を持つ。口縁部は僅かに内湾。外面:口縁部は横なで、体部はなで、底部~脚部上端は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	住居内北西部床直
3371	甕土師器	器高:(53mm)口径:[148mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{2}{3}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い褐。	口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はハケなで。	貯蔵穴内。

I地区B区39a号住居跡（第164~166図、図版27~29）

当住居跡は、B区39b号住居跡・B区39c号住居跡・B区39d号住居跡と重複する。B区39b号住居跡との新旧関係は、当住居跡の壁・床がB区39b号住居跡の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が新しい。B区39c号住居跡との新旧関係は、当住居跡の壁・床がB区39c号住居跡の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が新しい。B区39d号住居跡との新旧関係も、当住居跡の壁・床・竈がB区39d号住居跡の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が新しい。

当住居跡の規模は、東西方向約3.3m・南北方向約3.4mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-48°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmである。床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、東側壁の南東隅付近に築かれている。袖は、粘質土を構築材として用い、先端部は石を使い固めていた。袖の手前には、天井に使用された細長い石が落ちている状態で検出できた。住居跡内からは4基のピットが検出できたが、柱穴と考えられるピットはなく、南西部隅のピット

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

が貯蔵穴と考えることができる。規模は、長辺約80cm・短辺約60cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。

遺物は、竈内及びその周辺を中心に多量に出土している。種類は、土師器の長胴甕・甑・杯・鉢の他須恵器の提瓶が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、6世紀後半である。
(井川)

I 地区 B 区 39 c 号住居跡 (第164・167図、第44表)

当住居跡は、B区39a号住居跡・B区39b号住居跡・B区39d号住居跡と重複する。B区39a号住居跡との新旧関係は、同住居跡の壁・床・竈が当住居跡の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。B区39b号住居跡との新旧関係は、当住居跡がB区39b号住居跡の北東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。B区39d号住居跡との新旧関係は、同住居跡の覆土中に当住居跡の壁が確認できることから、当住居跡の方が新しい。

当住居跡は大部分がB区39a号住居跡に破壊されているが、規模は、一辺約3.8mであり、平面形は隅丸方形を呈すると推定できる。確認面までの壁の立ち上がりは、約15～20cmである。確認できる部分の床面は、やや軟弱であるが、ほぼ平坦である。

竈・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。住居内の北西部にピットが1基検出できたが、住居より新しいものである。遺物は土師器の甕の他、土錘が出土しているが、出土量は非常に少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期である。
(井川)

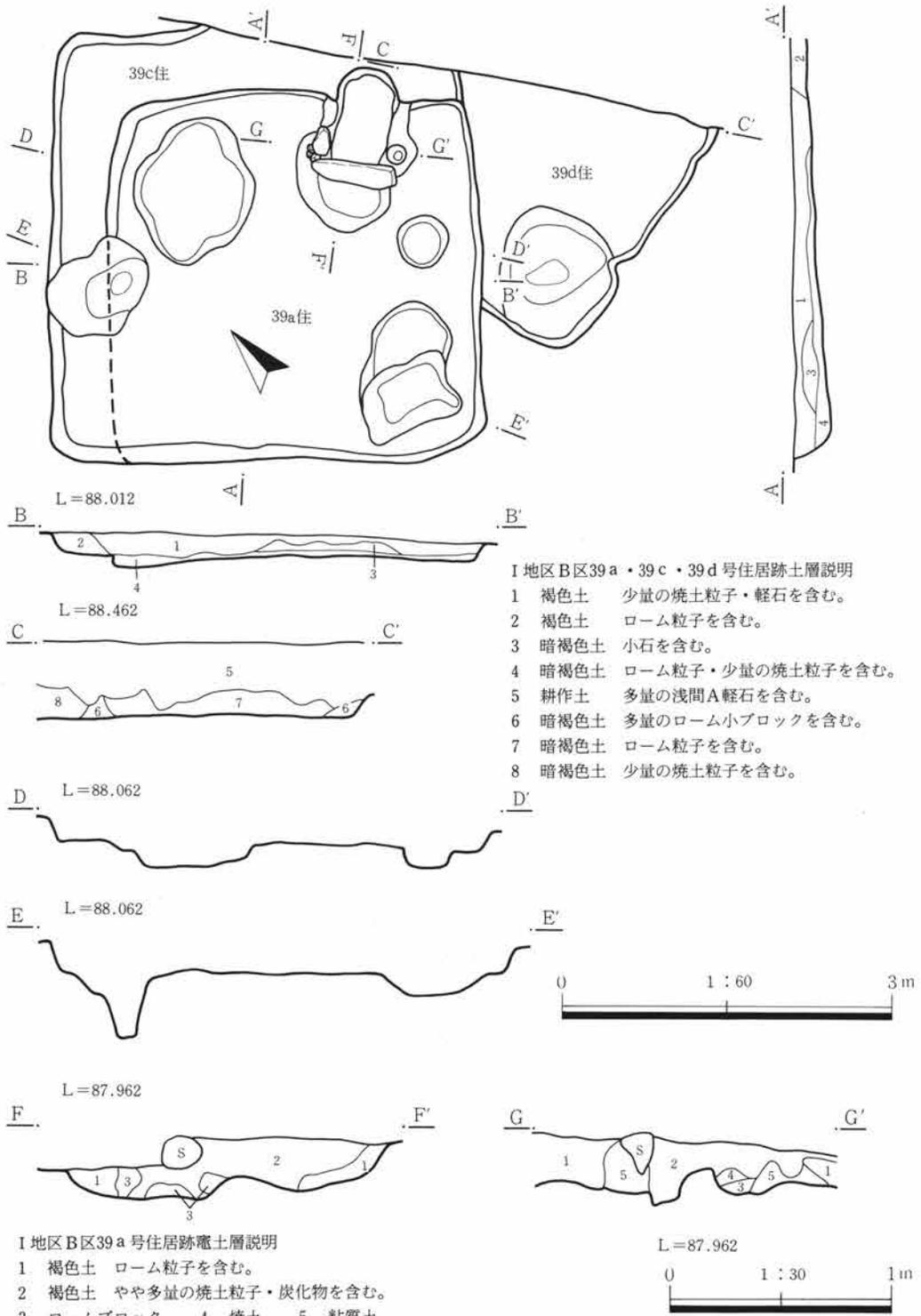
I 地区 B 区 39 d 号住居跡 (第164図)

当住居跡は、B区39a号住居跡・B区39c号住居跡と重複する。B区39a号住居跡との新旧関係は、同住居跡の壁・床・竈が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。B区39c号住居跡との新旧関係も、同住居跡の壁・床が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊して築かれていることから、当住居跡の方が古い。

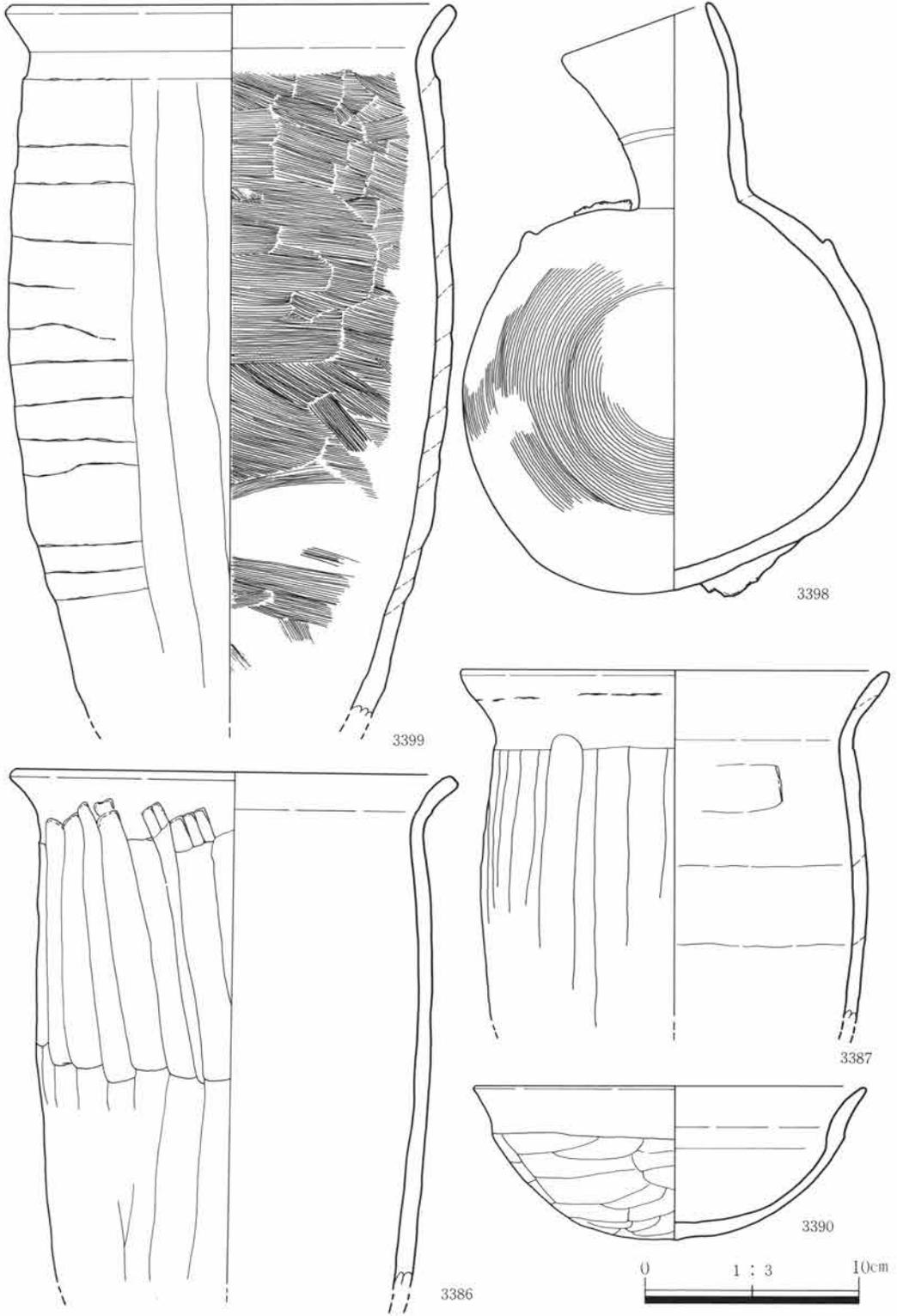
当住居跡の規模は、東側部分が調査区域外であり、北西部分が破壊されているために不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定している。確認面までの壁の立ち上がりは、約10cmであり、残存状態は悪い。確認できる部分の床面は、やや軟弱であり、凹凸が多い。住居内の南東部隅からは、ピットが1基検出できたが、当住居跡を破壊している新しいものである。

当住居跡からは、遺物の出土はなく、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周辺の遺構との関係から古墳時代後期の住居跡と考えられる。
(井川)

II 古墳時代（竪穴住居跡）

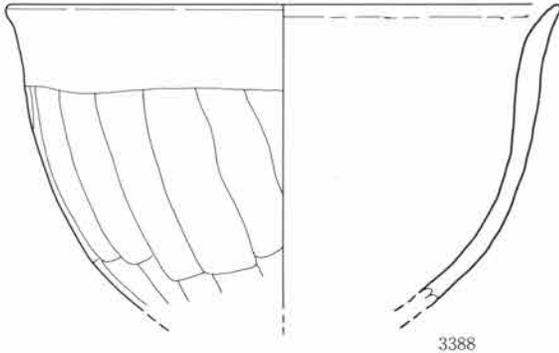


第164図 I 地区B区39a・39c・39d号住居跡遺構図



第165図 I地区B区39a号住居跡遺物図(1)

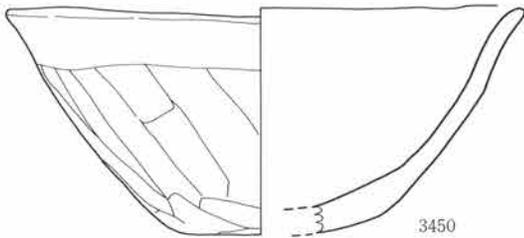
II 古墳時代（竪穴住居跡）



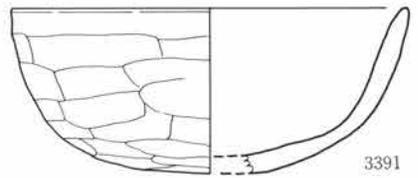
3388



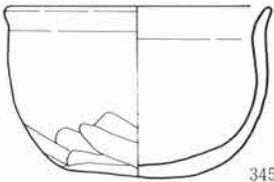
3449



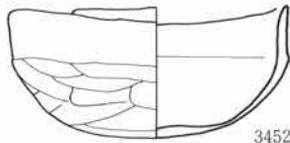
3450



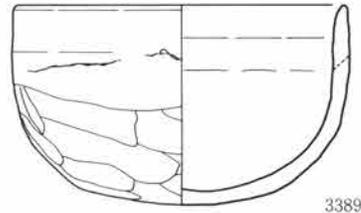
3391



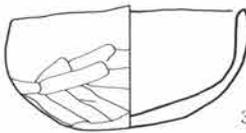
3451



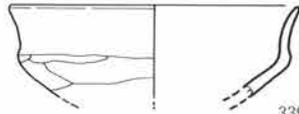
3452



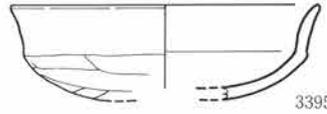
3389



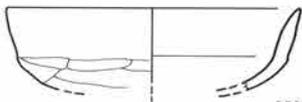
3454



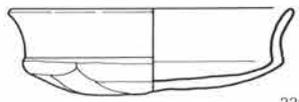
3397



3395



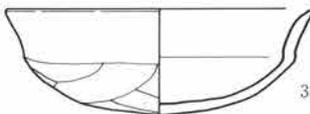
3396



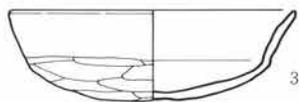
3392



3394



3393



3354



第166图 I 地区B区39a号住居跡遺物图(2)

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

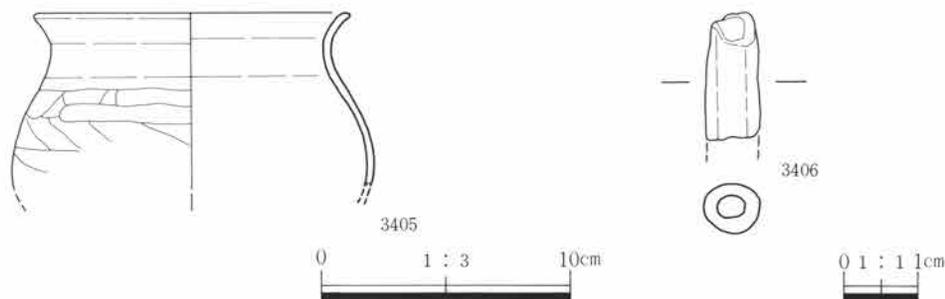
第43表 I地区B区39a号住居跡遺物観察表

番号	器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3386	甕 土師器	器高:(237mm)口径: 209mm底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は 口縁部。外面:口縁部は横なで、体部 は篋削り。内面:口縁部は横なで、体 部はなで。	住居内北東部床直 外面に多量の油煙 付着。
3387	甕 土師器	器高:(163mm)口径: [200mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は 口縁部。外面:口縁部は横なで、体部 上半は篋削り。内面:口縁部は横なで 体部上半は篋なで。	竈内。内外面に油 煙付着。
3388	甕 土師器	器高:(121mm)口径: 222mm底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横 なで、体部は篋削り。内面:口縁部は 横なで、体部はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙付着
3389	鉢 土師器	器高:79mm口径:133 mm底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い褐。	体部上半~口縁部は直立。丸底。外 面:口縁部は横なで、体部~底部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部~ 底部はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙付着
3390	杯 土師器	器高:71mm口径:183 mm底径:一ほぼ完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 丸底。外面:口縁部は横なで、体部~ 底部は篋削り。内面:口縁部~体部は 横なで、底部はなで。	住居内北東部床直
3391	椀 土師器	器高:(66mm)口径: 158mm底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	丸底。外面:口縁部は横なで、体部 ~底部は篋削り。内面:口縁部~体部 は横なで、底部はなで。	住居内北東部床直 外面に油煙付着。 甕に転用か?
3392	杯 土師器	器高:34mm口径:115 mm底径:一ほぼ完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 外面:口縁部は横なで、体部~底部は 篋削り。内面:口縁部~体部は横な で、底部はなで。	竈内。内面に油煙 付着。
3393	杯 土師器	器高:42mm口径:[122 mm]底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 丸底。外面:口縁部は横なで、体部 ~底部は篋削り。内面:口縁部は横な で、体部~底部はなで。	竈内他。
3394	杯 土師器	器高:(38mm)口径: [126mm]底径:一口縁 部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 丸底。外面:口縁部は横なで、体部 ~底部は篋削り。内面:口縁部~体部 は横なで、底部はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙付着
3395	杯 土師器	器高:(38mm)口径: [124mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 外面:口縁部は横なで、体部は篋削り 内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南西部床上 10cm。
3396	杯 土師器	器高:(32mm)口径: [118mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。口縁部は やや外湾。外面:口縁部は横なで、体 部は篋削り。内面:口縁部~体部は横 なで。	住居内中央部床上 10cm。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

3397	杯 土師器	器高:(36mm)口径: [116mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 外面:口縁部は横なで、体部は篋削り 内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内中央部床上 5cm。外面に油煙 付着。
3398	提瓶 須恵器	器高:270mm口径:75 mm底径:一最大径: 196mmほぼ完形	砂粒を含む。還元。硬質。 黄灰。	口縁部は外湾するが、一部不整湾曲。 口縁部中央に沈線一条。外面:口縁部 は回転なで、体部~底部はカキ目。内 面:口縁部は回転なで、体部~底部は 回転なで。窯体の付着がある。	住居内北東部床直 他。
3399	甕 土師器	器高:(330mm)口径: 211mm底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。軟質 鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面に輪 積み痕が顕著に残る。最大径は口縁 部。外面:口縁部は横なで、体部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部は ハケ目。	住居内南西部床直 他。内外面に油煙 付着。
3449	甕 土師器	器高:132mm口径:132 mm底径:88mm最大 径:155mmほぼ完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は外湾。底部は丸底に近い平 底。最大径は体部中央。外面:口縁部 は横なで、体部は篋磨き、底部は篋削 り。内面:口縁部は篋磨き、体部~底 部はなで。	竈左袖脇床直。内 外面に油煙付着。
3450	鉢 土師器	器高:(90mm)口径: 208mm底径:81mmほぼ 完形。	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横 なで、体部~底部は篋削り。内面:口 縁部は横なで、体部~底部は篋なで。	竈前床直。内外面 に油煙付着。甕に 転用か?
3451	椀 土師器	器高:69mm口径:107 mm底径:55mm完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横 なで、体部上半はなで、体部下半~底 部は篋削り。内面:口縁部は横なで、 体部~底部は篋なで。	竈左袖脇床直。外 面に多量の油煙付 着。
3452	杯 土師器	器高:52mm口径:112 mm底径:一完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	外面に稜を持つ。丸底。外面:口縁部 は横なで、体部~底部は篋削り。外 面:口縁部~体部は横なで、底部はな で。	竈左袖脇床直。
3453	杯 土師器	器高:36mm口径:115 mm底径:一完形	砂粒を含む。酸化。やや硬 質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。 丸底。外面:口縁部は横なで、体部 ~底部は篋削り。内面:口縁部は横な で、体部~底部はなで。	住居内南東部隅床 直。
3454	杯 土師器	器高:48mm口径:93mm 底径:一完形	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。淡黄。	口縁部は僅かに外湾。丸底。外面:口 縁部は横なで、体部~底部は篋削り。 内面:口縁部は横なで、体部~底部は なで。	竈左袖脇床直。内 外面に油煙付着。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



第167図 I地区B区39c号住居跡遺物図

第44表 I地区B区39c号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3405	甕 土師器	器高:(70mm)口径: [127mm]底径:一最大 径:[145mm]口縁部 ~体部上半 $\frac{3}{4}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	口縁部は外湾。最大径は体部中央。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内覆土。内外 面に油煙付着。
3406	土 錘	長さ:(35mm)中央部 径:15mm端部径:13mm 孔径:6mm	砂粒を含む。酸化。やや硬 質。橙。	棒状。両端がやや細くなる。	住居内覆土。

I地区B区39b号住居跡 (第168~171図、第45表)

当住居跡は、B区39a号住居跡・B区39d号住居跡・B区15土坑と重複する。B区39a号住居跡との新旧関係は、当住居跡の北東部分の壁・床がB区39a号住居跡により破壊されているので、当住居跡の方が古い。B区39d号住居跡との新旧関係も、当住居跡の北東部分の壁・床がB区39d号住居跡により破壊されているので、当住居跡の方が古い。B区15土坑との新旧関係は、当住居跡の南側部分の壁・床がB区15土坑により破壊されているので当住居跡の方が古い。

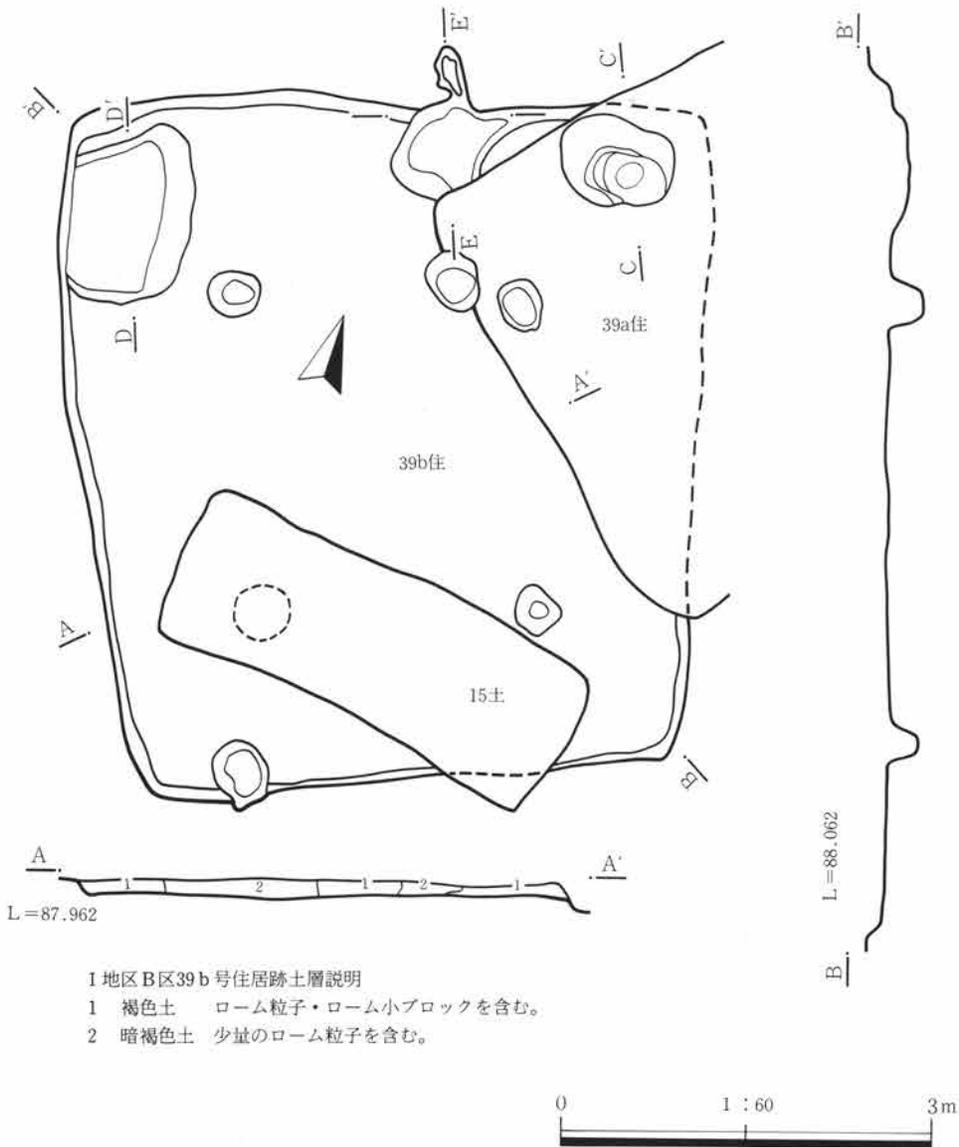
当住居跡の規模は、東西方向約4.7m・南北方向約5.4mであり、北側が狭い平面形は台形を呈する。主軸はN-21°-Wである。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmである。床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、北側壁の東よりに築かれている。大部分が破壊されており、袖等は検出できなかったが、燃焼部からは構築材に使用されたと考えられる河原石と焼土を検出することができた。支柱穴は4基と考えられるが、南西部の柱穴はB区15土坑に破壊されており、検出することができなかった。柱穴の規模は、直径約30~40cm・床面からの深さ約25cmであり、平面形は不整形な円形ない

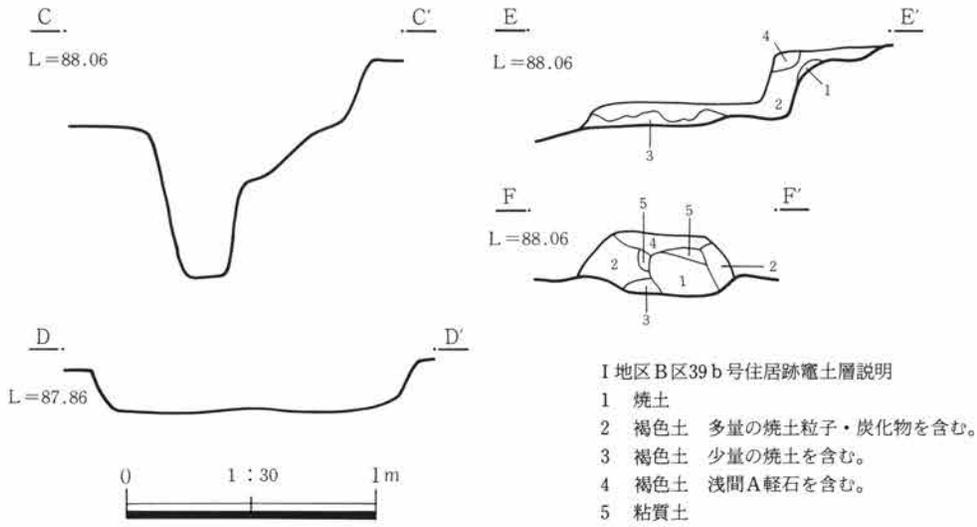
II 古墳時代（竪穴住居跡）

しは不整形な楕円形を呈する。竈の右脇、北東部の隅と推定される部分からは、貯蔵穴と考えられるピットが検出できた。規模は、長軸約90cm・短軸約70cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。北西部隅にもピットが検出できたが、床面からの深さが約5～10cmと浅く、皿状であり、貯蔵穴と考えることは難しい。

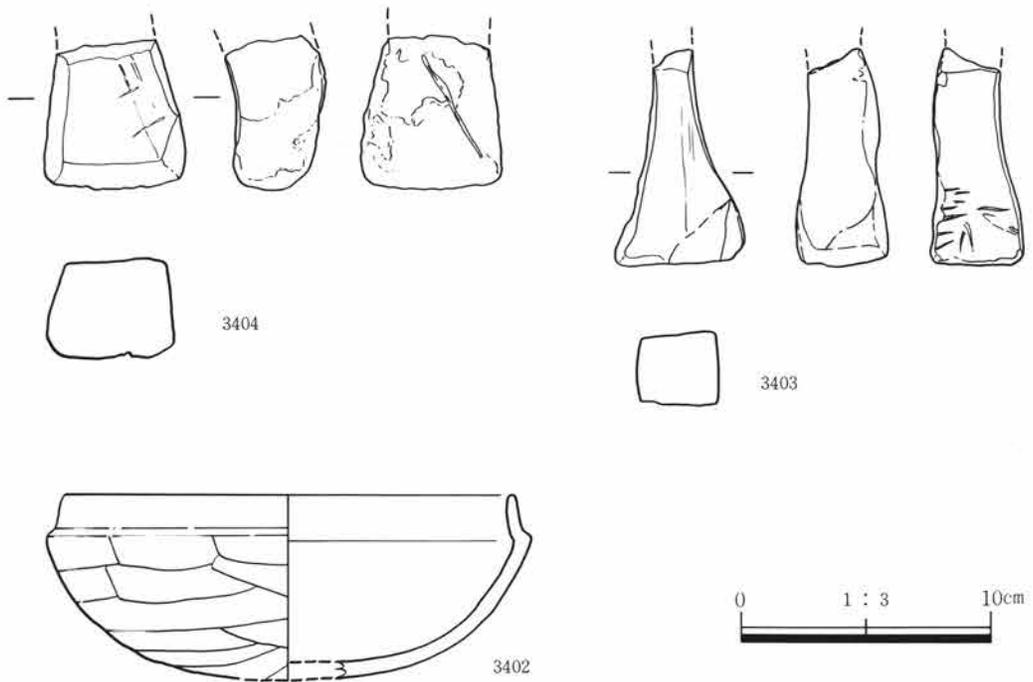
遺物は、土師器の長胴甕・杯の他、砥石が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は6世紀中葉である。（井川）



第168図 I 地区B区39b号住居跡遺構図（1）

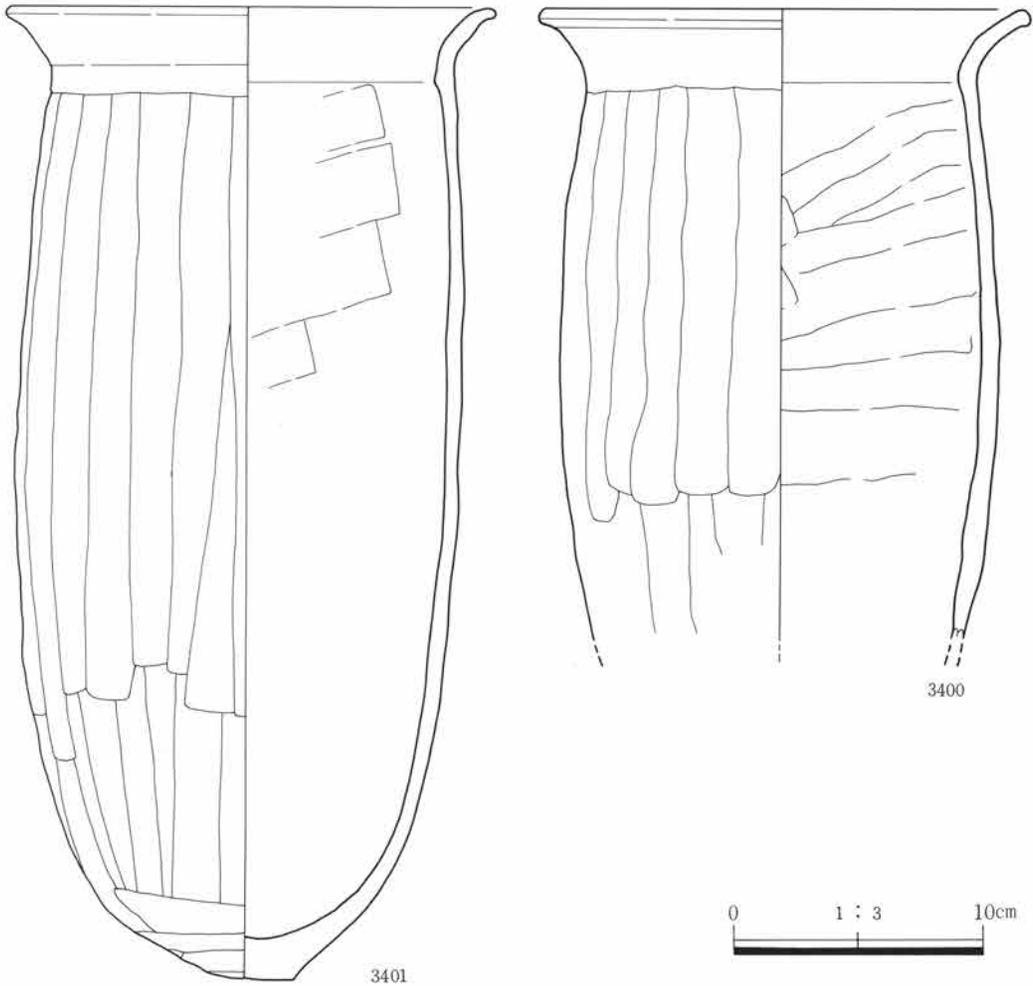


第169図 I地区B区39b号住居跡遺構図(2)



第170図 I地区B区39b号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



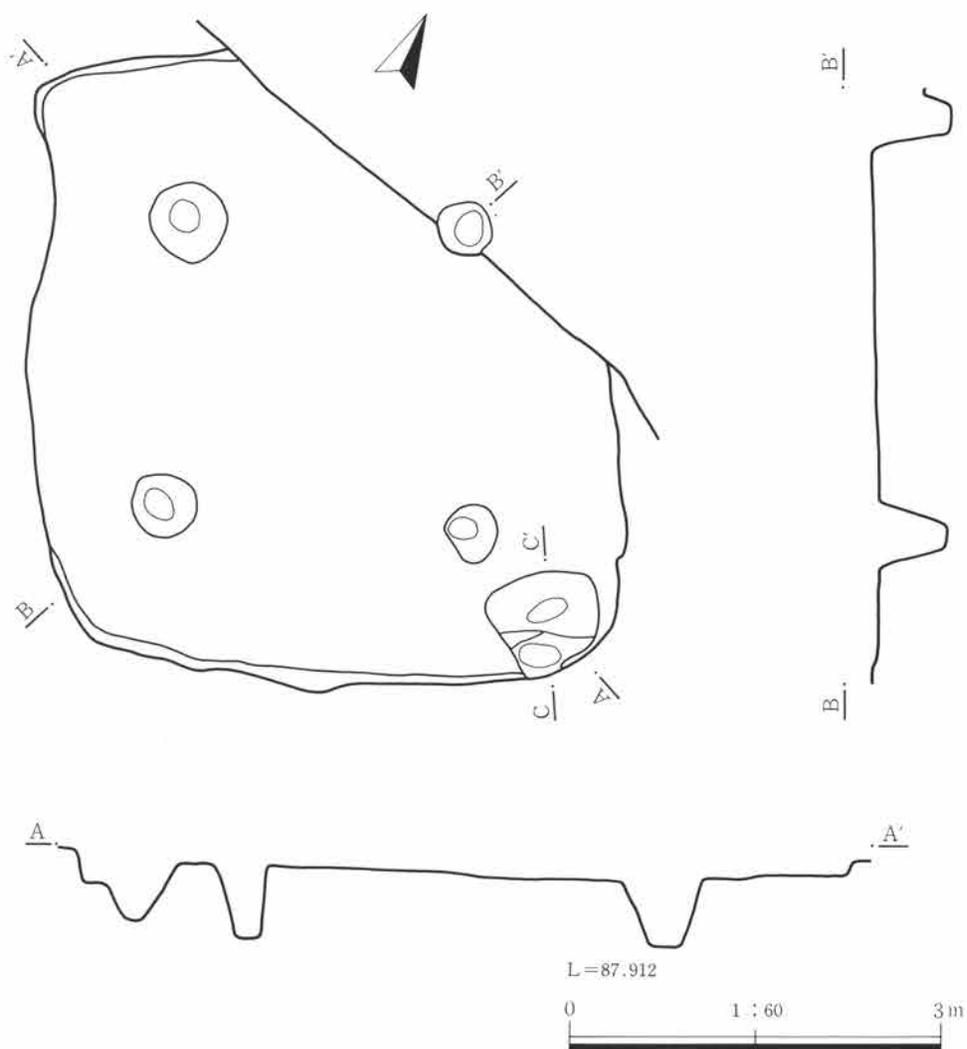
第171図 I地区B区39b号住居跡遺物図（2）

第 45 表 I地区B区39b号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3400	甕土師器	器高:(251mm)口径:197mm底径:一口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は口縁部。外面:口縁部は横なで、体部は篔削り。内面:口縁部は横なで、体部は篔なで。	竈前床直。内外面に多量の油煙付着
3401	甕土師器	器高:386mm口径:197mm底径:36mmほぼ完形	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	口縁部は「く」字状に外湾。最大径は口縁部。外面:口縁部は横なで、体部～底部は篔削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部は篔なで。	住居内北西部床直外面に多量の油煙付着。

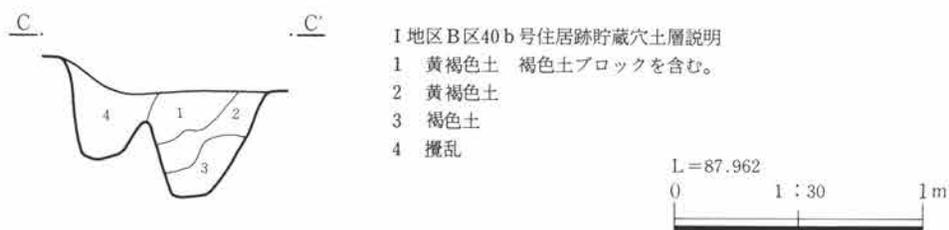
第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

3402	杯 土師器	器高:(73mm)口径: [180mm]底径:一口縁 部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。明黄褐色。	外面に稜を持つ。口縁部はやや内湾。 内面:口縁部は横なで、体部~底部は 篋削り。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部はなで。	住居内北東部床直 内外面に燻しあり
3403	砥石	長さ:(84mm)幅: 51~16mm厚さ: 37~22mm		使用面は三面。断面四角形。	住居内床下。
3404	砥石	長さ:(59mm)幅: (57~39mm)厚さ: (38~32mm)		使用面は四面。断面台形。	住居内覆土。



第172図 I地区B区40b号住居跡遺構図(1)

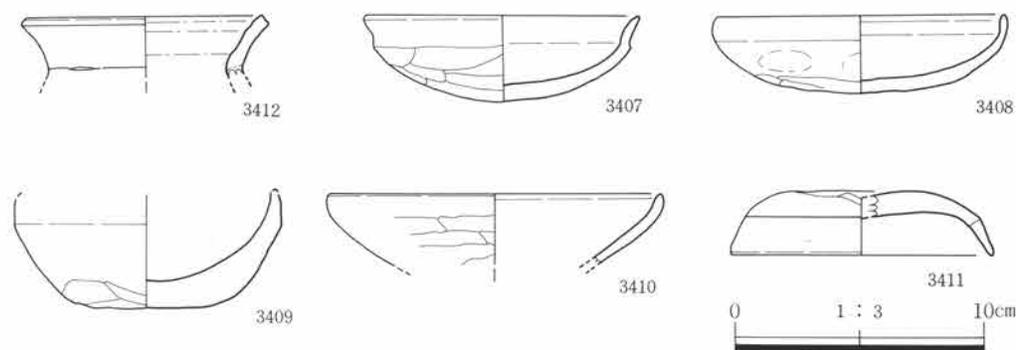
II 古墳時代（竪穴住居跡）



第173図 I地区B区40b号住居跡遺構図（2）

I地区B区40b号住居跡（第172～174図、第46表、図版30・32）

本住居跡は、耕作土下、黄褐色土中確認された。40a号住居跡と重複し、本住居跡が古い。東北辺は40a号住居跡により破壊されている。平面形は隅丸長方形を呈し、東西方向約4.7m・南北方向約5.0mを測る。主軸はN-32°-Wである。床面はローム層で固く踏み締められている。柱穴は4本が確認でき、径約40～60cm・床面からの深さ約50～70cmを測る。遺物は土師器の杯、須恵器の蓋・瓶が出土している。出土遺物から古墳時代後期とする。（秋池）



第174図 I地区B区40b号住居跡遺物図

第46表 I地区B区40b号住居跡遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3407	杯 土師器	器高:34mm口径:111mm底径:一ほぼ完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。口縁部はやや外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部～底部は削り。内面:口縁部は横なで、底部～底部はなで。	住居内南東部床直
3408	杯 土師器	器高:31mm口径:[116mm]底径:一口縁部～底部%残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	口縁部は僅かに外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部上半に指頭痕が残り、体部下半～底部は削り。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。	住居内南東部床上10cm。内面に油煙付着。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

3409	杯 土師器	器高:(45mm)口径: 一底径:48mm口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い赤褐色。	口縁部は僅かに内湾。平底。外面:口 縁部は横なで、体部はなで、底部は篋 削り。内面:口縁部は横なで、体部 ~底部はなで。	住居内南東部床直 内面に油煙付着。
3410	杯 土師器	器高:(29mm)口径: [134mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。明赤褐色。	口縁部は僅かに内湾。外面:口縁部は 横なで、体部は篋削り。内面:口縁部 は横なで、体部はなで。	住居内覆土。
3411	蓋 須恵器	器高:(26mm)口径: [106mm]天井部~口 縁部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。還元。硬質。 灰白。	外面:天井部は篋削り、口縁部は回転 なで。内面:天井部上半はなで、下半 ~口縁部は回転なで。	住居内覆土。
3412	瓶 須恵器	器高:(25mm)口径: [100mm]底径:一口縁 部~頸部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。還元。硬質 灰。	口縁部は外湾。内外面共に口縁部 ~頸部は回転なで。	住居内覆土。

I地区B区41a号住居跡(第175~178図、第47表、図版30・32)

当住居跡は、B区41b号住居跡・B区11号土坑と重複する。B区41b号住居跡との新旧関係は不明である。B区11号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の北西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

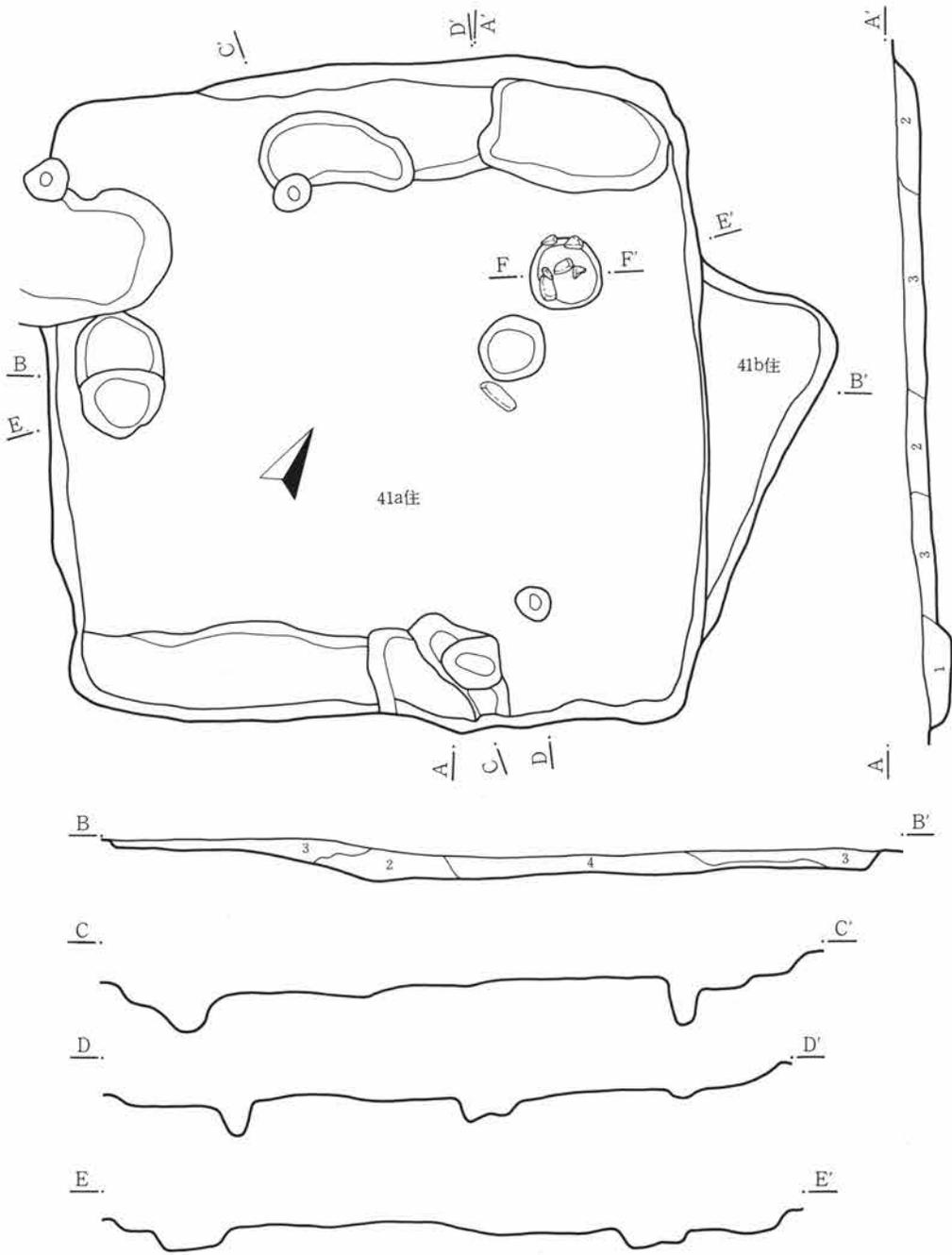
当住居跡の規模は、一辺約5.5mであり、平面形は隅丸方形を呈する。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~20cmであり、残存状態は悪い。床面は、軟弱な部分があり、やや凹凸が多い。壁溝は検出できなかった。

炉と推測できるピットは、住居跡内の北東部に2基検出できた。北東よりのピットの規模は、直径約60cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。やや中央部よりのピットの規模は、直径約50cm・床面からの深さ約15cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。両ピット共に内部から、囲い石に使用されたと推測できる河原石及び遺物が検出できたが、焼土が検出できなかった。貯蔵穴と推定できるのは北東部隅のピットである。規模は、長軸約150cm・短軸約100cm・床面からの深さ約15cmである。その他2基の小ピットが検出できたが、柱穴と断定できるものはない。

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の高杯・壺が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。(井川)

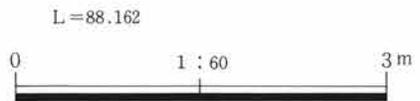
I地区B区41b号住居跡(第175図)

当住居跡は、B区41a号住居跡と重複する。新旧関係は不明である。当住居跡の規模は、B区41a号住居跡との重複部分が確認できなかったために不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは



I 地区B区41a号・41b号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・少量の軽石を含む。
- 3 褐色土 浅間A軽石を含む。
- 4 褐色土 ローム小ブロック・細かい軽石を含む。

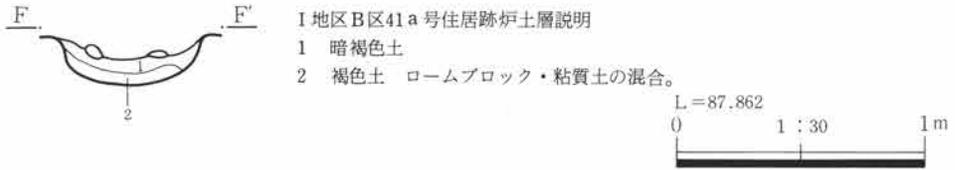


第175図 I 地区B区41a・41b号住居跡遺構図（1）

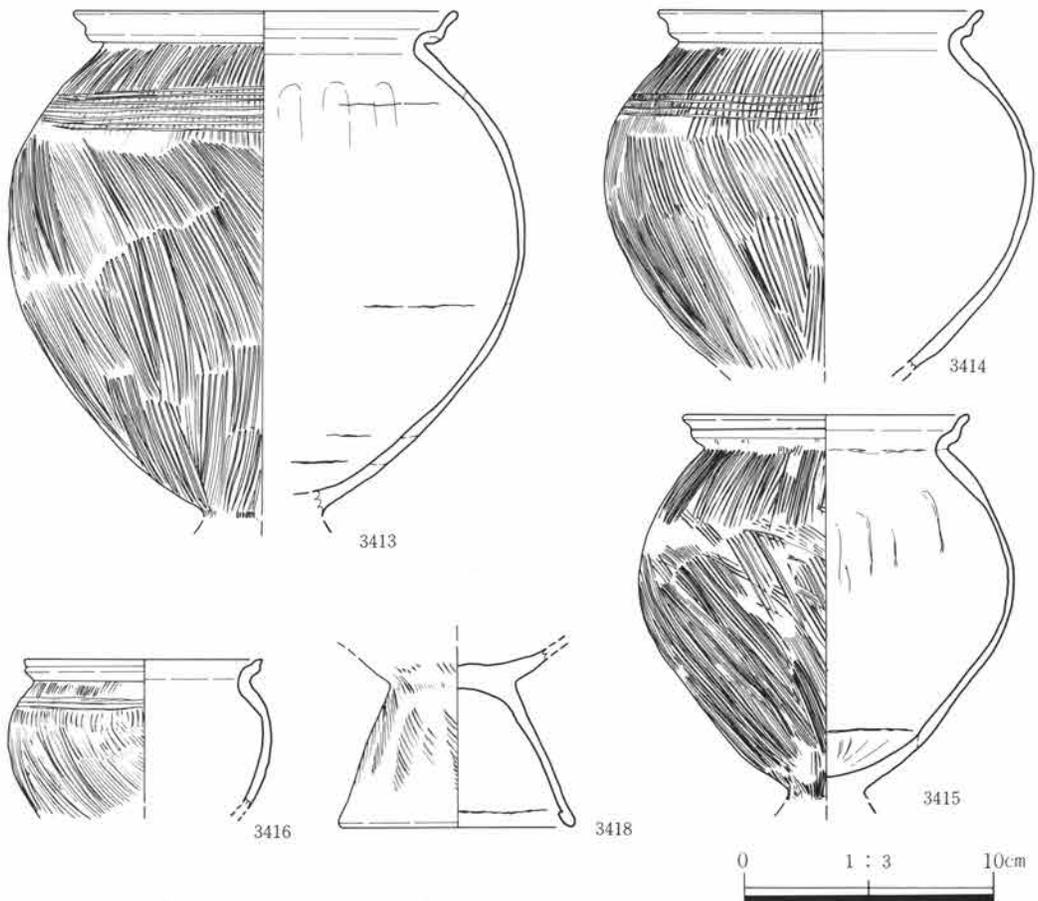
第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は非常に悪い。床面はやや軟弱であり、凹凸が多い。

炉・柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。遺物もほとんどなく、当住居跡の時期の限定は困難であるが、覆土の状態・覆土から「S」字状口縁を持つ台付甕の小片が出土していることから、古墳時代前期の住居跡と推定している。(井川)

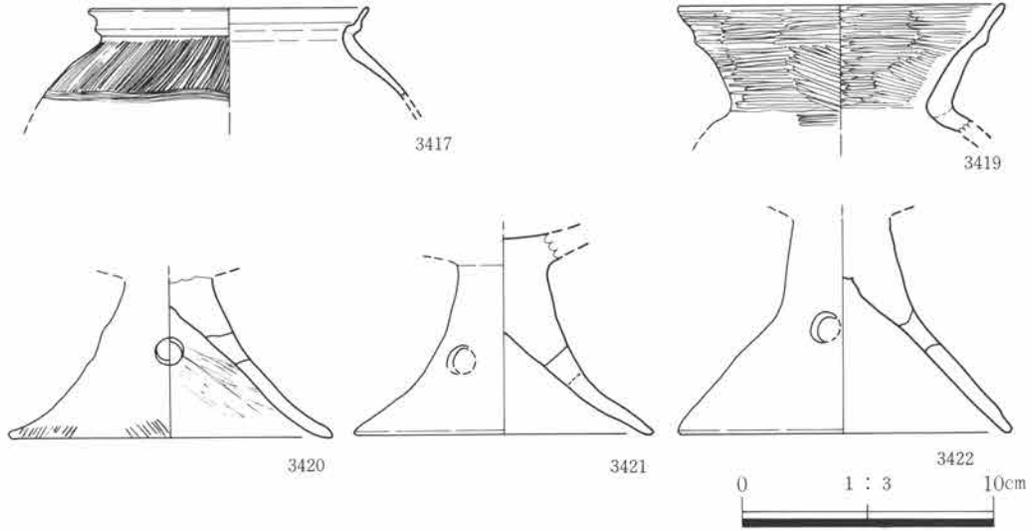


第176図 I地区B区41a・41b号住居跡遺構図(2)



第177図 I地区B区41a号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



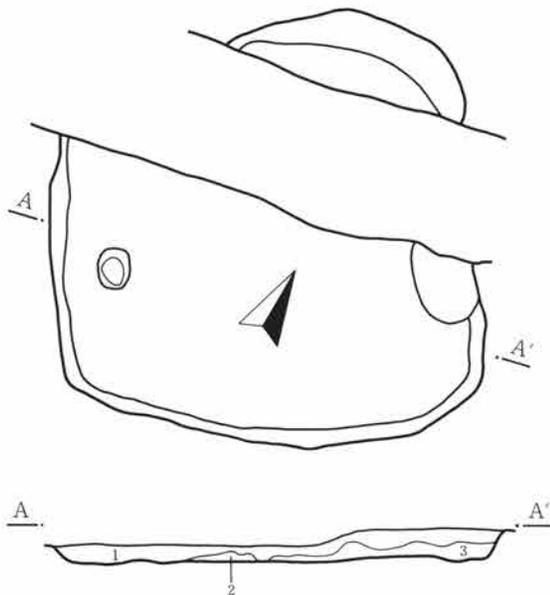
第178図 I 地区B区41a号住居跡遺物図（2）

第 47 表 I 地区B区41a号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3413	台付壺土師器	器高:(201mm)口径:154mm 底径:一最大径:206mm 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで、一部指頭痕が残る。	住居内北東部床直内外面に多量の油煙付着。
3414	台付壺土師器	器高:(142mm)口径:130mm 底径:一最大径:171mm 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。明黄褐。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ目、下半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北東部床直内外面に多量の油煙付着。
3415	台付壺土師器	器高:(153mm)口径:[115mm] 底径:一最大径:[150mm] 口縁部～脚部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。黄橙。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部～脚部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部～底部はなで。体部下端に輪積み痕が顕著に残る。	住居内北西部床上10cm。内外面に油煙付着。
3416	台付壺土師器	器高:(62mm)口径:95mm 底径:一最大径:106mm 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明黄褐。	口縁部は「S」字状。最大径は体部上半。外面:体部上半は縦ハケ目後横ハケ目、体部下半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内北東部床直内外面に多量の油煙付着。
3417	台付壺土師器	器高:(38mm)口径:112mm 底径:一口縁部～体部上端残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。淡黄。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内北東部床直内外面に油煙付着

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

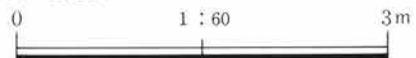
3418	台付甕 土師器	器高:(71mm)口径: 一底径:94mm体部下 端~脚部残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	脚部は「ハ」の字にひらき、先端は折 り返し。外面:体部下端は縦ハケ目、 脚部は斜めハケ目後まで。内面:体部 下端~底部はなで。	住居内中央部床直 外面に油煙付着。
3419	壺 土師器	器高:(51mm)口径: [131mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	口縁部は外湾し、段を持つ。外面: 口縁部~体部上端は寛磨き。内面 :口縁部は寛磨き、体部上端はな で。	住居内覆土。内面 に油煙付着。
3420	高杯 土師器	器高:(64mm)口径: 一底径:129mm脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	脚部は「ハ」の字にひらき、4個の円 形穿孔。外面:足支部はなで、先端は ハケ目。内面はハケ目。	住居内中央部床上 20cm。外面に油煙 付着。
3421	高杯 土師器	器高:(80mm)口径: 一底径:[120mm]底部 ~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	脚部は「ハ」の字にひらき、3個の円 形穿孔。外面:脚部はなで。内面:底部 ~脚部はなで。	住居内覆土。
3422	高杯 土師器	器高:(86mm)口径: 一底径:[133mm]脚 部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	脚部は「ハ」の字にひらき、3個の円 形穿孔。内外面共に脚部はなで。	住居内北西部床上 10cm。



I地区B区42号住居跡土層説明

- 1 褐色土 浅間A軽石を含む。
- 2 褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 3 褐色土 少量の焼土粒子を含む。

L=88.162



I地区B区42号住居跡(第
179・180図、第48表)

本住居跡は、耕作土下、黄褐色土
中で確認された。11号溝と重複する
が、本住居跡が古い。規模は東西方
向約3.4m・南北方向約3.5mを測る。
主軸はN-33°-Wである。平面形は
体部張りの方形を示す。床面はロー
ム面となっている。遺物は土師器の
甕・杯が出土している。出土遺物か
ら古墳時代後期とする。(秋池)

第179図 I地区B区42号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第180図 I 地区 B 区42号住居跡遺物図

第 48 表 I 地区 B 区42号住居跡遺物観察表

番号	器 種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3423	甕 土 師 器	器高:(53mm)口径: 一底径:[72mm]体部 下端~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	外面:体部下端~底部は篋削り。内 面:体部下端~底部はなで。	住居内覆土。外面 に油煙付着。
3424	杯 土 師 器	器高:(29mm)口径: [104mm]底径:一口縁 部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	外面に不明瞭な稜を持つ。丸底。外 面:口縁部は横なで、体部は篋削り。 内面:口縁部~体部は横なで。	住居内覆土。

I 地区 B 区43号住居跡（第181・182図、第49表、図版32）

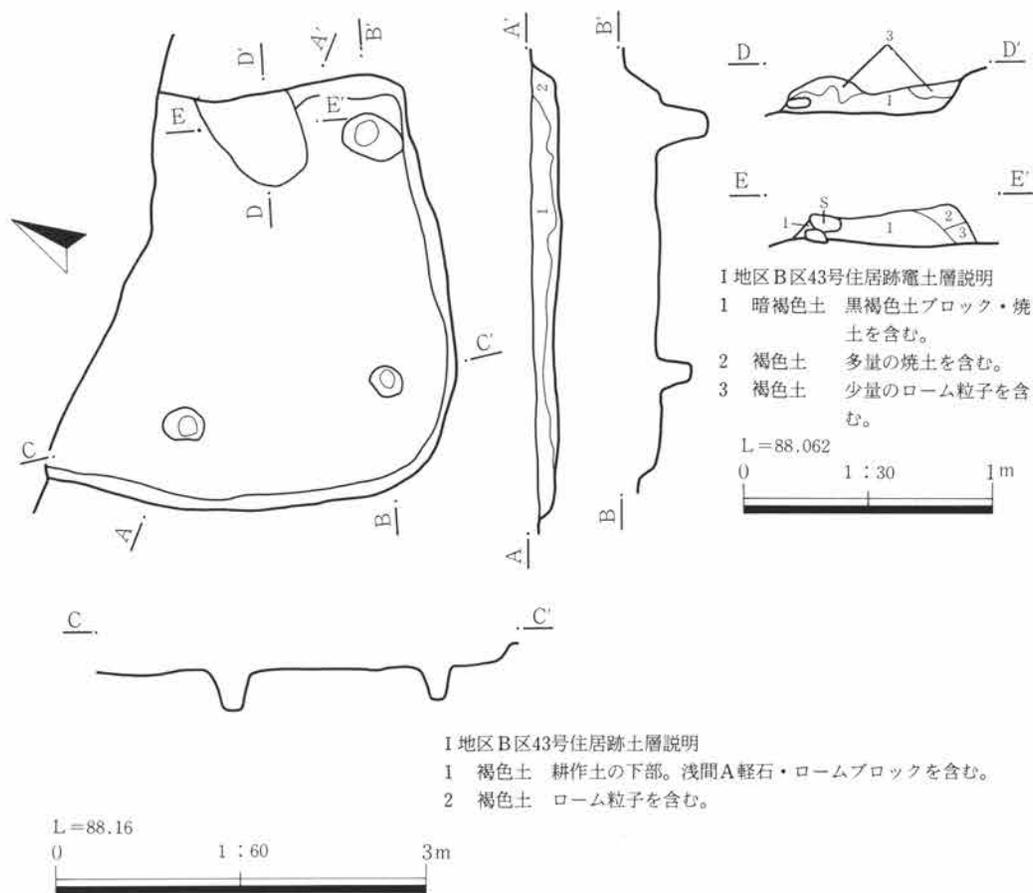
当住居跡は、B区11号溝跡と重複する。新旧関係は、B区11号溝跡が当住居跡の北側部分を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、B区11号溝跡に破壊されており確定できないが、東西方向は約3.3mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約20cmである。床面は比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

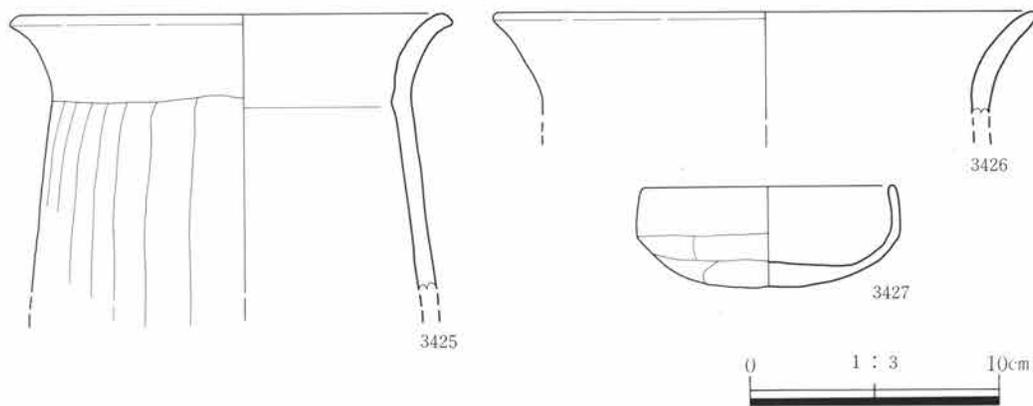
竈は、東側壁の南よりに築かれている。袖は検出できなかったが、燃烧部からは袖の構築材に使用されたと考えられる河原石と焼土が検出できた。支柱穴は4本と推定できるが、検出できたピットは3基である。規模は、径25~45cm・床面からの深さ25~40cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の長胴甕・杯が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、7世紀中葉である。

（井川）



第181図 I 地区B区43号住居跡遺構図



第182図 I 地区B区43号住居跡遺物図

第 49 表 I 地区 B 区 43 号住居跡遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備 考
3425	甕 土 師 器	器高:(110mm)口径: 177mm底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径 3~4 mm の小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。明黄褐。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横な で体部上半は篋削り。内面:口縁部は横 なで、体部上半は篋なで。	住居内中央部床上 10cm。外面に油煙 付着。
3426	甕 土 師 器	器高:(42mm)口径: [218mm]底径:一口縁 部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 4~5 mm の小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	口縁部は外湾。内外面共に口縁部は 横なで。	住居内覆土。
3427	杯 土 師 器	器高:40mm口径:[100 mm]底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径 1~2 mm の小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 橙。	口縁部は内湾。外面:口縁部は横な で体部~底部は篋削り。内面:口縁部は 横なで、体部~底部はなで。	住居内南壁中央脇 床上10cm。

I 地区 B 区 44 号住居跡（第183・184図、第50表、図版31・33）

当住居跡は、B区37号住居跡・B区45号住居跡と重複する。B区37号住居跡との新旧関係は、当住居跡がB区37号住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。B区45号住居跡との新旧関係は、同住居跡が当住居跡の南西部分の壁・床及び竈を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、一辺約4.1mであり、平面形は隅丸方形を呈する。確認面までの壁の立ち上がりは、約10~20cmである。床面は比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、西側壁の三波よりに築かれている。大部分がB区45号住居跡により破壊されているが、燃焼部・煙道部の掘り込みと焼土を検出することができた。又、竈の周辺からは袖・天井の構築材と考えられる河原石が出土している。支柱穴は4基である。規模は、直径20~30cm・床面からの深さ約30~50cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器の長胴甕・甗・杯・高杯の他、管玉が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期・6世紀後半である。（井川）

I 地区 B 区 45 号住居跡（第183・184図、第51表）

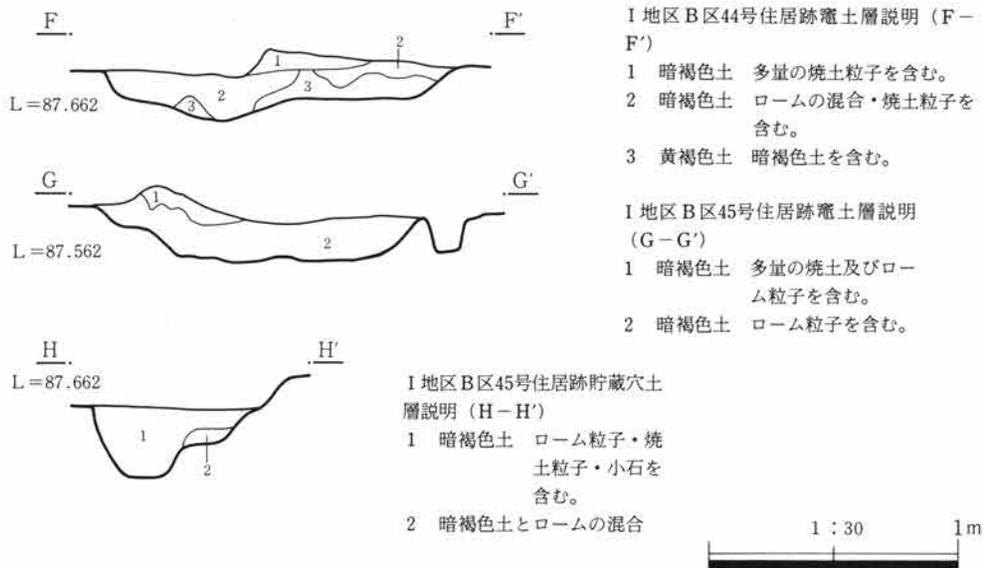
当住居跡は、B区37号住居跡・B区44号住居跡と重複する。B区37号住居跡との新旧関係は、当住居跡がB区37号住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。B区44号住居跡との新旧関係は、当住居跡がB区44号住居跡との南西部分の壁・床及び竈を破壊していることから、当住居跡の方が新しい。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

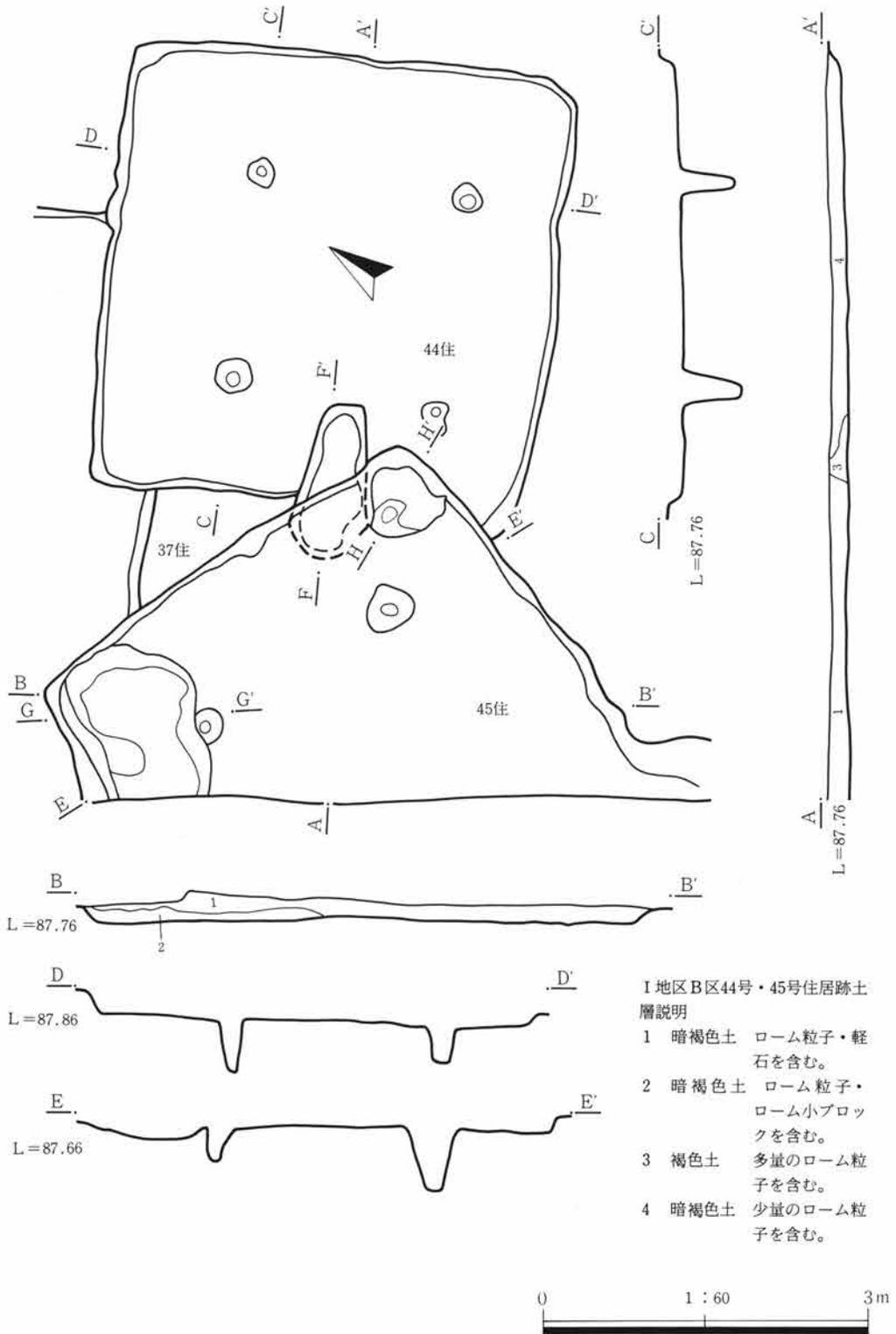
当住居跡の規模は、西側部分が調査区域外のために確定することはできないが、南北方向は約4.1mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約15～20cmである。床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

竈は、北東部の隅に築かれている。袖は確認できなかったが、燃烧部から焼土を検出することができた。主柱穴は4基と考えられるが、調査区域内から検出できたのは2基である。規模は、径30～40cm・床面からの深さ約30～60cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。住居跡内の南東部隅からはピットを検出することができた。規模は、一辺約70cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不整形な方形を呈する。覆土には焼土が混入している。同ピットは貯蔵穴と推定できる。

遺物は土師器の甕・杯・須恵器の杯が出土しているが、出土量は少ない。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、6世紀後半～7世紀初である。 (井川)

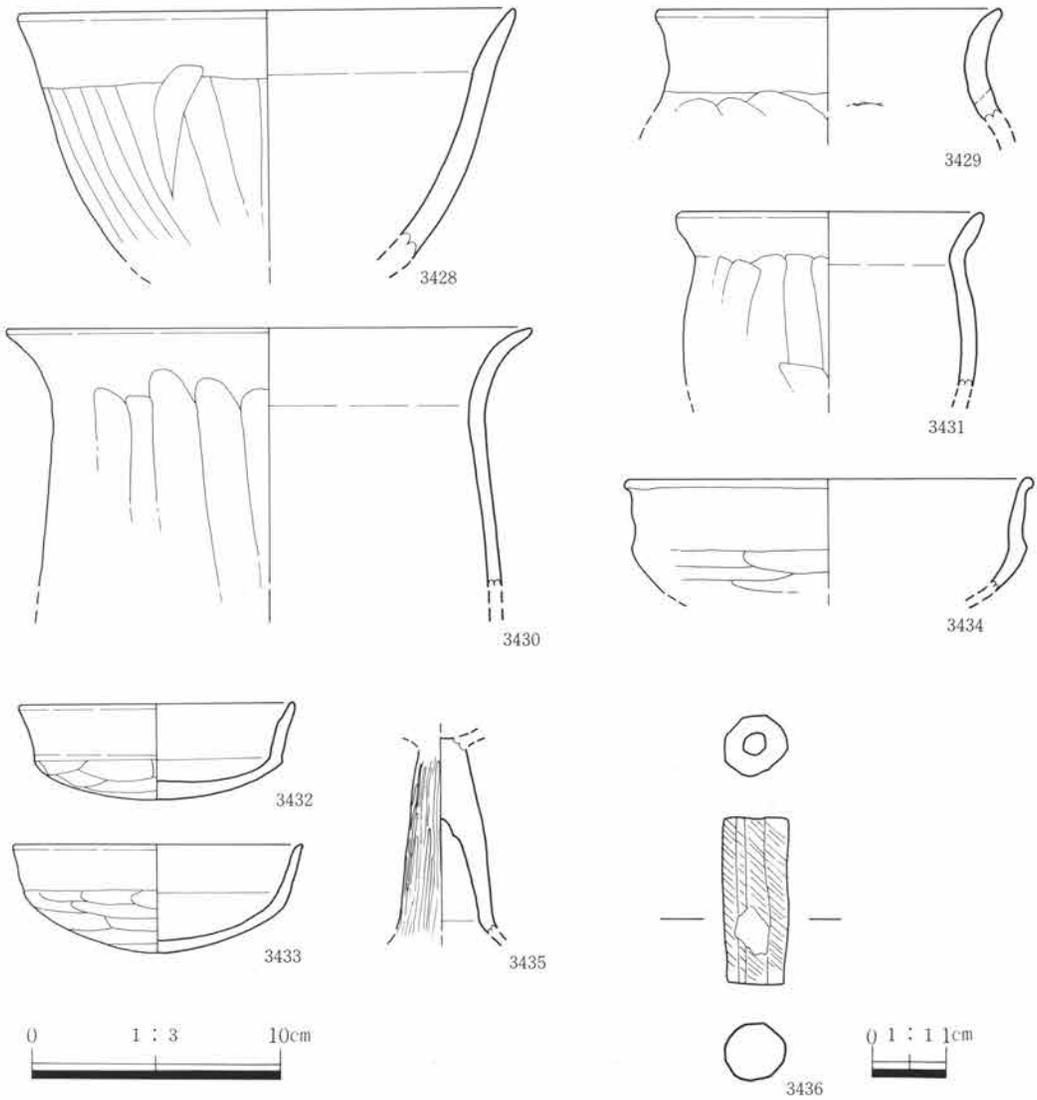


第183図 I 地区B区44・45号住居跡遺構図(2)



第184図 I 地区B区44・45号住居跡遺構図（1）

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物



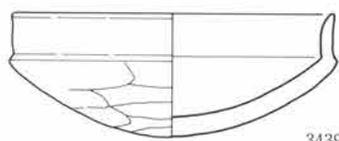
第185図 I地区B区44号住居跡遺物図

第50表 I地区B区44号住居跡遺物観察表

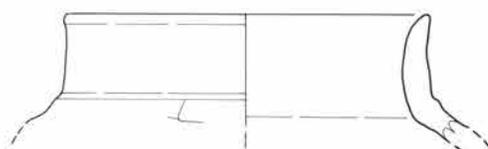
番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3428	甑 土師器	器高:(99mm)口径: [200mm]底径:一口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。浅黄。	口縁部は僅かに外湾。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南東部床直内面に油煙付着。
3429	甕 土師器	器高:(45mm)口径: [139mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。灰白。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	柱穴内。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

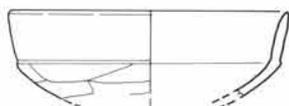
3430	甕 土師器	器高:(103mm)口径: [210mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は外湾。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内南西部床直外面に油煙附着。
3431	甕 土師器	器高:(69mm)口径: [124mm]底径:一口縁部 ~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明褐。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内南西部床直内面に油煙附着。
3432	杯 土師器	器高:38mm口径:111mm 底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内覆土。
3433	杯 土師器	器高:43mm口径:[116mm] 底径:一口縁部 ~底部 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部はやや外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部~底部はなで。	住居内南西部床直外面に油煙附着。
3434	杯 須恵器	器高:(45mm)口径: [164mm]底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	外面に稜を持つ。口縁部は僅かに外湾。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内南東部床直
3435	高杯 土師器	器高:(77mm)口径: 一底径:一脚部 $\frac{3}{4}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質浅黄。	外面:脚部は篋磨き。内面:脚部はなで。	住居内覆土。
3436	管玉	長さ:21mm直径:7.5mm 孔径:2mm		未完成品。穴は貫通していない。	住居内北東部床上10cm。



3439



3437



3438



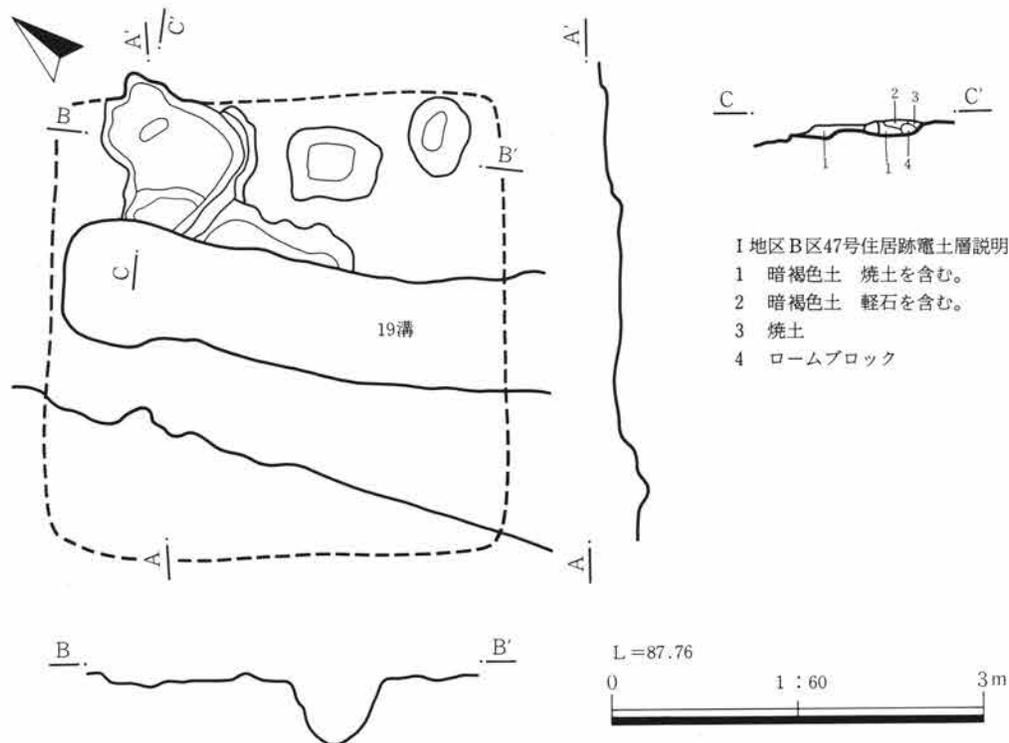
第186図 I地区B区45号住居跡遺物図

第51表 I地区B区45号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3437	甕土師器	器高:(51mm)口径: [147mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径3~4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。淡橙。	口縁部は僅かに外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。
3438	杯土師器	器高:(35mm)口径: [112mm]底径:一口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。赤橙。	外面に稜を持つ。口縁部はやや外湾。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内覆土。
3439	杯須恵器	器高:(49mm)口径: [129mm]底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。明赤褐。	外面に稜を持つ。口縁部は僅かに外湾。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は篋削り。内面:口縁部~体部は横なで、底部はなで。	竈内。内外面に油煙付着。

I地区B区47号住居跡 (第187・188図、第52表、図版31・33)

当住居跡は、B区19号溝跡と重複する。新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡の方が古い。当住居跡の規模は、大部分が破壊されており、掘形での確認のために不明であるが、平面形は隅



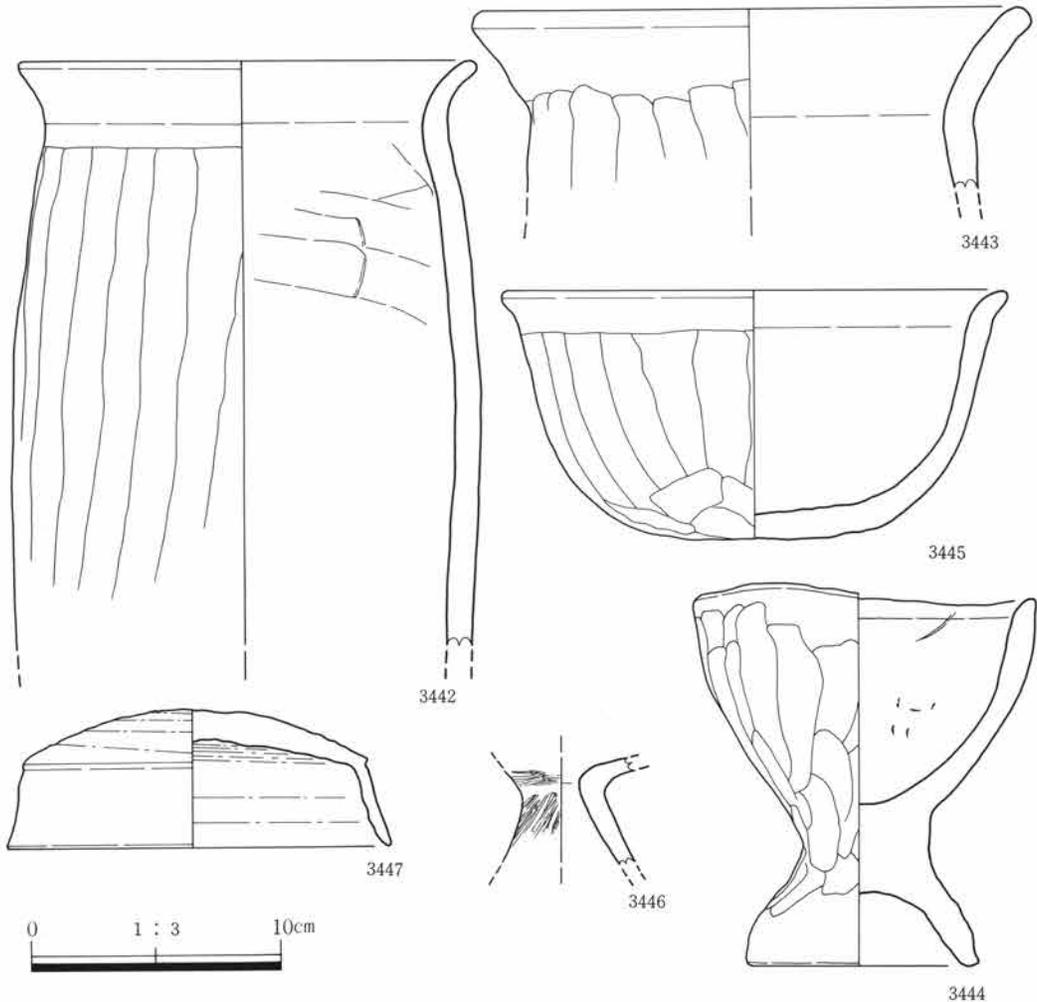
第187図 I地区B区47号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）

丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定している。

当住居跡からは、壁・床・柱穴は検出できず、確認できたのは竈と貯蔵穴である。竈は東側壁の北よりに築かれていると推定される。袖の一部と、燃烧部から構築材に使用されたと考えられる河原石と焼土を検出することができた。貯蔵穴と考えられるピットは、竈の右脇と南東部隅と推定される位置に、2基検出できた。竈右脇のピットの規模は、長辺約70cm・短辺約60cm・確認面からの深さ約50cmであり、平面形は長方形を呈する。南西部隅のピットの規模は、長軸約60cm・短軸約50cm・確認面からの深さ約15cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。両ピット共に内部から土師器が出土している。

遺物は、土師器の甕・台付甕・鉢・器台・須恵器の蓋が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代後期、6世紀後半である。（井川）



第188図 I地区B区47号住居跡遺物図

第52表 I地区B区47号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3442	甕土師器	器高:(232mm)口径:184mm底径:一最大径:188mm口縁部～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は外湾。最大径は体部上半。外面:口縁部は横なで、体部上半は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上半は篋なで。	住居外南東部。外面に油煙付着。
3443	甕土師器	器高:(72mm)口径:[224mm]底径:一口縁部～体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径3～4mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁部は横なで、体部上端は篋削り。内面:口縁部は横なで、体部上端はなで。	住居外南東部。
3444	台付甕土師器	器高:152mm口径:137mm底径:92mm完形	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	体部～口縁部は内湾。脚部は「ハ」の字にひらく。外面:口縁部は横なで、体部～脚部上半は篋削り、脚部下半は横なで。内面:口縁部は横なで、体部～底部は篋なで、脚部は篋なで。	住居外南東部。内外面に多量の油煙付着。
3445	鉢土師器	器高:99mm口径:[202mm]底径:75mm口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2～3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は外湾。底部は丸底に近い平底。外面:口縁部は横なで、体部は篋削り、底部は指なで。内面:口縁部は横なで、体部は篋なで、底部は指なで	住居外南東部。内外面に油煙付着。
3446	器台土師器	器高:(43mm)口径:一底径:一体部下端～脚部上半残	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	内面底部は円形穿孔。外面:体部下端～脚部上半は篋磨き。内面:底部～脚部上半はなで。	住居外南東部。内外面に油煙付着。
3447	蓋須恵器	器高:55mm口径:153mm底径:一ほぼ完形	直径1～2mmの小石、及び砂粒を含む。還元。硬質。灰。	外面天井部下端に沈線一条。外面:天井部は回転篋削り、口縁部は横なで。内面:天井部～口縁部は回転なで。	住居外電右脇。

I地区C区1号住居跡(第189～192図・第53表・図版34)

当住居跡は、C区1号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面がC区1号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。

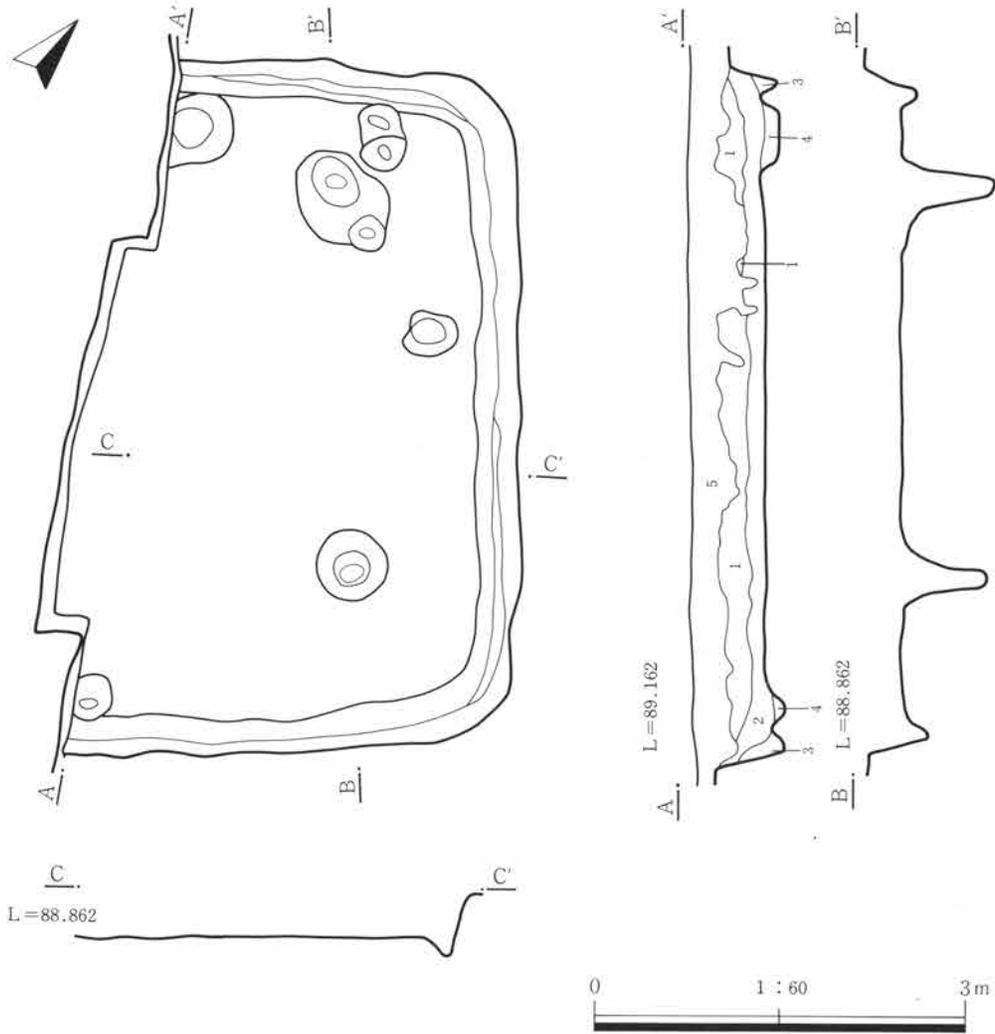
当住居跡の規模は、西側部分が調査区域外になるために確定できないが、南北方向は約5.5mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約30～40cmを測り、残存状態は比較的良好である。床面は、比較的堅く、平坦である。調査区域内からは、全面にわたり壁溝が検出できた。規模は、幅約15～20cm・床面からの深さ約5～10cmである。

調査区域内から炉を検出することはできなかった。支柱穴は4基と考えられるが、調査区域内から検出できたのは2基である。規模は、径約40～50cm・床面からの深さ約60～70cmを測り、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。その他、住居跡内からは6基のピットが検出できたが、貯蔵穴の可能性が考えられるのは、北側壁の西よりで検出できたピットである。

II 古墳時代（竪穴住居跡）

半分が調査区域外になるために規模の確定はできないが、短軸約50cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈するものと推定できる。

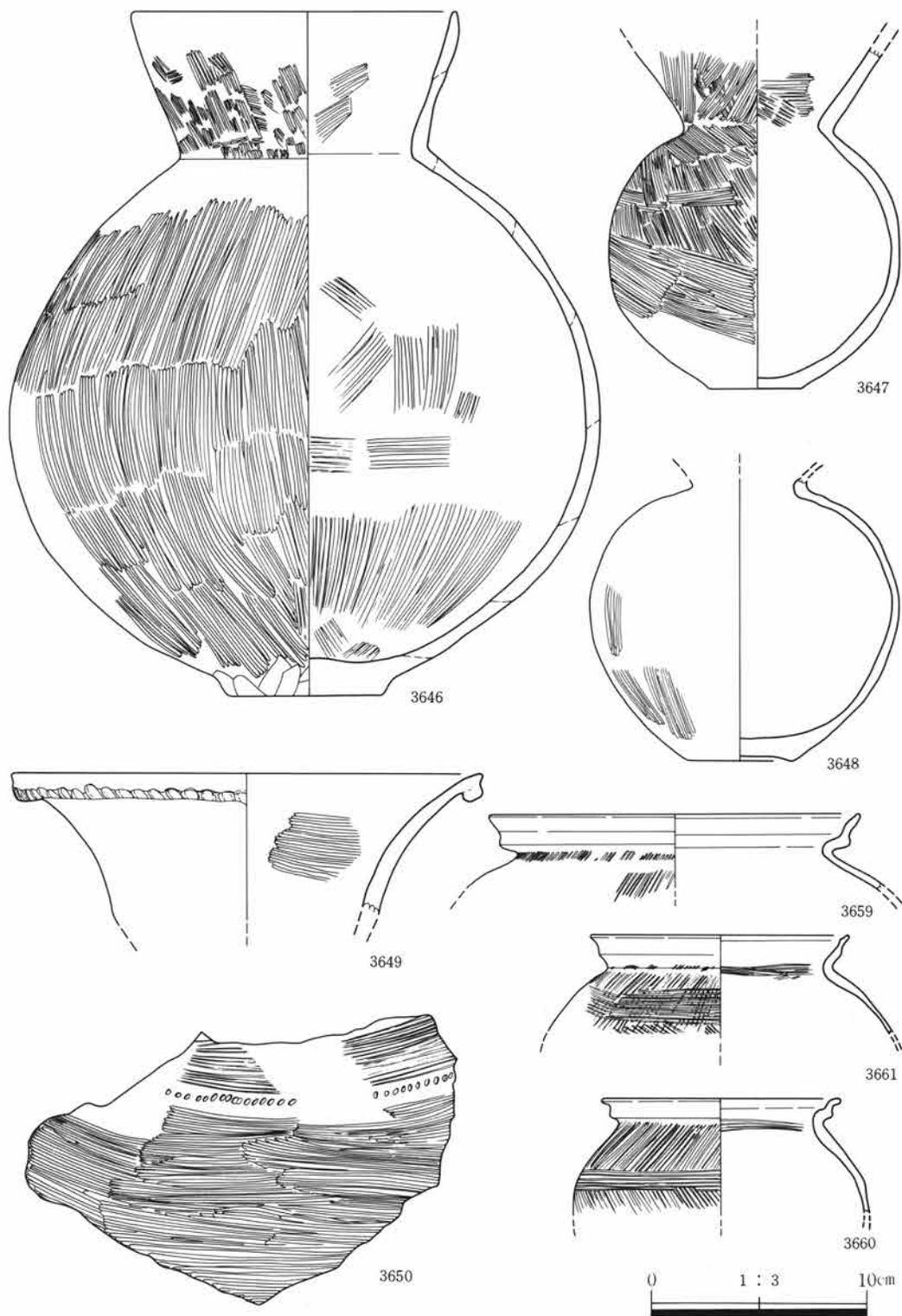
遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の壺・器台・高杯などが多量に出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）



I 地区C区1号住居跡土層説明

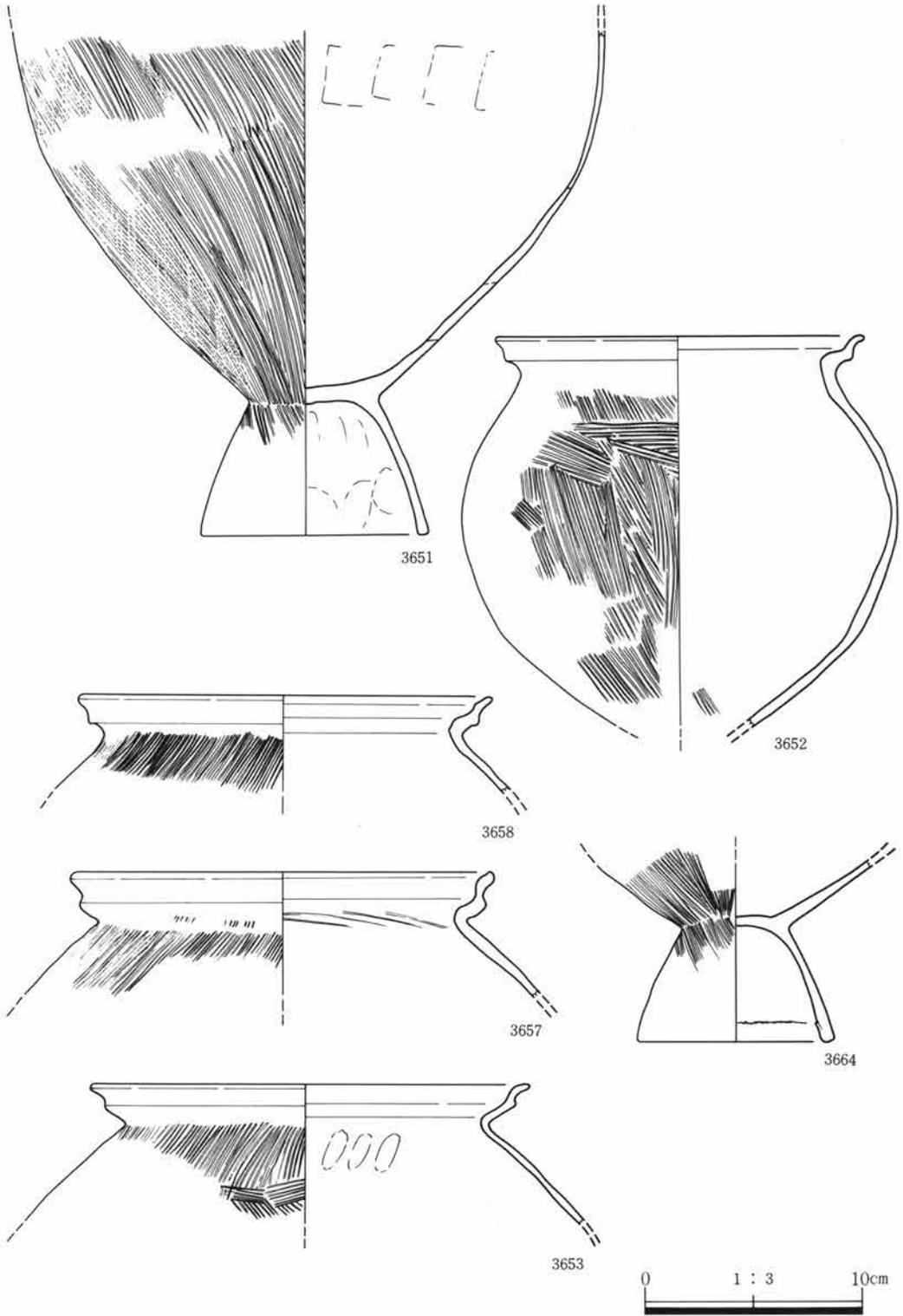
- 1 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粒子は粗い。
- 2 黒褐色土 やや多量のロームブロックを含む。
- 3 褐色土 やや多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
- 5 表土 耕作土

第189図 I 地区C区1号住居跡遺構図

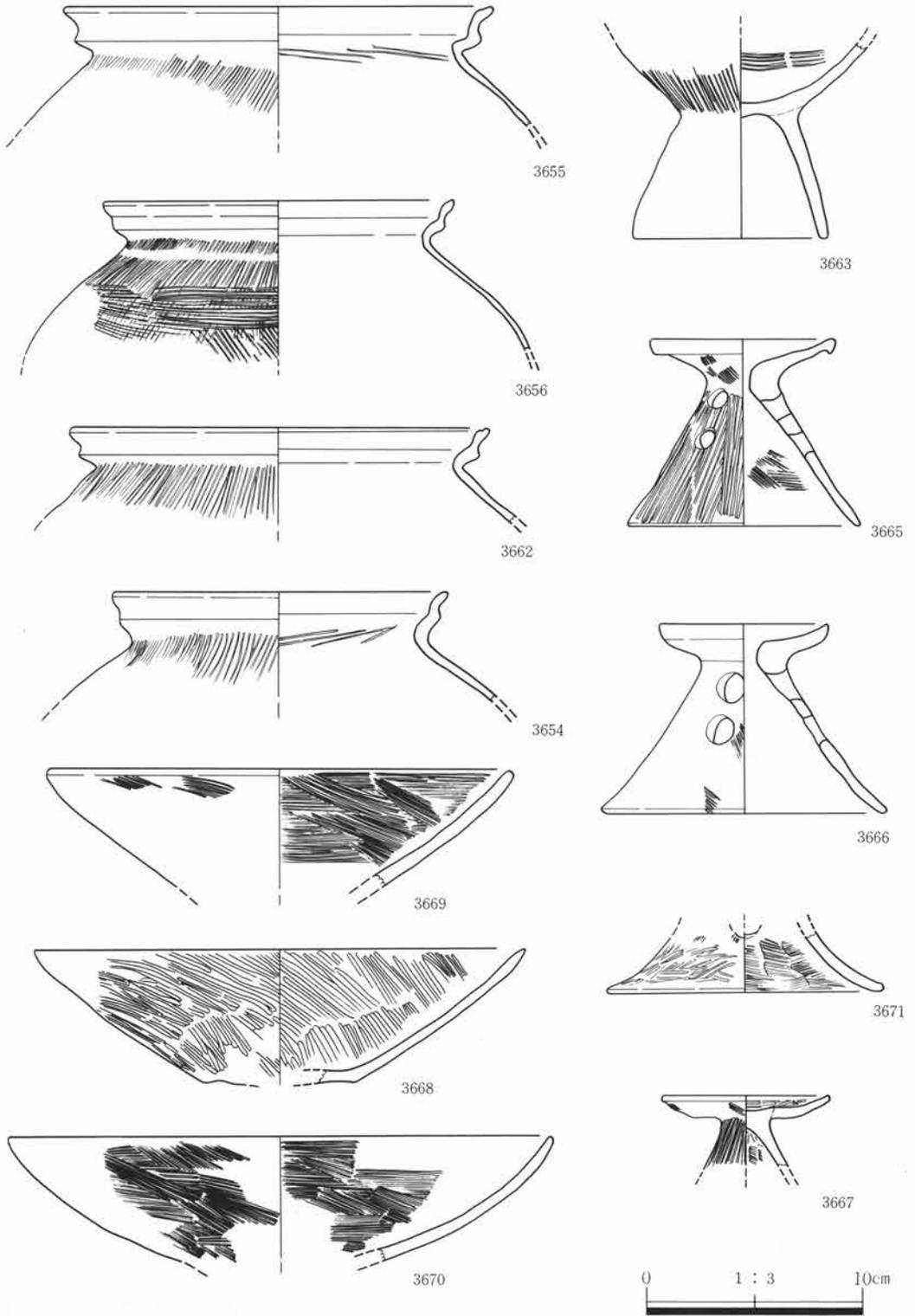


第190図 I地区C区1号住居跡遺物図(1)

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第191図 I地区C区1号住居跡遺物図(2)



第192図 I地区C区1号住居跡遺物図(3)

第53表 I地区C区1号住居跡遺物観察表

番号	器 種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3646	壺 土師器	器高:315mm口径:151mm底径:74mm最大径:151mmほぼ完形	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	口縁部は「く」字状に外湾し、口縁端部は僅かに内湾。最大径は体部下半。外面:口縁端部は横なで、口縁部~体部は篋磨き、体部下端~底部は篋なで内面:口縁端部は横なで、口縁部~底部はハケなで。	住居内中央部床直外面に油煙付着。
3647	壺 土師器	器高157mm底径:[43mm]最大径:136mm口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	口径:mm直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。球球形。最大径は体部中央。外面:口縁部~体部上半はハケなで後、篋磨き。体部下半は篋磨き、底部は篋なで。内面:口縁部はハケなで後、篋磨き、体部~底部は篋なで。	住居内南東部床直
3648	壺 土師器	器高:(130mm)口径:一底径:48mm最大径:143mm頸部~底部残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	球球形。最大径は体部中央と推定。外面:頸部にハケ目が残り、体部は篋削り、底部はなで。内面:体部~底部はなで。	住居内南東部床上10cm。外面に油煙付着し、器壁は荒れている。
3649	壺 土師器	器高:(68mm)口径:[218mm]底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。淡黄。	口縁部は大きく外湾し、端部は折り返し。外面口縁端部に刻み面あり。外面:口縁部はなで。内面:口縁部は篋磨き。	住居内北東部床直
3650	壺 土師器	器高:一口径:一底径:一腰部	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。黄橙。	外面:上部からクシ目、刺突文、篋磨き。内面はなで。外面は篋磨き後、赤色顔料塗布。	住居内中央部床上10cm。外面に油煙付着。
3651	台付壺 土師器	器高:(231mm)口径:一底径:106mm体部下半~脚部残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	脚部は「ハ」の字にひらく。外面:体部下半は縦ハケ目、脚部は斜めハケ目。内面:体部下半はなで、脚部は指なで	住居内南東部隅床上10cm。内外面に油煙付着。
3652	台付壺 土師器	器高:(179mm)口径:[170mm]底径:一最大径:[202mm]口縁部~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明黄褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ目、体部下半は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで、体部下端はハケ目が残る。	住居内南東部隅床上10cm。外面に油煙付着。
3653	台付壺 土師器	器高:(64mm)口径:[202mm]底径:一口縁部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明黄褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部上半はなで。	住居内南東部床上10cm。外面に油煙付着。
3654	台付壺 土師器	器高:(50mm)口径:[156mm]底径:一口縁部体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、頸部は横ハケ目、体部上端はなで。	住居内中央部床直外面に油煙付着。
3655	台付壺 土師器	器高:(55mm)口径:[199mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、頸部は横ハケ目、体部上半はなで。	住居内南東部床上10cm。外面に油煙付着。

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

3656	台付壺 土師器	器高:(71mm)口径: [162mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。褐色。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、体部上半 はなで。	住居内中央部床直 内外面に多量の油 煙付着。
3657	台付壺 土師器	器高:(57mm)口径: [196mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、頸部は横ハケ目、体部 上端はなで。	住居内南東部床上 10cm。外面に油煙 付着。
3658	台付壺 土師器	器高:(45mm)口径: [192mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内北東部床上 10cm。内外面に油 煙付着。
3659	台付壺 土師器	器高:(35mm)口径: [172mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。硬質鈍 い橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後、一部横 なで。内面:口縁部は横なで、体部上 端はなで。	住居内覆土。内外 面に多量の油煙付 着。
3660	台付壺 土師器	器高:(52mm)口径: [110mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後、横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、頸部は横 ハケ目、体部上半はなで。	住居内北東部床直 外面に油煙付着。
3661	台付壺 土師器	器高:(45mm)口径: [120mm]底径:一口縁 部~体部上半 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目後、横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、頸部は横 ハケ目、体部上半はなで。	住居内中央部床上 10cm。外面に油煙 付着。
3662	台付壺 土師器	器高:(42mm)口径: [194cm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内北東部床直 内外面に油煙付着
3663	台付壺 土師器	器高:(90mm)口径: 一底径:90mm体部下 端~脚部残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	脚部は「ハ」の字にひらく。外面:体部 下端は縦ハケ目、脚部はなで。内面: 体部下端は横ハケ目、底部はなで、脚 付着。部は指なで。	住居内南東部床上 15cm。外面に油煙 付着。
3664	台付壺 土師器	器高:(83mm)口径: 一底径:91mm体部下 端~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	脚部は「ハ」の字にひらく。外面:体部 下端~脚部上端は縦ハケ目、脚部は なで。内面:体部下端~脚部はなで。	住居内南東部床上 15cm。内外面に油 煙付着。
3665	器台 土師器	器高:86mm口径:[86 mm]底径:108mm口縁 部~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	杯部は小さく、外面口縁端部は凸帯 状。脚部は「ハ」の字にひらき、縦に2 個づつ三列計6個の円形穿孔。外面: 口縁部~体部はハケ目後なで。脚部 は篋磨き。内面:口縁部~体部は篋 磨き、脚部はハケ目。	住居内覆土。
3666	器台 土師器	器高:87mm口径:79mm 底径:132mm口縁部 ~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い橙。	杯部は小さい。脚部は「ハ」の字にひ らき、縦に2個づつ三列、計6個の円 形穿孔。外面:口縁部は横なで、体部 はなで、脚部は篋磨き。内面:口縁部 は横なで、体部~脚部上半ははなで、 脚部端部は横なで。	住居内南東部床上 10cm。外面に油煙 付着。

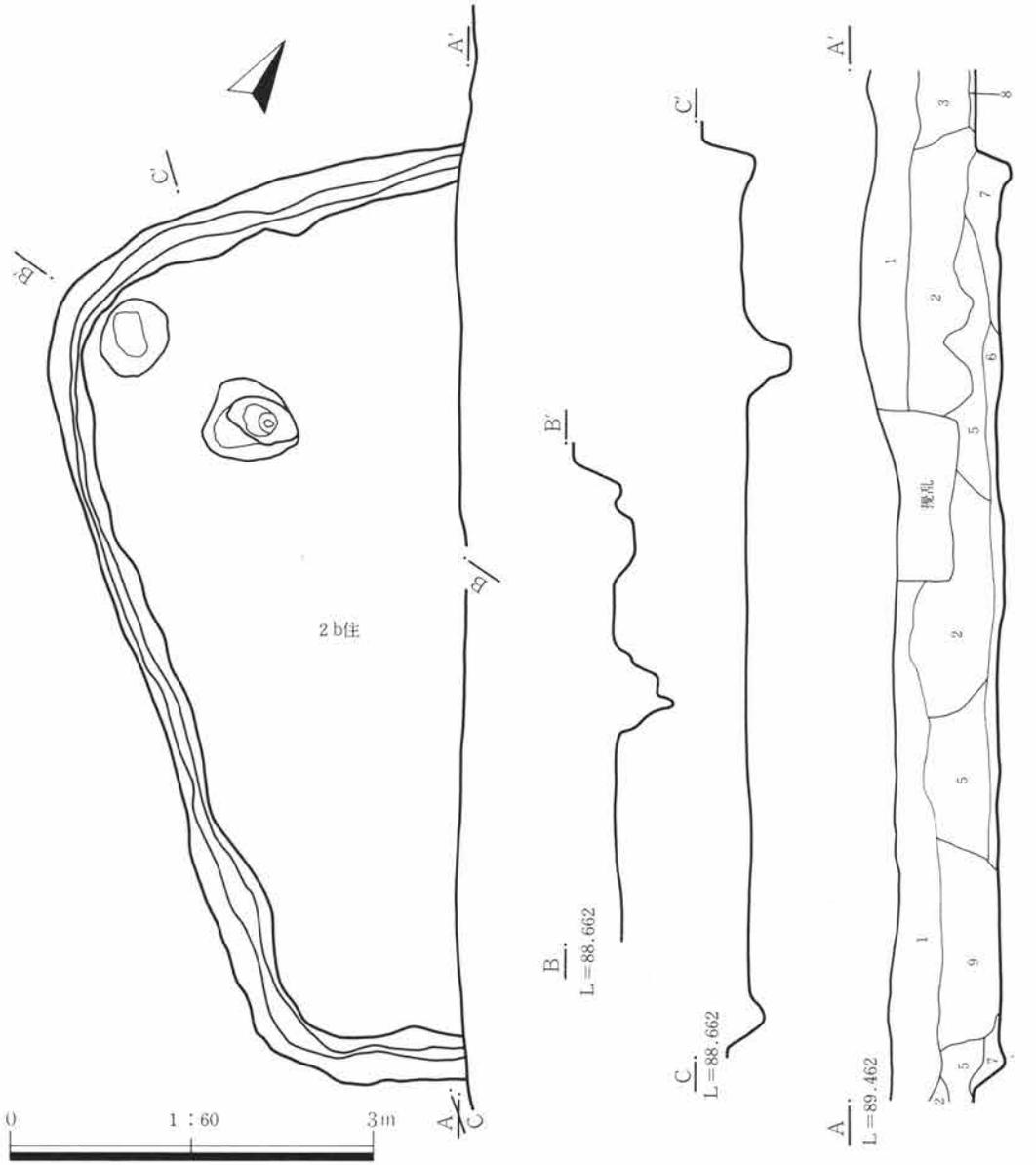
II 古墳時代（竪穴住居跡）

3667	器 土師器	器高:(33mm)口径: [77mm]底径:一口縁 部〜脚部上半 $\frac{1}{2}$ 残	直径2〜3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 鈍い黄橙。	口縁部は小さい。外面:口縁部は横な で、体部〜脚部上半は筥磨き。内面: 口縁部は横なで、体部〜底部は筥磨 き、脚部上半はハケ目。	住居内北東部床上 内外面に油煙附着
3668	高 土師器	器高:(62mm)口径: [226mm]底径:一口縁 部〜底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1〜2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	杯部は鉢状に大きくひろく。内外面 共に口縁部〜底部は筥磨き。	住居内北東部床上 10cm。内外面に油 煙附着。
3669	高 土師器	器高:(54mm)口径: [216mm]底径:一口縁 部〜体部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1〜2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	内外面共に口縁部〜体部は筥磨き。	住居内中央部床上 15cm。外面に油煙 附着。
3670	高 土師器	器高:(57mm)口径: [257mm]底径:一口縁 部〜体部 $\frac{1}{4}$ 残	直径2〜3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。鈍い橙。	口縁部はやや内湾。内外面共に口縁 部〜体部は筥磨き。	住居内覆土。
3671	高 土師器	器高:(28mm)口径: 一底径:128mm脚部下 半 $\frac{1}{2}$ 残	直径1〜2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	脚部は「ハ」の字にひろく。円形穿孔 あり。外面は筥磨き。内面はハケ目。	住居内中央部床上 15cm。外面に油煙 附着。

I 地区C区2b号住居跡（第193・194図・第54表・図版35）

当住居跡は、耕作土下、黄褐色土中で確認された。2a・2c・2d号住居跡と重複し、当住居跡が最も古い。東側は調査範囲外となっている。規模は、東西方向約7.5mを測る。平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈すると考えられる。床面はローム層で固く締まっている。壁下には、溝がまわされている。柱穴は径約60cm・深さ約50cmのものが1本確認できた。出土遺物はほとんどないが、土師器の台付甕・甕が出土している。遺物から、古墳時代前期の住居跡とする。

（秋池）



I地区C区2b号住居跡土層説明 (A-A')

- 1 黒褐色土 浅間A軽石を含む。耕作土。
- 2 褐色土 多量の浅間A軽石を含む。
- 3 褐色土 多量の浅間A軽石及びロームブロックを含む。
- 4 浅間A軽石層
- 5 黒褐色土 ローム粒子・軽石を含む。

- 6 褐色土 黒褐色土・焼土粒子・粘土を含む。上面は2a号住居跡の張り床。
- 7 黒褐色土 やや多量のローム粒子・ロームブロックを含む。
- 8 ローム層 ブロック状。褐色土を含む。
- 9 黒褐色土 多量の浅間A軽石・ロームブロックを含む。

第193図 I地区C区2b号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）



第194図 I地区C区2b号住居跡遺物図

第 54 表 I地区C区2b号住居跡遺物観察表

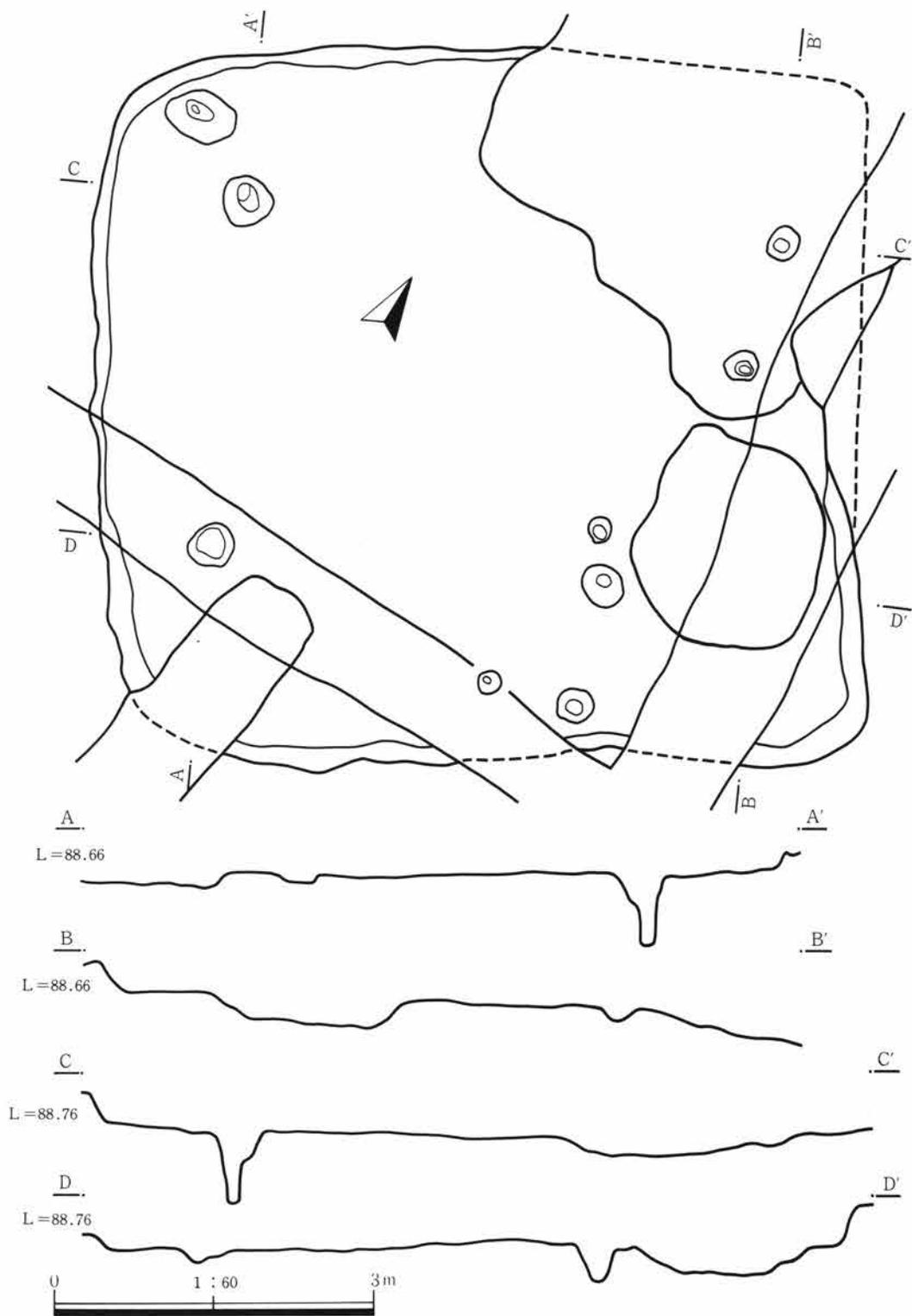
番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
3678	台付甕 土 師 器	器高:(64mm)口径: 一底径:93mm底部 ~脚部残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	脚部は「ハ」の字にひらく。外面:脚部 はなで。内面:底部はなで、脚部は指 なで。	住居内南東部床直 外面に油煙付着。
3679	甕 土 師 器	器高:(24mm)口径: 一底径:70mm体部下 端~底部%残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。硬質 明橙。	外面:体部下端は寛磨き、底部はなで 内面:体部下端~底部はなで。	住居内覆土。内面 に油煙付着。

I地区C区10号住居跡（第195・196図・第55表・図版35・36）

当住居跡は、C区3号古墳・C区1号溝跡・C区2号溝跡・C区1号土坑・C区10号土坑と重複する。C区3号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がC区3号古墳の墳丘下になることから、当住居跡の方が古い。C区1号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の南東部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。C区2号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。C区1号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の南西部隅の壁・床を破壊していることから当住居跡の方が古い。C区10号土坑との新旧関係は、同土坑が南東部の床を破壊していることから当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、破壊されている部分が多く、確定できないが、東西方向約6.5m・南北方向約7.1mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-58°-Eである。確認面からの壁の立ち上がりは、南側は約20~30m確認できたが、北東部はほとんど検出できなかった。検出できた部分の床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

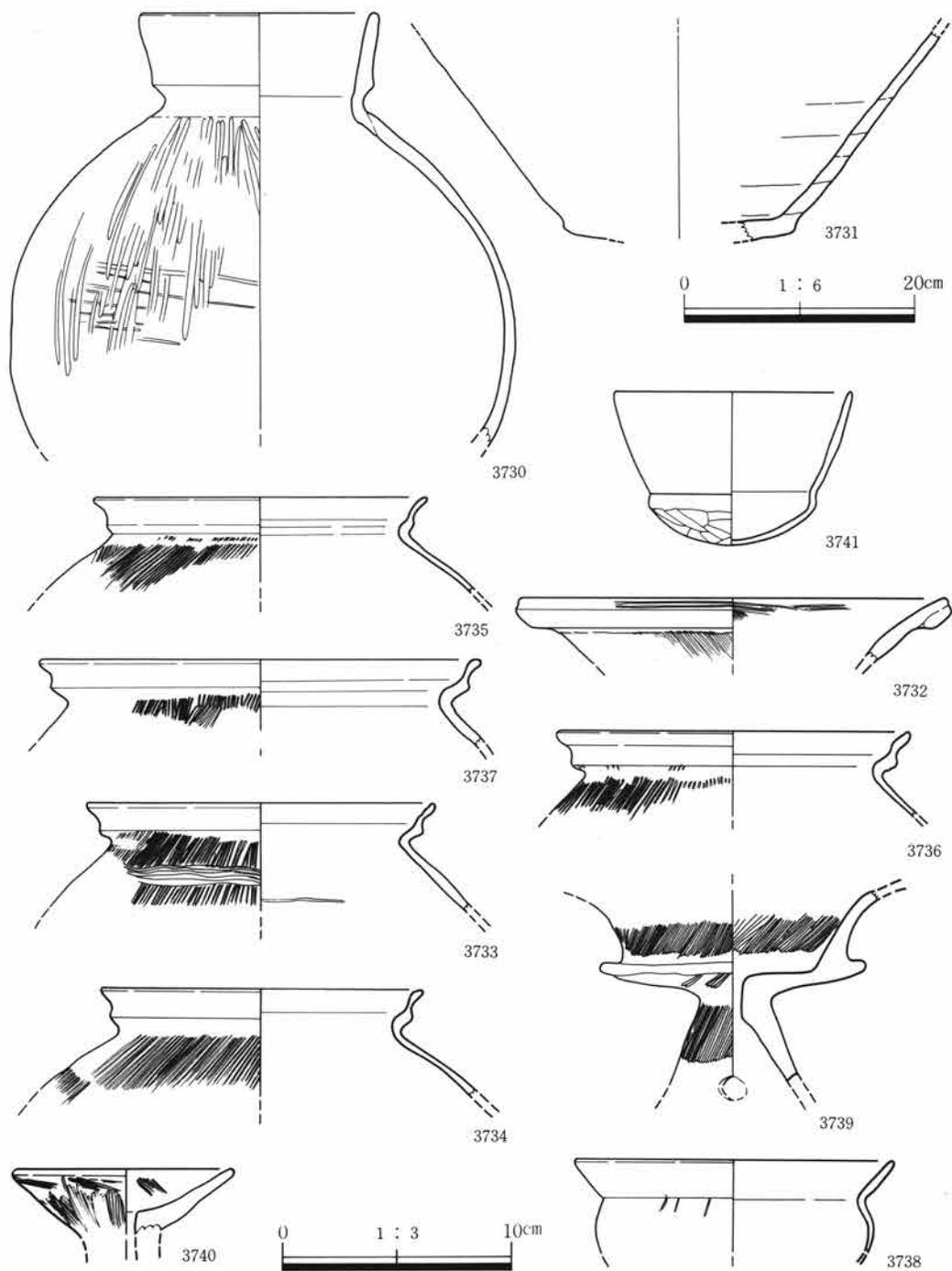
炉は検出できなかったが、住居跡内からは9基の小ピットが検出できた。北西部隅のピットとを除く8基のピットの規模は、直径約15~30cm・床面からの深さ約10~65cmであり、平面形は円形ないしは不整形な円形を呈する。柱穴と考えられるピットもあるが、ピットが揃わず、相互の位置に疑問は残る。北西部隅のピットの規模は、長軸約65cm・短軸約50cm・床面からの深さ約40cmであり、平面形は楕円形を呈する。貯蔵穴と考えることも可能である。



第195図 I地区C区10号住居跡遺構図

II 古墳時代（竪穴住居跡）

遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の台付甕の他、土師器の甕・壺・壺・埴・器台が出土している。
遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。（井川）



第196図 I 地区C区10号住居跡遺物図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

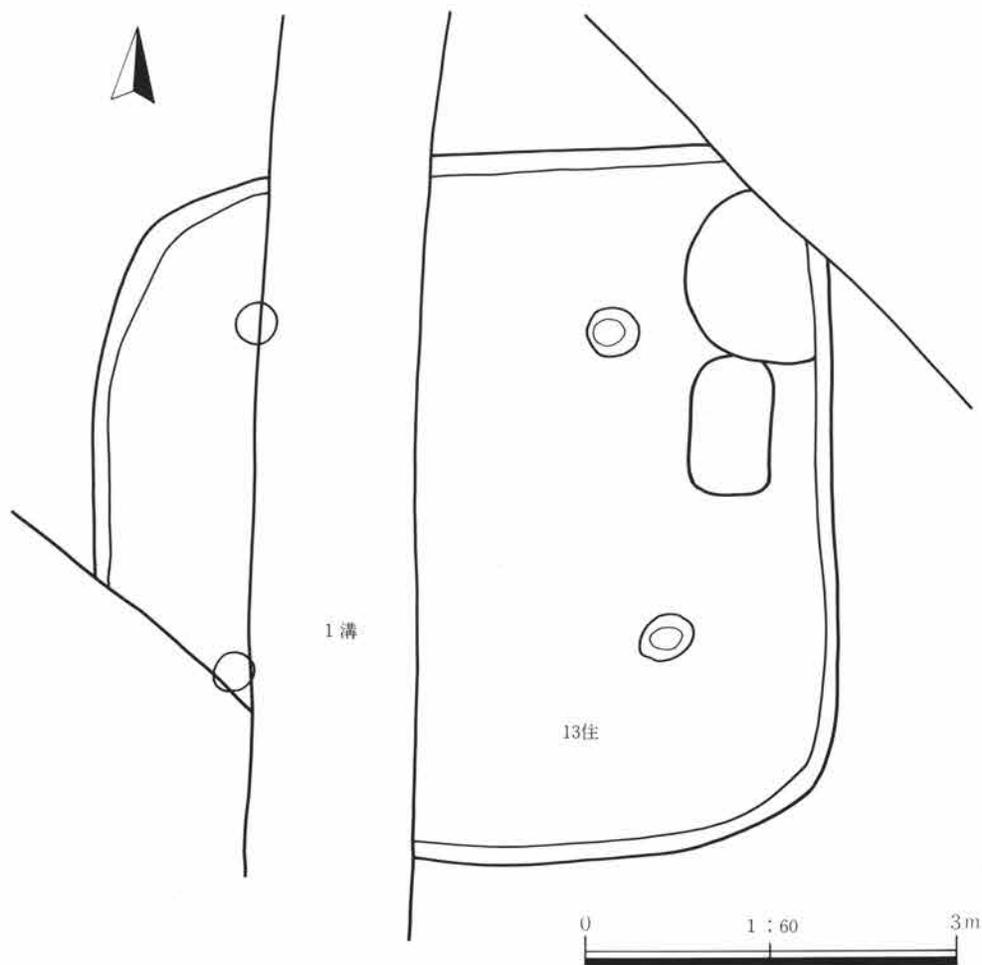
第55表 I地区C区10号住居跡遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
3730	壺 土師器	器高:(188mm)口径: [105mm]底径:一最大 径:[222mm]口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 軟質。橙。	球形。頸部は強く溢れ、やや外湾し つつ口縁部は立ち上がる。外面:口縁 部~頸部は横なで、体部は篋磨き。内 面:口縁部~頸部は横なで、体部はな で。	住居内北西部床上 10cm。
3731	甕 土師器	器高:(177mm)口径: 一底径:[202mm]体部 下半~底部 $\frac{1}{4}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。軟質 浅黄橙。	大きな底部から、体部は直線的に立 ち上がる。内外面共に剥落が激しく、 技法は観察不能。	住居内南東部床上 15cm。
3732	甕 土師器	器高:(28mm)口径: [190mm]底径:一口縁 部 $\frac{1}{4}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	口縁部は大きく外湾し、口縁端部は 折り返し。外面:口縁端部は横なで、 口縁部はハケ目。内面:口縁端部は横 なで、中央部はハケ目、下部はなで。	住居内覆土。外面 口縁端部・内面口 縁部は油煙付着。
3733	台付甕 土師器	器高:(46mm)口径: [152mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。浅黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上半は縦ハケ目後横ハケ 目。内面:口縁部は横なで、体部上半 はなで。	住居内覆土。内面 油煙付着。
3734	台付甕 土師器	器高:(46mm)口径: [141mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い褐。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内床下。外面 油煙付着。
3735	台付甕 土師器	器高:(41mm)口径: [146mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内南東部床直 内外面に油煙付着
3736	台付甕 土師器	器高:(36mm)口径: [154mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内南東部床上 10cm。外面に多量 の油煙付着。
3737	台付甕 土師器	器高:(36mm)口径: [194mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横 なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口 縁部は横なで、体部上端はなで。	住居内覆土。外面 に油煙付着。
3738	甕 土師器	器高:(40mm)口径: [140mm]底径:一口縁 部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を含む。酸化。やや硬 質。鈍い橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面:口縁 部は横なで、体部上端はなで、篋の 跡が残る。内面:口縁部は横なで、体 部上端はなで。	住居内覆土。内外 面に油煙付着。
3739	器台 土師器	器高:(85mm)口径: 一底径:一体部~脚 部上半残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い橙。	円盤状の底部から、外湾する体部が 立ち上がる。底部に円形穿孔1個。脚 部に円形穿孔4個。外面:体部~脚部 上半は篋磨き。内面:体部上半にハケ 目が残り、体部下半~底部は篋磨き、 脚部はなで。	住居内南西部床上 10cm。
3740	器台 土師器	器高:(29mm)口径:97 mm底径:一口縁部 ~体部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。橙。	口縁部~体部は直線的にひろがる。 内外面共に口縁部~体部は篋磨き。	住居内北西部床上 15cm。

3741	埴土師器	器高:66mm口径:[104mm]底径:一口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	外面に稜を持ち、大きな口縁部が広がる。丸底。外面:口縁部は横なで、体部~底部は筥削り。内面:口縁部は、横なで。体部~底部はなで。	住居内南東部床上15cm。
------	------	---	---------------------------------	--	---------------

I 地区C区13号住居跡（第197・198図・第56表・図版36）

当住居跡は、C区3号古墳・C区1号方形周溝墓・C区1号溝跡・C区33号土坑と重複する。C区3号古墳との新旧関係は、同古墳の周溝が当住居跡の南西部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。C区1号方形周溝墓との新旧関係は不明である。C区1号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の西側部分の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。C区33号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の北東部隅の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

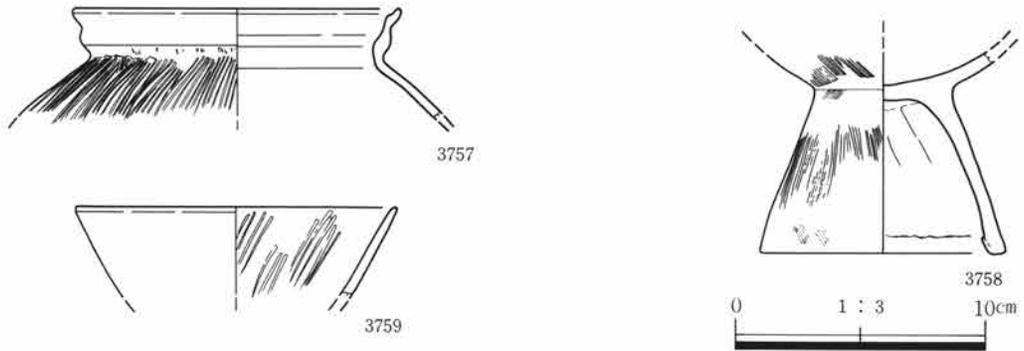


第197図 I 地区C区13号住居跡遺構図

第2章 縄文・古墳時代の遺構と遺物

当住居跡の規模は、東西方向約5.9m・南北方向約5.7mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-82°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、僅かであり、残存状態は悪い。確認できた部分の床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

炉は確認できなかった。支柱穴は4基である。規模は径約30~40cmであり、平面形は不整形な円形ないしは不整形な楕円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。遺物は、「S」字状口縁を持つ土師器の甕の他、土師器の罎が出土している。遺物から推定される当住居跡の時期は古墳時代前期である。
(井川)



第198図 I地区C区13号住居跡遺物図

第56表 I地区C区13号住居跡遺物観察表

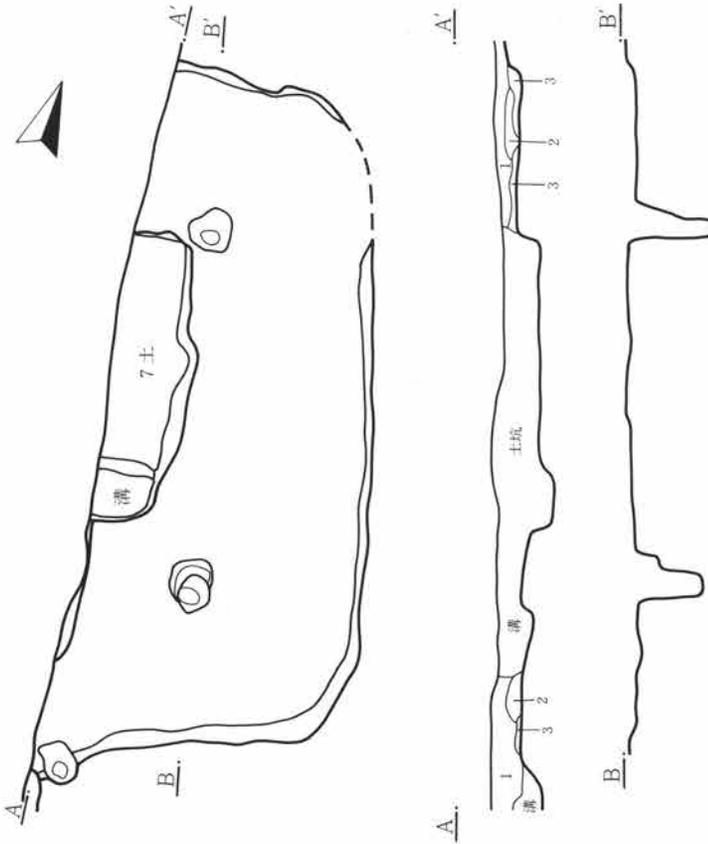
番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態備考
3757	台付甕土師器	器高:(43mm)口径:[132mm]底径:一口縁部~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「S」字状。外面:口縁部は横なで、体部上端は縦ハケ目。内面:口縁部は横なで、体部はなで。	住居内覆土。
3758	台付甕土師器	器高:(80mm)口径:一底径:[98mm]体部下端~脚部 $\frac{1}{2}$ 残	直径2~3mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	脚部は「ハ」の字にひらき、端部は折り返し。外面:体部下端は縦ハケ目、脚部は縦ハケ目後なで。内面:体部下端~底部はなで、脚部は筥なで。	住居内覆土。
3759	罎土師器	器高:(36mm)口径:[129mm]底径:一口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	直径1~2mmの小石、及び砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	内外面共に口縁部は横なで後、筥磨き。	住居内覆土。

I 地区D区1号

住居跡（第199図）

当住居跡は、D区3号古墳・D区7号土坑と重複する。D区3号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がD区3号古墳の墳丘下であることから、当住居跡の方が古い。D区7号土坑との新旧関係は、同土坑が当住居跡の中央部分の床面を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、西側部分が調査区域外になるために確定できないが、南北方向は約5.3mであり、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定される。確認面までの壁の立ち上がりは、約5～10cmであり、残存状態は悪い。床面は、比較的堅く、ほぼ平坦である。壁溝は検



I 地区D区1号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム粒子・軽石を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 黄褐色土 ロームを主体とし暗褐色土を含む。



第199図 I 地区D区1号住居跡遺構図

出できなかった。

調査区域内からは炉を検出することはできなかった。支柱穴は4基と考えられるが、検出できたのは2基である。規模は、径約30～40cm・床面からの深さ約55～65cmであり、平面形は不整形な円形ないしは楕円形を呈する。貯蔵穴は検出できなかった。

当住居跡からは、遺物の出土もなく、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周辺の遺構との関係から、古墳時代前期の住居跡と推定される。

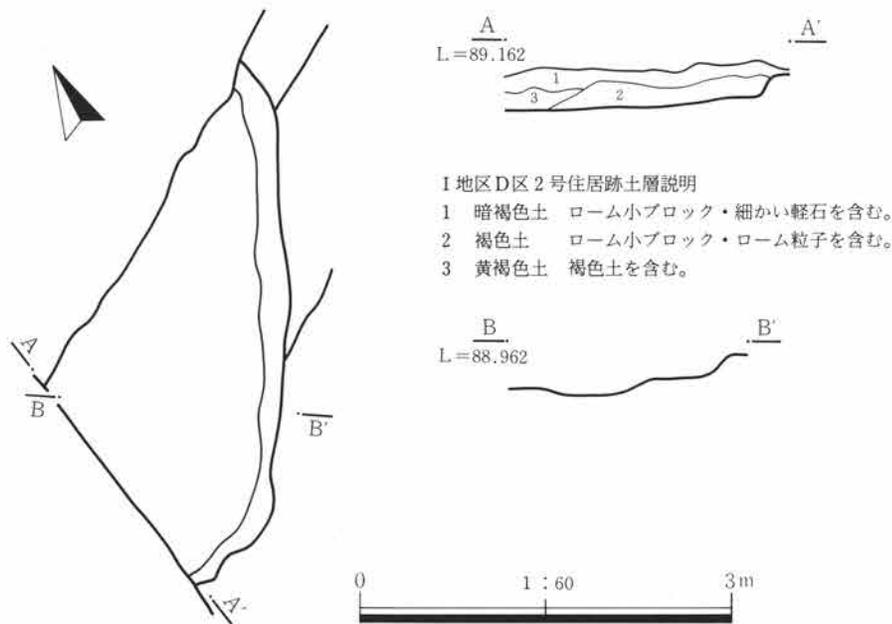
（中東）

I 地区D区2号住居跡（第200図）

当住居跡は、D区4号古墳と重複する。新旧関係は、当住居跡の確認面がD区4号古墳の墳丘下であること、同古墳の周溝が当住居跡の壁・床を破壊していることから、当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、D区4号古墳に破壊されている部分と調査区域外に当たる部分が多いために不明であるが、平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推定している。確認面までの壁の立ち上がりは約5～15cmであり、残存状態は非常に悪い。床面はやや軟弱であり、凹凸が多い。検出できた部分からは炉・壁溝・柱穴・貯蔵穴を検出することはできなかった。

当住居跡からは遺物の出土もなく、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周辺の遺構との関係から、古墳時代前期の住居跡と推定している。（中東）



第200図 I 地区D区2号住居跡遺構図

I 地区D区3号住居跡（第201図）

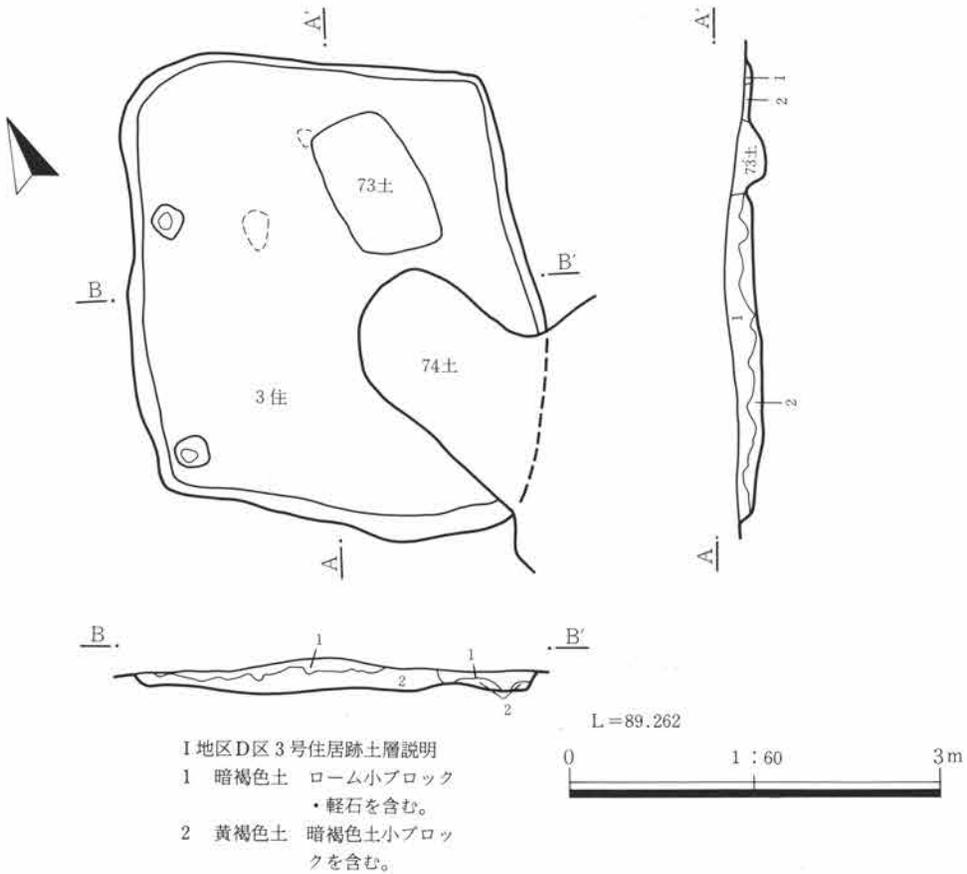
当住居跡は、D区4号古墳・D区39土坑・D区73土坑・D区74土坑と重複する。D区4号古墳との新旧関係は、当住居跡の確認面がD区4号古墳の墳丘下であることから、当住居跡の方が古い。D区39土坑との新旧関係は、当住居跡の北西部分の床面を同土坑が破壊していることから、当住居跡の方が古い。D区73土坑との新旧関係は、当住居跡の北東部分の床面を同土坑が破壊していることから当住居跡の方が古い。D区74土坑との新旧関係は、当住居跡の南東部分の壁・床

II 古墳時代（竪穴住居跡）

面を同土坑が破壊していることから当住居跡の方が古い。

当住居跡の規模は、東西方向約3.2m・南北方向約3.7mであり、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-15°-Eである。確認面までの壁の立ち上がりは、約5~10cmであり、残存状態は悪い。床面は、やや軟弱であり、凹凸が多い。炉・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出することができなかった。

当住居跡からは遺物の出土がなく、時期の限定は困難であるが、住居跡の形態・周辺の遺構との関係から古墳時代前期の住居跡と推定している。 (井川)



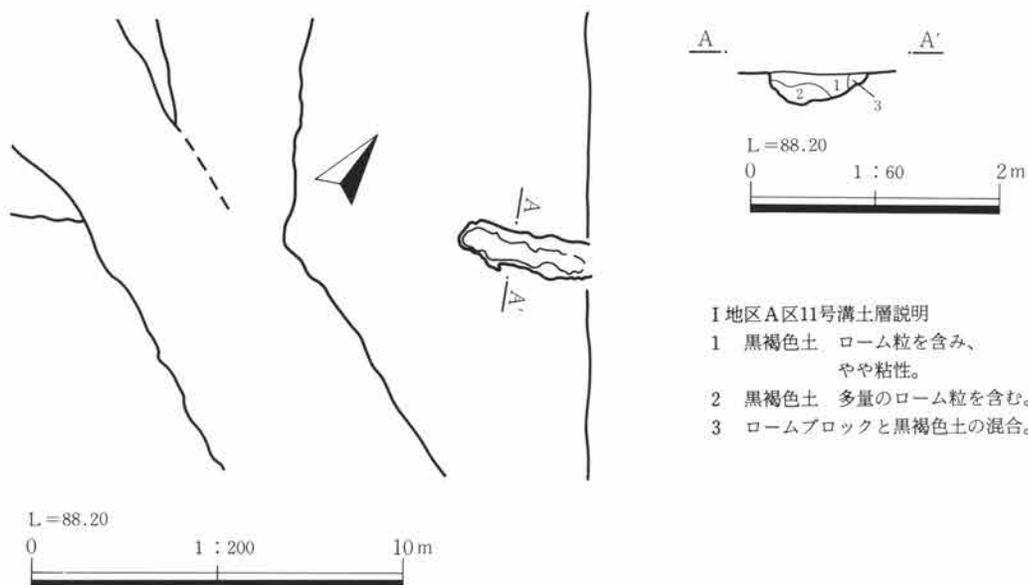
第201図 I 地区D区3号住居跡遺構図

(2) 溝

I地区A区11号溝 (第202図)

本溝は、極く一部が確認された。A区15号住居跡と重複しているが、本溝の方が古い。規模は、幅90cm～1m、深さ約25cmである。溝の掘り方は、断面U字形を呈するが、掘り方にはやや凹凸がある。本溝から遺物の出土はなく、構築時期は明らかではないが、本溝上に造られている古墳時代の15号住居跡と覆土が類似していることから、大きくは隔たらない時期が考えられる。

(飯塚)



I地区A区11号溝土層説明

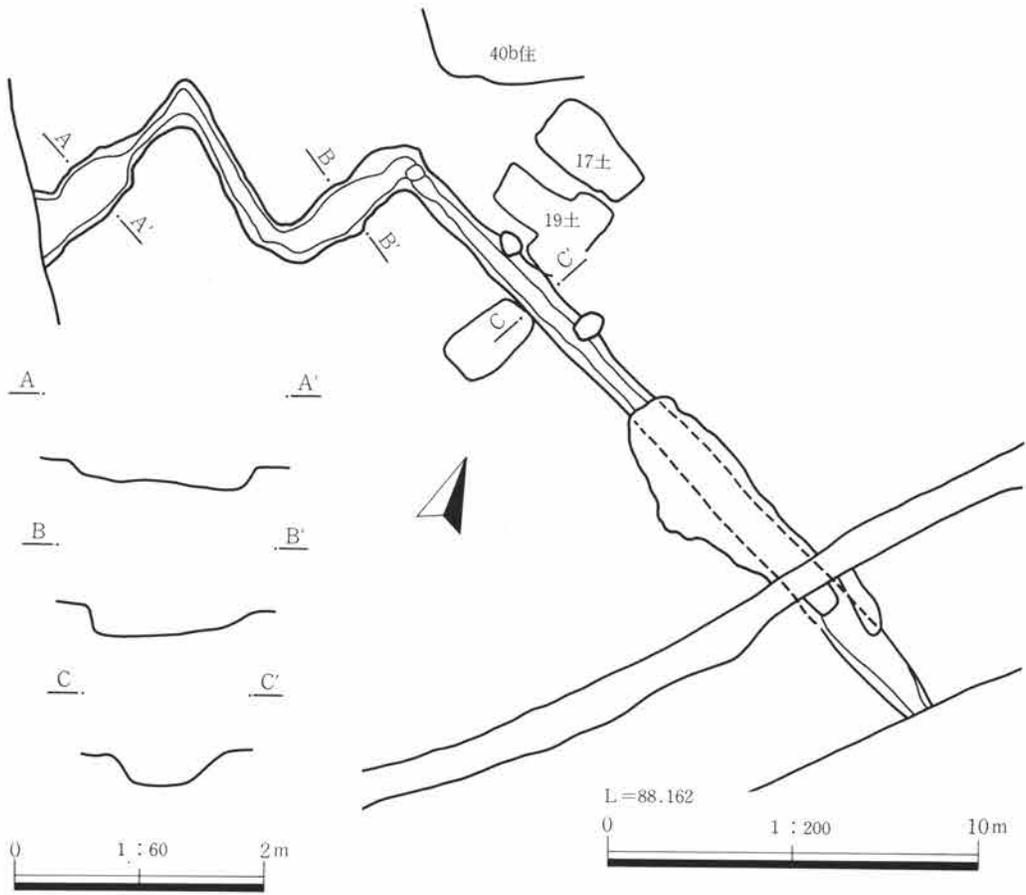
- 1 黒褐色土 ローム粒を含み、やや粘性。
- 2 黒褐色土 多量のローム粒を含む。
- 3 ロームブロックと黒褐色土の混合。

第202図 I地区A区11号溝遺構図

I地区B区16号溝 (第203・204図、第57表)

本溝は、B区17号溝・18号溝と重複しているが、両溝よりも本溝の方が古い。溝の形態は特異で、西側で2度L字状に曲がっている。又、西端部では幅が広がっている。溝の規模は、西端部を除いて、60cm～1.2mである。なお、西端部では1.5mとなる。溝の深さは、20～30cmであり、各部を通して溝底のレベルは一定している。溝内からの出土遺物として、杯 (3598) があり、古墳時代後期と考えられる。

(飯塚)



第203図 I地区B区16号溝遺構図



第204図 I地区B区16号溝遺物図

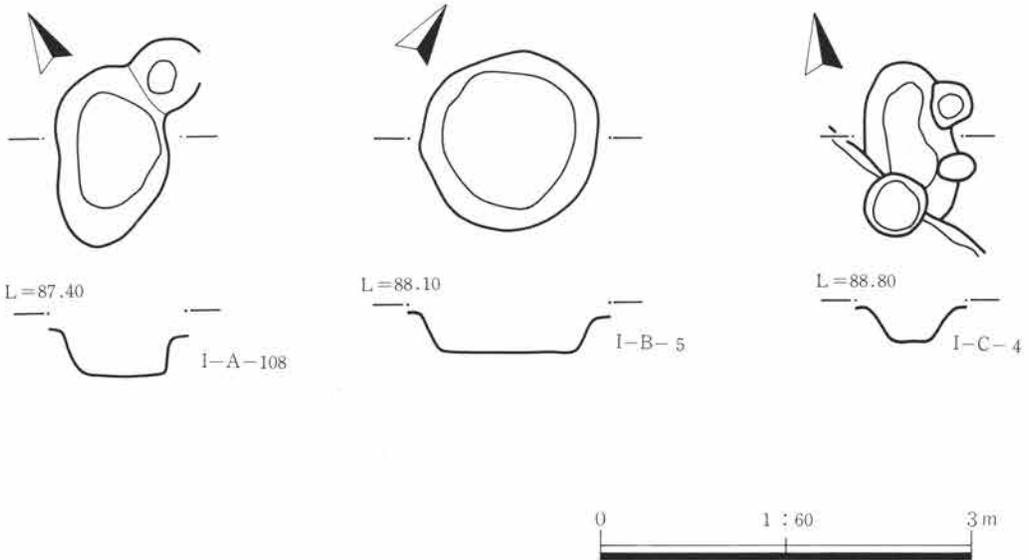
第 57 表 I地区B区16号溝遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
3508	杯 土 師 器	器 高:(35mm)口径: [120mm]底径:一ノ残	径 2 ~ 3 mmの 小 石 ・ 砂 粒 を 含 む。酸 化。や や 硬 質。	口 縁 部 は 幅 が 狭 く、や や 内 傾。外 面 の 口 縁 部 及 び 内 面 は な で。底 部 鈍 削 り。	覆 土。

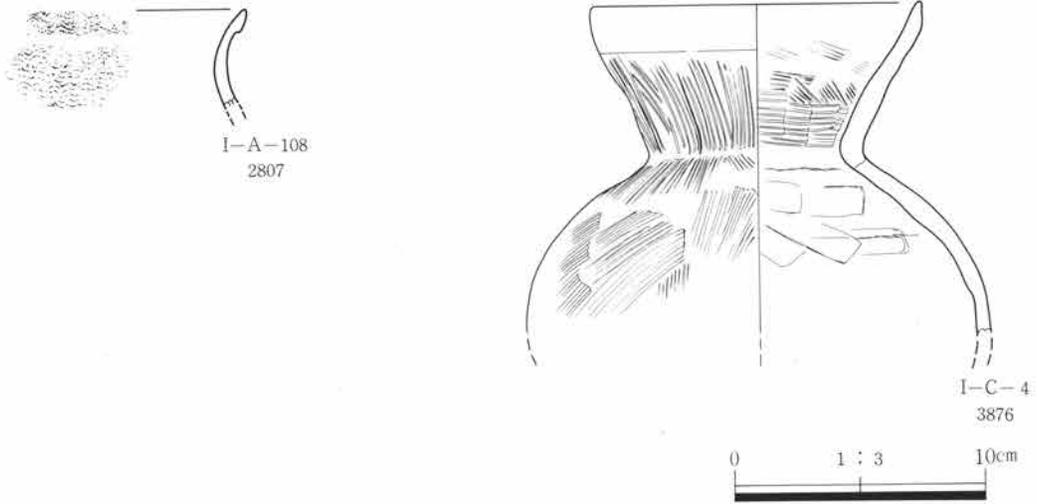
(3) 土 坑

第 58 表 土坑一覧表

土坑番号	規模(長辺・短辺・深さ) (一辺・深さ)(直径・深さ) (長軸・短軸・深さ)	形状・方位 (方位は長辺・ 長軸を基準)	出土遺物	備 考	挿 図 番 号
A区-108	長軸:155cm 短軸:90cm 深さ:40cm	不整楕円形 N-34°-E	甕1個体。	覆土中に焼土を含む。	205図
B区-005	直径:140cm 深さ:35cm	円 形		B区25号住居跡の床下土坑。覆土は多量のロームブロックを含みB区25号住居跡の掘形の覆土と同一。	205図
C区-004	長軸:(120cm) 短軸:75cm 深さ:30cm	楕 円 形 N-4°-W	人骨・土師器の壺1個体。	B区6号土坑より新しい。覆土にローム小ブロック・焼土ブロックを含み、底面は焼けている。	205図



第205図 土坑遺構図

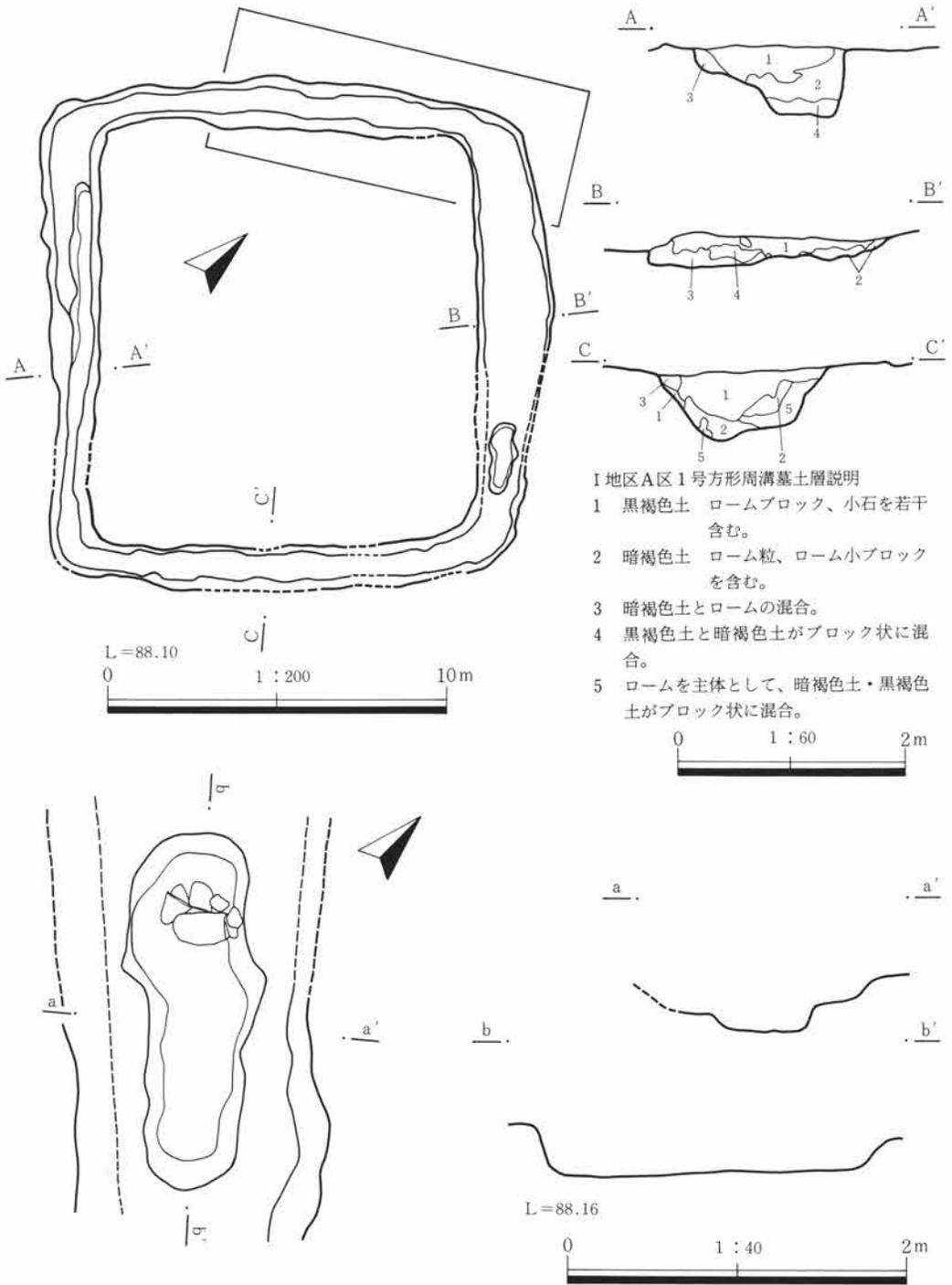


第206図 土坑遺物図

第 59 表 土坑遺物観察表

番号	器 種 土 器 種	法量(器高・口径・底 径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	出 土 状 態 備 考
A区108土坑 2807	甕	器高：—口径：—底 径：—小破片	砂粒を含む。酸化。やや軟 質。鈍い褐色。	折り返し口縁。口縁部は外反する。頸 部に波状文。	弥生時代末の土器 か。
C区4土坑 3876	壺 土 師 器	器高：(131mm)口径： 133mm 底径：—最大 径：[133mm]口縁部 ～体部上半分残	直径2～3mmの小石、及 び砂粒を含む。酸化。やや 硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」字状に外湾。外面：口縁 端上半は横なで、下半は縦ハケ目、体 部上半はハケ目。内面：口縁部上半は 横なで、下半は横ハケ目、体部上半は 寛なで。	土坑内覆土。

(4) 方形周溝墓



第207図 I地区A区1号方形周溝遺構図

II 古墳時代（方形周溝墓）

I 地区A区1号方形周溝墓（第207～

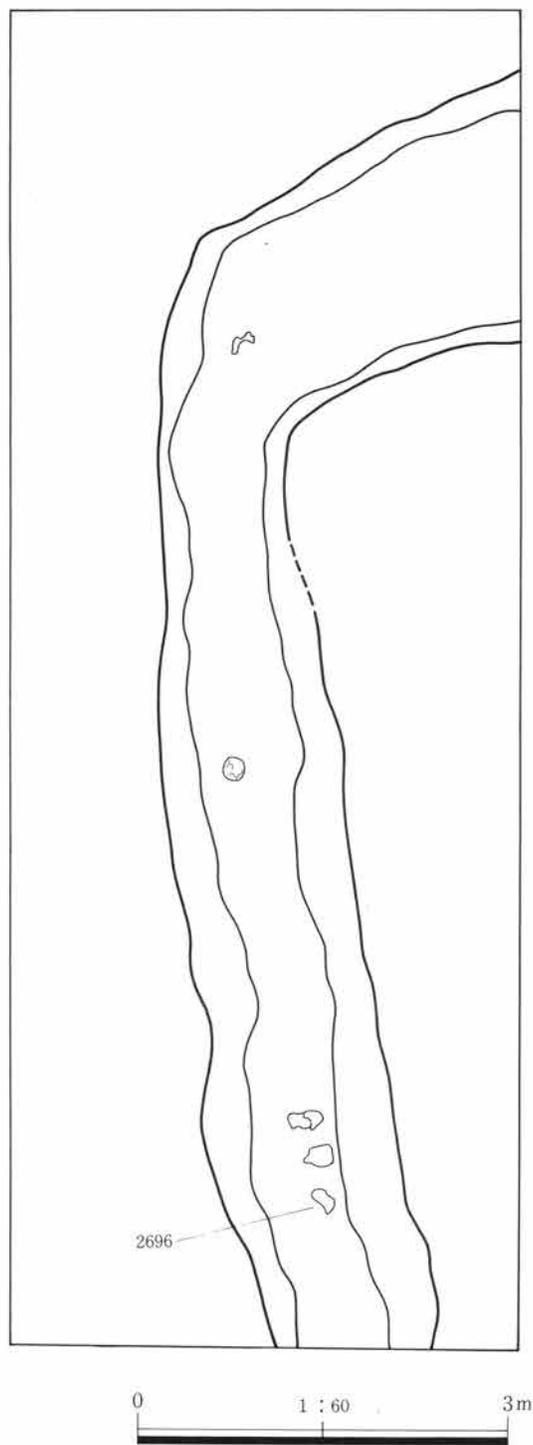
209図、第60表、図版37・44）

本方形周溝墓は、2号方形周溝墓の北西1.6mに、ほぼ平行して存在する。他の多くの遺構と重複関係を持つ。しかし、本方形周溝墓よりも古いのは、縄文時代の9号住居跡のみで、他の遺構である7号住居跡・11号住居跡・9号溝・17号土坑は、本方形周溝墓よりも新しい。方台部は、約12m×11mのやや隅丸方形を呈する。西北辺及び南東辺では約11mあるのに対して、他の2辺では約12mとなっている。主軸は、N-48°-Wである。

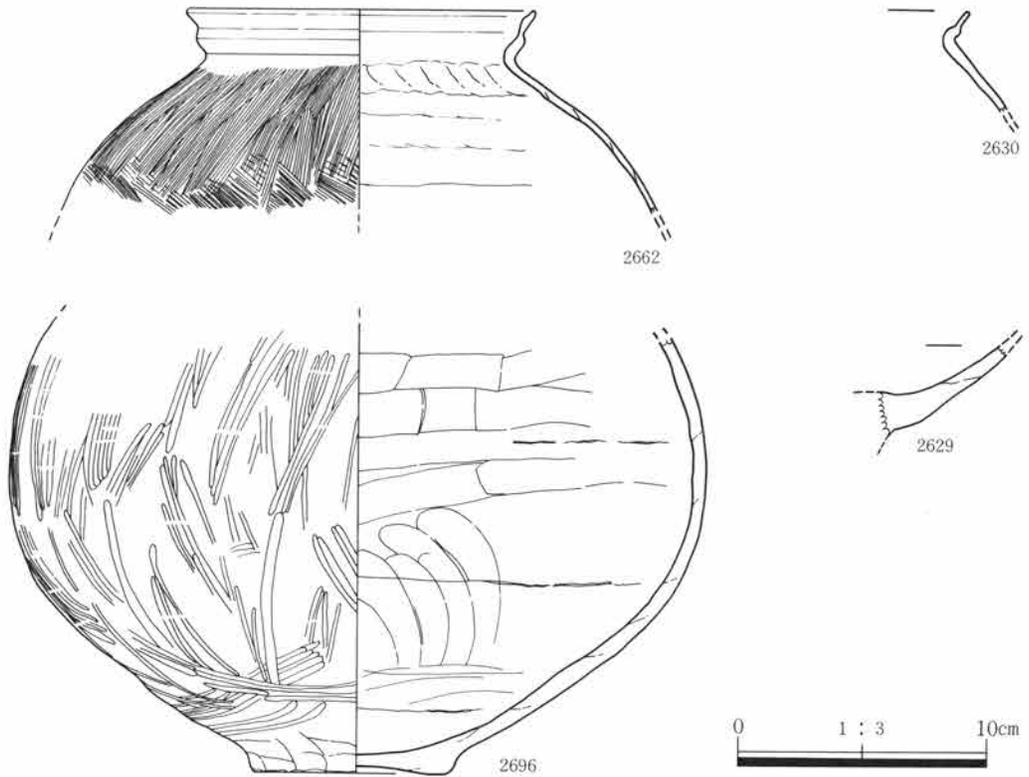
周溝は全周している。周溝幅は1m～2.2mであるが、北側周溝の中央付近が最も幅が広がっている。又、周溝の深さは、北側辺では約30cmであるが、他の3辺では50cm～60cmと深くなっている。

北側の周溝内には、約2m×0.8mで深さ約30cmの隅丸長方形土坑が存在する。土坑内には、底面に着いて数個の河原石が西側部分にまとまって存在した。又、本土坑の覆土は、周溝の覆土と全く同じであることから、本方形周溝墓と一体となるものと思われる。

遺物は、周溝中より出土している。壺(2696)は、底面より約7cm上方からの出土である。なお、北側周溝内土坑からの遺物の出土は皆無である。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。 (飯塚)



第208図 I 地区A区1号方形周溝墓遺物出土状況図



第209図 I地区A区1号方形周溝墓遺物図

第60表 I地区A区1号方形周溝墓遺物観察表

番号	器土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態考
2629	高杯 土師器	器高:一口径:一底径: 一最大径:一杯部小片	砂粒を含む。酸化。軟質。 赤褐色。	杯下端に稜をもって立ち上がる。外面:縦覧磨き。内面:横覧磨き。	周溝内。
2630	甕 土師器	器高:一口径:一底径: 一最大径:一口縁部~体部上端小片	砂粒を多く含む。酸化。軟質。 黒褐色。	「S」字状口縁。外面:斜め刷毛。内面:横なで。	周溝内。
2662	甕 土師器	器高:(80mm)口径: [140mm]底径:一最大径: 一口縁~体部上端 $\frac{1}{2}$ 残	砂粒を多く含む。やや軟質。 鈍い黄橙。外面煤付着。	「S」字状口縁。体部外面:全面斜め刷毛。 体部内面:なで。頸部内面:指押さえ。	周溝内。
2696	壺 土師器	器高:(173mm)口径: 一底径:79mm 最大径: 280mm体部 $\frac{1}{2}$ 残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。 鈍い黄橙。下半部に黒斑あり。	最大径体部中央。外面:覧磨き。内面:横なで。	周溝内。

写 真 图 版



遺跡遠景(観音山丘陵より)



周囲の風景(I地区A区より観音山丘陵を望む)



遺跡近景(I地区A区より北を望む)



試掘調査風景(I地区D区より北を望む)



I 地区 A 区中央付近より北を望む



I 地区 C 地区北半部全景



I地区からII地区を望む



I地区C区1号館跡調査風景



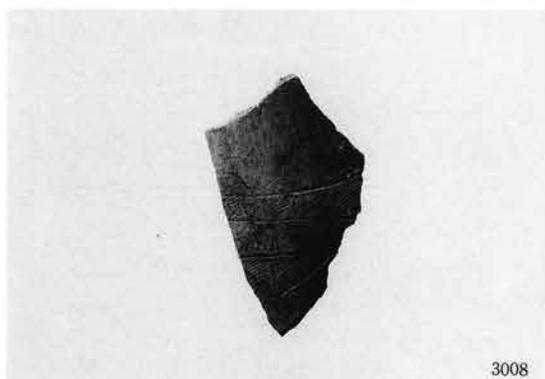
I 地区A区1号住居跡



I 地区A区9号住居跡



I 地区 A 区 53 号住居跡



3008



2200



2198

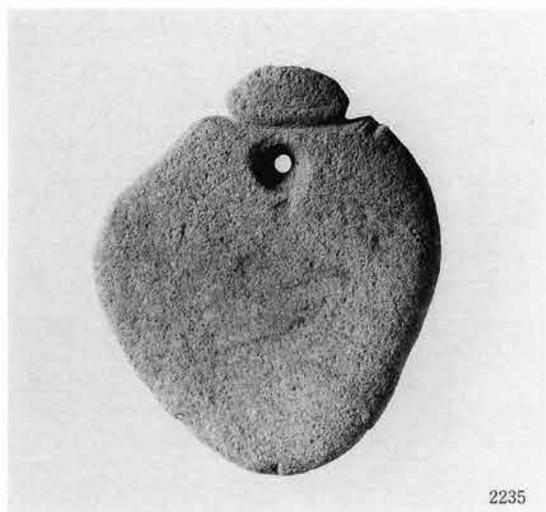
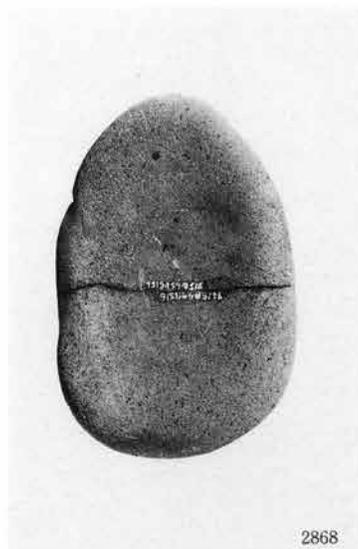
I 地区 A 区 1 号・53 号住居跡出土遺物

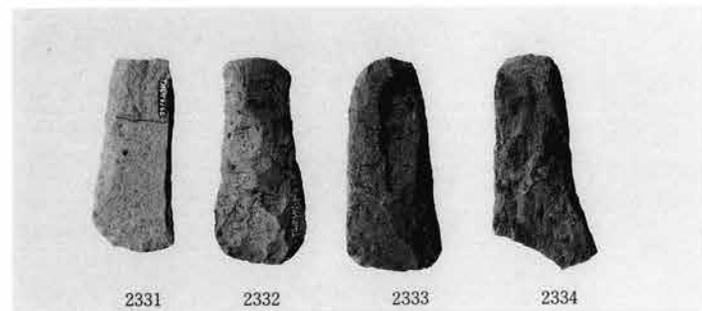
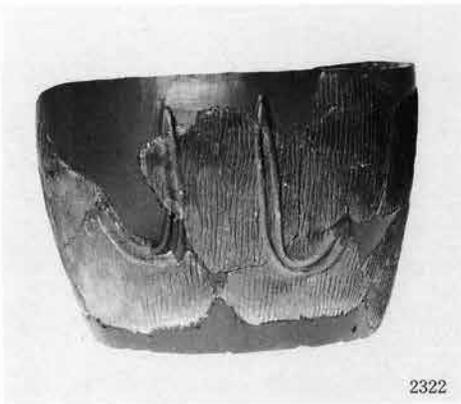


I 地区 A 区 57 号住居跡

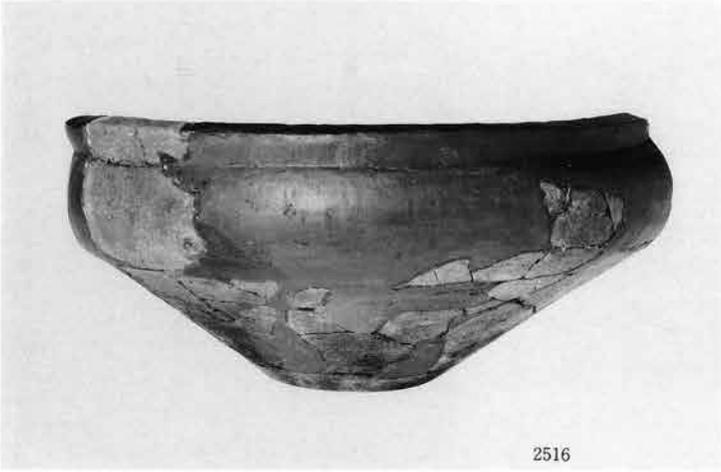


I 地区 A 区 58 号住居跡 炉





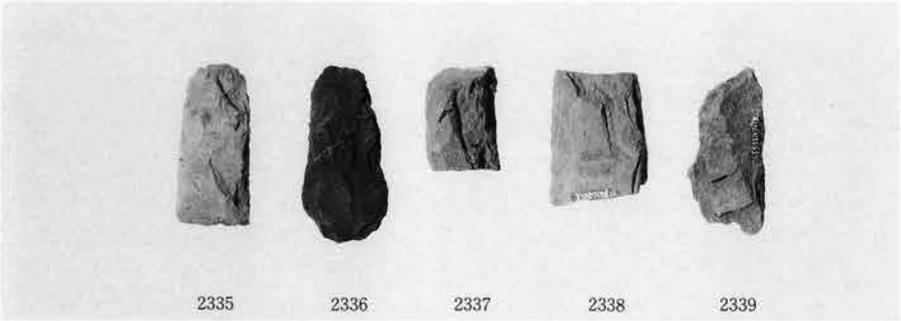
I 地区 A 区 59 号·76 号住居跡出土遺物



2516



2328



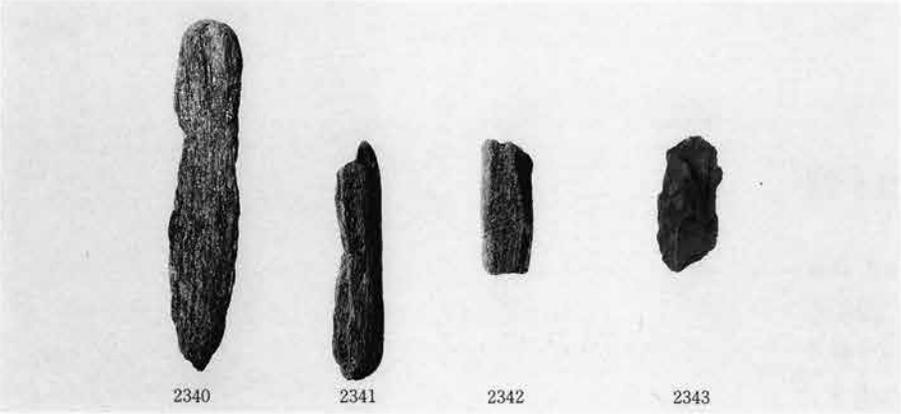
2335

2336

2337

2338

2339

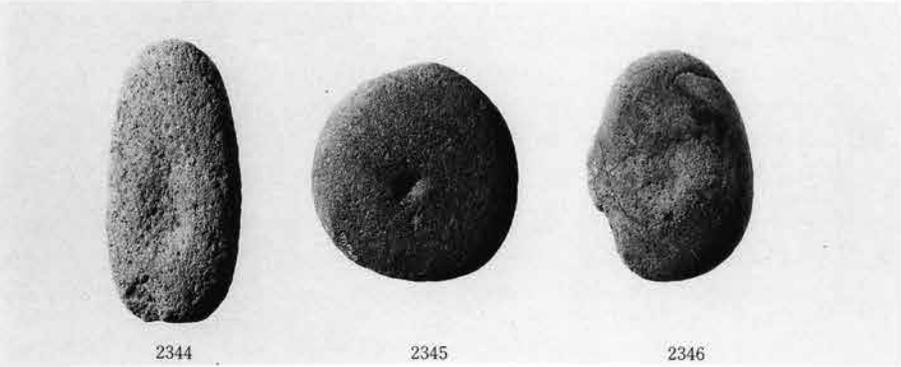


2340

2341

2342

2343



2344

2345

2346

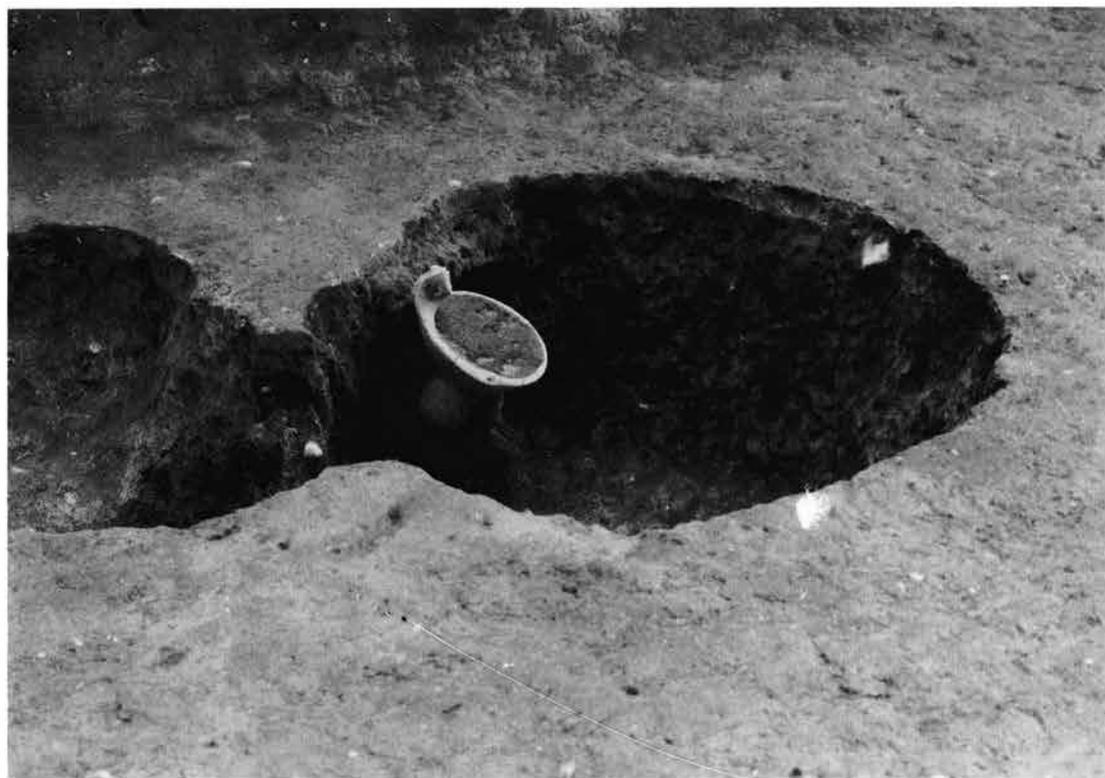
I 地区 A 区 76 号住居跡出土遺物



I地区A区87号土坑



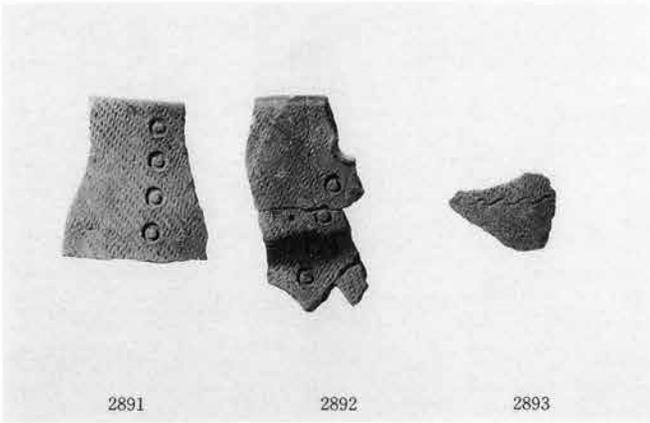
I地区A区100号土坑



I地区A区210号土坑



I地区A区212号土坑



表土中発見の縄文時代遺物



I 地区 A 区 35 号住居跡



I 地区 A 区 35 号住居跡



I 地区 A 区 36 号住居跡



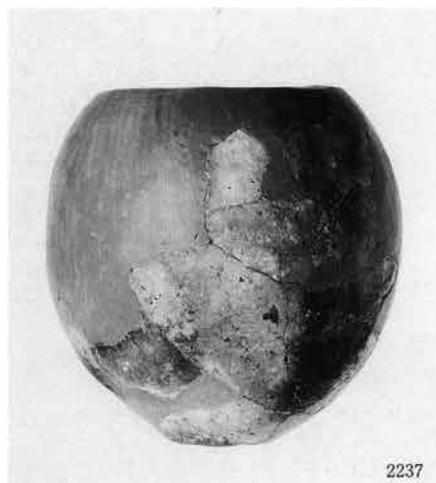
I 地区 A 区 36 号住居跡



I 地区 A 区 47 号住居跡



I 地区 A 区 47 号住居跡



I 地区A区16号·35号·47号住居跡出土遺物



I 地区 A 区 74 号住居跡



2188



2293



2300

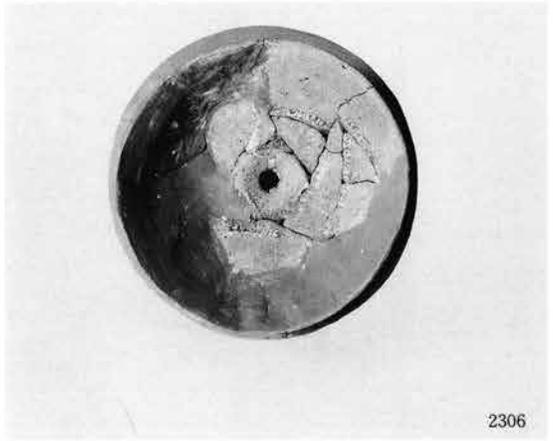
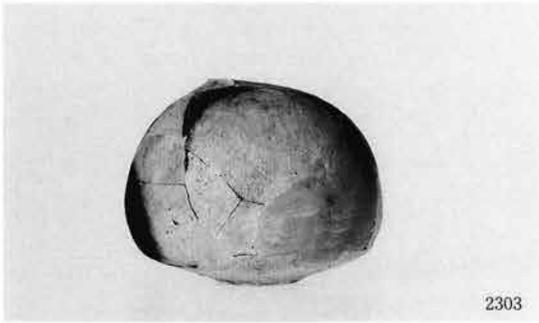


2301



2302

I 地区 A 区 49 号 · 73 号 · 74 号住居跡出土遺物



I 地区 A 区 74 号住居跡出土遺物



2296



2294

I 地区 A 区 74 号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 4c·4d 号住居跡



3107



3108



3111



3109



3110



3112



3117



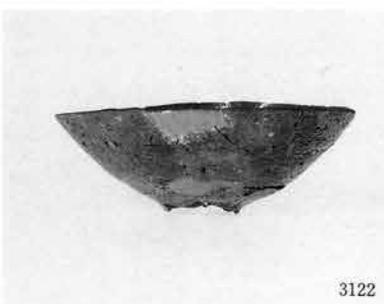
3118



3120



3123



3122



3119

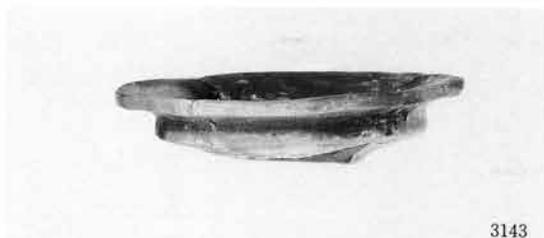
I 地区 B 区 10a 号住居跡出土遺物



3134



3144



3143



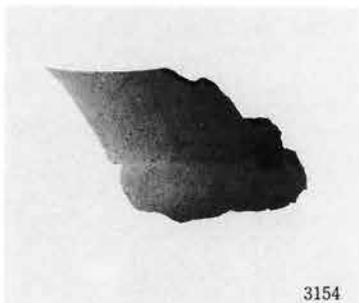
3135



3136



3155



3154



3148



3147



3286

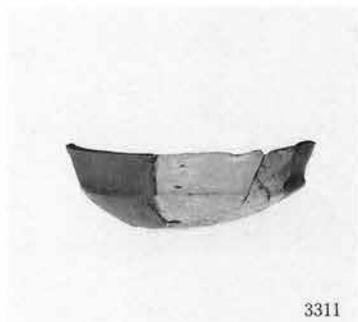
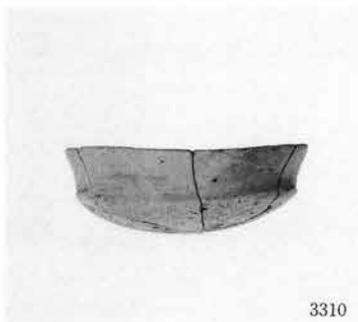
I 地区 B 区 12a 号、24 号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 28 号住居跡



I 地区 B 区 30 C 号住居跡カマド



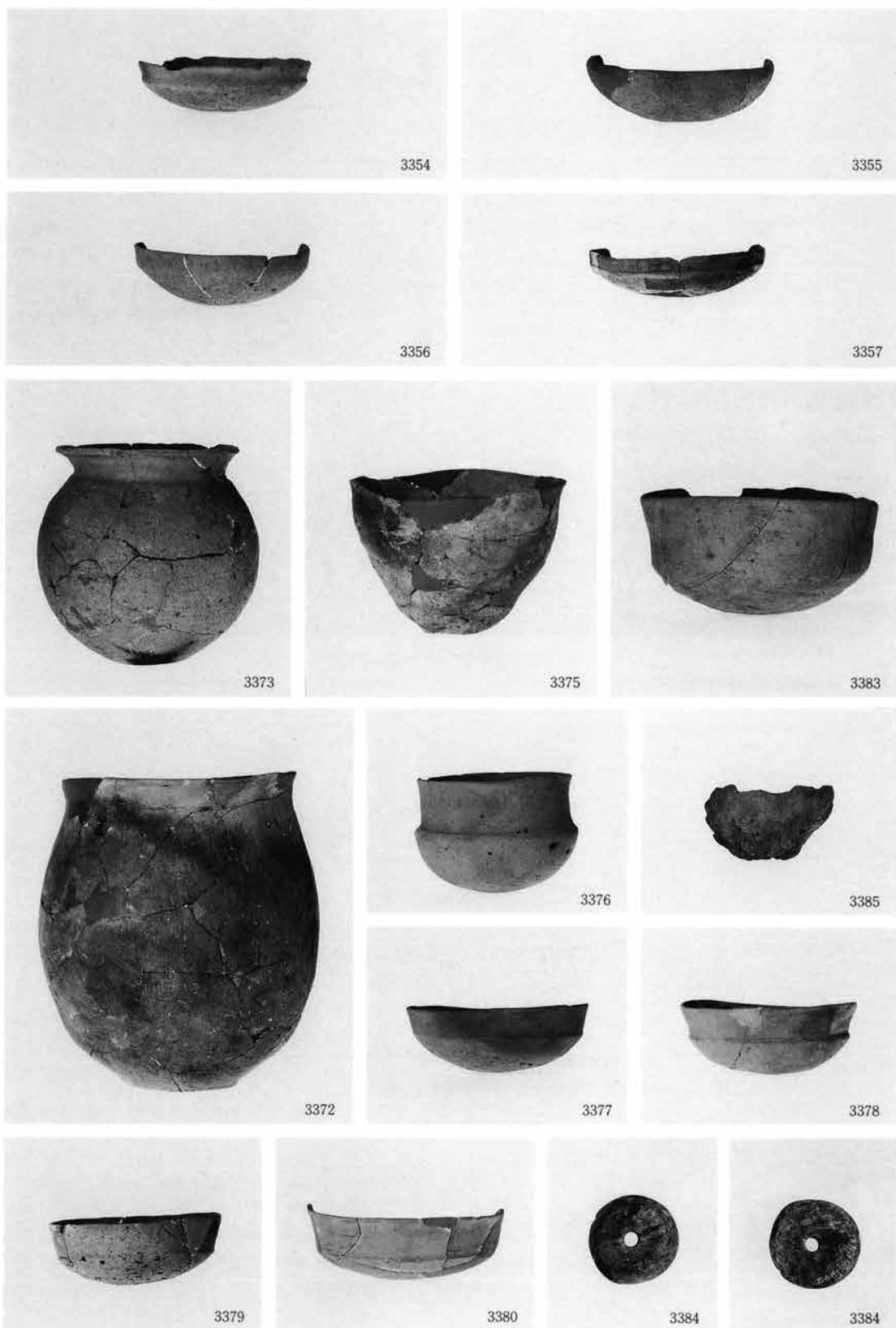
I 地区 B 区 25 号 · 27b 号 · 30c 号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 38 号住居跡



I 地区 B 区 31 号・34 号住居跡出土遺物



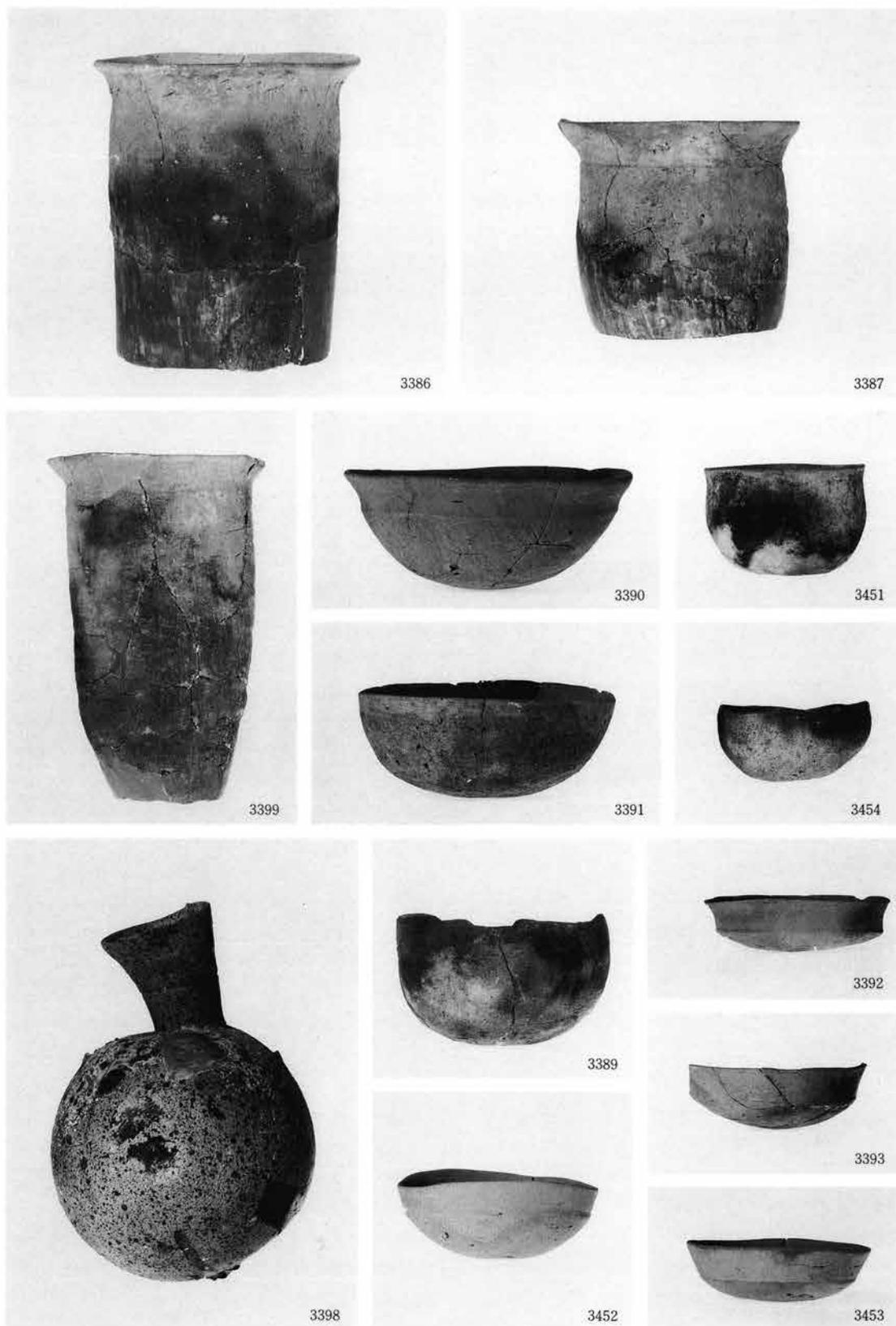
I 地区 B 区 34 号 · 38 号住居跡出土遺物



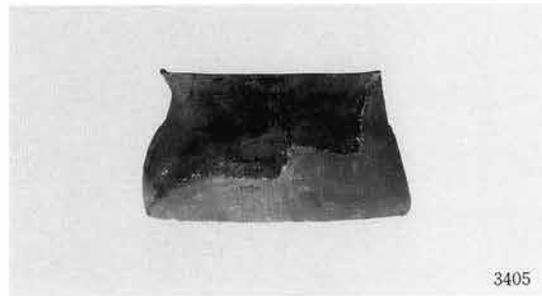
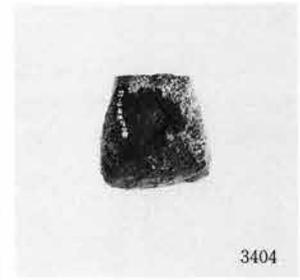
I 地区 B 区 39a 号 · 39d 号住居跡



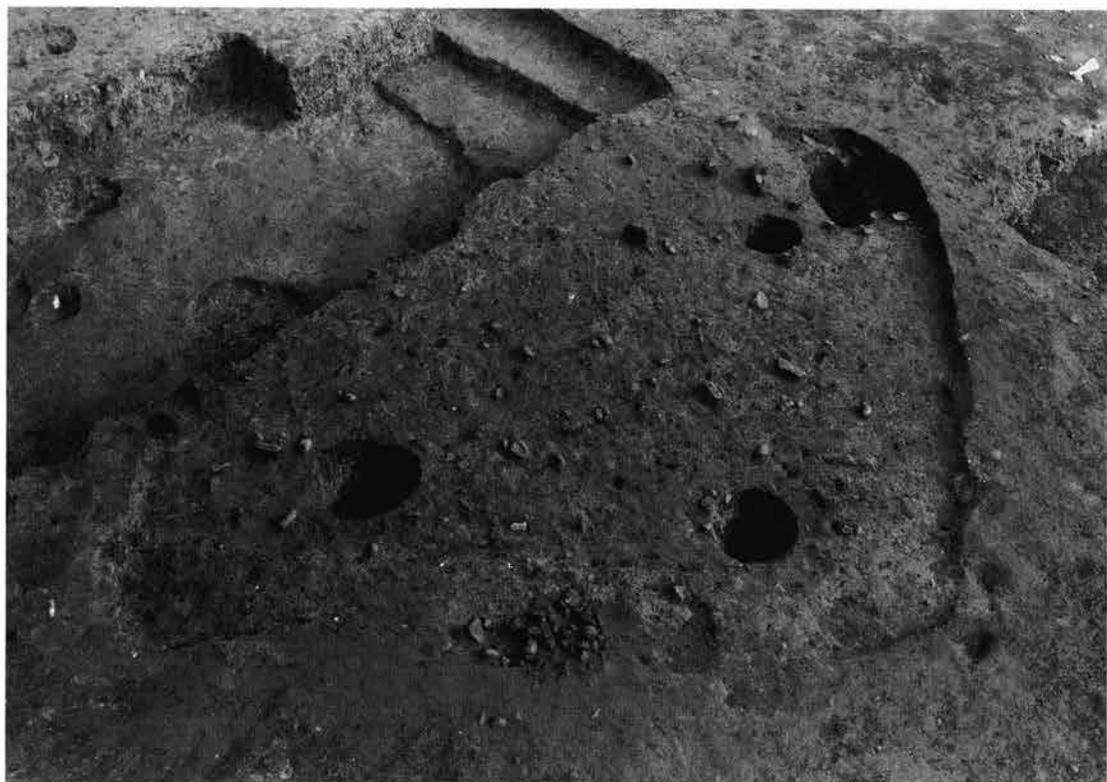
I 地区 B 区 39a 号住居跡



I 地区B区39a号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 39a 号 · 39b 号 · 39c 号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 40b 号住居跡



I 地区 B 区 41a 号住居跡



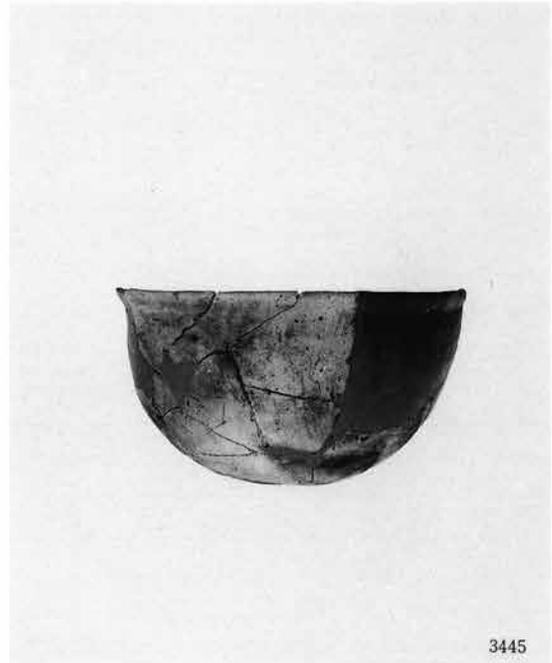
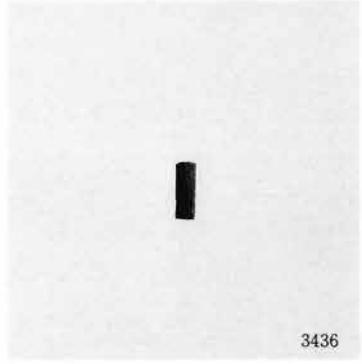
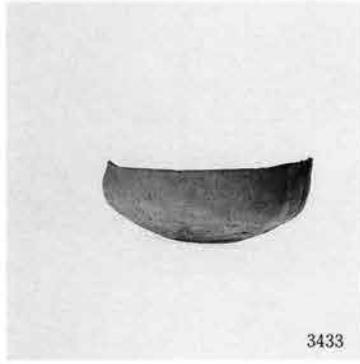
I 地区B区44号住居跡



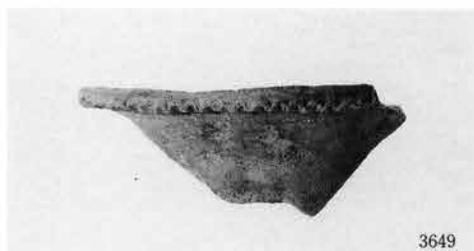
I 地区B区47号住居跡



I 地区B区40b号·41a号·43号住居跡出土遺物



I 地区 B 区 44 号・47 号住居跡出土遺物



I 地区C区1号住居跡出土遺物



I 地区C区2b号住居跡



I 地区C区10号住居跡



I 地区 C 区 13 号住居跡



I 地区 C 区 10 号・13 号住居跡出土遺物

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第77集

I地区・寺前地区(1)
縄文時代・古墳時代編①

下佐野遺跡

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第11集—

平成元年2月25日 印刷

平成元年2月28日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 5 2 - 2 5 1 1 (代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 5 2 - 2 5 1 1 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社